㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第282集

舞台遺跡(1)

(奈良・平安時代他編)

北関東自動車道(高崎～伊勢崎)地域
埋蔵文化財発掘調査報告書第6集

2001

日本道路公団
㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団

㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第282集

舞台遺跡(1)

(奈良・平安時代他編)

北関東自動車道(高崎～伊勢崎)地域
埋蔵文化財発掘調査報告書第6集

2001

日本道路公団
㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団

舞台遺跡遠景（上縁の山並は赤城山。左下方の弧状道路は国道上武道。中央部方画地帯が遺跡地）

方形周溝墓群（前方後方型・方形型がある）

窯跡群を西上方より望む（谷地形左岸縁辺に構築する）

序

北関東自動車道は、本県高崎市の関越自動車道から分岐し、茨城県那珂湊にいたる延長約150㎞の高速自動車道であります。その間、群馬・栃木・茨城各県の主要都市及び東北自動車道・常磐自動車道を結び、地域社会の発展に大きな役割を果すものと期待されています。

この北関東自動車道の高崎～伊勢崎間約15㎞の建設に先立って、平成7年6月から36の遺跡で発掘調査が行われましたが、当事業団ではその内、31の遺跡の発掘調査を担当致しました。また、それらの遺跡の整理作業は平成10年度から実施しており、本書『舞台遺跡(1)』は、その発掘調査報告書第6集として刊行するものです。

本遺跡は、伊勢崎市三和町内に所在し、発掘調査は平成7年度から11年度まで、整理は平成10年度から実施しました。その結果、旧石器時代、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代の住居跡や遺物が数多く発見されました。本報告書はその中の「奈良・平安時代」の住居跡51軒、須恵器窯11基についてまとめたものです。

この中で注目されるものに、須恵器の窯跡の発見があります。通常、須恵器の窯跡は、斜面を利用した窖窯が多いのですが、この窯跡は平地に築かれるもので県内でも稀な発見です。近くの波志江沼周辺には良質の粘土が採掘されることから、それらを利用して作った須恵器を焼いたと考えられます。

本報告書は、北関東自動車道の建設に先立ち発掘調査された他の遺跡とともに、波志江沼周辺地域の古代を明らかにしていく貴重な資料になるものと確信しております。

最後になりましたが、日本道路公団東京建設局、同高崎工事事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、伊勢崎市教育委員会、地元関係者の皆様には、発掘調査から本報告書刊行まで終始ご協力を賜り、心から感謝の意を表すとともに、発掘調査に携わった担当者、作業員の方々の労をねぎらい序といたします。

平成13年3月

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長　小　野　宇三郎

例　　言

1．本書は、北関東自動車道（高崎～伊勢崎）地域建設に伴い事前調査された舞台遺跡（遺跡略号ＫＴ-320）の発掘調査報告書である。本書は全３巻中の第１巻で、舞台遺跡から検出された諸時代の遺構・遺物のうち歴史時代以降を報告の対象とする。

2．舞台遺跡は群馬県伊勢崎市三和町1690-1、1691-1、1691-2、1703-1、1704-1、1704-2、1705、1706、1707-1、1708-1、1730-1、1731-1、1731-2、1732-1、1733-1、1739-1、1741-1、1742-1、1743-1、1744-1、1745、1746、1747-1、1748、1749、1750、1750-2、1751-1、1752-1、1753-1、1754-1、1755-1、1756-1、1756-2、1757-1、1757-2、1758-1、1759-1、1789-4、1791-1、1792-1、1793-1、1794-1、1794-8、1795、1796、1797、1798-1、1798-2、1798-3、1798-5、1798-6、1799、1802、1803、1804、1805、1806、1807-1、1823-1、1824、1825、1826、1827、1828、1892-1にまたがって所在する。

3．事業主体　日本道路公団

4．調査主体　財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

5．調査期間　平成７年４月１日～平成12年３月31日

6．整理期間　平成10年４月１日～平成13年３月31日

7．調査・整理組織

事務担当　菅野　清、小野宇三郎、原田恒弘、赤山容三、渡辺　健、住谷　進、神保侑史、水田　稔、小渕　淳、坂本敏夫、中東耕志、西田健彦、国定　均、井上　剛、小山建夫、笠原秀樹、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、宮崎忠司、岡島伸昌、片岡徳雄、大澤友治

調査担当　井上哲男、伊平　敬、金子伸也、久保　学、熊谷　健、須田正久、関口美枝、立澤綾子、津島秀章、友廣哲也、長沼孝則、新倉明彦、深澤敦仁、綿貫邦男

整理担当・Staff

綿貫邦男、大勝桂子、佐藤信子、萩原光枝、福島和恵、藤井輝子、茂木良子、吉沢やよい

遺物写真　佐藤元彦

保存処理　関　邦一、土橋まり子

土器実測　一部機械実測班

8．石器石材鑑定　飯島静男氏（群馬県地質研究会）

9．発掘調査資料・出土遺物は群馬県埋蔵文化財センターに保管してある。

10．発掘調査及び報告書作成には以下の方々にご協力・ご指導いただいた。記して感謝の意を表します。
伊勢崎市教育委員会・地元関係者各位。渡辺　一・酒井清治・昼間孝志

11．本書執筆　第１章　第１節　中東耕志
第２節　新倉明彦
第３章　第２節　舞台遺跡窯跡の調査経過　深澤敦仁
第２章～第４章　綿貫邦男

12．本書編集　綿貫邦男

凡　　例

1．本書における遺構名称は区名を示すAlphabetと算用数字を用いて表す。Alphabetおよび数字は調査の進行に伴って便宜上に付与してあるため、いかなる順位をも示すものではなく遺構固有名詞とする。

2．本書の遺構図版中にある＋印とそれに記される3桁2種の数値は、国家座標X・Y値を表す。ただし、5桁数値のうち前2桁のX値38、Y値54は省略してある。

3．本書における遺構図にはそれぞれ比例尺を付したが、基本的には次のようである。

窯跡：1/30　住居跡：1/60　掘立柱建物跡：1/80　井戸・墓・土坑・溝：1/40

ただし、図によってはその限りではない。

4．本書における遺物図版にはそれぞれに比例尺を付したが、基本的には次のようである。

金属器・石器類の小型品：1/2　土器・陶器など：1/3　瓦：1/4　大型甕など：1/6

ただし、遺物によってはその限りではない。

5．本書における遺構図版中の断面基準は標高値でこれを表した。単位はmである。

6．各遺構図版中の遺物・遺物図版・遺物写真図版・遺物表の遺物に付された番号は同一である。

7．土器の実測図は原則として四分割法をとった。ただし、残存量が二分の一以下の場合は180°展開して図上復元とし、中心線は点線で示した。

8．遺物の撮影及び展開・断面は基本的に一角法で示した。

9．土器の色調は「標準土色帳」農林省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修に基本的に準じた。

10．本書で使用する浅間山および榛名山噴火による降下火砕物・泥流堆積物の呼称については以下のように表記する。

As-A　：浅間山噴出の火砕物　1783（天明三）年

As-B　：浅間山噴出の火砕物　1108（天仁元）年

ＦＰ泥流：榛名山二ツ岳噴出の火砕物泥流堆積物

ＦＰ　　：榛名山二ツ岳噴出の火砕物

ＦＡ泥流：榛名山二ツ岳噴出の火砕物泥流堆積物

ＦＰ　　：榛名山二ツ岳噴出の火砕物

As-C　：浅間山噴出の火砕物

11．窯跡土層に示した網のうち

黒網は焼土層

縦線網は還元層

点網は炭化粒・灰層

をそれぞれ示す。

目　　次

序
例　言
凡　例
目　次
図版目次
写真目次
報告書抄録

第１章　発掘調査の概要……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査の方法と経過……2

第２章　遺跡の立地と歴史環境……5
　第１節　遺跡の立地……5
　第２節　歴史環境……6

第３章　検出された遺構と遺物……11
　第１節　遺跡の概要……11
　第２節　窯　　跡……14
　第３節　竪穴住居跡……153
　第４節　掘立柱建物跡……238
　第５節　井 戸 跡……266
　第６節　土坑・土壙墓……287
　第７節　溝……295

第４章　成果と課題……320

写真図版

付図　舞台遺跡全体図（１/600）

挿図目次

第 1 図　北関東自動車道関連遺跡位置図 …… 1
第 2 図　舞台遺跡地域図 …… 2
第 3 図　調査区割図 …… 4
第 4 図　伊勢崎市域地形区分図 …… 5
第 5 図　周辺遺跡位置図 …… 9
第 6 図　谷地土層図 …… 13
第 7 図　A区全体図 …… 15
第 8 図　窯跡全体図 …… 17
第 9 図　1 号窯跡(1) …… 21
第 10 図　1 号窯跡(2) …… 22
第 11 図　2 号窯跡(1) …… 24
第 12 図　2 号窯跡(2) …… 25
第 13 図　3 号窯跡(1) …… 26
第 14 図　3 号窯跡(2) …… 27
第 15 図　4・10号窯跡(1) …… 29
第 16 図　4・10号窯跡(2) …… 31
第 17 図　5 号窯跡(1) …… 34
第 18 図　5 号窯跡(2) …… 35
第 19 図　6・11号窯跡(1) …… 37
第 20 図　6・11号窯跡(2) …… 39
第 21 図　7 号窯跡(1) …… 41
第 22 図　7 号窯跡(2) …… 42
第 23 図　7 号窯跡(3) …… 43
第 24 図　8 号窯跡(1) …… 45
第 25 図　8 号窯跡(2) …… 47
第 26 図　8 号窯跡(3) …… 48
第 27 図　9 号窯跡 …… 49
第 28 図　12号窯跡 …… 52
第 29 図　灰原出土遺物分布図 …… 53
第 30 図　谷地灰原土層図 …… 54
第 31 図　灰原出土遺物接合関係図 …… 55
第 32 図　坏の分類 …… 58
第 33 図　蓋の分類 …… 58
第 34 図　椀の分類 …… 59
第 35 図　甕の分類 …… 59
第 36 図　1 号窯跡坏計測値分布図 …… 60
第 37 図　1 号窯跡出土遺物(1) …… 61
第 38 図　1 号窯跡出土遺物(2) …… 62
第 39 図　1 号窯跡出土遺物(3) …… 63
第 40 図　2 号窯跡坏計測値分布図 …… 64
第 41 図　2 号窯跡出土遺物 …… 65
第 42 図　3 号窯跡出土遺物(1) …… 66
第 43 図　3 号窯跡出土遺物(2) …… 67
第 44 図　3 号窯跡出土遺物(3) …… 68
第 45 図　3 号窯跡坏計測値分布図 …… 69
第 46 図　4 号窯跡坏計測値分布図 …… 70
第 47 図　4 号窯跡出土遺物(1) …… 71
第 48 図　4 号窯跡出土遺物(2) …… 72
第 49 図　4 号窯跡出土遺物(3) …… 73
第 50 図　4 号窯跡出土遺物(4) …… 74
第 51 図　4 号窯跡出土遺物(5) …… 75
第 52 図　4 号窯跡出土遺物(6) …… 76
第 53 図　4 号窯跡出土遺物(7) …… 77
第 54 図　4 号窯跡出土遺物(8) …… 78
第 55 図　4 号窯跡出土遺物(9) …… 79
第 56 図　10号窯跡坏計測値分布図 …… 82
第 57 図　10号窯跡出土遺物 …… 83
第 58 図　5 号窯跡坏計測値分布図 …… 84
第 59 図　5 号窯跡出土遺物(1) …… 85
第 60 図　5 号窯跡出土遺物(2) …… 86
第 61 図　5 号窯跡出土遺物(3) …… 87
第 62 図　5 号窯跡出土遺物(4) …… 88
第 63 図　5 号窯跡出土遺物(5) …… 89
第 64 図　6 号窯跡坏計測値分布図 …… 91
第 65 図　6 号窯跡出土遺物(1) …… 92
第 66 図　6 号窯跡出土遺物(2) …… 93
第 67 図　6 号窯跡出土遺物(3) …… 94
第 68 図　6 号窯跡出土遺物(4) …… 95
第 69 図　6 号窯跡出土遺物(5) …… 96
第 70 図　6 号窯跡出土遺物(6) …… 97
第 71 図　11号窯跡坏計測値分布図 …… 100
第 72 図　11号窯跡出土遺物(1) …… 101
第 73 図　11号窯跡出土遺物(2) …… 102
第 74 図　7 号窯跡坏計測値分布図 …… 103
第 75 図　7 号窯跡出土遺物(1) …… 104
第 76 図　7 号窯跡出土遺物(2) …… 105
第 77 図　7 号窯跡出土遺物(3) …… 106
第 78 図　7 号窯跡出土遺物(4) …… 107
第 79 図　7 号窯跡出土遺物(5) …… 108
第 80 図　8 号窯跡坏計測値分布図 …… 109
第 81 図　8 号窯跡出土遺物(1) …… 110
第 82 図　8 号窯跡出土遺物(2) …… 111
第 83 図　8 号窯跡出土遺物(3) …… 112
第 84 図　8 号窯跡出土遺物(4) …… 113
第 85 図　8 号窯跡出土遺物(5) …… 114
第 86 図　9 号窯跡坏計測値分布図 …… 117
第 87 図　9 号窯跡出土遺物(1) …… 118
第 88 図　9 号窯跡出土遺物(2) …… 119
第 89 図　灰原出土遺物(1) …… 120
第 90 図　灰原出土遺物(2) …… 121
第 91 図　灰原出土遺物(3) …… 122
第 92 図　灰原出土遺物(4) …… 123
第 93 図　灰原出土遺物(5) …… 124
第 94 図　灰原出土遺物(6) …… 125
第 95 図　灰原出土遺物(7) …… 126
第 96 図　灰原出土遺物(8) …… 127
第 97 図　灰原出土遺物(9) …… 128
第 98 図　灰原出土遺物(10) …… 129
第 99 図　灰原出土遺物(11) …… 130
第100図　灰原出土遺物(12) …… 131
第101図　灰原出土遺物(13) …… 132
第102図　灰原出土遺物(14) …… 133
第103図　灰原出土遺物(15) …… 134
第104図　灰原出土遺物(16) …… 135
第105図　灰原出土遺物(17) …… 136
第106図　灰原出土遺物(18) …… 137
第107図　灰原出土遺物(19) …… 138
第108図　灰原出土遺物(20) …… 139
第109図　灰原出土遺物(21) …… 140
第110図　竪穴住居跡位置図 …… 153
第111図　A_1-16号住居跡 …… 154
第112図　A_1-16号住居跡出土遺物 …… 155
第113図　A_1-30号住居跡 …… 156
第114図　A_1-30号住居跡出土遺物 …… 156
第115図　A_1-35号住居跡 …… 157
第116図　A_1-35号住居跡出土遺物 …… 158
第117図　A_1-38号住居跡 …… 158
第118図　A_1-38号住居跡出土遺物 …… 159
第119図　C-51号住居跡 …… 159
第120図　C-51号住居跡出土遺物 …… 160
第121図　C-52号住居跡 …… 161
第122図　C-52号住居跡出土遺物 …… 162
第123図　C-58号住居跡 …… 162
第124図　C-58号住居跡出土遺物 …… 163
第125図　A_2-63号住居跡 …… 164
第126図　A_2-63号住居跡出土遺物(1) …… 164
第127図　A_2-63号住居跡出土遺物(2) …… 165
第128図　A_2-64号住居跡 …… 165
第129図　A_2-64号住居跡出土遺物 …… 166
第130図　A_2-66号住居跡 …… 167
第131図　A_2-66号住居跡出土遺物 …… 168
第132図　A_2-67号住居跡 …… 169
第133図　A_2-67号住居跡出土遺物 …… 170
第134図　A_2-68号住居跡 …… 171
第135図　A_2-68号住居跡出土遺物 …… 172
第136図　A_2-69号住居跡 …… 173
第137図　A_2-69号住居跡出土遺物 …… 174
第138図　A_2-70号住居跡 …… 175
第139図　A_2-70号住居跡出土遺物 …… 176
第140図　E_2-91号住居跡 …… 177
第141図　E_2-91号住居跡出土遺物 …… 178
第142図　E_2-92 a・92 b号住居跡 …… 179
第143図　E_2-92 a号住居跡出土遺物 …… 180
第144図　E_2-97号住居跡 …… 181
第145図　E_2-97号住居跡出土遺物 …… 181
第146図　E_2-103号住居跡 …… 182
第147図　E_2-103号住居跡出土遺物 …… 183
第148図　E_2-106号住居跡 …… 183
第149図　E_2-106号住居跡出土遺物(1) …… 184
第150図　E_2-106号住居跡出土遺物(2) …… 185
第151図　E_2-107号住居跡 …… 185
第152図　E_2-107号住居跡出土遺物(1) …… 186
第153図　E_2-107号住居跡出土遺物(2) …… 187
第154図　E_2-111号住居跡出土遺物 …… 188
第155図　E_2-113号住居跡 …… 189
第156図　E_2-113号住居跡出土遺物 …… 190
第157図　E_2-117号住居跡 …… 190
第158図　E_2-117号住居跡出土遺物 …… 191
第159図　E_2-118号住居跡 …… 192
第160図　E_2-118号住居跡出土遺物 …… 193
第161図　E_2-119号住居跡出土遺物 …… 193
第162図　E_2-120号住居跡 …… 194
第163図　E_2-120号住居跡出土遺物 …… 195
第164図　E_2-121号住居跡 …… 195
第165図　E_2-121号住居跡出土遺物(1) …… 196
第166図　E_2-121号住居跡出土遺物(2) …… 197
第167図　E_2-128号住居跡 …… 197
第168図　E_2-128号住居跡出土遺物 …… 198
第169図　D-144号住居跡 …… 199
第170図　D-144号住居跡出土遺物(1) …… 200

第171図 D-144号住居跡出土遺物(2)…201
第172図 E_2-150号住居跡 ……202
第173図 E_2-150号住居跡出土遺物 …202
第174図 E_2-151号住居跡 ……203
第175図 E_2-151号住居跡出土遺物(1)
……204
第176図 E_2-151号住居跡出土遺物(2)
……205
第177図 E_2-155号住居跡 ……205
第178図 E_2-155号住居跡出土遺物(1)
……206
第179図 E_2-155号住居跡出土遺物(2)
……207
第180図 A_2-161号住居跡 ……208
第181図 A_2-161号住居跡出土遺物 …209
第182図 E_2-168号住居跡出土遺物 …210
第183図 E_2-172号住居跡 ……211
第184図 E_2-172号住居跡竈 ……212
第185図 E_2-172号住居跡出土遺物(1)
……213
第186図 E_2-172号住居跡出土遺物(2)
……214
第187図 E_2-174号住居跡 ……215
第188図 E_2-174号住居跡出土遺物 …216
第189図 E_2-191号住居跡 ……216
第190図 E_2-191号住居跡出土遺物 …217
第191図 E_2-192号住居跡 ……217
第192図 E_2-192号住居跡出土遺物 …218
第193図 E_2-194号住居跡 ……218
第194図 E_2-194号住居跡出土遺物(1)
……219
第195図 E_2-194号住居跡出土遺物(2)
……220
第196図 E_2-198・199号住居跡……220
第197図 E_2-198号住居跡出土遺物 …221
第198図 E_2-199号住居跡出土遺物 …221
第199図 E_2-200号住居跡 ……222
第200図 E_2-200号住居跡出土遺物 …223
第201図 E_2-201号住居跡 ……223
第202図 E_2-205号住居跡 ……224
第203図 凸帯付四耳壺と類例の分布…225
第204図 E_2-206号住居跡 ……225
第205図 E_2-206号住居跡出土遺物 …226
第206図 E_2-208号住居跡 ……227
第207図 E_2-208号住居跡出土遺物(1)
……228
第208図 E_2-208号住居跡出土遺物(2)
……229
第209図 B-1号住居跡 ……229
第210図 B-1号住居跡出土遺物(1) …230
第211図 B-1号住居跡出土遺物(2) …231
第212図 B-2号住居跡 ……232
第213図 B-2号住居跡出土遺物 ……232
第214図 F-47号住居跡 ……233
第215図 F-47号住居跡出土遺物 ……233
第216図 F-70号住居跡 ……234
第217図 F-70号住居跡出土遺物 ……235
第218図 F-70号住居跡出土遺物(2) …236
第219図 工壙-6号住居跡出土遺物 …237
第220図 工壙-13号住居跡出土遺物 …237
第221図 掘立柱建物跡位置図……238
第222図 掘立柱建物跡(A_1-1・2号)
……247
第223図 掘立柱建物跡(A_1-3・4号)
……248
第224図 掘立柱建物跡・出土遺物
(A_1-7・B-6号) ……249
第225図 掘立柱建物跡(D_1-1・2号) 250
第226図 掘立柱建物跡
(D_1-3・4・5号)……251
第227図 掘立柱建物跡(D_1-6・9号)
……252
第228図 掘立柱建物跡(D_1-7・10号)
……253
第229図 掘立柱建物跡(D_1-8・11号)
……254
第230図 掘立柱建物跡(E_1-1・2号)
……255
第231図 掘立柱建物跡(E_1-3・4号)
……256
第232図 掘立柱建物跡出土遺物
(E_1-5・9号) ……257
第233図 掘立柱建物跡(E_1-6・7号)
……258
第234図 掘立柱建物跡(E_1-1・2号)
……259
第235図 掘立柱建物跡(E_1-3・8号)
……260
第236図 掘立柱建物跡(E_1-6・7号)
……261
第237図 掘立柱建物跡
(F-1・2・4号) ……262
第238図 掘立柱建物跡(F-3・7号)…263
第239図 掘立柱建物跡(F-8・9号)…264
第240図 掘立柱建物跡(E-5・G-1号)
……265
第241図 井戸跡位置図……266
第242図 井戸跡・出土遺物
(2・3・4号)……276
第243図 井戸跡・出土遺物
(5・6・7号)……277
第244図 井戸跡・出土遺物
(8・9・10・11号) ……278
第245図 井戸跡・出土遺物
(12・13・14号)……279
第246図 井戸跡・出土遺物
(15・16・17・18・20・21号) ……280
第247図 井戸跡・出土遺物
(19・22・23・24号) ……281
第248図 井戸跡・出土遺物
(25a・25b・26・27・28号)……282
第249図 井戸跡・出土遺物
(29a・29b・30・31号) ……283
第250図 井戸跡
(32・33・34・35・36・37・38号)…284
第251図 井戸跡・出土遺物
(41・42・43・44・45・47号) ……285
第252図 井戸跡(38・4・49号)……286
第253図 土坑・墓位置図……287
第254図 地下式土坑(1・2号) ……291
第255図 2号地下式土坑出土遺物1号
土壙墓・出土遺物……292
第256図 土壙墓・出土遺物(2・3・4号)
土坑・出土遺物(402・43号)…293
第257図 土坑・出土遺物
(243・327・311号) ……294
第258図 調位置図……295
第259図 E_1-38号溝 ……296
第260図 溝土層図(1)……297
第261図 溝土層図(2)……298
第262図 溝土層図(3)……299
第263図 溝土層図(4)……300
第264図 溝土層図(5)……301
第265図 溝土層図(6)……302
第266図 溝出土遺物
(1・4・5・6・11・12・22・26号)
……303
第267図 27号溝出土遺物(1)……304
第268図 27号溝出土遺物(2)……305
第269図 27号溝出土遺物(3)……306
第270図 27号溝出土遺物(4)
(30・36・39・40・44・45・49号)…307
第271図 溝出土遺物(51a・70号) ……308
第272図 38号溝出土遺物(1)……308
第273図 38号溝出土遺物(2)……309
第274図 38号溝出土遺物(3)……310
第275図 38号溝出土遺物(4)……311
第276図 38号溝出土遺物(5)……312
第277図 38号溝出土遺物(6)……313
第278図 38号溝出土遺物(7)……314
第279図 谷地出土遺物……315
第280図 その他の遺物……315
第281図 窯跡焼成部床傾斜度……322
第282図 船形製品……327

写真図版目次

PL.1 B区全景・A区全景
PL.2 A区全景・F区全景
PL.3 F区全景
PL.4 F区全景
PL.5 C区全景
PL.6 D・E_1区全景
PL.7 E_1・E_2区全景
PL.8 A_1区窯跡群全景・窯跡群全景
PL.9 窯跡群全景
PL.10 窯跡群全景
PL.11 1号窯跡
同床面遺物出土状況
同床面遺物出土状況
同土層断面 前庭部
PL.12 2号窯跡
同床面遺物出土状況
同土層断面
同床面燃焼部焚口付近
同土層断面
PL.13 3号窯跡・同土層断面
同土層断面煙道部付近
同煙道部遺物廃棄状況
PL.14 4号窯跡
同床面遺物出土状況
10号窯跡
同床面遺物出土状況
PL.15 4号窯跡遺物出土状況
同遺物出土状況
同土層断面
5号窯跡
同遺物出土状況
同土層断面
PL.16 6・7号窯跡
6・7・11号窯跡
6号窯跡土層断面
7号窯跡煙道部遺物出土状況
同煙道部遺物出土状況
同土層断面
PL.17 7号窯跡遺物出土状況
同土層断面
8号窯跡・床面遺物出土状況
同煙道部集石状況
同床面
同土層断面・遺物出土状況
PL.18 9号窯跡
同遺物出土状況
同遺物出土状況
同焼成部土層断面
同前庭部
PL.19 灰原全景
同土層断面
窯跡生産器種
PL.20 1号窯跡出土遺物(1)
PL.21 1号窯跡出土遺物(2)
2号窯跡出土遺物
PL.22 3号窯跡出土遺物(1)
PL.23 3号窯跡出土遺物(2)
4号窯跡出土遺物(1)
PL.24 4号窯跡出土遺物(2)
PL.25 4号窯跡出土遺物(3)
PL.26 4号窯跡出土遺物(4)
PL.27 4号窯跡出土遺物(5)
PL.28 4号窯跡出土遺物(6)
PL.29 4号窯跡出土遺物(7)
5号窯跡出土遺物(1)
PL.30 5号窯跡出土遺物(2)
PL.31 5号窯跡出土遺物(3)
PL.32 5号窯跡出土遺物(4)
6号窯跡出土遺物(1)
PL.33 6号窯跡出土遺物(2)
PL.34 6号窯跡出土遺物(3)
PL.35 6号窯跡出土遺物(4)
PL.36 6号窯跡出土遺物(5)
PL.37 7号窯跡出土遺物(1)
PL.38 7号窯跡出土遺物(2)
PL.39 7号窯跡出土遺物(3)
PL.40 7号窯跡出土遺物(4)
8号窯跡出土遺物(1)
PL.41 8号窯跡出土遺物(2)
PL.42 8号窯跡出土遺物(3)
PL.43 8号窯跡出土遺物(4)
9号窯跡出土遺物(1)
PL.44 9号窯跡出土遺物(2)
10号窯跡出土遺物(1)
PL.45 10号窯跡出土遺物(2)
11号窯跡出土遺物(1)
PL.46 1号窯跡焼台
2号窯跡焼台
3号窯跡焼台(1)
PL.47 3号窯跡焼台(2)
4号窯跡焼台
5号窯跡焼台(1)
PL.48 5号窯跡焼台(2)
6号窯跡焼台(1)
PL.49 6号窯跡焼台(2)
7号窯跡焼台
8号窯跡焼台
9号窯跡焼台(1)
PL.50 9号窯跡焼台(2)
10号窯跡焼台
11号窯跡焼台
PL.51 灰原出土遺物(1)
PL.52 灰原出土遺物(2)
PL.53 灰原出土遺物(3)
PL.54 灰原出土遺物(4)
PL.55 灰原出土遺物(5)
PL.56 灰原出土遺物(6)
PL.57 灰原出土遺物(7)
PL.58 灰原出土遺物(8)
PL.59 灰原出土遺物(9)
PL.60 灰原出土遺物(10)
PL.61 灰原出土遺物(11)
PL.62 灰原出土遺物(12)
PL.63 灰原出土遺物(13)
PL.64 灰原出土遺物(14)
PL.65 灰原出土遺物(15)
PL.66 灰原出土遺物(16)
PL.67 灰原出土遺物(17)
PL.68 灰原出土遺物(18)
PL.69 A_1-16号住居跡
A_1-30号住居跡
A_1-35号住居跡遺物出土状況
A_1-38号住居跡
C-51号住居跡
C-52号住居跡
C-58号住居跡
A_2-63号住居跡
PL.70 A_2-64号住居跡
A_2-66号住居跡
A_2-67号住居跡遺物出土状況
A_2-68号住居跡
A_2-69号住居跡
A_2-70号住居跡
A_2-70号住居跡竈
E_2-91号住居跡遺物出土状況
PL.71 E_2-92a 号住居跡遺物出土状況
E_2-97号住居跡遺物出土状況
E_2-103号住居跡
E_2-106号住居跡
E_2-107号住居跡遺物出土状況
E_2-111号住居跡掘形
E_2-113号住居跡
E_2-117号住居跡掘形
PL.72 E_2-118号住居跡
E_2-119号住居跡
E_2-120号住居跡
E_2-121号住居跡
E_2-128号住居跡
D-144号住居跡遺物出土状況
D-144号住居跡竈
E_2-150号住居跡遺物出土状況
PL.73 E_2-151号住居跡
E_2-155号住居跡
A_2-161号住居跡
E_2-169号住居跡
E_2-172号住居跡
E_2-172号住居竈遺物出土状況
E_2-172号住居竈遺物出土状況
E_2-174号住居跡
PL.74 E_2-191号住居跡
E_2-192号住居跡
E_2-194号住居跡
E_2-198号住居跡
E_2-199号住居跡
E_2-200号住居跡
E_2-201号住居跡
E_2-205号住居跡
PL.75 E_2-206号住居跡
E_2-208号住居跡
F-47号住居跡
F-70号住居跡
工房・6号住居跡
工房・13号住居跡
C区調査風景・F区調査風景
PL.76 A_1-16号住居跡出土遺物
A_1-30号住居跡出土遺物
A_1-35号住居跡出土遺物
A_1-38号住居跡出土遺物
PL.77 C-51号住居跡出土遺物
C-52号住居跡出土遺物
C-58号住居跡出土遺物
A_2-63号住居跡出土遺物(1)
PL.78 A_2-63号住居跡出土遺物(2)
A_2-64号住居跡出土遺物
A_2-66号住居跡出土遺物
A_2-67号住居跡出土遺物(1)
PL.79 A_2-67号住居跡出土遺物(2)
A_2-68号住居跡出土遺物
A_2-69号住居跡出土遺物

P L.80 A_2-70号住居跡出土遺物
E_2-91号住居跡出土遺物
E_2-92a.b 号住居跡出土遺物(1)
P L.81 E_2-92a.b 号住居跡出土遺物(2)
E_2-97号住居跡出土遺物
E_2-103号住居跡出土遺物
E_2-106号住居跡出土遺物(1)
P L.82 E_2-106号住居跡出土遺物(2)
E_2-107号住居跡出土遺物(1)
P L.83 E_2-107号住居跡出土遺物(2)
E_2-111号住居跡出土遺物
E_2-113号住居跡出土遺物
E_2-117号住居跡出土遺物
P L.84 E_2-118号住居跡出土遺物
E_2-119号住居跡出土遺物
E_2-120号住居跡出土遺物
E_2-121号住居跡出土遺物
P L.85 E_2-128号住居跡出土遺物
D-144号住居跡出土遺物
P L.86 E_2-150号住居跡出土遺物
E_2-151号住居跡出土遺物
E_2-155号住居跡出土遺物(1)
P L.87 E_2-155号住居跡出土遺物(2)
A_2-161号住居跡出土遺物
P L.88 E_2-168号住居跡出土遺物
E_2-172号住居跡出土遺物(1)
P L.89 E_2-172号住居跡出土遺物(2)
E_2-174号住居跡出土遺物
E_2-192号住居跡出土遺物
E_2-194号住居跡出土遺物
P L.90 E_2-198号住居跡出土遺物
E_2-199号住居跡出土遺物
E_2-200号住居跡出土遺物
E_2-205号住居跡出土遺物
E_2-206号住居跡出土遺物
E_2-208号住居跡出土遺物(1)
P L.91 E_2-208号住居跡出土遺物(2)
B-2号住居跡出土遺物
B-1号住居跡出土遺物
P L.92 F-47号住居跡出土遺物
F-70号住居跡出土遺物
工境-6号住居跡出土遺物
工境-13号住居跡出土遺物
P L.93 A_1-1号掘立柱建物跡
A_1-2号掘立柱建物跡
A_1-3号掘立柱建物跡
A_1-4号掘立柱建物跡
A_2-7号掘立柱建物跡
D_2-2号掘立柱建物跡
D_2-3号掘立柱建物跡
D_2-4号掘立柱建物跡
P L.94 D_2-5号掘立柱建物跡
D_2-6号掘立柱建物跡
D_2-7号掘立柱建物跡
D_2-8号掘立柱建物跡
D_2-11号掘立柱建物跡
E_2-1号掘立柱建物跡
E_2-2号掘立柱建物跡
E_2-4号掘立柱建物跡
P L.95 E_2-5号掘立柱建物跡
E_2-6号掘立柱建物跡
E_2-9号掘立柱建物跡
E_2-6号掘立柱建物跡
E_2-7号掘立柱建物跡
E_2-8号掘立柱建物跡
F-1号掘立柱建物跡
F-2号掘立柱建物跡
P L.96 F-3号掘立柱建物跡
F-4号掘立柱建物跡
F-5号掘立柱建物跡
G-1号掘立柱建物跡
F区掘立柱建物跡群
P L.97 2号井戸跡
3号井戸跡
4号井戸跡
4号井戸跡土層断面
5号井戸跡
6号井戸跡
7号井戸跡
8号井戸跡
P L.98 9号井戸跡
10号井戸跡
11号井戸跡
12号井戸跡
13号井戸跡
13号井戸跡土層断面
14号井戸跡
15号井戸跡
P L.99 16号井戸跡
17号井戸跡
18号井戸跡
19号井戸跡
20号井戸跡
21号井戸跡
22号井戸跡
23号井戸跡
P L.100 24号井戸跡
24号井戸跡土層断面
25a号井戸跡
25b号井戸跡
26号井戸跡
27号井戸跡
28号井戸跡
29a号井戸跡
P L.101 30号井戸跡
31号井戸跡
32号井戸跡
32号井戸跡土層断面
33号井戸跡
34号井戸跡
35号井戸跡
36号井戸跡
P L.102 37号井戸跡
38a号井戸跡
38b号井戸跡
41号井戸跡
42号井戸跡
43号井戸跡
44号井戸跡
45号井戸跡
P L.103 47号井戸跡遺物出土状況
47号井戸跡
48号井戸跡
49号井戸跡断割り(1)
49号井戸跡断割り(2)
49号井戸跡石組崩落状況
49号井戸跡石組
49号井戸跡掘形
P L.104 1号地下式土坑
2号地下式土坑
1号土壙墓
1号土壙墓遺物出土状況
2号土壙墓
3号土壙墓
4号土壙墓
4号土壙墓遺物出土状況
P L.105 4号溝 5号溝
9号溝 12号溝
16号溝 13号溝
15号溝 17号溝
P L.106 18号溝
20・21号溝
28・29号溝
37号溝 42号溝
47号溝 48号溝
49号溝 50号溝
P L.107 52号溝 70号溝
D_2-2号溝
D_2-1・2・4号溝
D_2-1号溝土層断面
D_2-7・19・20号溝
D_2-2号溝土層断面
D_2-21～25・29号溝
D_2-4号溝土層断面
P L.108 D_2-4号溝
D_2-18号溝
D_2-20号溝
F-13号溝
F-15号溝
F-22号溝
F-23号溝
G-18号溝
P L.109 掘立柱建物跡・井戸跡出土遺物
A_2-7・E_2-9号掘立柱建物跡
7・11～13・19・21・27・29a号井戸跡
P L.110 井戸跡・地下式土坑・土壙墓・土坑出土遺物
47号井戸跡・2号地下式土坑
1・2・3号墓・243号土坑
P L.111 土坑・溝出土遺物
227・311号土坑
1・4・5・12・27号(1)溝
P L.112 溝出土遺物 27号溝(2)
36・40・49号溝
P L.113 溝出土遺物51・70・38号溝
P L.114 38号溝出土遺物(2)
P L.115 38号溝出土遺物(3)
P L.116 38号溝(4)・他出土遺物

報 告 書 抄 録

ふ り が な	ぶたいいせき
書　　名	舞台遺跡(1)（奈良・平安時代他編）
副 書 名	北関東自動車道（高崎―伊勢崎）地域埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	第６集
シ リ ー ズ 名	財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告
シリーズ番号	第282集
編 集 者 名	綿貫邦男
編 集 機 関	財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
編集機関所在地	〒377―8555　群馬県勢多郡北橘村大字下箱田784―２　TEL 0279―52―2511
発 行 年 月 日	西暦2001年３月26日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
舞台遺跡（ぶたい）	伊勢崎市（いせさきし） 三和町（さんわまち）	10204		36°21′05″	139°13′33″	19950401 ～ 20000331	60893	北関東自動車道建設

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特記事項
舞 台 遺 跡	集　落	奈良・平安	竪穴住居・掘立柱建物	土師器・須恵器	竪穴住居51軒
	生 産 跡		須恵器窯跡	須恵器	窯跡11基
	井戸・土坑・墓・溝	奈良・平安 中世・近世	井戸・地下式土坑・土坑・墓・溝	土師器・須恵器・陶器・土器（カワラケ）	

第１章　発掘調査の概要

第１節　調査に至る経緯

舞台遺跡は北関東自動車道建設に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査として、高崎市上滝榎町北遺跡に次いで着手した２番目の遺跡である。本遺跡の周辺部は県企業局が実施していた三和工業団地建設予定地であり、「三和工業団地遺跡」として伊勢崎市教育委員会と本事業団が発掘調査を実施した。また、北関東自動車道と一般国道17号（上武道路）と結ぶ地点については、建設省（現国土交通省）委託により、本事業団が「下植木窄町田遺跡」として発掘調査を実施していた。さらに、高崎から伊勢崎間で比較的の用地買収が進んでいた本遺跡の発掘調査に着手することになった。

本遺跡は北関東自動車道高崎基点STA 142.85～148.05の間、伊勢崎 Interchange 建設予定地部分に該当している。東西方向の本線部分約520mと、南北方向は北側の環状部、及び南には進入部と料金所敷地約420mにおよぶ範囲が調査対象となった。なお、本遺跡の周辺部に発掘調査が及んでいたため、試掘調査は実施せず、本調査に着手することとなった。推定として表面積約60,000㎡が遺跡範囲と判断された。

日本道路公団、県土木部道路建設課高速道路対策室、県教育委員会文化財保護課と当理文事業団による「北関東自動車道文化財調査に関する調整会議」を、平成７年11月20日と平成８年１月30日開催し、本遺跡の調査を実施することになった。また、同年２月22日には県教育委員会文化財保護課主催による「第１回北関東自動車道地域埋蔵文化財発掘調査に関する沿線市町村連絡調整会議」が開催された。

これらの調整会議を受け、同年２月に本線内に調査事務所を設置し、用地杭の確認、及び調査区周辺に安全フェンスを設置した。同月にA－１区の表土除去作業から着手した。３月には新規発掘作業員を募集し、３月11日から本調査を実施した。本年度の調査は、A－１区の遺構確認作業をおこなった。

第１図　北関東自動車道関連遺跡位置図

第２節　調査の方法と経過

調査にあたっての方眼設定には、国家座標第IX系を用い10mを基準とした。各方眼の名称は、南東隅の座標値で表し、X＝389980・Y＝－347740のように標記した。本遺跡の調査は、複数年次に渡ることが予測されたため、対象地区を便宜的にA～G区に分けて実施した。さらに、農道や用地買収状況等により調査区が分断される場合には、A－1区・A－2区等と適宜細分した（第３図）。遺構名称は基本的には、区名にあたるAlphabet を冠し、遺構の種類別に算用数字を用いて通番とした。A1号住居跡・B1号井戸跡等である。なお、遺物注記は、遺跡略号であるKT―320を使用した。

１．平成７年度（平成８年３月11日～３月31日）

本線内に調査事務所の設置、及びA－１区の表土除去作業を実施した。

２．平成８年度（平成８年４月１日～平成９年１月24日　以降、一時中断する。）

通年の調査計画で開始したが、前橋南部地区の工事計画との調整で、平成９年１月をもって調査を一時中断した。A－１区の調査では古墳時代から平安時代の住居跡の調査と、A－３区では古墳時代から平安時代の住居跡と須恵器窯跡の調査を実施した。さらに、B区とC区の古墳時代の住居跡の調査を実施した。

第２図　舞台遺跡地域図

一方、Ａ－３区は８月中旬に調査を一時中断し、光仙房遺跡の排土置き場を確保するため、Ｂ区の調査を優先させた。また、11月に須恵器窯跡を中心として、新聞記者発表をおこなった。特に、西側の谷部分に延びる灰原より多量の須恵器が出土したため、12月に本部分の調査期間について関連機関と再調整のうえ、平成９年度へ継続して調査を実施することに変更した。

３．平成９年度（平成９年４月１日～平成10年３月31日）

本年度の調査は、前年度に終了したＡ－１区・Ｃ区を除き、Ａ－２・３区・Ｂ区・Ｄ－１・２区・Ｅ－１～３区・Ｆ－２区・Ｇ－２区を実施した。Ａ区では須恵器窯跡関連の調査を終了させるとともに、７月には調査事務所の一部を移動し、Ａ－２区の調査に着手した。本区では古墳時代から平安時代の住居跡の調査を実施した。Ｄ－１区では古墳時代の方形周溝墓群と、古墳時代から平安時代の住居跡の調査を実施した。Ｄ－２区では旧石器と縄文時代の住居跡、土坑、及び古墳時代の住居跡を調査した。また、５月にＡ区からＧ区北側の工業団地との境界に水路建設の計画が提示され、日本道路公団、県企業局、文化財保護課と当事業団により協議うえ、Ｆ区とＧ区の一部を調査した。Ｆ－２区・Ｇ－２区ともに旧石器２面と、古墳時代の住居跡の調査を実施した。一方、同年６月から旧石器の確認調査等に関して「表土掘削と排土及び関連土木作業工事」請負業務として土木作業員を導入し、Ｅ－１～３区では旧石器と奈良・平安時代の住居跡の調査を実施した。さらに、10月の日本道路公団、県教育委員会文化財保護課との調整会議では、当面供用に必要な範囲（Ａ・Ｂ・Ｄ－１・Ｄ－２・Ｅ区）を確認し、調査体制を補強した。特に、本年度の調査に関して、Ｄ－１区で検出された方形周溝墓群は注目をあびたので、９月13日に現地説明会を実施し遺跡の公開をおこなった。見学者数は408人であった。

４．平成10年度（平成10年４月１日から同年８月31日と平成11年２月１日～同年３月31日）

本年度の調査は、昨年度の継続であるＤ－１区の調査と、新たに用地買収が終了したＤ－３区の調査に着手した。旧石器と縄文時代の土坑、及び古墳時代の住居跡、掘立柱建物跡、方形周溝墓、畠跡等の調査を実施した。また、同年８月に調査を終了していたＡ区全体と、Ｂ区・Ｄ区の一部を道路公団へ用地の引渡をおこなった。さらに、伊勢崎市波志江地区の工事計画が切迫してきたため、本遺跡の調査は一時中断した。

一方、本年度より整理作業に着手した。平成８年度に調査した須恵器窯の資料を整理した。

５．平成11年度（平成11年４月１日～平成12年３月31日）

Ｄ－３区・Ｆ－１区・Ｇ－１区の調査をおこなった。Ｄ－３区は古墳時代の住居跡と方形周溝墓、畠跡、Ｆ－１区は旧石器から縄文時代の住居跡と土坑、古墳時代の住居跡と掘立柱建物跡、畠跡、及び奈良平安時代の住居跡等である。Ｇ－１区は古墳時代の住居跡と掘立柱建物跡、畠跡等の調査を実施した。

また、日本道路公団へ引渡を終了した地点の工事計画との兼ね合いにより、10月よりＡ－３区北側の隣接地を借地し排土置き場とするとともに、平成12年２月に書上遺跡の隣接地に調査事務所を移動した。同月に舞台・大井戸遺跡の調査終結に伴い、関連機関との最終協議をおこない同年３月末日をもって本遺跡の調査を終了した。

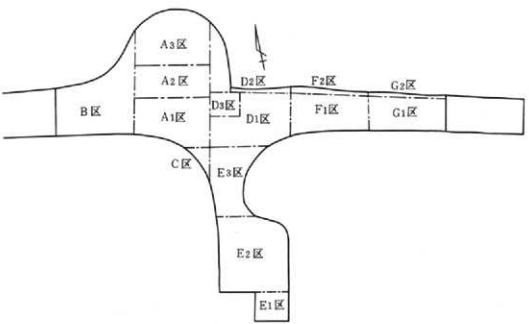
一方、整理２年次は昨年度から継続した平安時代の須恵器窯跡関連の資料と、平成７～10年度に調査した古墳時代から中世にかけての住居跡、掘立柱建物跡、方形周溝墓、溝等の整理をおこなった。

６．平成12年度（平成12年４月１日～平成13年３月31日）

整理３年次は須恵器窯跡と、奈良平安時代から中世の住居跡、館跡、掘立柱建物跡等に関する資料を、第１分冊として報告書を刊行した。

舞台遺跡（表面積60,893㎡　延べ面積88,319㎡）									
調査区№	A 区				B 区	C 区	D 区				
表面積	17,378				9,663	568	9,333				
	A-1 (5,748)	A-2 (4,017)	A-3 (7,613)				D-1 (4,625)	D-1 (1,692)	D-2 (468)	D-2 (440)
内容（面数）	古墳～平安集落 1面	古墳～平安集落 1面	古墳～平安集落・墓跡 1面	古墳～平安集落 1面	古墳～平安集落 1面	縄文～平安集落・方形周溝墓 2面		工業団地拡幅旧石器～平安集落 3面		
延べ面積	5,748	4,017	7,613	9,663	568	9,250	3,554	2,724		
第1面	古墳～平安：住居 H 8. 3/11～7/31	古墳～平安：住居 H 9. 7/1～H10. 1/31	古墳～平安：住・墓 H 8. 5/1～H 9. 7/31	古墳～平安：住居 H 8. 4/1～H 9. 8/31	古墳～平安：住居 H 8. 7/1～9/30	古墳～平安：住・墓 H 9. 4/5～H10. 3/25	古墳：住居 H10. 4/10～8/10	古墳：住居 H 9.11/1～11/30	古墳：住居 H 9.11/1～11/30	
第2面						縄文 H10. 4/5～5/11	縄文 H10. 8/6～8/31	縄文 H 9.12/1～12/15	縄文 H 9.12/1～12/15	
第3面							旧石器(170㎡) H11.10/14～12/13	旧石器 (170) H 9.12/15～12/25	旧石器 (170) H 9.12/15～12/25	

調査区№	E 区				F 区		G 区	
表面積	13,874				5,298		4,779	
	D-3 (2,108)	E-1 (1,716)	E-2 (7,246)	E-3 (4,912)	F-1 (4,748)	F-2 (550)	G-1 (4,246)	G-2 (533)
内容（面数）	本識 旧石器～近世集落・方形周溝墓 3面	奈良・平安集落 1面	旧石器～平安集落 2面	奈良・平安集落 1面	旧石器～古墳集落 3面	旧石器～古墳集落 3面	旧石器～古墳集落・島 3面	旧石器～古墳集落 3面
延べ面積	4,426	1,716	9,291	4,912	11,771	1,650	9,817	1,599
第1面	中・近世：館 H11. 2/8～2/26	奈良・平安：住居 H 9. 7/1～12/25	奈良・平安：住居 H 9. 5/1～12/25	平安・古墳：住居 H 9. 5/1～H10. 3/25	古墳：住居 H11. 6/1～11/30	古墳：住居 H 9.11/1～11/30	古墳：住居・島 H11. 6/1～11/30	古墳：住居 H 9.11/1～11/30
第2面	古墳：住居 H11. 3/1～10/13		旧石器 (2,045) H10. 1/5～3/25		縄文 H11.12/1～H12. 1/17	旧石器 H 9.12/1～12/10	縄文 H11.12/1～H12. 1/31	旧石器 H 9.12/1～12/10
第3面	旧石器 (210) H11.10/14～H12. 1/31				旧石器 (2,275) H12. 1/17～2/29	旧石器 H 9.12/11～12/25	旧石器 (1,325) H12. 2/1～2/29	旧石器 H 9.12/11～12/25



第３図　調査区割図

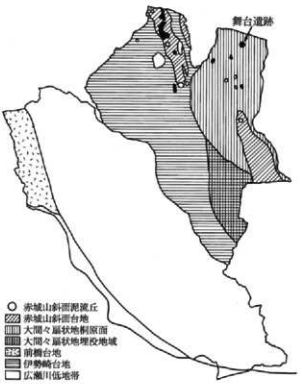
第2章　遺跡の立地と歴史環境

第1節　遺跡の立地

舞台遺跡は、伊勢崎市三和町に所在する。群馬県の南部に位置する伊勢崎市域は、その南を埼玉県本庄市と利根川を介して県境とする。市域の大半は平坦地形をなし、北東部は粕川が南流する。中央部には広瀬川が南東流し、地質的にはこの広瀬川境に左岸が洪積台地に、右岸は沖積台地に大別される。

舞台遺跡の位置する三和町は、伊勢崎市域の東北方最端部にあたり、東は佐波郡東村に、北は赤堀町に接する。西は粕川に区切られている。粕川を境にしてその西側は、赤城南麓の開析された低台地が樹枝状に発達する。東側は、足尾山地に源を発する渡良瀬川によって形成された、古期大間々扇状地桐原面の広大な低台地が広がる(第4図)。三和町は、この大間々扇状地形の西南端部にあたり、洪積台地上には多くの湧水地が点在する。この湧水による侵食で、周辺域には多くの細長い谷地形が形成されている。当遺跡地や隣接地においても「あまが池」・「男井戸」・「角弥清水」・「谷地清水」などの湧水地が知られている。「男井戸」は現在でも湧水地として残るが、多くは昭和50年代の土地改良工事によって消滅している。舞台遺跡の調査では、「角弥清水」に比定できる湧水地点と、これを源にする南開口の狭長な谷地形を検出している。一見、豊かな水量を保有する地帯と考えがちである。しかし、舞台遺跡を含む広瀬川左岸の洪積台地では、江戸時代、水量の乏しい湧水と赤城山小沼を水源とする神沢川・粕川水系の小河川に属するため渇水に苦しむことが多かったとされる。外観は広大な平坦地勢をなす当該地域ではあるが、可耕地の拡大には溜池と用水路の築造が不可欠となり、寛文年間・貞享年間には華蔵寺下沼・上沼が、元治年間には八幡沼がそれぞれ完成した。なお溜池灌漑のみには頼れず、八坂用水を造り桃の木川から引水した。宝永年間の完成である。溜っては中世、赤城山南面の裾野ににに永々と延びる女堀が知られる。広大な大間々扇状地を潤すべく開削されたこの用水路は、天仁元年の浅間山噴火に伴う火山灰(As-B)による耕地の潰滅的被害からの復興が直接的な動機であったとされる。このことは、当該地域においては水源不足から生じる渇水という自然条件が、基本的問題として内在していたことを物語っている。

舞台遺跡は、東に湧水地「男井戸」の谷地形縁辺に接し、西は「角弥清水」の谷地を取り込み両者に挟まれたLoam台地を中心に展開する。このLoam台地は両湧水地が合流することによって舌状地形であり比較的平坦な地勢となっている。遺跡地は台地基部から中央にかけて位置し、標高87.50m～85.00mの北から南に緩く傾斜する台地で低地部との比高差はおよそ3mである。



第4図　伊勢崎市域地形区分図

舞台遺跡の構成は、旧石器時代より中世に至る複合遺跡であるが、古墳時代から歴史時代にかけては数度の断絶が認められている。しかし、舞台遺跡隣接周辺では広大な三和工業団地遺跡が調査されており、両者は同一遺跡として認識できるものである。本遺跡の動向はそこでの成果を踏まえた上での総合的な検討がされなければならない。また、この現象の理解には周辺地域における水量の増減もまた一つの要件として考慮されるべき視点になろう。

第２節　歴史環境

舞台遺跡は、旧石器時代から中世に至る複合遺跡である。したがって検出された遺構は住居跡・生産跡・墓跡など種々にわたりこれらに伴う遺物もまた豊富で様々である。周辺域の可視的な遺跡分布では、当遺跡の南・西域では大間々扇状地形の開析谷の耕地化を背景に展開した幾多の古墳群が知られている。近年、当遺跡以西では北関東自動車道予定地の北側を伴走する上武国道自動車道の建設に伴う遺跡発掘調査によって歴史的環境は一気にその内容が充実するに至っている。

旧石器時代　旧石器時代における赤城山南麓は、岩宿遺跡の発見に象徴されるように日本旧石器研究にとって重要な地域である。旧石器時代の遺跡は桝形遺跡のような高標高地帯から麓端の低平なLoam台地に多く分布するが、伊勢崎市豊城町にある独立丘陵権現山台地に発見された権現山遺跡では岩宿遺跡より溯る石器が出土したことで著名である。石器は関東Loam層の八崎軽石層（Hr-HP）下で検出され、現在のところ赤城山南麓地域で最も古く中期旧石器時代に位置付けられている。また、石器の形態についても、洋ナシ型・心臓型握斧など全国的にも未だ類似する資料を見ないものである。大間々扇状地扇端より南には権現山台地の他、新田町木崎台地・太田市由良台地など扇状地より古い洪積台地が点在しており、同時代の資料の発見が期待される。舞台遺跡を含め周辺地域では、現在のところ（As-YP）含有のLoam層からAT含有の暗色帯及び最下位暗色帯層での後期旧石器時代の発見に留まる。

舞台遺跡の北に接する三和工業団地Ⅰ遺跡ではAs-YP含有Loam層以下AT下暗色帯の間に４つの文化層が層位的に確認されている。両極剥離痕ある石器（ピエス・エスキーユ）・尖頭器・大形礫・局部磨製石斧及び台形様石器などが検出されている。広範に分布する石器群から、環状分布・帯状分布を抽出するが、単層的文化面との見通しから剥片生産・ピエス・エスキーユ・石材など各種石器分布の分析から遺跡構造解明に迫っている。また、周辺地域では昭和49年から63年にかけて調査された上武国道（国道17号線）関連では８遺跡、その他併せて11ケ所の旧石器時代遺跡が発見されており旧石器時代人の濃密な活動状況が窺われる。

縄文時代　赤城山南麓の縁端に位置する伊勢崎市の縄文時代遺跡は、広範な広瀬川低地帯を挟み、主にはその東側に色濃く、西側に若干の分布が見られる。広瀬川西側の前橋台地上には遺跡数が少ないが、縄文後期後半の時期のものが希薄ながら点在する。赤城山斜面・大間々扇状地・伊勢崎台地などの東側地帯では、遺跡の実態は不明ながら草創期の遺物が発見された間之山遺跡がある。早期の遺跡としては、波志江六反田・山崎・波志江権現山・高山・書上本山・八寸Ｂ等の諸遺跡があり、小丘陵上やその裾部に立地する。

縄文時代前期に至り遺跡は、湧水に近い台地の縁辺部に立地する傾向が見られるようになる。この時期の遺跡には波志江天神山・書上浄水場・尼ケ池周辺・天ケ堤・下吉祥寺遺跡等が知られる。集落は数軒の単位で比較的小規模なものがほとんどであるが、三和工業団地Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡では前期を中心とした草創期から後期にいたる130軒あまりの竪穴住居跡が調査されている。

縄文中期前半にはやや減少傾向となるが、後半から後期前半には遺跡数・集落規模ともピークに達し、それにともなって遺跡の立地も湧水や小河川を臨む広い台地上に占拠するようになる。この時期には、渡良瀬川扇状地の西端縁にある赤堀町曲沢遺跡では、住居跡100軒を上回る集落を形成し、赤城山南麓有数の遺跡となっている。伊勢崎市域の遺跡には鹿沼東・下海老・ネタンブチ・宮柴遺跡などがある。

縄文後期から晩期にかけての遺跡は前代に比べてかなり減少するが、荒砥川左岸の八坂遺跡・粕川左岸の大道西遺跡など広瀬川低地帯をのぞむ伊勢崎台地の西縁の河川や湧水に恵まれた地帯に立地し、より低台化した平地へ占地する。八坂遺跡では遺物散布の範囲が2ヘクタールにも及び獣骨・炭化物・土製耳飾り・配石遺構等の発見があり当該期の文化様相を示す遺跡として注目されている。また、断絶をもちつつも、八坂遺跡付近に集中する弥生遺跡の存在に、その類似する立地条件からして先駆的な農耕の芽生えもあったと考えられている。舞台遺跡での縄文時代はその前期を中心としている。竪穴住居跡5軒・Tピットと呼ばれる狭深な落穴が検出されているが集落構造としては散在した分布を示し、周辺遺跡と同様な在り方を示している。

弥生時代　関東地方における弥生文化は従来中期からとされていたが、群馬県では浚川市南大塚遺跡・藤岡市沖Ⅱ遺跡・安中市注連引原Ⅱ遺跡・子持村押手遺跡等の発見によってその成立の時期が前期に溯る可能性が高まった。南大塚では東海地方に発生をもつ水神平系の土器が、また沖Ⅱ・注連引原Ⅱ・押手からは西日本の遠賀川式土器が検出されている。

内陸部に位置する群馬県の弥生文化の波及は、複数の土器系譜として認められ、県域ではおおよそ西部山間部および利根川西の平野部と、利根川東の赤城山南麓から渡良瀬川流域の地域にに大別反映される。弥生時代前期末から中期前半では、前者が縄文的要素の強い岩櫛山式が、後者は東関東地方を中心とする野沢Ⅰ式・南関東を主とする須和田式の影響を受ける。

赤城山南麓および大間々扇状地帯での弥生時代の遺跡は希薄な状況である。近年、低地帯をひかえた山麓の末端地域では徐々にではあるがその事例が増加しているが、なお集落遺跡としての充分な展開を見せるに至ってはいない。伊勢崎市域での弥生時代遺跡の主分布は古利根川低地帯を流れる広瀬川の北側微高地上に立地している。遺跡の形成は中期から知られるが、西太田遺跡・中組遺跡では中期後半から後期前半のにかけての当地域には数少ない竪穴住居跡が検出されている。後期に属する遺跡には、大道西遺跡・合同庁舎北遺跡などがあり、樽式土器を中心にするが北関東に形成される土器文化の摂取も見られ、前者からは茨城県の十王台式系が、後者からは栃木県の二軒屋式系の土器を検出している。この時期には大集落形成が見られず、後の水田開発地域への先達的な遺跡としての性格が考えられている。

赤城山南麓地域には後期後半になって縄文系の赤井戸式土器が県内では主体土器形式である樽式土器と混在しはじめる。壺・甕型土器の口頸部に残す輪積痕と縄文の施文を特徴とする土器群である。赤井戸式土器は従来、赤城山南麓を主とした分布圏をもつとされていたが、近年では鏑川流域をはじめ県内各地に分布することが知られている。その形成について、平地よりは山寄りの土器文化としてとらえられていたが、埼玉県比企地域に中心のある吉ケ谷式土器文化の拡散により樽式土器文化との融合によって成立したと考えられている。

伊勢崎地域では、弥生時代中期後半に至ってようやく水田農耕の兆しが感じられる。しかし、農耕適地を求めて様々な異系統土器文化が進出・交雑しながらも、なお当該地域に根着くことなく、また発展しなかった。このような遺跡の状況は、利根川流域の広大な湿潤地帯が開発の対象となるには当時の技術的未成熟を示していると考えられている。耕地への本格的な動きは古墳時代前期を待たなければならなかったが、ただ

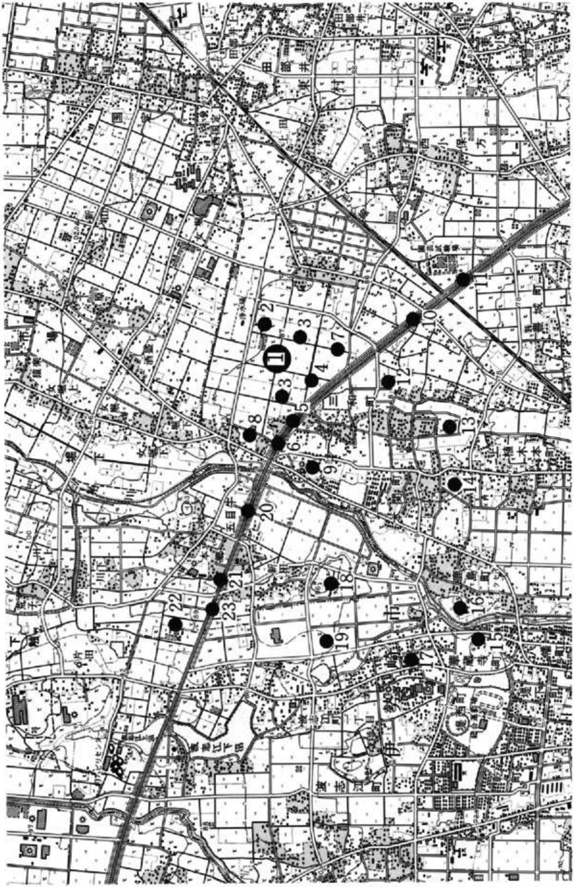
一人、赤井戸式土器に対しては古墳時代前期に発展的であると位置付ける考えもある。この観点からすれば、古墳時代初期に現れ、Ｓ字口縁台付き甕に代表される外来文化流入に際しては、迅速かつ広範にそれを摂取したのは樽・赤井戸式土器文化の人々であり、進歩した農業技術を会得した彼らが赤城山南麓の開発主体者であったとの考え方もできよう。しかし、舞台遺跡での弥生時代文化は現在のところ積極的な痕跡を見いだすことはできず、なお稲作農耕には未開拓な地域であった。

古墳時代　県内における稲作農耕が飛躍的な展開を見せるのは古墳時代になってからである。その前半期には中小の河川流域の沖積地の開発を背景に多くの集落遺跡が形成される。群馬県を中心とした北関東の初期古墳文化は東海地方特に伊勢湾を中心とした外来系土器文化圏に強い影響を受けて発展したと考えられている。県内においてのその代表的な土器がＳ字状口縁台付き甕である。この東海地方を中心とする外来系土器文化の希求的な地点として群馬郡から高崎市にかけての地域が有力視されている。

伊勢崎市域での初期古墳文化の足跡は、粕川・広瀬川に画された伊勢崎台地上喜多町遺跡に残される。両河川によって形成された沖積地平坦面にある。遺構確認はなされていないが、粘土層中から検出された土器群の一部はパレス式壺・Ｓ字状口縁甕・大形器台など東海系のもので弥生土器から土師器への過渡的様相をもつとされている。その後の展開は、伊勢崎市域のみならず群馬県内でも最古の古墳のひとつとされる華蔵寺裏山古墳の築造が利根川東岸の広範な平坦地を背景にした身分階層社会を創出したことを示している。５世紀半ば頃には長持形石棺を蔵したとされる、全長125mの前方後円墳御富士山古墳の出現に至り、赤城山南麓一帯の頂点に達した勢力が誕生している。

舞台遺跡での古墳前期は、150件に達する住居群と前方後方型２基を含む10基の方形周溝墓が検出されている。隣接する三和工業団地遺跡を乗しての遺跡構成内容は、当該地域における古墳時代前期の社会構造・変遷究明に欠くことの出来ない存在であろう。また、古墳時代中期を隔て後期に再現する集落は、粕川左岸間近な関山古墳群の形成に有機的なかかわりが予想される。

歴史時代　多くは広瀬川の東方に遺跡分布のある伊勢崎市域で、その東北部はとみに豊富な遺跡が知られている。舞台遺跡はその版図に入り、上武国道の建設に伴う発掘調査によってますます濃密さを増している。当遺跡北方約400m指呼の間に推定東山道が東西走し、南南西方1.3kmには著名な上植木廃寺が位置する。とくに上植木廃寺は七堂伽藍を具備し、前橋市山王廃寺・太田市寺井廃寺に並ぶ古代上野国の秀逸した初期寺院跡である。このことをとっても、舞台遺跡周辺は伊勢崎市域でも中心的な地域としての位置付けは容易である。歴史時代を構成する舞台遺跡の遺構内容は９世紀から10世紀にかけての竪穴住居跡51軒・須恵器窯跡11基の他、掘立柱建物跡などからなる。集落規模としては、隣接して同一遺跡として考えられる三和工業団地遺跡・光仙房遺跡・上植木光仙房遺跡の一角に過ぎない。しかし、上記の遺跡を含む総体が遺跡の本質であり、集落遺跡としては県内屈指の様相を呈している。集落の形成はやや唐突に出現する感があり、古代後半期の地域開発にかかわる実態解明に大きく寄与するものとなろう。



第5図 周辺遺跡位置図 (国土地理院 1/25000「大胡」)

周辺の遺跡一覧表

番号	遺　跡　名	遺　跡　の　概　要	備　　考
1	舞台遺跡	旧石器・縄文前期住居跡・陥穴・古墳前期周溝墓・住居後期住居・奈良・平安住居、平安須恵器窯他	本報告・『年報15』～『年報19』群理文　1996～2000
2	三和工業団地Ⅰ遺跡	旧石器・古墳前期～後期住居、平安時代住居他	『三和工業団地Ⅰ遺跡』(1)・同2)群理文　1999
3	三和工業団地Ⅱ～Ⅳ	旧石器、縄文前期住居、古墳前期住居・周溝墓、古墳後期住居、奈良・平安住居・須恵器窯　中世馬房他	『年報15』・『年報16』・『年報17』群理文　1996～1998
4	下植木壱町田遺跡	旧石器・古墳前期・後期住居、奈良・平安住居、中世館跡・遺構群、平安水田	『下植木壱町田遺跡』群理文　1999
5	上植木壱町田遺跡	縄文中期～平安住居、中世井戸他	『書上下古祥寺遺跡・書上上之原遺跡・上植木壱町田遺跡』群理文　1988
6	上植木光仙房遺跡	古墳・平安時代住居	『上植木光仙寛遺跡』群理文　1989
7	鰐沼東遺跡	古墳～平安住居他	『鰐沼東遺跡・舞台遺跡』伊勢崎市教育委員会　1977
8	光仙房遺跡	旧石器、古墳前期・後期住居、古墳、古墳後期粘土採掘坑、平安住居・須恵器窯跡、水路他	『年報17』・『年報18』群理文1998・1999
9	岡山古墳群	鮎川左岸に立地。６～７世紀代の古墳群、上植木光仙房遺跡・光仙房遺跡の調査でその一部分が調査された。	『岡山古墳群』『伊勢崎市史　通史編Ⅰ』　1997
10	書上本山遺跡	旧石器、古墳時代住居、平安住居・掘立柱建物跡他　瓦塔片出土。	『書上本山遺跡』群理文　1985
11	書上上之原城遺跡	平安住居・掘立建物跡他	『書上下古祥寺遺跡・書上上之原城遺跡・上植木壱町田遺跡・上植木壱町田遺跡』群理文　1988
12	高山古墳群	７世紀代の古墳群　竪穴式・横穴式石室をもつ	『高山遺跡・天ケ堤遺跡・天野屈遺跡・下書上遺跡』　伊勢崎市教育委員会　1977
13	丸塚山古墳	全長81mの帆立貝式前方後円墳。後円部に箱式棺状の竪穴式石室３基を設ける。５世紀後半	『丸塚山古墳』『伊勢崎市史　通史編Ⅰ』伊勢崎市教育委員会　9997
14	上植木廃寺	７世紀後半の創建で、県内初期寺院の一つ。	『上植木廃寺発掘調査概報Ⅰ』伊勢崎市　1984 『上植木廃寺発掘調査概報Ⅱ』伊勢崎市　1985 『上植木廃寺』―昭和59年度発掘調査概報―伊勢崎市教育委員会　1985
15	華蔵寺裏山古墳	全長40m前後の前方後円墳と考えられ、５世紀初頭の築造と推定されている。複合口縁壺が出土。	『華蔵寺裏山古墳』『伊勢崎市史　通史編Ⅰ』伊勢崎市　1987
16	上西根遺跡	古墳・奈良住居、古墳前期周溝墓	『上西根遺跡』伊勢崎市教育委員会　1985
17	台所山古墳群	『総覧』では７基が確認。調査では箱式石棺の主体部をもつ１基がある。	『台所山古墳』『伊勢崎市史　通史編Ⅰ』伊勢崎市　1987、『上毛古墳綜覧』群馬史跡名勝天然記念物報告第５輯　群馬県　1938
18	地蔵山古墳群	５世紀～８世紀代の古墳55基からなる古墳群	松村一昭『赤堀村地蔵山の古墳Ⅰ』1978、『赤堀村地蔵出の中墳２』1979　赤堀村教育委員会
19	蟹沼東古墳群	６世紀末～７世紀の10基以上の古墳群。縄文時代住居・古墳前期住居・周溝墓検出。	『宮貝戸古墳群・蟹沼東古墳群』伊勢崎市教育委員会　1983。『蟹沼東古墳群・宮貝戸遺跡』伊勢崎市教育委員会　1978。『蟹沼古墳群』伊勢崎市教育委員会　1988
20	五目牛清水田遺跡	縄文前期住居　古墳前期住居、前方後円墳、奈良住居、水田他	『五目牛清水田遺跡』群理文　1993
21	五目牛南組遺跡	縄文前期住居、古墳、近世屋敷跡他	『五目牛南組遺跡』群理文　1992
22	八幡林古墳群	縄文前期住居、６世紀～７世紀代古墳４基	『八幡林古墳群及び縄文住居跡調査概報』赤堀村教育委員会　1982
23	堀下八幡遺跡	旧石器　縄文前期住居、奈良～平安住居他	『堀下八幡遺跡』群理文　1990

第3章　検出された遺構と遺物

第1節　遺跡の概要

舞台遺跡は湧水地によって開析された谷地地形の低湿地帯と Loam 低台地からなっている。遺構形成の主たる地点は台地上に展開している。前述したように旧石器時代から中・近世におよぶ重層的構成を見せる遺構内容となっているが、台地上での遺構検出面は遺跡内のほとんどの地点で Loam 漸移層か黄褐色 Loam 層である。したがって縄文時代前期から中・近世にわたる各種の遺構は表土層ないしは現畑耕作土下での同一面確認となり、面的調査としては Loam 層中の旧石器時代との2段階となる。

舞台遺跡は低地と台地によって形成されているため、その基本土層は大きく異なっている。台地上では大間々扇状地礫層を基盤におよそ5mの Loam 層が堆積するが、層中には広域火山灰の AT をはじめ浅間山・赤城山・榛名山等を給源とする As-YP・As-OPI・As-BP・Ag-KLP・Ag-KP・Hr-HP 等の Thpra が確認されている。隣接する三和工業団地遺跡での土層分析によれば台地上 Loam 層で観察される Thpra の多くは Hr-HP を除いては一次堆積のものではなく層中に散在的であるとされる。なお、旧石器時代の遺物検出は Ⅲ層の黄褐色 Loam 層からⅨ層の暗色帯層である。

低地部では粘土層や Silt 層を中心とした土層堆積からなるが地点毎にみられる土層の表情は一様のものとはならず、かなりの分層が可能である。各種 Thpra は一次堆積の状態で存在し、台地上では辛うじて遺構埋土の二次堆積として認められる As-B をはじめ Hr-FA・As-C などの Tphra も一次堆積で検出されている。

舞台遺跡における遺構の構成は旧石器時代の半環状 Block の体をなす石器群。縄文時代では竪穴住居跡・落とし穴・埋め甕。古墳時代前期には竪穴住居跡と方形および前方後方形周溝墓。古墳時代後期にいたっては竪穴住居跡・円形周溝遺構。平安時代には竪穴住居跡や掘立柱建物跡・墓跡・溝のほか生産跡として平坦地形には希な須恵器窯跡群がある。さらに、中世から近世にかけては屋敷地割りが想定される溝群のほか井戸跡や小穴群が検出されている。

舞台遺跡の旧石器は後期旧石器時代に属し、遺跡南端に入り込む底湿地帯縁辺部でおおよそ2つの Block を形成する半環状の石器分布が確認されている。Loam 層中での高低差はあるものの、遺物の最も集中する層位は AT 下の暗色帯層中でありその数およそ600点に及び、石器および石片の主たる石材はチャートと頁岩である。旧石器の分布は調査区域の中央部分ではほとんど認められていないが、三和工業団地遺跡に接する北側で文化面が確認され、石器の出土は暗色帯層を主とし約50点を数える。石器石材は同じく、チャートと頁岩を主なものとする。舞台遺跡の旧石器石器種には hammer-stoon・台形様石器・尖頭状石器・knife 形石器・end-scraper・石刃・彫刻刀型石器などがある。

縄文時代では前期に属する5軒の住居跡が調査区南部の谷地地形の縁辺と台地中央部及び北部で検出され、集住形態とは言えず各住居跡間にはかなりの空間がある。その他の遺構には、土坑墓・貯蔵穴・落とし穴がある。4軒の住居跡出土土器はほぼ諸磯式に属し、210号住居跡からは諸磯B式の有孔浅鉢型の土器がある。また、落とし穴は南部から中央部にかけて5基が散在してみられ、いわゆる T-pit 形である。

また、土坑墓からは土器・装飾品類が出土している。

古墳時代は峻別を経ていないが前期と後期に大別されると考えられる。中期に属する遺構は極めて希薄か

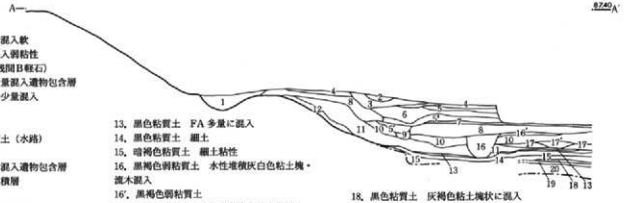
欠落するようである。前期に属する遺構は竪穴住居跡と周溝墓が主で、両者は調査区の北側から中央部かけての地帯に偏在している。一部は重複して検出され集落と墓域の時間的形成過程が知れる。居住空間と墓域空間の成立に関する時間的前後関係は全体を通しての検討を要するが、調査時点の重複例では竪穴住居跡が周溝墓に先行する。竪穴住居跡は149余軒にのぼり、一辺９～10mの比較的大型の規模のものが多く、完形の重圏文鏡出土の146号住居跡や柱穴に礎板をもつ住居跡がある。また、住居内の炉跡には精選された粘土を用い、円形の炉床をつくる竪穴が数例ある。これらは工房跡的な遺構とも考えられるが具体的な性格を示す遺物などはいまのところ確認されていない。舞台遺跡の北側に続く区域の三和工業団地遺跡では、当該期の竪穴住居跡が大半を占め一連の集落範囲となろう。

周溝墓は10基が検出され８基は方形で、２基は前方部を南西に向ける前方後方形周溝墓である。周溝墓の規模は前方後方形の１号・９号が大型で、中型の10号・８号、小型の２号・３号・４号・５号・11号に分けられる。ただし、方形形状のうち６号周溝墓はその規模が前方後方形に匹敵する。周溝墓は、三和工業団地遺跡で舞台遺跡の東に隣接する区域で少なくとも12基が、さらに東側で大井戸と称される湧水谷地を隔てて５基が検出されている。それぞれは群単位としてのまとまりを見せており、舞台遺跡10基のうち離れて南端に位置する11号は隣接三和工業団地遺跡の群に属する。また三和工業団地遺跡の１基は舞台遺跡の群に属す。両遺跡の周溝墓を通観して、形状・規模等で舞台遺跡１号・９号が前方後方形・６号が大型方形で周溝墓群中でも盟主的な存在になろう。

古墳時代後期はほぼ竪穴住居跡で構成され約66件を数える。分布域は前期住居群と一部重量するものの中央部から南部にかけての西側に偏在する。一辺７～８ｍの大形住居から、３ｍ前後の小規模住居がある。特殊な遺構としては２基の円形遺構がある。幅30cm前後の溝を巡らし、溝底には径20cm前後の小穴を多数穿ってある。溝の内区には炉跡などの明瞭な施設を設けないが、柱穴を思わせる小穴の存在する例もある。いわゆる平地式建物跡に類しようか。調査区北西部に形成されている谷地内からは当該期の多量な遺物が出土している。土師器・木器の他須恵器の大甕などがあり、祭祀にかかわる行為が想定される。

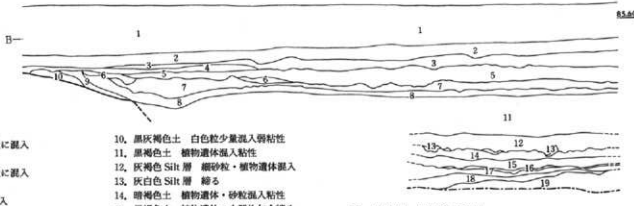
歴史時代は竪穴住居群と須恵器窯跡群に集約できよう。当該期の竪穴住居跡は51軒を数え、分布は古墳時代前期・後期の住居群に重なる中央部西側と、古墳時代後期住居群と混在する南部西側から南東部に広がりをもち、中心的な分布域は調査区南半にある。須恵器窯跡は北西部に形成される谷地縁辺にあり、近接して６軒の工人工房跡ないしは住居跡と考えられる内容で構成されている。窯跡群は12基(うち１基は構築途中)で最大で３基の重複があり、比較的短期間の操業と考えられる。舞台遺跡のような平野部での窯跡群の形成自体がやや特殊と言えようが、窯跡群中には１号窯のごとくまったくの平坦地形に窯体を構築するものがあり極めて特異な例となっている。古代後半期における窯構築技術や窯業生産の在り方に多くの問題を提起するものとなろう。また、51件の竪穴住居跡のうち窯跡群操業期に必ずしも照応するものとはなっていない。生産須恵器の供給先の追及が今後の課題である。

中世・近世の遺構は掘立柱・井戸・溝等からなる。とくに南半部に分布する井戸跡や方形区画をなす溝の存在が目立っている。南に続く下植木壱町田遺跡（飯森康広「下植木壱町田遺跡」(財)群埋文1999）では方形区画の整った中世館跡が明らかにされており、周辺域でも馬繋留施設である「馬房」に想定される興味深い遺構群が発見されている（平田貴正「2000年技術研修発表概要集」株式会社シン技術コンサルタント2000.6)。舞台遺跡における当該期の諸遺構について、現状では完結した時代様相・景観を描けるに至っていない。地勢的には多くの湧水地をもつ環境が近・現代に至っての土地改変によってその姿を変えたとは言え、当遺跡もまた周辺地域に相応した歴史景観をもっていたと考えられる（付図)。



谷地土層（A－A'）

1．黒褐色土　Loam粒少量混入軟
2．黒褐色土　白色粒少量混入弱粘性
3．黄灰色砂質土　As-B（浅間B軽石）
4．黒色弱粘性土　白色粒少量混入遺物包含層
5．灰褐色砂質土　粗く細砂少量混入
5'．灰褐色砂質土　細土
5"．灰褐色砂質土　細土
6．明褐色砂質土　水性堆積土（水路）
7．黒色粘質土
8．黒褐色粘質土　植物遺体混入遺物包含層
9．灰褐色弱粘質土　水性堆積層
10．黒褐色粘質土
11．黒褐色粘質土　細植物遺体多量混入
12．黒褐色粘質土　乳白色Silt斑点状に混入
13．黒色粘質土　FA多量に混入
14．黒色粘質土　細土
15．暗褐色粘質土　細土粘性
16．黒褐色弱粘質土　水性堆積灰白色粘土塊・流木混入
16'．黒褐色弱粘質土
17．明褐色砂質土　水性堆積白色粒多量混入
17'．明褐色砂質土　水性堆積混入物多量
18．黒色粘質土　灰褐色粘土塊状に混入
19．暗褐色砂質土　白色粒多量に混入
20．乳白色・青灰色粘土



谷地土層（B－B'）

1．客土
2．暗灰褐色　土弱粘性
3．暗灰褐色土　白色粒多量に混入
4．暗灰褐色土
5．暗灰褐色土　白色粒多量に混入
6．暗灰褐色土
7．黒褐色土　As-B少量混入
8．As-B層
9．黒褐色土　暗褐色粘質土を斑点状に混入
10．黒灰褐色土　白色粒少量混入弱粘性
11．黒褐色土　植物遺体混入粘性
12．灰褐色Silt層　細砂粒・植物遺体混入
13．灰白色Silt層　縞る
14．暗褐色土　植物遺体・砂粒混入粘性
15．黒褐色土　植物遺体・土器片包含縞る
16．FA層
17．黒色土　植物遺体・土器片多量に混入
18．黒褐色土　砂粒多量に混入
19．黒色土　砂粒混入、土器片多量

第6図　谷地土層図

第２節　窯　　跡

舞台遺跡窯跡の調査経過

1997年７月中旬、Ａ－３区の谷地調査に際して、東側緩傾斜面を中心に須恵器破片の散布が見られた。この散布状況を、当初は周辺集落の遺物が廃棄されたものと考えていた。しかし、破損品の中には明らかに焼損じとしか見えない破片が混じっており単なる廃棄物ではないという結論に達した。現地を検討する中で、谷地の緩傾斜面に窯体が存在することを確認し、先の須恵器類が窯資料であることが決定付けられた。

８月下旬、谷地緩傾斜面付近の遺構確認を行い、６基以上（最終的には11基）の窯跡の存在を確認した。また、窯跡は極めて接近して構築されておりかなりの重複関係が認められた。窯跡の集中する傾斜面からやや離れた台地上の平坦面には平面形状楕円形の遺構が検出されていた。この遺構は12号溝と重複し、その部分より焼土面や須恵器片が確認され窯跡と判断するに至った。

９月中旬になり、窯跡調査を本格的に開始した。調査は切り合い関係のない５号窯・８号窯と重複の最も著しくそれらの中では最終段階に操業したと考えられる７号窯、そして台地平坦部に検出された１号窯の４基から着手することとなった。各窯の遺存状況と床面の状況を探る目的で主軸方向に試掘溝を設定し下面の把握を試みた。操業の回数を示す床面枚数は１から３面以上の面数をもつ窯が確認された。いずれの窯跡でも床面は薄くかつ軟弱であり断面においても辛うじて認識できる程度のものであった。７号窯に関しては当初きずかなかったが、試掘溝を入れた段階で、１号窯同様、平坦面に構築されている須恵器窯であることが判明した。

９月下旬、上記４基の窯調査は床面検出段階に進んだ。平面における床面認定は、先述した通りのことが原因で困難を極めた。細心の注意を払いながらも床面の一部を破壊してしまうこともあった。しかし、こうした困難も試掘溝を調査時に概ね予想されていた事であった。遺物が埋土と床面出土の層位の混乱を少なくとも最終段階で回避する目的で窯内出土遺物はすべて点取りあげをした。床面の状況が最初に判明したのは５号窯であった。５号窯の床面は薄い焼土面とその直上にさらに薄く存在する灰層が指標となった。床面の堅さはほとんどなく油断していると掘り過ぎてしまうような軟弱な面であった。この軟弱な面が紛れもなく床面である証拠は、焼台の存在である。ここで言う焼台とは斜面である窯の床面において水平面を確保するために須恵器坏を天地逆にして転用したものである。この転用焼台はその後に調査したほとんどの窯において用いられた方法であり、困難な床面認識の有効な指標の一つとなった。

１号窯は他に類の無い形態の窯と考えていたが調査の進展に伴って、平坦面に掘り込まれてはいるものの床面構造は緩い傾斜面に築かれた他の窯とほぼ同じことが明らかになった。８号窯の調査では、崩落した天井が断面において良好に検出された。この崩落天井から、焚口部・焼成部・煙道部の範囲がかなり明瞭な形で把握することが可能であった。

10月初旬からは灰原の調査にも着手した。灰原の範囲と層位の状況把握のため、谷地内に任意の試掘溝を設定した。灰原は約15m×６mの範囲に広がりをもち、灰原層は浅間Ｂ軽石下に形成されていた。

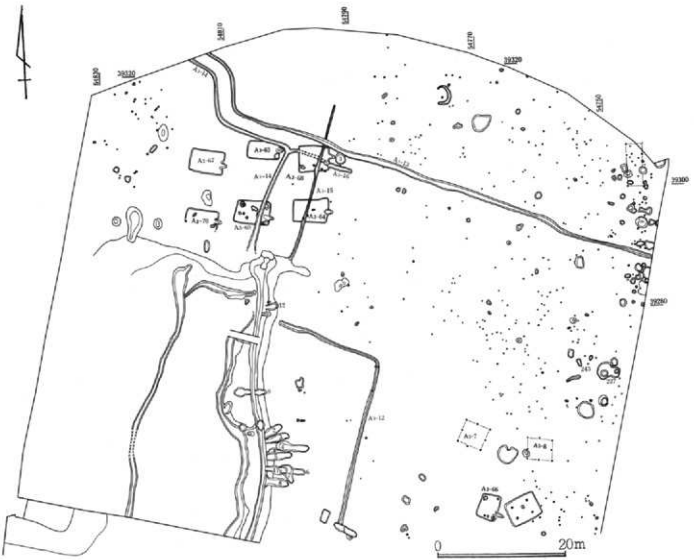
灰原は各窯跡との位置及びその範囲から、おおよその帰属は把握できたが明確な同定はできず、出土遺物は点取りあげを行った。

３月下旬、各窯跡最終断割調査を行い終了した。

窯跡群の概要（第図7・8　PL.8～10）

舞台遺跡窯跡群は、大間々扇状地形の洪積台地に立地する。台地は標高約87m前後で、低平な地形である。基盤層は、大間々扇状地古期面である桐原面先端部の礫層で、上位に関東 Loam 層が堆積する。舞台遺跡周辺には幾多の湧水地が点在し、これらを源とする小開析谷が南に開口して形成されている。窯跡群は築造途中の放棄かと思われる1基を加え12基が調査され、「角弥清水」と呼ばれる湧水による南に開口する開析谷の左岸谷奥にある。谷地形の北東隅左岸に湧水点があり、谷頭となっている。ここを起点として南に延びる左岸は、台地面より25度から35度の傾斜面を成し谷地面に至るが、傾斜面は一旦狭小な平坦部をなした後、再び傾斜して谷地底に続く。谷地内の堆積層には5～6cmのFA層が見られるが、左岸寄りでは下縁に沿って幅3.5mの範囲が落ち込んでいる。このことから、FA降下前後の時期には左岸沿いに湧水流路が形成されていたと考えられ、窯跡灰原層もこの流路内に堆積する。この流路は湧水による自然流水か人工的な導水路かは不明である。なお、谷地内には灰原の形成が見られ、台地面の比高差は約3mである。

窯跡群は12基中11基が谷の傾斜面かその縁辺に築造され、谷頭より南へ約30mで谷縁線が東へ緩く湾曲する地点に2～8号・10号・11号窯の9基が集中する。これらのうち3号・4号・10号窯が、そして6号・7



第7図　A区全体図

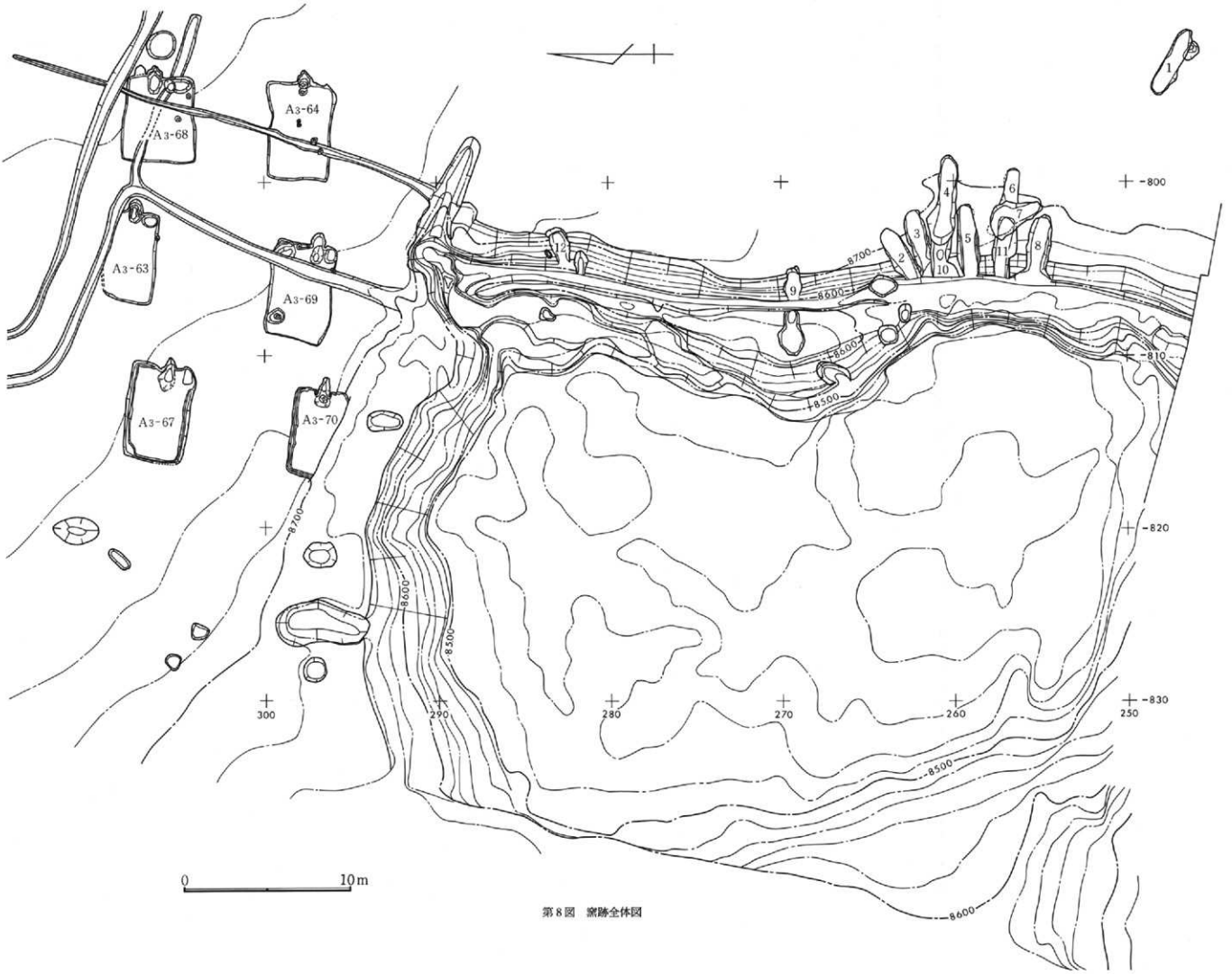
号・11号窯がそれぞれ重複する。この群から僅かの間をおいて、谷地の下縁が西へ張り出す地点に９号窯があり、さらに北側には構築途上未操業の12号窯があり最も谷頭に近く位置している。１号窯は唯一築造立地が他とは異なり、谷地縁辺から約８ｍ離れた台地上の平坦面にある。縁辺に構築される大半の窯跡は、窯尻をほぼ東方向に向ける長軸方位東西方向になるが、７号窯跡のみ南北方向に長軸をもち窯尻は南にある。また、１号窯跡の窯尻は北西方にあり他の窯跡とは対峙する向きにある。

窯跡の形態は二つ、構築方法は二～三に大別されるが、窯体内に崩落した天井 Loam 層の存在からみて、いずれも無段無階の地下式窖窯とすることができる。しかし、天井部が遺存する窯跡はなくすべて窯体内に崩落埋没している。窯跡形態の一は、焚口部から前庭部が大きく八の字状に開く開放型前庭部ともいえる形状である。この形状に属す窯跡は、本窯跡群の操業停止後に左岸傾斜地の中段の狭小平坦部に開削された湧水導水路によって前庭部の大方は消失する。２号・３号・５号・８号・11号窯がこれに相当する。これら窯跡の構築方法は、前庭部にあたる中段平坦部より台地縁辺肩部に生じる落差を利用して緩い上り勾配で Loam 層を掘り抜いて窯体を造る。掘り抜く天井の範囲は、窯尻の煙道部を除くほぼ焼成部の範囲である。形態の二は、窯体に続く前庭部が解放型にならず楕円形状でそのまま収束する形状である。この形態をもつ窯跡は、１号窯に代表される。前述したように、１号窯は台地上の平坦面にある。構築方法は、1.7×1.0mの楕円形土坑を掘り、(現状の深さ約0.95m)。底面より窯尻に向かい僅かな上り勾配をつけて窯体を掘り抜くものである。これに類似する窯跡には４号・６号・７号窯がある。ただし、これらは前庭部の膨らみが１号窯より大きく、７号窯は窯体規模が著しく小型化している。立地的には谷の縁辺部にあるが、天井崩落などによって操業を停めた旧窯跡の窪みを利用して平坦面に構築するものであり、基本的な構築方法に１号窯のそれと差は無いと考える。また、９号窯はこれらに形態上は類似するものであるが、構築に関しては傾斜面を利用するという違いがある。窯跡の形態及び構築方法の相違は幾例かの重複関係によって、これらに技術的な変遷があったことを示している。それによれば、前庭部が収束し平坦面に窯体を掘り抜く１号・４号・６号・７号窯が新形態であり、前庭部が八の字状に開き傾斜面に構築される２号・３号・５号・８号・10号・11号窯が旧形態となり、９号窯は両者の中間形態といえよう。

窯跡の規模は、その全容の知れる９号窯が最大で長さ5.3m、最小の７号窯が長さ3.2mを測る。窯跡群総じて焼成部規模が２ｍ前後と小規模である。窯体幅は焼成部床面で約１ｍ、天井部の高さは現状で約0.60m、復元での最天井高は0.80m程度になろうか。

各窯跡の操業状態は、天井・壁面などの著しい崩落のため詳細には知り得ないが、床面の還元硬化の度合からは８号・10号・11号窯の床が他窯と比較して硬化度が強い傾向が窺われた。操業回数は壁面等では確認できず、床面の断ち割りによって面数を得た。床面は、基本的に酸化層と還元層の組み合わせをもって一単位としたが、焼成の終了毎に床面の整地等が行われたとすれば確認床面数は最小限の操業回数を示すことになる。操業回数が最も多いのは、４号窯で３～４回、３回は１号・６号・８号・９号窯、２回は２号・５号・10号・11号窯、１回は７号窯である。

出土遺物は坏類が大半を占め、蓋とこれに組み合わさる椀型がある。これらは、各窯跡ともに焼成された基本的器種揃えと考えられる。灰原からは中型の甕が出土しているが、量的には極めて少なく窯跡ごとに一定量の焼成がなされていたとは考えにくい。また、瓦の出土は無く須恵器専焼窯跡群と考えられる。特殊遺物では小形の舟型陶硯がある。出土遺物のうち坏類には底部と僅かな体部を残したものが目立ち、焼き台として使用されている。出土状況の観察から、床面への設置には底部を表に床傾斜下方に体部残存部を置き水平を保っている。なお、７号窯跡焼成部には不完全焼成状態の遺物が多く残されていた。操業途中に何らか


A3-64
A3-68
A3-63
A3-69
A3-67
A3-70
-800
-810
-820
-830
300
290
280
270
260
250
-8700
-8600
-8500
0
10m

第8図　窯跡全体図

の事故によって操業を中断したと考えられるが、窯体内に残された遺物量から見てある程度は完成品として搬出されたと思われる。灰原は主として谷地部に形成されている。個々の窯跡と灰原の関係は谷地内の遺物分布状況によっておおよその範囲は知れる。しかし、左岸中段に開削された湧水導水路は窯体とその灰原への連続する土層観察を不可能にしている。また、谷地縁辺の平坦部に窯体を築く4号・6号・7号窯は前庭部を閉塞した形状であり掻き出された排出物がどの程度の範囲に及んでいるかは不明である。最も顕著な1号窯は、前庭部の構造上、窯体外の地上に灰原が形成されたと思われる。しかし、窯跡の周辺には何らの痕跡も確認されず、後世の削平によって消失したものと考えざるを得ない。

当窯跡群の形成時期やその変遷及び操業期間については、出土遺物等の詳細な検討が必要とされるが、概ね成立時期は平安時代前半、操業期間は極めて短年月と考えられる。

窯跡群に関連すると考えられる遺構には、竪穴住居跡がある。谷地左岸の北東端が湧水地点となり谷頭を形成していることは先に述べたが、谷地頭に近接する台地上平坦面に工人の工房あるいは住居跡と思われる6棟の竪穴が検出されている。竪穴は3棟2列の配置で、軒間・列間には極めて強い企画性が窺われる。住居跡の形態は東西方向に長軸をもつ長方形で竈は全て東向きに付設されるなどの統一性が顕著である。しかしながら、遺構の内容にあっては工人の工房や住居跡としては積極的な根拠に欠ける面もある。それは、住居内より窯跡関連製品（本窯跡製品である須恵器）がほとんど出土していないことや、工房施設の希薄さである。しかし、窯跡群の重層性とは対象的な遺構・遺物の単層的な在り方こそ、舞台遺跡における須恵器生産が極めて集中的短期間で終結したことを示すと考えられる。また、窯跡群と住居群の双方を有機的関連の視点での分析は、古代須恵器生産にかかわる工人の組織構成や労働形態の解明に欠かせないものとなろう。さらには、窯跡群の成立と変遷の背景には、舞台遺跡を含む当該期の周辺地域の社会を探る重要な鍵が隠されていると確信する。

古墳時代以降、須恵器をはじめとする各種窯跡は生産遺跡の代表的な遺構とされよう。寺院跡などの特殊建造物に付随して構築される瓦窯などの存在をのぞいてはて、少なくとも群馬県内における窯跡は丘陵地形の谷合に立地するものが多く、これが一般的と考えられていた。平坦地形の伊勢崎近郊で知られる窯跡としては新田郡笠懸町の丘陵部立地の笠懸窯跡群や勢多郡大胡町の樋越須恵器窯跡がある。また、寺院併設のものとしては伊勢崎市上植木廃寺の寺域に廃寺供給を主とした瓦窯の存在がある。舞台遺跡での調査事例は従来の須恵器窯跡群の立地通念に変更を余儀なくさせるものであるが、本遺跡での須恵器窯跡の発見に前後して隣接する三和工業団地遺跡と光仙房遺跡において前者からは2基の須恵器窯が、後者からは12基の須恵器窯跡が相次いで検出調査されている。3遺跡とも極めて近接した位置関係にあり遺跡名称で区別されているものの同一遺跡の広がりとして捕え得る要素が強い。各窯跡群は9世紀前半代を中心にその成立年代が考えられ、時間的な推移は看取されるものの群から群への継起には大きな年代的断絶を伴ってはいないようである。群形成の移動契機にはごく手近な範囲内での燃料の枯渇というような内障的な要因が考えられ、窯跡の直接運営には一系の工人たちが携わっていた可能性が高いと考えられる。このように舞台遺跡を初めとする周辺の須恵器窯跡群の在り方の背景には平安時代初期に一段と活発化する土地開発への強い希求があったことを想起せざるを得ない。端的に言えば、当該地域の開拓集団に対する須恵器の短期一元的な供給を目的とした立窯であったかと思われる。このような想定した場合には、本遺跡を初めとする窯跡群にはやはり立地要件の特殊性は顕在すると言えよう。

１号窯（第９・10図　ＰＬ.11）

台地の平坦面に構築される。他窯跡が集中する谷地左岸縁辺より約10m奥まって位置する。窯の形態は無階無段地下式窯窯に類しようか。平坦面に造られているため、前庭部が閉塞する特異形である。構築方法は、径1.5m×１m現況での深さ0.95m程度の竪穴を掘り、この底面より緩い傾斜を付けて窯体を掘り抜いたと考えられる。長軸方位はＮ－60'－Ｗを示し、窯体規模は前庭部より窯尻まで全長4.2m・最大幅は焼成部底面で9.4mを測る。窯体形状は弧状に丸まる窯尻からそのまま焼成部・燃焼部へと続く。炊口部に至り底面壁線がすぼまって境を画する。天井部は全て窯対内に崩落・埋没し、窯壁も基底部近くが僅かに残存する程度である。焼成部中央上半は湧水導溝の横断により60cm幅で消失している。窯体内埋土中位には天井材の Loam 落下層からなり、その下縁には焼け土帯・還元帯の薄い層が見られる。閉塞する前庭部内には顕著な灰原層の形成はなされず、焼土粒・還元粒混在層と Loam 主体の互層からなる。なお、崩落焼土・還元塊など窯体内面の構築材にはスサ状混入物はほとんど認められていない。灰原を形成すべき廃棄物は窯外へ掻き出されたと想定されるが、検出時の窯周辺には全くその痕跡が認められていない。このことは、窯構築当時の地表面はさらにたかくあって、後世土地改良等の削平によって消失したものと解釈される。したがって、窯体そのものはなお地中深く築かれていた傍証となる。

掘り抜きによる天井部は天井 Loam の崩落状況より、窯尻煙道部を除くほぼ焼成部の範囲で約２ｍである。壁面は床面基底より上方は崩落が著しく、補修等に伴う壁材の塗り重ね等は観察できない。剥落後の淡赤褐色の被熱面として残り、石材等を用いた補強・施設材は見られない。床面は燃焼部で部分的ではあるが３面が確認されている。燃焼部から焼成部床面傾斜度は12度から10度に変化する。

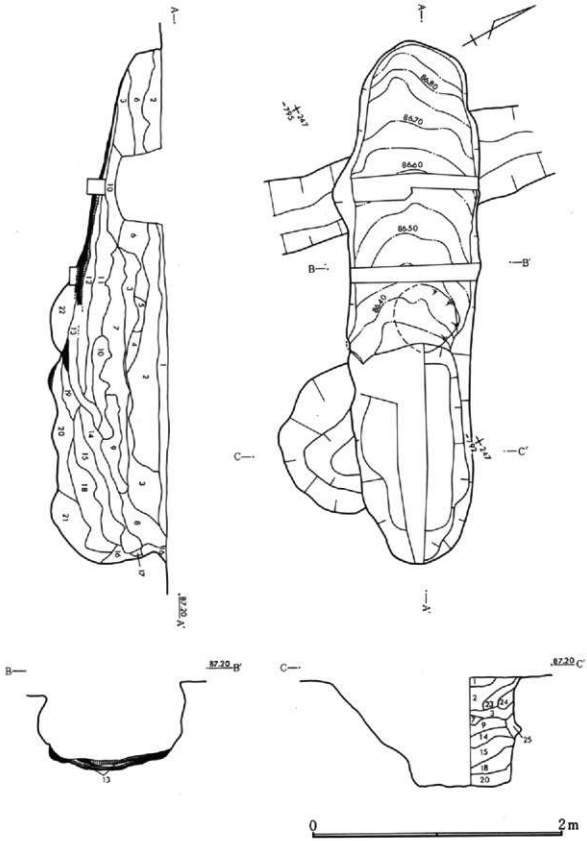
煙道部は窯尻壁面の遺存が悪く、かろうじて赤化面を成す。煙道上部の形状は不明だが窯尻より垂直に近い急傾斜で立ち上がる。底面からの高さ約20cmを測り、天井 Loam 層崩落の範囲から70cm前後の径になろう。

焼成部壁面は外傾気味に立ち上がり上半は大きく湾曲して円屋根状の天井を形成すると考えられる。壁高は60～70cm、復元天井高は80cm程度となる。床面は青灰色還元層と焼土層の一対層からなり、最終操業面のみ残るが硬質化の度合は弱い。操業回次毎に燃焼部が焼成部に近付いており、焼成部規模が縮小している。１面は1.7m・２面は2.0m・３面は2.4mである。しかし壁面幅内法には変化がない。また、規模の縮小に伴い燃焼部との比高差が減じ床面傾斜度は当初12度であったものが最終的には10度となる。

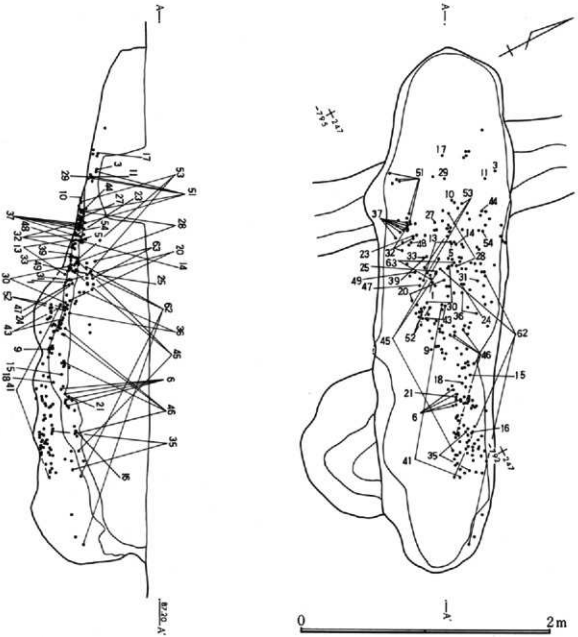
燃焼部は焼成部幅と大差なく90cm、長さは約１ｍを測る。僅かな窪みかほぼ平坦をなし操業の回を追う毎に焼成部寄りに位置する。床面は危弱ながら青灰色還元層と暗赤褐色の薄層からなる。１面及び２面の燃焼部下には径50cm深さ20cmの窪みがあり炭化粒・焼土粒の混合土が埋まる。２回目の操業に際し設けられた湿気防止的な機能があろうか。燃焼部底面壁線が狭まって幅70cmの焚口部をつくる。

前庭部は長さ1.5m・底面幅80cmで、壁面は直に立ち上がり閉塞部は袋状に抉る形状をなす。焼土粒・炭化粒・還元塊層と Loam 粒・塊を含む互層堆積土は窯体内埋土とは逆方向堆積を示している。操業回数にしたがって窯体内からの掻き出しがおこなわれて嵩上げされた状況が窺われる。前庭部西縁は傾斜度約45度で擂り鉢状に突出した部分が作り出されている。窯への出入りのためと考えられる。

遺物出土状況は焼成部床面手前側に多く集中し、前庭部での出土は細片化したものがほとんどである。器種は坏類が大半で少量の蓋・椀がある。焼成部中央から燃焼部寄りの床面に焼き台として使用した坏類が見られる。底部を表にし、三分の一から四分の一残された体部を傾斜下方に置き水平を意図している。出土遺物は、焼台を含め坏・椀類はすべて底部回転糸きり無調整一種類である。



第9図　1号窯跡(1)



１号窯跡

1．黒褐色土（盛土）　Loam 縞状に混入締る
2．暗褐色土　焼土粒・炭化粒・Loam 粒少量混入粘性締る
3．灰褐色土　焼土粒・炭化粒・Loam 粒粗密あり粘性締る
4．褐色土　炭化粒・Loam 粒混入砂質軟
5．純黄褐色土（Loam 塊層）　褐色土混入締る
6．暗褐色土　Loam 粒多量、炭化粒少量混入粘性締る
7．暗赤褐色土　焼土粒・炭化粒・還元粒混入軟
8．褐色土　焼土粒・炭化粒・還元粒混入締る
9．灰褐色土　Loam 小塊多量、焼土粒・炭化粒少量混入粘性締る・
10．橙色土　Loam 被熱層軟
11．暗灰黄色粘土　窯体天井落下、焼土層・炭化層・還元粒下縁にある
12．灰赤色粘質土　焼土粒混入締る
13．黒灰色土　炭化粒・還元粒・Loam 粒多量混入粘性締る
14．赤橙色（焼土粒・塊）　炭化粒・還元粒混入締る
15．明黄褐色土　Loam 塊混入粘性締る
16．橙色土（Loam 被熱層）
17．褐色土　砂質締る
18．褐灰色土　Loam 粒混入砂質軟
19．灰赤色土　焼土粒混入粘性締る
20．褐灰色土　焼土粒・炭化粒・還元粒・Loam 小塊混入粘性軟
21．褐灰色土　Loam 粒多量混入軟
22．炭化粒・Loam 塊・焼土粒混合層軟、構築時の湿気防止か
23．灰黄色土　loam 粒多量混入粘性締る
24．明黄褐色土（Loam 層）
25．明黄褐色土（Loam）　炭化粒混入、塊状硬質

第10図　１号窯跡(2)

2号窯（第11・12図　ＰＬ.12）

左岸縁辺の傾斜地にある。群集する9窯跡の一基で群では北端に位置し、南に接して3号窯がある。窯の形態は無階無段地下式窖窯である。前庭部は　谷頭湧水点より延びる廃窯後の開削導水路によって消失し窯体の全容は不明である。灰原は谷地部に形成されるが窯本体と連続して捉こはできない。長軸方位はＮ―60′―Ｅを示し、窯尻からの現長3.6m・最大幅焼成部底面で1.0mを測る。窯体形状は弧状の窯尻から焼成部中位をすぎ僅かに幅を減じて燃焼部に至る。燃焼部と焚き口部にはこれを画するような壁線の変化は見られない。

窯体の構築は地山 Loam 層を掘り抜いたもので埋土の上位には崩落した天井 Loam 層が堆積する。掘抜きの範囲は地上へ真上に抜ける窯尻煙道部を除いた焼成部に相当し、約1.5mである。壁面は焼成部の燃焼部寄りが最も被熱度が強いものの崩落が著しく床より10cm程度の高さまで還元硬質層が残る。床面は焼成部の燃焼部寄りで2面を確認した。

煙道部窯尻壁面は還元硬質層は残らないものの厚い赤化焼土面をなす。底面から直立し高さ約20cmを測る。窯体検出時の窯尻部に径60cm程度の平面円形の焼土帯が残り、煙道部の孔径を示すと考えられる。埋土中には塊状の焼土帯が見られ、煙道部上位壁面の崩落であろう。

焼成部壁面は床より外傾気味に開き上半は大きく内湾曲する円屋根形の天井を作ると考えられる。残存壁高は約50cm・復元天井高は70cm前後と思われる。床面は青灰色還元層と焼土層の一対薄層からなり硬質化は比較的進んでいる。燃焼部近くで2面の床を確認した。焼成部の規模は長さ2.3m・床面の最大幅1.0mを測る。床面の傾斜度は20度で、窯尻付近からやや角度を増して26度となる。

燃焼部の底面幅は約65cmと狭まり、右壁には焼成部と境を画する位置に長径40cm大の角礫一石が付設され礫の周囲には充塡された被熱粘土の痕跡が残る。燃焼部の規模は長さ70cm・幅60～70cmを測る。床面は約10度の傾斜度をもち、窪みの度合は小さい。還元硬質面はなくやや危弱な焼土面となっている。焚き口部との区画は不明瞭でそのまま壁幅をすぼめている。燃焼部の上位埋土に水平堆積する炭化物層が検出されたが、本跡の操業停止後、他窯からの投棄と考えられる。

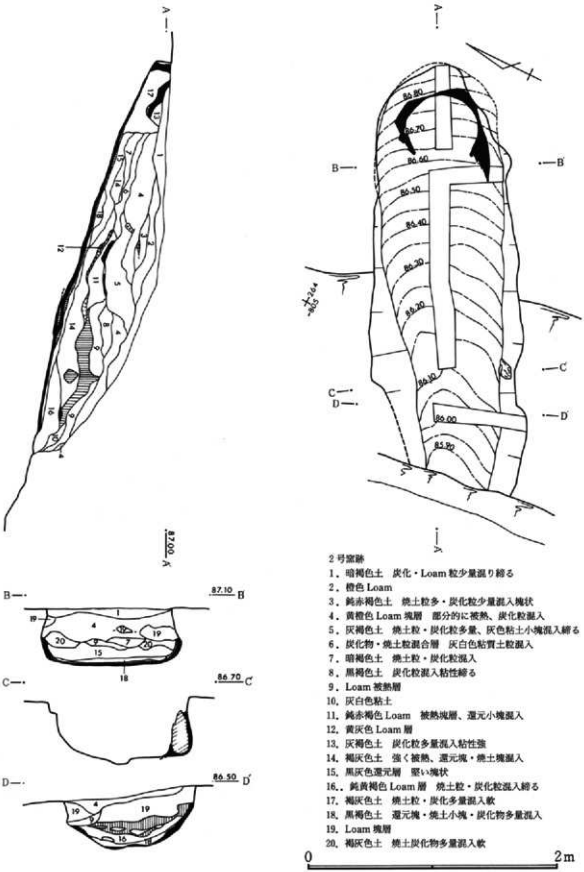
遺物は焼成部に主として検出されたが、散在的で少量である。坏・蓋・椀があり、坏類を主体的に焼成した窯と考えられる。坏及び椀類はすべて底部回転糸きり無調整である。

3号窯跡（第13・14図　ＰＬ.13）

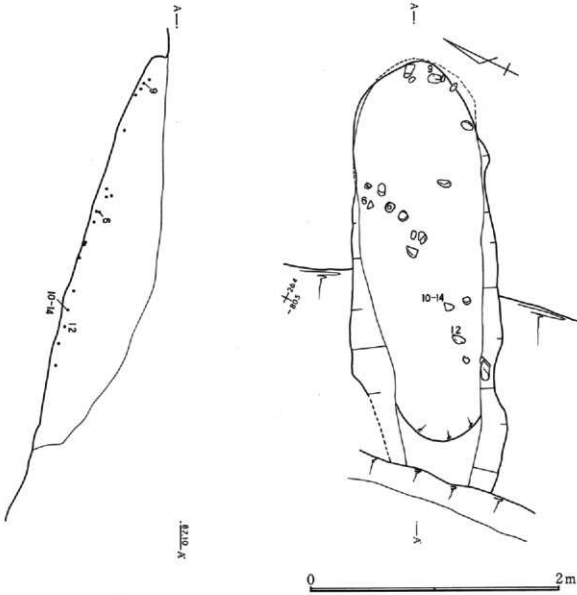
開析谷頭近く左岸縁辺の傾斜地にある。北に接して2号窯が、南側で4号・10号窯と重複している。窯の形態は無階無段地下式窖窯である。前庭部は谷底縁の導水路によって消失するが、焚き口部から延びる壁線は僅かに開く様相があり、八の字状に大きく開く形状になろう。灰原は谷地部に形成されるが、窯体との連続は捉られない。長軸方位はＮ―76°―Ｅを示し、窯尻からの現長は4.0m・最大幅は焼成部中央にあり底面幅94cmを測る。窯体形状は、弧状の窯尻から僅かに脹み焼成部をなす。燃焼部は僅かにくびれて焚き口は狭まる。

窯体の構築は地山 Loam 層を掘り抜いてあり、天井は焼成部にあたる範囲に崩落し厚い Loam 層や被熱 Loam の堆積が見られる。掘り抜きによる天井部の範囲は天井 Loam の存在から窯尻より約2mである。壁面は崩落が著しいため全体に淡赤褐色面として残る。床面は1面のみの確認である。4号・10号窯との重複関係は4号窯の灰層が埋没後の3号窯を覆い、10号窯の埋土は3号窯体によって切られている。これによって、三者の新旧関係は10号窯が最も古く、3号窯・4号窯の構築順となる。

煙道部の窯尻壁面は焼土層が極めて薄い。現存する立ち上がりは小さく湾曲気味で、底面より10cmの高さ


B
B'
C
C'
D
D'
87.10
86.70
86.50
86.80
86.70
86.60
86.50
86.40
86.30
86.20
86.10
86.00
85.90
2号窯跡
1．暗褐色土　炭化・Loam粒少量混り締る
2．橙色 Loam
3．鈍赤褐色土　焼土粒多・炭化粒少量混入塊状
4．黄橙色 Loam 塊層　部分的に被熱、炭化粒混入
5．灰褐色土　焼土粒・炭化粒多量、灰色粘土小塊混入締る
6．炭化物・焼土粒混合層　灰白色粘質土粒混入
7．暗褐色土　焼土粒・炭化粒混入
8．黒褐色土　炭化粒混入粘性締る
9．Loam 被熱層
10．灰白色粘土
11．鈍赤褐色 Loam　被熱塊層、還元小塊混入
12．黄灰色 Loam 層
13．灰褐色土　炭化粒多量混入粘性強
14．褐灰色土　強く被熱、還元塊・焼土塊混入
15．黒灰色還元層　堅い塊状
16．鈍黄褐色 Loam 層　焼土粒・炭化粒混入締る
17．褐灰色土　焼土粒・炭化多量混入軟
18．黒褐色土　還元塊・焼土小塊・炭化物多量混入
19．Loam 塊層
20．褐灰色土　焼土炭化物多量混入軟
0
2m

第11図　２号窯跡(1)



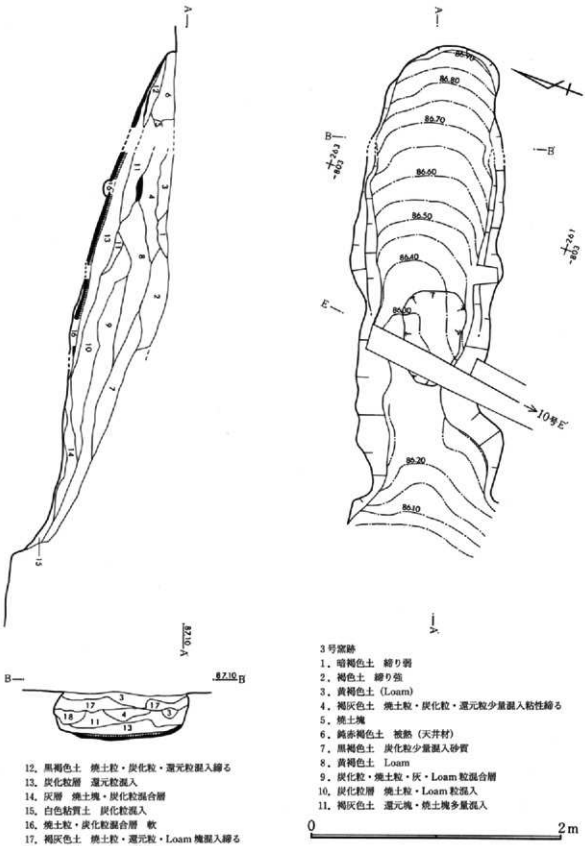
第12図　2号窯跡(2)

である。

焼成部の壁は湾曲して立ち上がり、天井は円屋根形になろう。壁面の崩落が進んでおり還元硬質層は遺存しない。焼成部壁は燃焼部寄りで最も高く60cmを測り、復元天井高は最大で80cm前後になろうか。床面は青灰色還元層と焼土層の一対一面である。焼成部の規模は長さ2.0m・底面最大幅は94cm、床面傾斜度は約16度である。

燃焼部は底面幅約70cmに狭まり、長さ90cmである。床面は70×50cmの楕円形で皿状に窪む。焚き口部はほぼ水平の底面で幅約40cmに狭まった後、八の字状に開気味の前庭部壁線へと続く。

遺物は焼成部中央と燃焼部寄りに集中して残る。中央部の一群は、崩落天井中あるいは上面にあり他窯からの投棄の可能性が高い。燃焼部寄りの一群は、崩落天井土中にあり他窯跡からの投棄と考えられる遺物で選別後のものであろうが遺存度は高い。燃焼部寄りでは床面直上に焼台として使用したと思われる底部分の

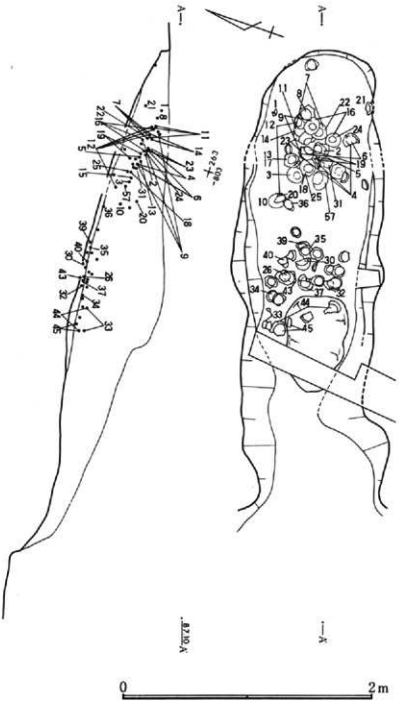


12. 黒褐色土　焼土粒・炭化粒・還元粒混入締る
13. 炭化粒層　還元粒混入
14. 灰層　焼土塊・炭化粒混合層
15. 白色粘質土　炭化粒混入
16. 焼土粒・炭化粒混合層　軟
17. 褐灰色土　焼土粒・還元粒・Loam 塊混入締る
18. Loam 塊　下縁は青灰色に還元

3号窯跡
1. 暗褐色土　締り弱
2. 褐色土　締り強
3. 黄褐色土（Loam）
4. 褐灰色土　焼土粒・炭化粒・還元粒少量混入粘性締る
5. 焼土塊
6. 鈍赤褐色土　被熱（天井材）
7. 黒褐色土　炭化粒少量混入砂質
8. 黄褐色土　Loam
9. 炭化粒・焼土粒・灰・Loam 粒混合層
10. 炭化粒層　焼土粒・Loam 粒混入
11. 褐灰色土　還元塊・焼土塊多量混入

0　2 m

第13図　3号窯跡(1)



第14図　3号窯跡(2)

坏が多い。焼成器種は坏・蓋・椀の三器種でほとんどが坏類で占められる。

4号窯跡（第15・16図　ＰＬ.14・15）

開析谷頭近く左岸縁辺の平坦地にあり、前庭部先端がかろうじて傾斜面にかかる位置である。北は3号窯が一部重複し南は5号窯が隣接する。本窯の下位には10号窯が存在し、窯尻から焼成部にかけての大半は本窯によって削平されている。また、灰層の一部は3号窯の埋土上にかかり3号・10号窯の両者より新しい構

築である。窯の形態は無階無段地下式窖窯に類しよう。１号窯と同じく台地平坦面に構築され前庭部が閉塞する形状をとる。同様な形状をもつ窯には６号・７号窯がある。灰原の形成は傾斜地と一部谷地内にあると思われるが、湧水導水溝によって明らかではない。窯体形状は弧状の窯尻から緩く膨らむ焼成部をなす。燃焼部・焚き口部は底面幅が僅かに狭まるが変化のない壁線で前庭部に至る。長軸方位はN-94°-Eを示し、窯尻から前庭部まで全長4.9m・底面最大幅は焼成部中央にあって約1.0mを測る。床面は焼成部で２面確認されたが、前庭部には４回の操業を窺わせる灰層及び炭化物層が見られる。

窯体の構築には廃絶した10号窯が作り出した地表との落差を利用し、これをさらに掘り窪め底面より緩い傾斜をつけて Loam 層を掘り抜く工法であり、基本的には１号窯の構築方法と異ならない。天井部は全て崩落し、下縁の還元層は床面に近く天井を形成する Loam 層は窯体内を埋め尽くすほどに層厚である。堀抜きの範囲は焼成部を中心に約３mあり、下縁還元層の位置より燃焼部にまで及ぶと考えられる。

煙道部の窯尻壁は赤化焼土面をなし焼け締まりは良好である。底面近くは小さく湾曲し直立気味に立ち上がり、壁高は約20cmである。煙道径は窯体の確認時に観察された環状焼土帯より約60×50cmになろう。

焼成部の壁高は燃焼部寄りで最も高く約60cmを測るが壁面の崩落が著しく埋土中には折り畳まれたように壁面焼土帯が堆積する。復元天井高は約85cmである。床面は燃焼部寄りで２面が確認されている。この部分の傾斜度は12度を測るが、窯尻近くは傾斜を急にして19度となる。焼成部長さ約2.3m、底面最大幅約1.0mである。

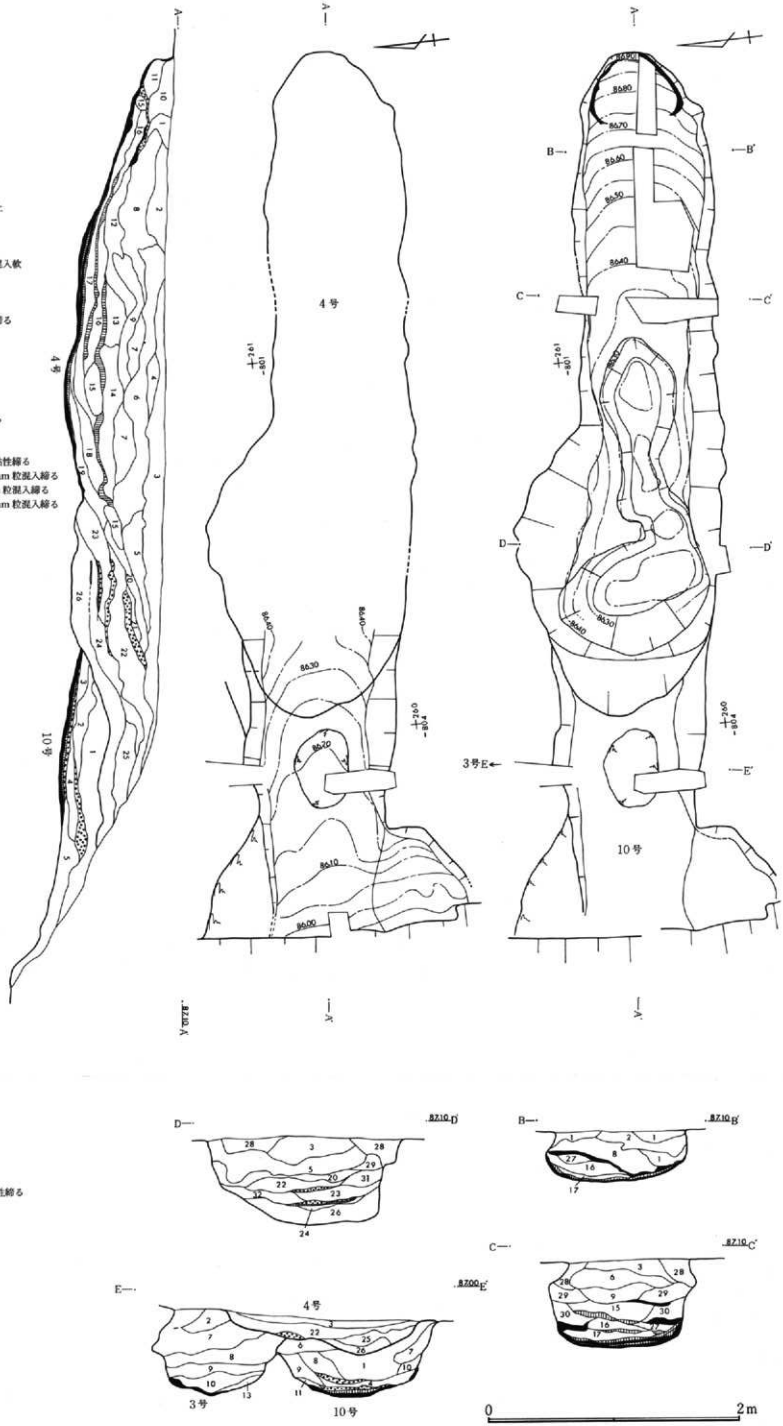
燃焼部は1.0×0.6mの範囲で皿状に窪み、10cm程度の落差で焼成部へ続く。底面幅は焼成部より僅かに狭まって80cmを測る。壁線では焚き口部とに変化は見られないが、前庭部へは小さな高まりとなって画くされている。

前庭部は閉塞して楕円形をなし、北壁線が僅かに張り出す。１号窯の前庭部の張り出しに類似するが、傾斜度や張り出しの度合は弱い。南壁はほぼ垂直に立ち上がり約70cmを測る。灰などの窯体内からの排出物の掻き出し方向になる西壁はすり鉢状に緩く立ち上がる。前庭部の埋土には窯体内より排出された還元粒・塊層や炭化物層が間層をおいて５層、４単位が確認され少なくとも４回の操業が行われた可能性が高い。前庭部外での顕著な灰原形成は見られず、清掃・補修などに伴う排土のほとんどは前庭部に掻き出され嵩上げによって処理されていたと考えられる。

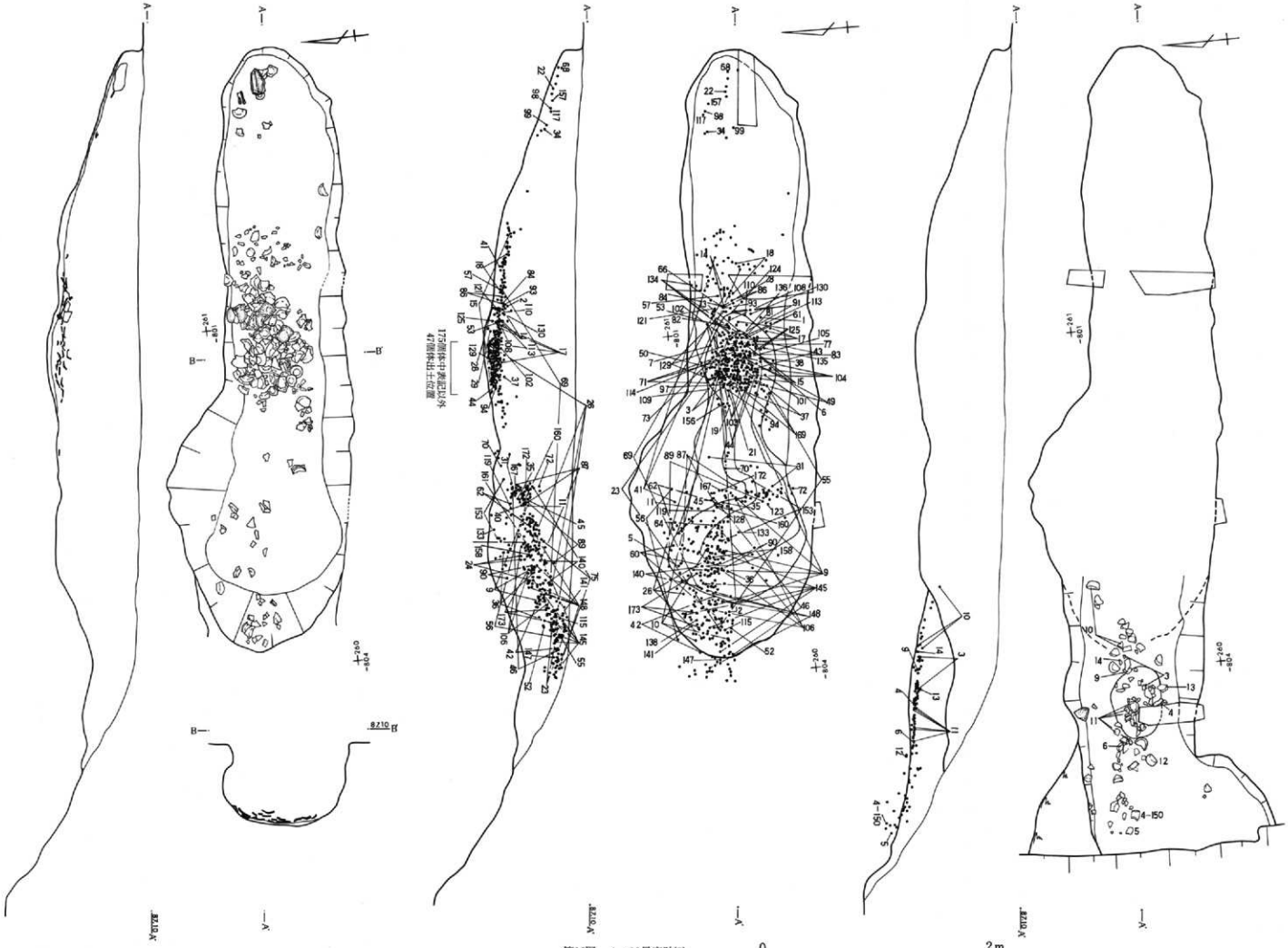
遺物は燃焼部に集中して出土している。最終操業に伴う製品選別後の放置であろう。比較的大形の破損品である。これに対して、前庭部上位面には小破片が多い。出土遺物の器種は坏・蓋・椀の他甕の口縁部数点がある。量的には坏類が他を圧倒している。

10号窯跡（第15・16図　ＰＬ.14）

開析谷頭近く左岸縁辺の傾斜面にある。３号・４号窯と重複し、両者より古い構築である。窯体のほとんどは４号窯と重なり、窯尻から焼成部までの大半は４号窯の前庭部掘り形によって消失している。残存するのは燃焼部と前庭部のごく一部であるが、前庭部もまたその大半は湧水導水溝により失われており谷地部に形成されたと思われる灰原層との連続性は知り得ない。窯体の形状は不明であるが前庭部が八の字状に開放する形状と考えられる。長軸方位は４号窯とほぼ一致し、N－90°－E前後であろう。現状での遺存長は約2.5mを測り、焼成部から燃焼部および焚き口にかけての壁線に変化は見られない。床は１面のみ確認したが、燃焼部から前庭部の範囲にかけて床面淡黄色粘質土薄層を挟んで上下に灰層の堆積があり、少なくとも２度の操業が行われた可能性が高い。埋土の最上位には黄褐色土塊層が厚く堆積し、４号窯構築に伴う排土と考えられる。



第15図　4・10号窯跡(1)



第16図　4・10号窯跡(2)

焼成部床面は還元層の形成が良好で硬質化が著しい。床面傾斜度は13度で底面の幅は85cmを測る。

燃焼部壁面の遺存は悪く、焼土面が薄層として残る程度である。床面は緩く皿状に窪み、長さ80cm・幅85cmを測る。

前庭部は大きく八の字状に広がる様相をなし、燃焼部との変換部が焚き口になろう。検出最大幅2.2m長さ90cmの範囲である。床面は緩く谷側に傾斜する。

遺物は少量で、図示できるものは少ない。燃焼部から前庭部に集中し、坏・蓋がある。

5号窯（第17・18図　P L.15）

開析谷頭近く左岸縁辺の傾斜地にある。北に4号・10号窯、南に6号・7号・11号窯が隣接する。窯の形態は無階無段地下式窖窯である。前庭部は湧水導水溝によって消失し、谷地部に形成されたであろう灰原と窯体との連続性は不明確である。前庭部上面の壁線が八の字状に開く様相が見られる。長軸方位はN－85°－Eを示し、窯尻からの全長4.4m底面最大幅は焼成部にあり約1mを測る。窯体形状は孤状の窯尻から僅かに膨らみ焼成部を成す。燃焼部は直線的な壁線で徐々に狭まって焚き口部に至っている。燃焼部壁面右には1か所、左3カ所に人頭大の角礫が壁面補強材として設置される。

窯体の構築は埋土中位に崩落天井材と考えられるLoam層の堆積があることか地山Loam層の掘り抜きによっている。掘り抜きによる天井の範囲は窯尻煙道部を除く焼成部約1.8～2.0mと思われる。壁面上位部分では崩落が進み、淡赤褐色の被熱面として残る。床面は燃焼部において2面確認しており少なくも2回以上の操業が行われたであろう。

煙道部の孔径は天井材Loam層の崩落範囲より径40cm程度になろう。窯尻の壁面は遺存が悪く若干の被熱が窺うえる程度である。底面よりやや角度をもち約10cm立ち上がる。

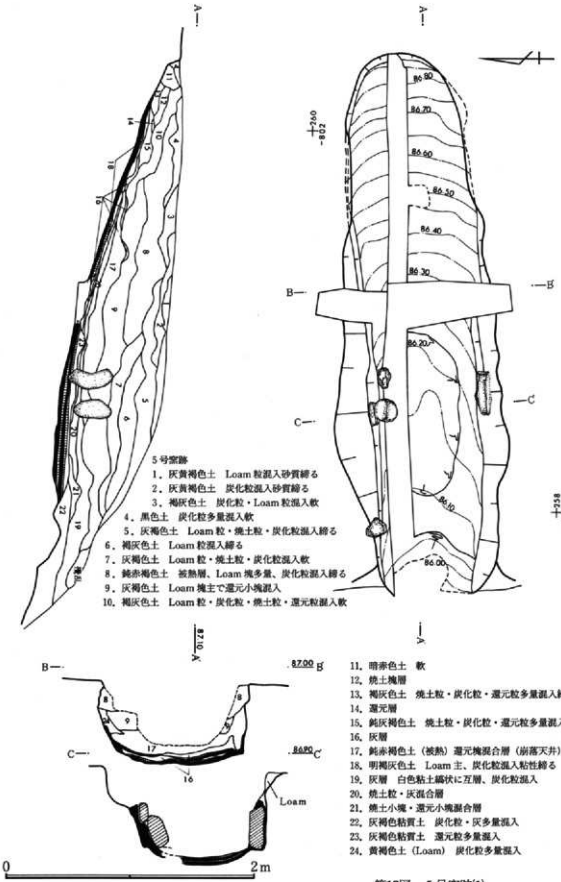
焼成部壁面は被熱面の崩落が著しく、現高で約60cm湾曲して立ち上がり円屋根形の天井を作ると思われる。復元天井高は約80cmとなろう床面傾斜は約18度で窯尻に近く10度ほど斜度を増す。焼成部規模は長さ2.2m、底面最大幅は約1.0mである。

燃焼部床面は平坦をなし底面幅は約80cmに狭まり長さ1.3mである。床面枚数は2枚確認され、少なくとも2回の操業が行われている。右側の壁面には35cm大の偏平な角礫が擺形をもって付設され、壁面との隙間および礫表面にはスサ状混入物の入る粘土が充塡され焼土化している。スサ入り粘土はここ以外には使用された痕跡を確認していない。左側壁面には右壁角礫に対置して2石が僅かな間を隔てて設置される。壁面に危うい状態にあり、崩落により剝離したものと考えられる。左壁にはこれより前庭部寄りへ70cm離れてさらに1石が設置される。なお左壁設置の礫周辺にはスサ入り粘土の使用は見られない。左右壁面にはこれ以外に礫を設置した痕跡は検出されず、壁面の部分的な修復によるものと考えられる。焚き口部分は明瞭ではないが上縁が八の字状に開く箇所とすれば底面幅は60cmを測る。

遺物は焼成部に散在して出土し、多くは坏底部を表にした破損品である。焼台として使用したものであろう。製品には坏類が多く、他に蓋・椀がある。特殊遺物としては舟形の硯があり谷地部灰原及び9号窯埋土出土の破片と接合する。

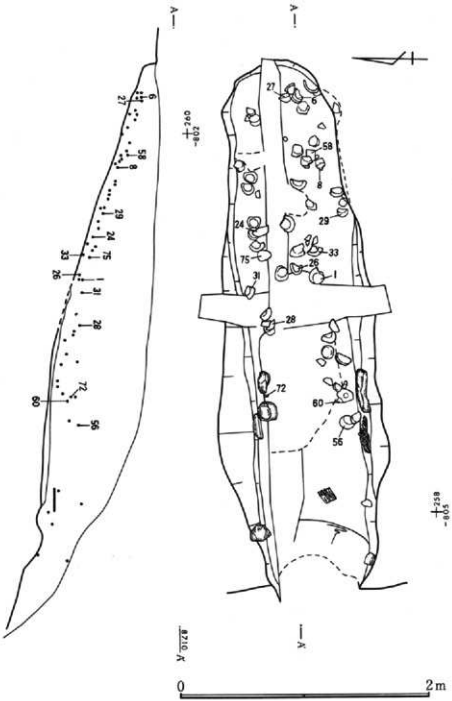
6号窯（第19・20図　P L.16）

開析谷頭近く左岸縁辺の平坦面にある。7号・11号窯と重複し、7号より古く11号窯より新しい築造である。燃焼部壁線は7号窯の前庭部によって消失するが、床面は7号窯構築に伴う貼床によって辛うじて残されている。1号窯と同じく台地の平坦部に構築されているため前庭部が閉塞する形状である。同じ形態をもつ窯跡には4号・7号窯があり無階無段地下式窖窯に類しよう。灰原の形成は傾斜面から谷地部にあると考



5号窯跡
1．灰黄褐色土　Loam粒混入砂質締る
2．灰黄褐色土　炭化粒混入砂質締る
3．褐灰色土　炭化粒・Loam粒混入軟
4．黒色土　炭化粒多量混入軟
5．灰褐色土　Loam粒・焼土粒・炭化粒混入締る
6．褐灰色土　Loam粒混入締る
7．灰褐色土　Loam粒・焼土粒・炭化粒混入軟
8．鈍赤褐色土　被熱層、Loam塊多量、炭化粒混入締る
9．灰褐色土　Loam塊主で還元小塊混入
10．褐灰色土　Loam粒・炭化粒・焼土粒・還元粒混入軟
11．暗赤色土　軟
12．焼土塊層
13．褐灰色土　焼土粒・炭化粒・還元粒多量混入締る
14．還元層
15．鈍灰褐色土　焼土粒・炭化粒・還元粒多量混入軟
16．灰層
17．鈍赤褐色土（被熱）還元塊混合層（崩落天井）
18．明褐灰色土　Loam主、炭化粒混入粘性締る
19．灰層　白色粘土縞状に互層、炭化粒混入
20．焼土粒・灰混合層
21．焼土小塊・還元小塊混合層
22．灰褐色粘質土　炭化粒・灰多量混入
23．灰褐色粘質土　還元粒多量混入
24．黄褐色土（Loam）　炭化粒多量混入

第17図　5号窯跡(1)



第18図　5号窯跡(2)

えられるが湧水導水溝によって前庭部からの連続性は知ることができない。長軸方位はN—97°—Eを示し、窯尻から前庭部までの全長約5.0m、底面の最大幅は焼成部中央で約80cmを測る。窯体形状は、弧状に丸まる窯尻よりやや膨らみをもつ焼成部に至り、燃焼部は若干底面幅を狭める。前庭部は楕円形に広がり、壁面の立ち上がりはすり鉢状になる。床面は3枚確認されており、少なくも3回以上の操業が行われている。

窯体の構築は10号窯上に作られている4号窯の構築状況に酷似する。6号窯は廃絶した11号窯によって生じた落差を利用し、底面を水平裁断するようにLoam層を掘り抜き11号窯の窯尻をふくむ焼成部の一部を消

失させる。天井部はすべて崩落し、天井 Loam 層は厚く窯体内に堆積する。堀抜きの範囲は崩落土の一部が７号窯によって除去されているが、窯尻の煙道部を除く焼成部の1.5mの長さになる。天井 Loam 層は床面灰層の直上に近く、本跡廃絶後さほど時間を経ずして崩落に至ったと思われる。

煙道部窯尻壁は薄い焼土面をなし、やや傾斜をもって立ち上がる。底面からの高さ約30cmを測る。煙道孔は窯体の検出時に環状焼土帯として認められ、煙道径約70cmになろうか。

焼成部の壁高は中央部で最も高く一部55cmまでの高さが残存する。復元天井は壁面の湾曲状況から円屋根形をなし、70～80cmの高さと推定される。壁面は崩落が進み、埋土中には折り畳むような焼土帯が見られる。焼成部の床面は１面のみで、青灰色還元層による硬質化が比較的進んでいる。燃焼部付近ではほぼ水平な床面をなすが、窯尻に向い17度の傾斜をもつ。焼成部規模は長さ2.7cm・最大底面幅85cmを測る。

燃焼部は長さ1.2cm・底面幅80cmで壁面・床面とも焼成部との変換に特段の変化は見られない。床面は３面確認されたが初期の床は若干の窪みをなし、操業毎に水平に近づく。前庭部への変換は底面幅を約55cmに狭めて焚き口部としている。

前庭部は楕円形を呈する閉塞形である。底面は凹凸があり窯体長軸線上にある壁面は低くすり鉢状を呈する。南北の壁面は約50cmの高さをもち、急傾斜で立ち上がる。埋土には３層の灰層が見られ燃焼部の床面枚数と一致する。操業に伴う窯体内からの排土はその都度前庭部内への掻き出しが行われて嵩上げ状態になっている。

遺物は燃焼部から焚き口部に集中し、選別による破損品として放置されたものであろう。焼成部には焼台として使用され、体部の一端を残す坏類の底部が多く残されている。前庭部灰層中には小破片が多い。器種には坏類が大半で、蓋・椀がある。

11号窯（第19・20図　ＰＬ.16）

開析谷頭近く、左岸縁辺の傾斜地にある。６号・７号窯と重複し、両者より古い構築である。６号窯は、本跡廃絶後の落差を利用して築かれ、窯体のほとんどの部分は重なる。６号窯との重複範囲は著しく、窯壁の大部分と窯尻部は破壊され、遺存するのは焼成部と燃焼部の床面と燃焼部壁面の一部に止まる。また、前庭部は湧水導溝によって消失し、谷地部に形成される灰原層との連続性も通観できない。窯の形態は焼成部床面直上に堆積する崩落天井 Loam 層の存在から地下式窖窯と考えられる。長軸方位は６号窯に対し南に約２°のずれがありＮ－99°－Ｅを示す。残存長3.5m・焼成部底面最大幅80cmを測る。床面は２枚確認でき、２回以上の操業が行われたであろう。

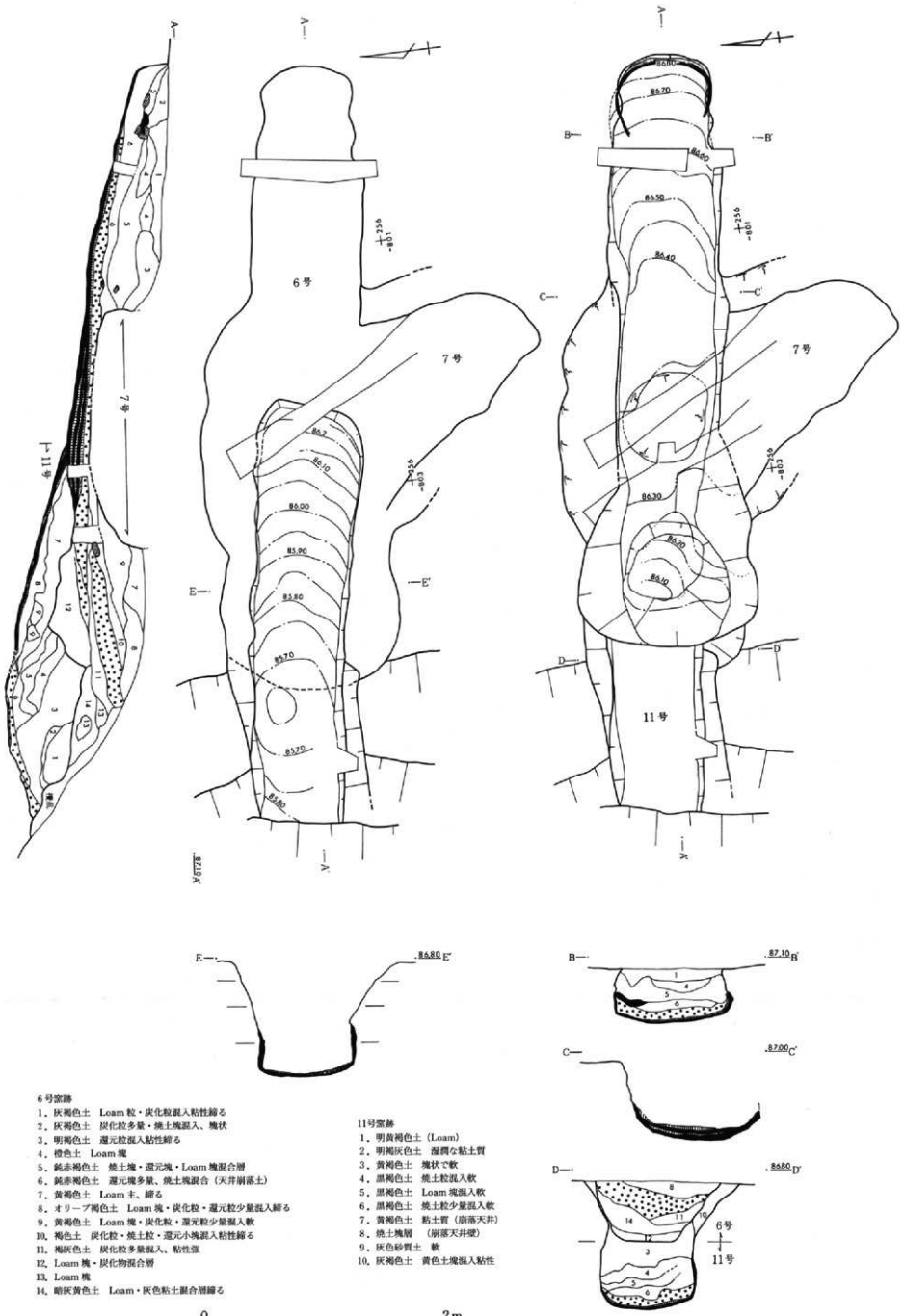
焼成部壁面は燃焼部寄りで傾斜面にかかかる僅かな範囲で遺存する。床面より高さ約40cmまで焼土化が著しいものの、還元硬質面は崩落のためか見られない。床面は２枚確認し、上下面とも硬化が著しい。床面の傾斜度は17度である。

燃焼部は焼成部下縁の壁線から変化なく続き、底面幅65cm、長さ70cmを測る。床面の硬化はなく緩やかな皿状に窪み、前庭部へは緩い傾斜をもって続く。

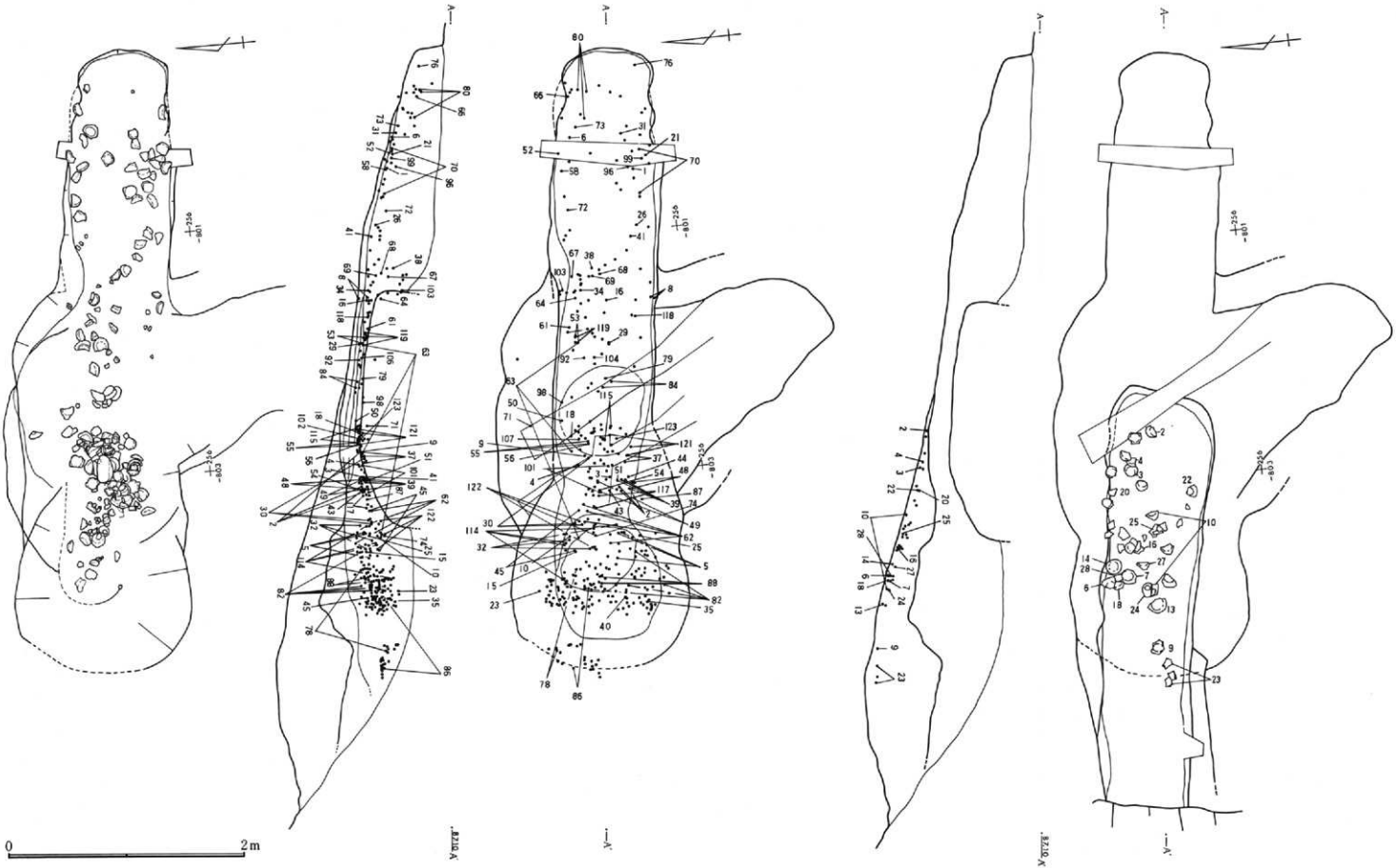
遺物は焼成部に集中して出土するが量的には少なく、焼台使用の坏底部が目立つ。器種には坏・蓋類がある。

７号窯（第21・22・23図　ＰＬ.16・17）

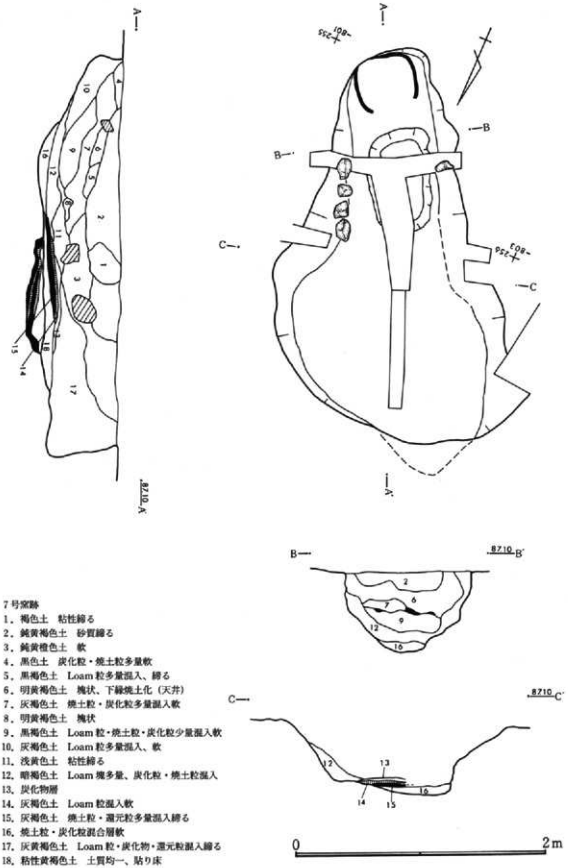
開析谷頭近く左岸縁辺の平坦部にある。６号・11号窯と重複し、両者より新しい構築である。北側には５号窯が、南には８号窯が隣接する。窯の形態は無階無段地下式窖窯に類しよう。窯跡群中最も小規模であるが、基本的な形状は１号窯と同じく前庭部が閉塞するものである。同じ形状の窯には４号・６号窯がある。



第16図　6・11号窯跡(1)

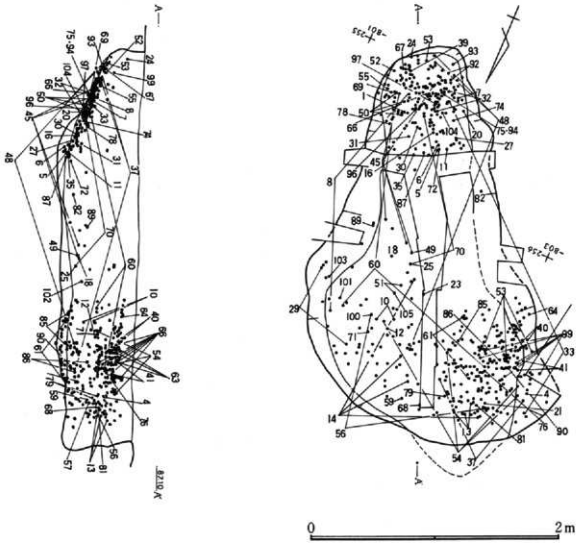


第20図　6・11号窯跡(2)



7号窯跡
1．褐色土　粘性締る
2．鈍黄褐色土　砂質締る
3．鈍黄橙色土　軟
4．黒色土　炭化粒・焼土粒多量軟
5．黒褐色土　Loam粒多量混入、締る
6．明黄褐色土　塊状、下縁焼土化（天井）
7．灰褐色土　焼土粒・炭化粒多量混入軟
8．明黄褐色土　塊状
9．黒褐色土　Loam粒・焼土粒・炭化粒少量混入軟
10．灰褐色土　Loam粒多量混入、軟
11．浅黄色土　粘性締る
12．暗褐色土　Loam塊多量、炭化粒・焼土粒混入
13．炭化物層
14．灰褐色土　Loam粒混入軟
15．灰褐色土　焼土粒・還元粒多量混入締る
16．焼土粒・炭化粒混合層軟
17．灰黄褐色土　Loam粒・炭化物・還元粒混入締る
18．粘性黄褐色土　土質均一、貼り床

第21図　7号窯跡(1)

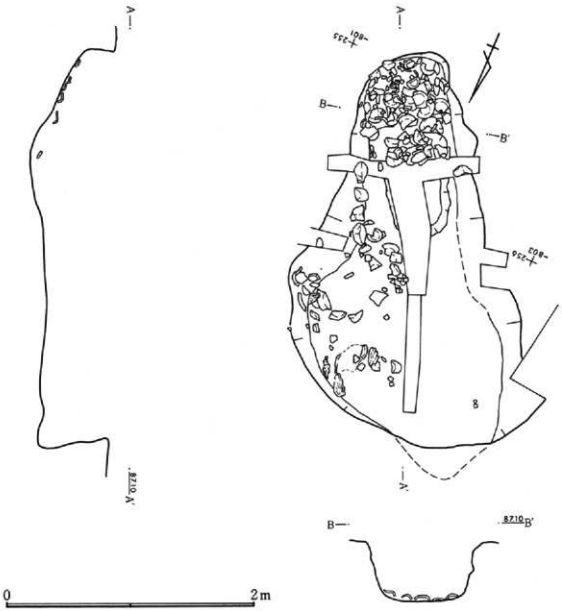


第22図　７号窯跡(2)

窯外での灰原の形成は明らかではない。長軸方位はＮ－27°－Ｗを示し、窯尻方向は谷地縁辺に立地する他窯跡とは異なり大きく南へ傾ける。操業された11基の窯跡では最小規模で、長軸3.2m・最大幅は前庭部にあり、底面で1.5mを測る。窯の形状はやや隅丸矩形の窯尻から直線的な壁線で焼成部・燃焼部に至り、前庭部は大きく膨らんで楕円形をなして閉塞する。床面は燃焼部付近で１枚を確認した。窯体の構築は、廃絶後の６号窯前庭部及び燃焼部の窪みを利用して広い前庭部を作り、６号窯の南壁に対して直角に近い角度でLoam層を掘り抜いてある。天井はすべて崩落し、窯体内には厚いLoam層の堆積が見られる。掘り抜きは６号窯の南壁線を取っ付きとして煙道部を除く範囲で約１ｍと考えられる。掘形の深さは６号窯の床面までには至らず、これと重なる部分には粘性のある均一な黄褐色土が貼床として充填されている。

煙道部の窯尻壁は底面より小さく抉れた後、直に立ち上がり壁高は28cmを測る。壁面は崩落のためか被熱面は淡赤褐色を呈する。煙道孔は窯体確認時に環状の焼土帯が検出されている。これによれば、平面形状は隅丸の方形を呈し、径70cm大の煙道孔である。

焼成部は断面Ｕ字形をなし、壁面被熱の度合は弱い。壁高60～65cm・底面幅は70cmを測る。窯尻寄りの床



第23図　7号窯跡(3)

面傾斜度は28度の急勾配をなし、中位より著しく傾斜を減じて傾斜度8度で燃焼部へ続く。床面には多量の遺物が残されていたが赤褐色を呈する不完全焼成のものが目立っている。焼成部床面や壁面の焼土化や硬化は弱く、操業初回での焼成半ばで突発的な事故が発生した可能性が考えられるが、残存する遺物量や移動の痕跡も認められることから多少の完成品は搬出されていると思われる。床面緩傾斜部の床下は皿状の浅い窪みをなし、埋土は焼土粒・炭化物粒のしまりのない混合層からなる。上面は床に相当するような面は形成されていないが、遺物選別に伴う攪乱を受けた可能性もある。焼成部規模は長さ1.25m、幅70cmを測る。

燃焼部床面となる焼土・青灰色面は前庭部として広がる範囲までにもおよび、焚口部として認識できる壁線は不明瞭である。燃焼部は焼土の広がりより80×90cmの規模と考えられる。燃焼部から焼成部にかけての左右壁面には左壁に4石、右壁には1石の人頭大角礫が設置される。壁面補強に用いられたと考えられるが、

とくに左壁の４石は６号窯の埋土をもって構築されるため一層の壁面強化を目的としたと考えられる。両壁とも重ね積みはなく１段積である。前庭部は東壁線が強く膨らみやや不整形を成す。閉塞部壁面は底面近くが抉れ、上半は内傾して後直線的に立ち上がる。深さ50cm、長さ1.1m、底面最大幅1.5mを測る。

遺物は焼成部に集中しており、不完全焼成品とともに破損土類が散乱した状態で検出されているが、不完全焼成であったがための放棄品が大半を占める。前庭部には比較的小破片が多い。出土器種には坏類の他、蓋・椀などがある。

８号窯（第24・25・26図　ＰＬ.17）

開析谷頭近く、左岸縁辺の傾斜面にある。北側に隣接して６号７号11号窯があり窯跡群の中では最も南側に位置する。前庭部は湧水導水溝によって大半が消失するため、谷地部に形成された灰原との連続性は不明である。窯の形態は無階無段地下式窖窯である。長軸方位はＮ－99°－Ｅを示し、窯尻から前庭部までの長さ3.9m、焼成部底面最大幅は１ｍを測る。窯体形状はやや先細りに弧を描く窯尻から緩やかな膨らみをもつ焼成部に至る。燃焼部はすぼまりながら焚き口部を作り、前庭部は大きくハの字状に開放すると考えられる。

窯尻は有段形状を呈するが集石を伴う土坑と重複する結果である。この土坑は本跡窯尻上位面において小児頭大の礫群で充填された状態で検出された。土坑壁面は鮮明な赤色軟化焼土である。当初、８号窯の煙道部構造にかかわる石材とも考えられた。礫群には弱い被熱の痕跡が認められ、明瞭な石組ではないが多少とも平置きが意識されていうである。礫群の下面は壁面と同様な赤化焼土の床として認識され、灰の薄い層も存在した。壁面・床面の焼土はともに窯跡で発生するような硬質なものではなく比較的低温・短時間によるもののようである。また、粘土などの構築材は用いられていない。以上のことから８号窯の廃絶後に作られた土坑であると結論付けた。

窯の構築は天井崩落による Loam 層の堆積状況から、地山 Loam 層の掘り抜きによっている。掘り抜きの範囲は崩落 Loam 層が前庭部まで流れた状態で及んでいるため明瞭ではないが、崩落 Loam の層厚から煙道部を除く焼成部の約１ｍ程度であろう。窯体壁面には部分的に礫が付設され、補強ないしは補修がなされている。また、焼成部床面には人頭大の礫が多数検出されている。本跡はその構築にあたって窯跡群中最も多くの礫を用いたことを窺わせる。

床面は焼成部から燃焼部にかけての範囲に比較的良好に依存しており、焼土粒・炭化物・還元土粒の混在する薄層を介在して酸化・還元の対層が２面確認した。さらに最終面と下位面の間には炭化粒を多量に含む灰白色粘土層が介在し、床面整地が考えられる。下位床面には焼土・還元の対層は認められないが、還元層の分離が可能であり操業回次を示すものと認識でき、４回の操業が考えられる。

煙道部の窯尻壁面は薄い焼土面をなし、約70度の傾斜をもって立ちあがる。壁高は床面より20cmで、上半の土坑攪乱を考慮すれば40cm強になる。煙道部径は崩落天井の範囲から径50cm程度になる。

焼成部窯尻寄りの左壁には４個の礫が残る。礫裏は焼土化した壁面をなすが地山 Loam との間は焼土・炭化粒を含む Loam 塊と暗褐色土の混合層で充塡され、礫裏の焼土面はこの充塡土と同質である。また、対面右壁には下位に礫を設置した窪みの痕跡がある。なお、充塡土にはスサの混入は認められなかった。壁面の礫は本跡構築当初からのものか修復によるものかは不明であるが操業回数からすれば修復に由来する可能性が高い。壁高は40～50cmで、復元高は燃焼部寄りで80cm前後の円屋根形の天井を作ると考えられる。焼成部長さ約1.9m、底面最大幅1.0mを測る。床面は約15度の傾斜をもち窯尻近くは緩く波打つ。

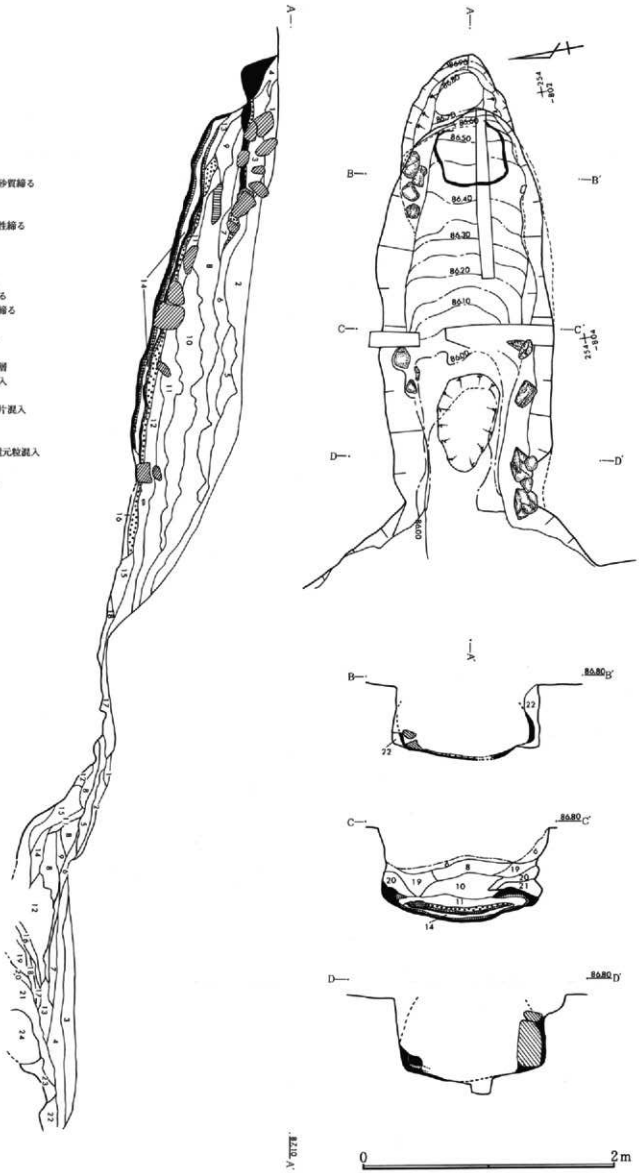
燃焼部は焚口にかけて底面幅を狭め、焼成部との変換部で約80cm・焚口幅は70cmである。長さ80cmを測る。床面は緩い傾斜をなして、僅かな窪みをもつ。左右の壁面には礫を設置してあり、左壁面の石組みが良好に

8号窯跡

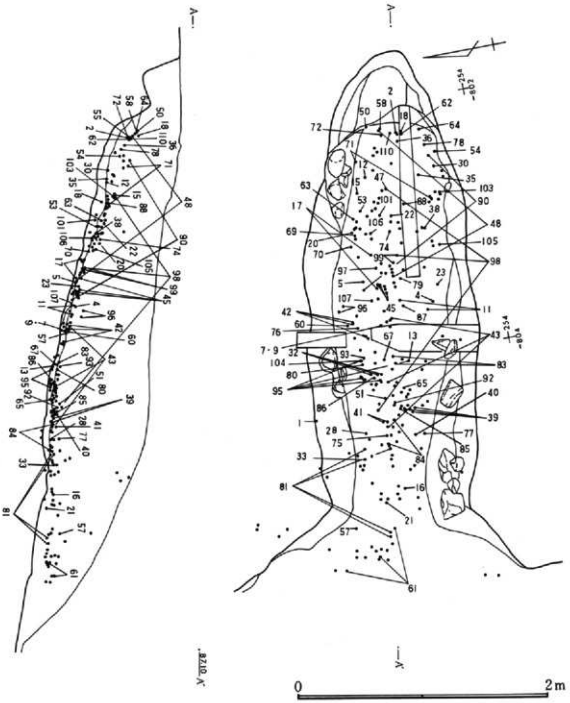
1．暗褐色土　Loam粒・焼土粒・炭化粒少量混入砂質締る
2．オリーブ灰色土　砂質締る
3．褐色土　焼土粒・炭化粒少量混入粘性締る
4．黄橙色土　Loam塊主、焼土粒・炭化粒混入粘性締る
5．褐灰色土　炭化粒少量混入締る
6．鈍橙色土　被熱、炭化粒少量混入
7．褐灰色土　焼土大粒・炭化粒混入締る
8．褐灰色土　灰色粘土主、Loam粒多量混入締る
9．鈍褐色土　焼土粒・炭化粒・還元粒多量混入締る
10．明褐色土　Loam主、灰色粘土粒少量混入粘性締る
11．Loam塊層　被熱著しい崩落天井
12．灰褐色土　焼土小塊・炭化粒・還元粒多量混入
13．灰褐色土　焼土粒・炭化粒・還元粒多量混入
14．鈍赤褐色土　焼土粒・炭化粒・還元粒混入粒状層
15．褐灰色粘質土　焼土粒・炭化粒・須恵器少片混入
16．鈍灰褐色粘質土
17．褐灰色粘質土　灰・焼土粒・炭化粒・須恵器少片混入
18．黄灰白色粘土　炭化粒混入
19．Loam塊・灰色粘質土塊混合層
20．灰色粘質土塊灰黄色土（Loam塊）・焼土粒・還元粒混入
21．明黄褐色土（Loam塊）
22．Loam塊・暗褐色混合層　焼土粒・炭化粒混入

8号窯灰原

1．褐灰色粘質土　遺物・炭化粒包含
2．褐灰色Silt
3．明褐色砂質土
4．黒褐色Silt　植物遺体混入
5．灰褐色粘質土　遺物・炭化粒・焼土粒包含
6．黒褐色土　遺物多量混入
7．灰褐色土　炭化粒多量混入
8．明褐色土　遺物・炭化粒・Silt多量混入
9．灰褐色Silt　炭化粒・Loam粒多量包含
10．茶褐色砂質土
11．灰白色粘土
12．黄白色Silt　遺物多量包含
13．明褐色土　炭化粒多量包含
14．黄白色Silt
15．灰褐色土　炭化粒多量包含
16．黄白色Silt　遺物多量包含
17．灰褐色Silt
18．黒色粘質土
19．暗褐色粘質土
20．黄白色Silt
21．明褐色土　遺物・炭化粒多量包含
22．暗褐色土
23．灰褐色土
24．流木



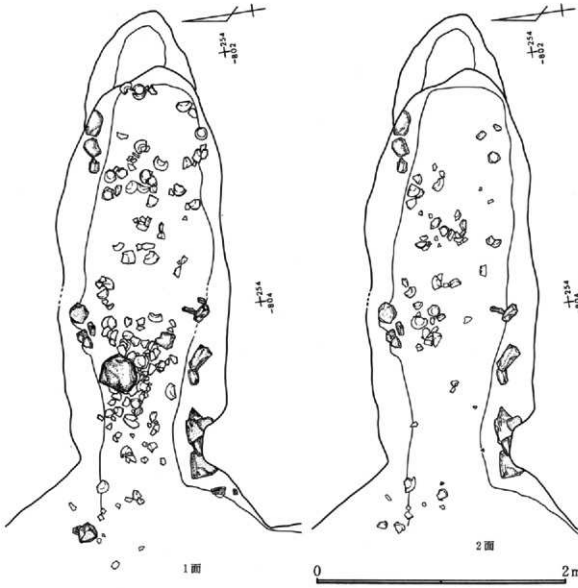
第24図　8号窯跡(1)



第25図　8号窯跡(2)

遺存する。左壁焚口寄りには長径40cm余りの偏平角礫2個を用い、地山との隙間や礫表面にスサ入りの灰白粘土を充塡塗布する。

遺物は最終床面と下位床面から出土している。最終床面では焼成部で焼台に使用された坏類が、燃焼部には選別後の破損品が放置されたごとく雑な重なりで検出されている。下位床面では焼成部に焼台使用の坏類が多い。器種には坏類が大多数を占め、少量ながら蓋・椀類がある。

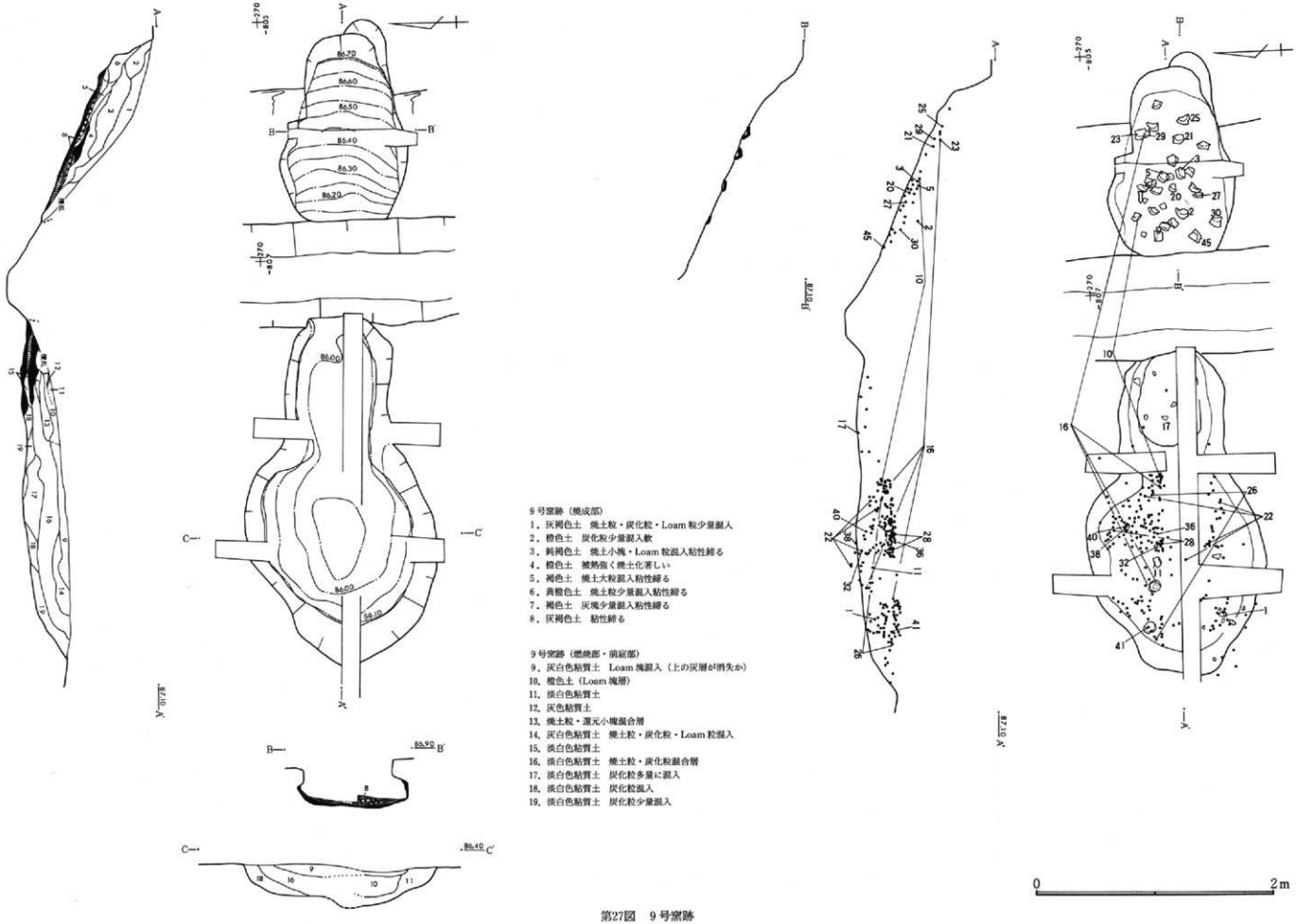


第26図　８号窯跡(3)

９号窯（第27図　ＰＬ.18）

開析谷近くの左岸傾斜地にある。当跡が構築される地点は左岸の傾斜面下縁が谷地面に張り出して平坦面をなし、再び谷地部へ傾斜する地形である。群在する２号～11号窯から10mの距離を隔て、築造途中と思われる12号を除けば最も北側に位置し谷頭に近い。焼成部の過半は湧水導水溝によって消失し窯体は分断されている。窯の形態は無階無段地下式窖窯になろう。前庭部は閉塞する形状で、１号窯をはじめ４号・６号・７号窯と類似する。長軸方位はＮ－90°－Ｅを示し、全長5.3m・焼成部底面で最大幅96cmを測る。窯体形状は弧状の窯尻より膨らんだ焼成部に至り、燃焼部は細まる。前庭部は大きく膨らみ楕円形に閉塞する。窯壁の遺存は削平が進んだためか極めて低く、30cm前後の壁高しか残さない。床面は焼成部で２枚を、また燃焼部では３枚の貼り床状の薄い層を確認している。

窯の構築は、焼成部底面間近に崩落した焼土帯層及びLoam層が堆積しており掘り抜きの天井であろう。



9号窯跡（焼成部）
1．灰褐色土　焼土粒・炭化粒・Loam 粒少量混入
2．橙色土　炭化粒少量混入軟
3．鈍褐色土　焼土小塊・Loam 粒混入粘性締る
4．橙色土　被熱強く焼土化著しい
5．褐色土　焼土大粒混入粘性締る
6．黄橙色土　焼土粒少量混入粘性締る
7．褐色土　灰塊少量混入粘性締る
8．灰褐色土　粘性締る

9号窯跡（燃焼部・前庭部）
9．灰白色粘質土　Loam 塊混入（上の灰層が消失か）
10．橙色土（Loam 塊層）
11．淡白色粘質土
12．灰色粘質土
13．焼土粒・還元小塊混合層
14．灰白色粘質土　焼土粒・炭化粒・Loam 粒混入
15．淡白色粘質土
16．淡白色粘質土　焼土粒・炭化粒混合層
17．淡白色粘質土　炭化粒多量に混入
18．淡白色粘質土　炭化粒混入
19．淡白色粘質土　炭化粒少量混入

第27図　9号窯跡

前庭部は傾斜地中段の平坦面にあるが基層はLoam層の下位に堆積する粘性の黄白色土であることから前庭部はかなり削平がされていると考えられる。9号窯の焼成部は谷地斜面の傾斜度に近く斜面そのものを掘り抜いて構築されている。同じ傾斜面に構築されている他窯（2号・3号・5号・8号・10号・11号）は縁辺周部を斜めに掘りぬき、両者には地形利用に多少の差があることを窺わせる。

煙道部窯尻は傾斜して立ち上がるが崩落による塊状のLoamで埋まり本来は直立していたと考えられる。底面からの高さ約30cmを測る。

焼成部は窯跡群中最大の傾斜度をもち25度を有する。前述したように、床面斜度は谷地傾斜面に沿ったものと考えられる。床面は2枚確認されており、青灰色還元層も硬化の度合が強い。直上には灰及び焼土粒の薄層があり、崩落天井の焼土帯Loam層が続く。燃焼部への移行部は湧水導水溝によって不明であるが、底面壁線が狭まって画するようである。焼成部長さ2.3m、底面最大幅96cmである。

燃焼部は長さ1.1m、底面幅70cm。傾斜面にある焼成部の急傾斜から一変しほとんど平坦面である。床面の硬化の度合は弱く僅かな窪みをなす。焼土層が2枚その間に還元層が挟まれ、焼成部同様2枚の床面が観察される。さらに、各床面の間層として貼床が想定できる淡白色粘土質の薄層が2層、そして床面の上位には灰色・淡白色粘土層がある。これらを操業次回に伴う窯体整備の結果とするならば最大3回の操業が考えられる。焚き口部は大きく広がる前庭部との変換部で底面幅50cmである。

前庭部は楕円形の閉塞型である。長さ1.85m、底面幅85cm、掘形の深さ35cmを測る。純度の高い灰層は燃焼部にあり前庭部では白色粘土層と混合状態で堆積する。

遺物は焼成部床面及び直上に散在してある。坏類で占められ、体部の一端を残す底部が大半である。検出された坏類は底部を表に、傾斜する床面に対して水平に据えられるものが多く、焼き台として使用されたものであろう。

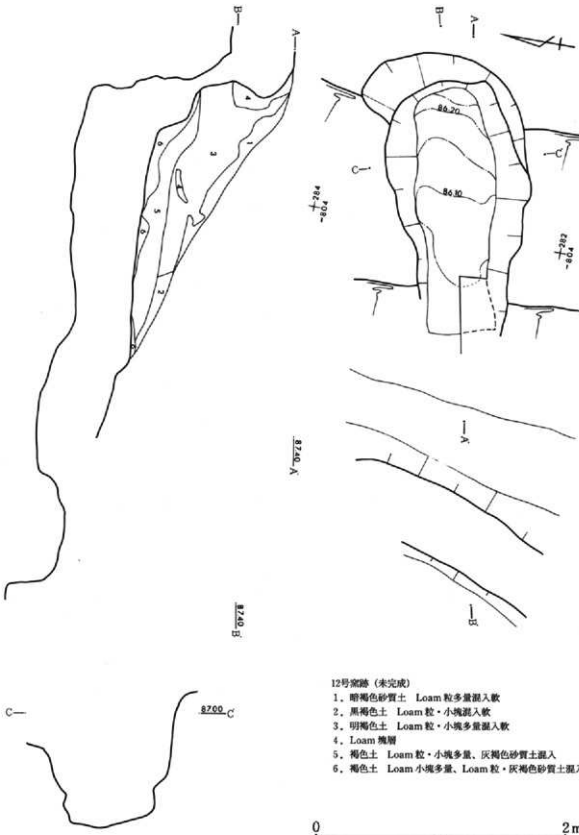
12号窯（第28図）

開析谷頭近く左岸傾斜面にあり、窯跡群の中では最も谷頭に位置する。窯跡とするには使用の痕跡はなく、ここでは構築途中の窯遺構としての可能性を指摘できるに過ぎない。窯体構築地点としては、操業窯跡群と共通した谷地傾斜部を利用し、掘り抜き手法による築造を目指したと考えられる。微地形的には、谷地縁辺斜度約33°の傾斜面から中段にあたる幅2m程の平坦面をなして谷地底へ再び落ち込む。平坦面の端より傾斜度9度前後で長さ2.1m掘り進んだ状態である。掘形現況では、上幅1.1m・下幅60cm・奥壁高1.1mを測る。長軸方位はN－77°－Eを示す。窯体部分としては燃焼部に相当しよう。埋土は上層に締まりの無い暗・黒褐色土が、下位はLoam小塊の混じる褐色土が見られる。上下層の間には厚くLoam塊層があり、奥壁に近く層厚を増し掘り抜き工法による天井部の崩落土を思わせる。遺物は検出されていない。

谷地傾斜面の利用および埋土の状況から、何らかの事情によって構築が中断された窯跡である蓋然性は高いと考える。また、窯跡の形状・構造については傾斜面中段の地形を考慮しているところから9号窯跡に近い形態が想定される。

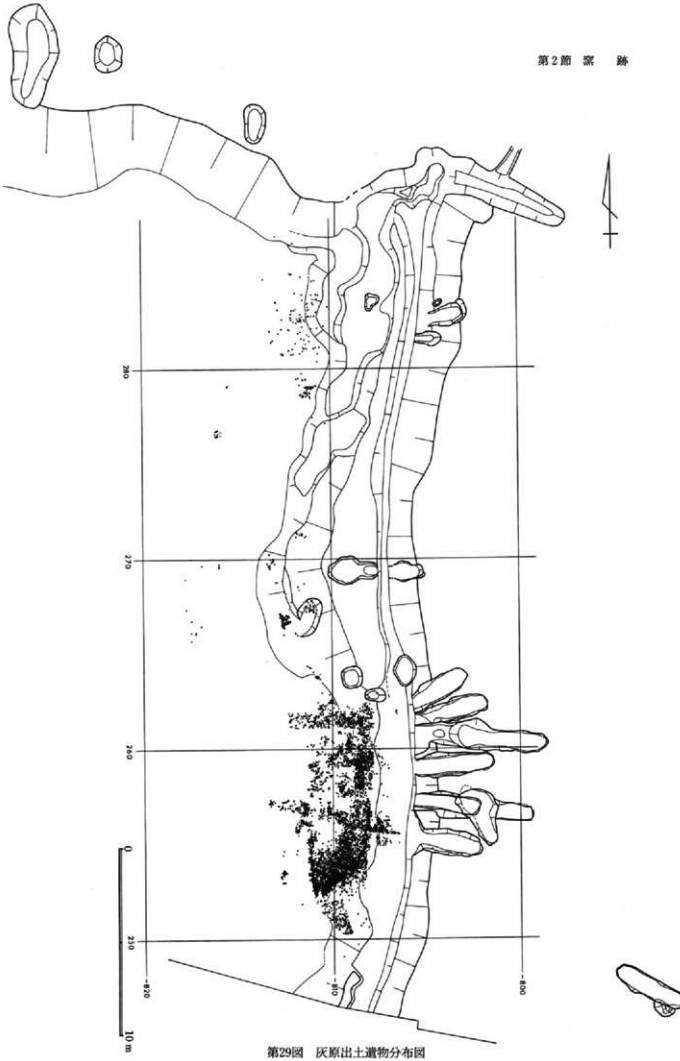
灰原（第29・30・31図　PL.19）

舞台遺跡で検出された11基の窯跡のうち台地上に構築された1号窯をのぞき、窯場の灰原はすべて谷地部に形成されている。谷地は北側を谷頭に発達し、窯跡群の形成される左岸側に湧水点をもつ。この湧水は昭和年代の土地改良前まで利用されていたと言われている。現状で知る得る最古の利用は、浅間B軽石層を埋土とする導水路とみられる左岸中段に検出された溝である。なお、谷地下位の堆積土中にはFA層と考えられる黄白色細砂質土が左岸寄りで落ち込む状態で認められている。これもまた導水路的な遺構と考えられ、



12号窯跡（未完成）
1．暗褐色砂質土　Loam 粒多量混入軟
2．黒褐色土　Loam 粒・小塊混入軟
3．明褐色土　Loam 粒・小塊多量混入軟
4．Loam 塊層
5．褐色土　Loam 粒・小塊多量、灰褐色砂質土混入
6．褐色土　Loam 小塊多量、Loam 粒・灰褐色砂質土混入

第28図　12号窯跡

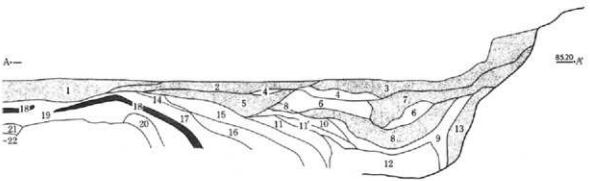


第29図　灰原出土遺物分布図

断面観察に留まり確証は得られていないものの、湧水の利用は古墳時代に溯る可能性もある。灰原面は浅間Ｂ軽石層下を上限に検出され、FA 層には達していない。層序としてはＢ軽石層にかかわる溝と近接するが、窯跡と灰原の間を横断するこの溝およびその周辺での灰層はほとんど認められていない。灰層は溝の開削によって窯体との連続性を断たれている。

灰層の堆積状況は谷地左岸寄りに認められた FA 層の落ち込みに相当する幅３ｍ程の帯状範囲に厚く堆積する。灰層の分層は明瞭さを欠くが、部分的に黄白色細砂質層を介在して３～４層に分けられるものの連続性は追及できなかった。

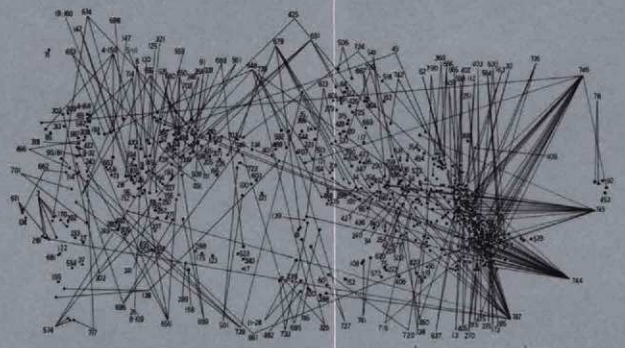
遺物の分布は堆積灰層に比例して、縁辺に多く２号～８号窯の範囲に濃密な分布をみる。特に８号窯の周辺が著しく、谷頭に近い９号窯の範囲は希薄さとは対象的で、流水による溜まり現象とも考えられる。また、未完成の窯跡とした12号窯の延長範囲での破損遺物の存在は、ここでも窯跡操業にかかわる何らかの行為がなされていたことを示していると考えられ、12号窯想定の一助となろう。出土遺物は坏類が大半を占め蓋・椀が続く。甕類のほとんどは灰層からの出土で全破片数をもってしても微量であり、提示した資料数を大幅に上回るほどの焼成がなされていたとは考えにくい。



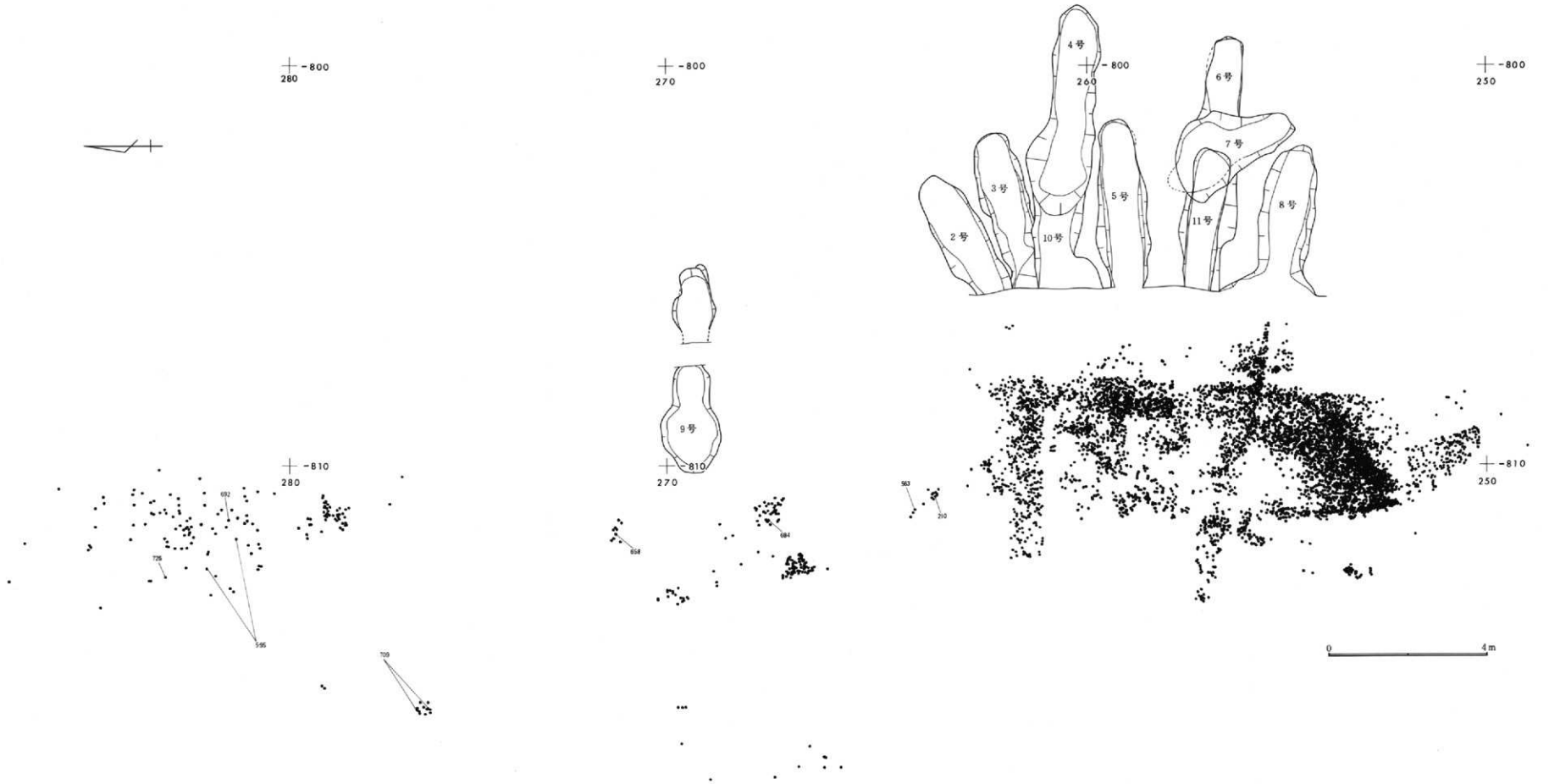
谷地部灰原土層註

1．黒褐色粘質土　植物遺体多量混入
2．黒褐色細粘質土　植物遺体多量混入
3．褐色弱粘質土
4．黄白色砂質土　塊状
5．褐色土　炭化物・焼土粒塊・遺物多量混入
6．黄白色砂質土　細粒
7．褐色弱粘質土　細土・炭化物・焼土粒塊・遺物多量
8．褐色土　炭化物・焼土粒塊・遺物多量
9．黄白色砂質土　細粒
10．黒褐色粘質土　細植物多量混入
11．黄白色砂質土
12．黒色粘質土
13．褐色弱粘質土　炭化物・焼土粒塊・遺物多量
14．褐色砂質土
15．黒色粘質土　細植物多量
16．黄白色砂質土
17．黒色粘質土
18．FA 層
19．黒色粘質土
20．褐色粘質土
21．褐色粘質土
22．暗褐色粘質土

第30図　谷地部灰原土層図



748個体中典記以外
204個体出土位置



第31図　灰原出土遺物接合関係図

窯跡出土遺物

1．分類

舞台遺跡窯跡群の遺物は11基の窯跡及びそれらによって形成された谷地内の灰原から検出されている。両者からの出土遺物を概観する中で坏類が最も多数を占め、一定量の蓋とこれに組み合わさる椀と少量の甕類が生産されている。また、特殊な遺物としは頸部に十字形の透かしを穿つ長頸瓶や甑のほか、舟形の陶硯が知れる。窯体内や灰原の遺物出土状況からは、これら各器種の焼成には個別窯跡による占有性は認められない。

生産の主体となる坏類の切り離し及び調整技法は底部右回転糸切り無調整を基本としている。観察した資料の限りでは左回転による糸切りは皆無である。また、回転糸切り後の調整は糸切り周辺を回転による箆削りを施す例は僅か1例にすぎない。当窯跡群出土遺物のなかで、篦工具によって行われる調整は蓋種で天井部に通有な技法である。舞台遺跡の須恵器工人にとって篦工具による調整は習熟されたものと考えられるのであり、底部の糸切り無調整は基本的な技法となっていた段階としてよいであろう。1点の篦調整資料は例外的・突発的なものとしたい。なお、灰原が形成される谷地内より数点の底部篦調整の須恵器坏の出土を見るが、いずれも使用にともなうと思われる痕跡が認められ、当窯跡の焼成製品に直結するものではない。

器種分類　舞台遺跡窯跡出土の須恵器種には坏・蓋・高台付き椀・無高台椀・平底甕・のほか小片で全容は知り得ないが長頸瓶・広口鉢・丸底甕・陶硯がある。各器種の形態分類を行うにあたっては、特に坏類に顕著である細部における多様な歪みが大きな障害となり、形状・計測値などの同定に遠巡する資料がほとんである。歪みの現象は成作・乾燥・焼成の工程の中で通常的に起こり得ることである。器が歪んでいることそれ自体にも重要な研究視点があろう。しかしながら、ここでの作図は遺物の最も端正な部分を選択し、展開法で示した。この方法をとった基本的な理由としては、本来製作者が目指したであろう器形状の復原を第一義に示すためである。現実に生じている歪みは、個体間の類似・相違の識別を困難なものにしがちである。この歪みはある須恵器の製作に際して意図的・作為的になされたものではないであろうと考えるからであり、そして、そのことが当然望まれる12基（うち1基は未操業）の窯跡資料の型式的な変遷の検討にも有効と思われるのである。

器種及び形態による分類は灰原からの出土資料を中心に行った。当窯群の灰原形成は窯跡の配置から見て、谷地内を南北方向に重複連続した分布形状を見せる。前述したように窯跡の構築される谷地傾斜面下位には後世に掘削された湧水点からの導水路によって各窯跡と灰原は分断されている。さらには、導水路の開削や流水によって灰層そのものも攪乱を受けている可能性も大きいと思われた。実際の遺物分布を見ても、集中の度合は谷地下手に著しい。このような遺存状況からは各窯跡との同定や灰原相互の関係を見極めることは困難である。しかしながら、窯跡で焼成された製品のほとんどんを内包すると考えられる無作為の灰原出土遺物をもって分類した。

分類の基準は器種によって若干異なるが、基本的には全体形状を目安にした。外傾指数等の具体的数値が根拠ではないため全体ないしは部分の形状から受ける印象を類型化したといったものに近い。その際、口唇部の「薄」・「厚」・「丸」等の属性は、粘土紐による積み上げないしは巻き上げという基本的な成形技法と精選均一な粘土素材によらない（遺物胎土の観察から採取した堆積複数層の粘土をほとんど無作為に近い状態で使用していることが窺える）ために生ずる個別変異の結果とも考えられるのである。これら諸属性を考慮した場合、実際の類別作業においては個体段階にまで類型化がおよんでしまう。

坏　1形態に包摂され、a～hの8類型がある。各同類型とも多少の計測値差はあるものの、その変移は

緩やかで明瞭な大・小の分化としては認めにくい（第32図）。

a類　口・底径比の差が小さく、体部が直線的に立ち上がる。やや外反気味の体部をもつものもあるが少量で類中の変種としてとらえたが更に類別の可能性もある。

b類　口・底径比が大きく、深目で直線的な体部をもつ逆台形。

c類　口・底径比が大きく、偏平で体部が直線的・外反するものがある。

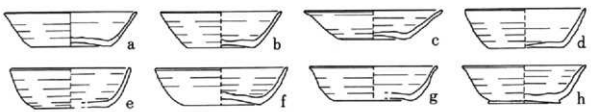
d類　口・底径比が小さく、深目の箱形である。体部は直線的。

e類　口・底径比が小さく、深目で腰部に丸みをもつ。体部の直線・内弯は類中の変異と考えた。

f類　口・底径比が小さく、丸みのある体部。

g類　口・底径比が小さく腰部が張る。丸みのある体部下半から上半は緩く外反して開く。

h類　口・底径は大きく腰部の丸みが強い。体部上半は緩く外反して開く。



第32図　坏の分類

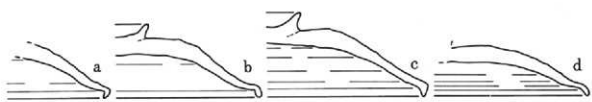
蓋　天井部回転篦削りで環状鈕と口縁単純折れの1形態である。総じて天井部の形状は丸みが少なく偏平である。口縁端部の形状でa～dの4類型があり、鈕の細部形状による分類も可能であるが繁雑に過ぎる恐れがありここでは考慮しない。口径によってⅠ～Ⅳに分類され、Ⅰ類(13cm以下)・Ⅱ類(14cm以上16cm以下)・Ⅲ類（16cm以上）・Ⅳ類（18cm以上）がある。計測値による類別は後述する椀B類各類型に対応すると考えられる（第33図）。

a類　口縁端部は丸みをもち内屈する。

b類　口縁端部は丸みをもち直下に折れる。

c類　口縁端部は略三角形で外縁は面取り状に調整を施す。

d類　口縁端部の屈折は緩く、外方に開く。



第33図　蓋の分類

椀はA類無高台椀とB類有高台椀に分類する。A類は回転糸切り無調整で体部が直線的に立ち上がる1形態である。B類は回転糸切り付け高台で形態からa・b・c・d・e類型に分かつ。さらにB類の各類型は口径によって大（16cm以上）・小（14cm以下）の分化が認められ、各類型で網羅はしないが、Ⅰ～Ⅳに分類される可能性が高い。Ⅰ類（13cm以下）・Ⅱ類（14cm以上16cm以下）・Ⅲ類（16cm以上）・Ⅳ類（18cm以上）があ

り、蓋のⅠ～Ⅳ類に対応すると考えられる（第34図）。

椀A類　無高台で口径17～18cmの深く直線的な体部をもつ。4号窯跡と灰原から各1点の出土で量産器種ではなかろう。形態的には4号窯跡のものが坏Ab類に、灰原出土は坏Ad類に似るが計測値の差は歴然である。

椀Ba類　腰部にやや丸みをもち強く張り、深目の体部は直線的に立ち上がる。

b類　腰部は強く張り、浅い体部で直線的または外反気味に立ち上がるものもある。

c類　腰部は強く張り、直線的な体部で大きく開く。

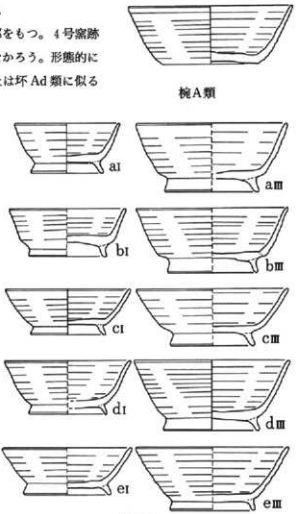
d類　腰部に丸みをもち、体部の上半は外反気味に開く。

e類　腰部を作らず、体部は直線的に開く。

長頸瓶　頸部片で全体の器形は不明である。頸部に篦状工具による十字形の透かしが穿たれる特種器である。三方透かしになると考えられる。

広口鉢　口縁部の小片で全容は不明である。唯一1点が3号窯よりの出土である。

甕　A類平底とB類丸底がある。両者とも灰原からの出土で窯跡からは検出されていない（第35図）。

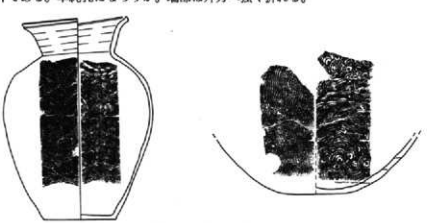


第34図　椀の分類

甕A類　口頸部は無紋。肩部は丸く張り、胴下半は直線的。外面平行叩き、内面無文の当て目。最大径肩部にある。

甕B類　底部のみで全容は不明。外面平行叩き、内面同心円文当て目。4号窯より本類の口縁部と考えられる小片が出土している。頸部は外面に平行叩きを施す。

甑　底部の小片である。単純孔になろうか。端部は外方へ強く折れる。



第35図　甕の分類

２．窯跡出土遺物

窯跡出土遺物には坏類を初めとして蓋・椀Ｂなどほとんどの場合、各器種に複数類型が混在する。ここに掲載した遺物については自明のことながら、各類型の多少は形状のうかがわれるものを主に取り上げたものであり、製作個体量の実態を示すものではない。しかし、窯跡全体を通覧した場合には坏類に関しては ａ 類が多く、ｃ類が少ない傾向が窺われる。また、甕Ａ・Ｂなどの大型品は窯体内からの出土は小破片に限られ、ほとんどの資料は灰原からの出土である。生産器種には坏・蓋・椀・甕・瓶・鉢・甑・硯など多種におよぶが、主製品は坏類であり甕などの中・大型の生産量は極めて少量・限定的である。これは、窯跡群全体にみられる状況で窯跡毎での製品別焼成はなされていない。

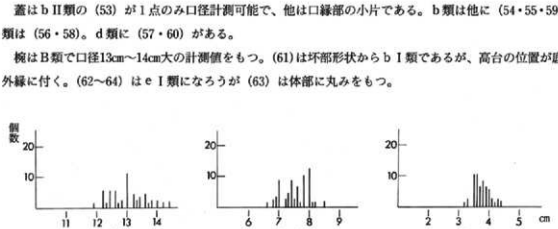
１号窯跡出土遺物（第36～39図　ＰＬ.20・21・46）

１号窯跡は他窯跡とは約10ｍの距離を隔て、台地平坦部にある。窯体外での灰原は当初より形成されなかったかまたは、削平による消滅のためか定かではないが痕跡すら認められない。１号窯跡の遺物はすべて窯体内からの出土で、坏・蓋・椀Ｂがある。

坏は口径13cmを中心に12cm以上14cm以下の範囲に主たる分布域がある。底径は８cmを頂点に７cmへ、器高は3.5cm頂点に４cm大に偏る。本窯にはａ・ｃ・ｄ・ｆ・ｇ・ｈの類型が存在する。（４・５）は体部が緩く外反気味になる。ａ類の（１～12）のうち（７）はｇ類に、(12) はｂ類の可能性がある。ｃ類は浅い体部が直線的な (13) と膨に丸味ある (14) で、作りは薄い。ｄ類は (15～22) で、体部下半がやや肥厚する。(18・20) は口縁部が外反気味になる。ｆ類の (23～41) は体部が内弯気味でｅ類に似るが、体部の丸みの強さと低い器高で区別される。(42～44) はｇ類になる。腰部が丸く強い張りをもち、体部の上半が外反する。ｈ類の (45～52) はやや小径な底部で体部に丸みがある。体部となる一段目粘土紐の接着位置か、切り離しの際の技術的稚拙のためか底部が突出するものが多い。

蓋はｂⅡ類の (53) が１点のみ口径計測可能で、他は口縁部の小片である。ｂ類は他に (54・55・59)。ｃ類は (56・58)。ｄ類に (57・60) がある。

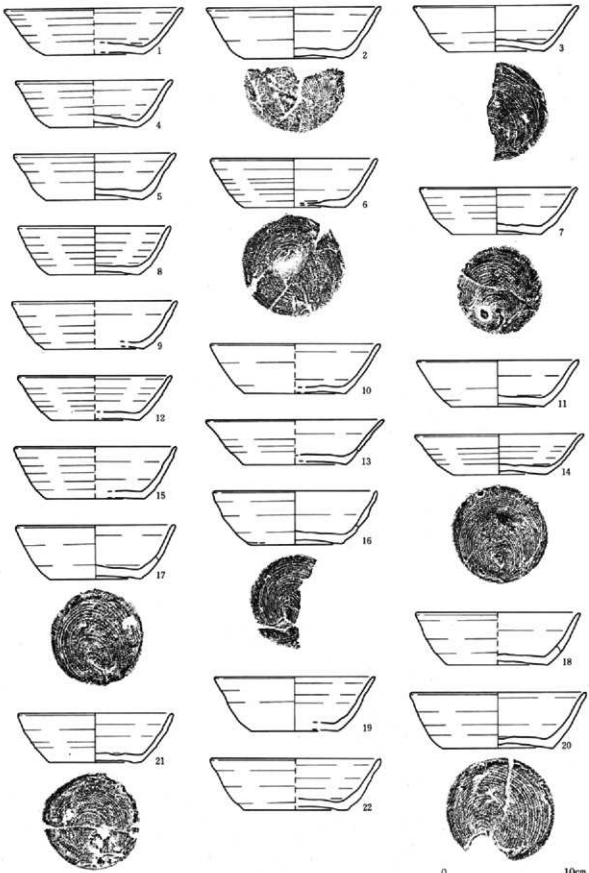
椀はＢ類で口径13cm～14cm大の計測値をもつ。(61) は坏部形状からｂⅠ類であるが、高台の位置が底部の外縁に付く。(62～64) はｅⅠ類になろうが (63) は体部に丸みをもつ。



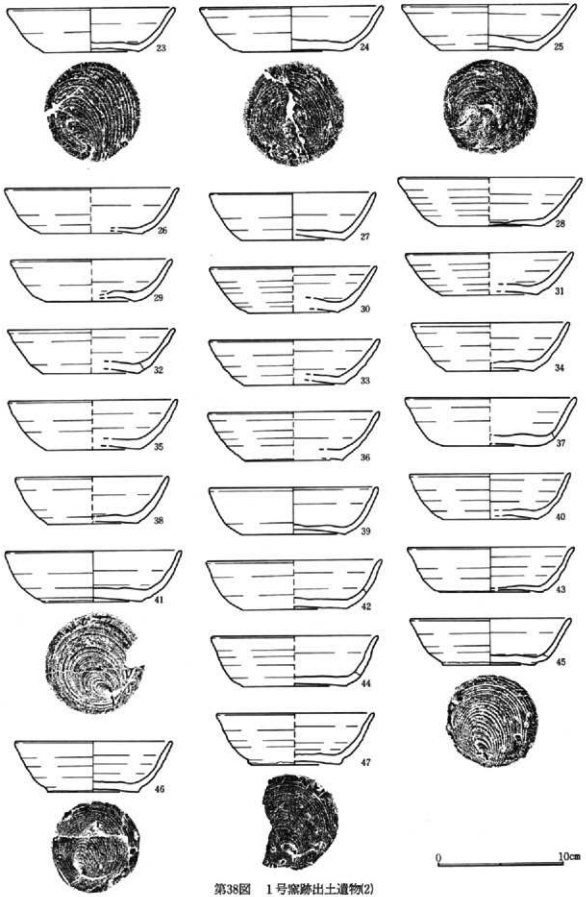
第36図　１号窯跡坏計測値分布図

舞台遺跡　１号窯(1)

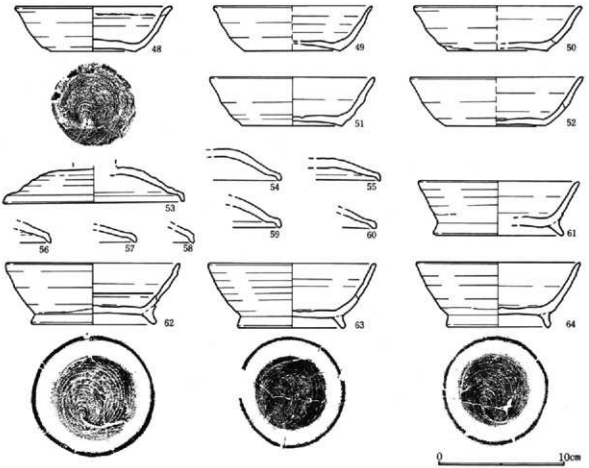
№	器種	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
1	坏	14.0×7.8×3.6	浅黄	良好	砂粒少	右回転糸切り　外面火襷	¼	
2	坏	13.6×7.8×3.6	鈍黄橙	軟	細砂粒	右回転糸切り　外面体部吸炭	½	重焼？
3	坏	13.0×7.5×3.6	灰	堅緻	粗砂粒多	右回転糸切り	½	
4	坏	12.2×6.9×3.7	灰	堅緻	粗砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
5	坏	12.6×7.6×3.6	黄灰	良好	粗砂粒多	回転糸切り　右回転　内面火襷？	½	
6	坏	13.2×8.0×3.9	鈍黄橙	良好	砂粒多	右回転糸切り	¾	
7	坏	12.2×6.8×3.7	灰	堅緻	微白粒多	右回転糸切り	ほぼ完	



第37図　1号窯跡出土遺物(1)



第38図　１号窯跡出土遺物(2)



第39図　1号窯跡出土遺物(3)

舞台遺跡　1号窯(2)

No.	器種	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
8	坏	12.2×7.4×3.8	灰	堅緻	微白粒多	回転糸切り　右回転内外面火襷	½	
9	坏	13.0×8.0×3.8	灰	堅緻	微白粒多	回転糸切り　右回転	¼	重焼
10	坏	13.2×8.0×3.9	灰白	良好	粗砂粒多	回転糸切り　右回転　再被熱	½	焼台
11	坏	12.6×7.0×3.6	淡黄	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
12	坏	12.0×6.8×3.5	灰	堅緻	微白粒多	回転糸切り　右回転	½	
13	坏	14.0×8.0×3.5	灰	良好	砂粒多	右回転糸切り　内面吸炭	¼	重焼
14	坏	13.0×7.4×3.2	灰白	良好	粗砂粒多	右回転糸切り	¾	
15	坏	12.6×7.4×4.1	灰白	良好	白粒多	右回転糸切り　内面吸炭	½	
16	坏	13.0×7.8×4.2	灰白	やや軟	粗砂粒多	右回転糸切り　見込み火襷	½	
17	坏	12.4×7.0×4.3	灰白	良好	粗砂粒多	右回転糸切り　内外面吸炭	¾	重焼
18	坏	12.7×7.8×4.1	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
19	坏	12.4×6.8×4.3	灰黄	やや軟	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
20	坏	13.7×8.5×4.4	淡黄	良好	粗砂粒多	右回転糸切り　口縁内外面吸炭	¾	重焼
21	坏	12.2×7.4×3.9	灰黄	良好	粗砂粒多	右回転糸切り	½	
22	坏	13.3×8.1×4.0	淡黄	やや軟	粗砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
23	坏	13.0×7.2×3.5	灰黄	良好	粗砂粒	右回転糸切り	¼	
24	坏	14.2×7.8×3.5	灰黄	良好	粗砂粒多	右回転糸切り	½	
25	坏	13.6×7.4×3.6	灰黄	良好	粗砂粒多	右回転糸切り	½	
26	坏	13.8×8.0×3.5	灰黄	良好	粗砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
27	坏	13.0×8.0×3.7	灰	堅緻	粗砂粒	右回転糸切り	½	
28	坏	14.4×8.2×3.8	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転　内外面吸炭	½	重焼
29	坏	12.8×7.0×3.3	灰白	良好	粗砂粒多	右回転糸切り	½	
30	坏	13.2×7.0×3.6	灰	良好	粗砂粒多	右回転糸切り	¾	

舞台遺跡　１号窯(3)

№	器種	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
31	坏	13.0×7.3×3.3	鈍黄橙	やや軟	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
32	坏	13.0×7.4×3.5	灰白	好	粗砂粒	回転糸切り　右回転	½	
33	坏	13.4×8.0×3.6	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転　再被熱	½	焼台
34	坏	12.3×6.9×3.8	灰	堅緻	微白粒多	右回転糸切り	½	
35	坏	13.4×7.4×3.9	鈍褐	軟	砂粒多	回転糸切り　右回転　外面吸炭	½	重焼
36	坏	13.4×7.6×3.8	浅黄	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
37	坏	13.3×7.3×3.8	灰白	良好	粗砂粒	回転糸切り　右回転　再被熱	½	焼台
38	坏	11.9×6.9×3.7	灰白	堅緻	砂粒少	右回転糸切り	¼	
39	坏	13.3×8.0×3.7	灰	良好	粗砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
40	坏	12.8×7.6×3.6	灰	堅緻	微白粒多	回転糸切り　右回転	½	
41	坏	13.8×7.8×4.0	灰白	良好	粗砂粒多	右回転糸切り　再被焼	½	焼台
42	坏	13.6×8.0×0.9	鈍橙	やや軟	粗砂粒	右回転糸切り　部外面吸炭	½	重焼
43	坏	13.0×8.0×3.6	鈍橙	やや軟	細砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	½	重焼
44	坏	13.0×8.0×3.9	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転　再被焼	½	焼台？
45	坏	12.4×7.0×3.7	灰	良好	粗砂粒少	右回転糸切り	½	
46	坏	12.4×7.2×4.0	灰	堅緻	微白粒多	右回転糸切り	完形	
47	坏	12.4×7.4×4.0	明黄褐	良好	砂粒少	右回転糸切り	¾	
48	坏	12.2×6.6×3.5	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り　口縁紐作り痕	½	
49	坏	12.6×7.6×3.6	灰	堅緻	微白粒多	回転糸切り　右回転	½	
50	坏	13.0×7.8×3.5	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
51	坏	13.0×8.0×3.8	灰白	良好	粗砂粒少	右回転糸切り　内外面吸炭	¾	重焼
52	坏	13.6×7.8×3.8	灰白	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転　再被焼	½	焼台
53	蓋	14.2×−×2.5(体部)	鈍黄橙	良好	砂粒少	天井右回転篦削り　口縁内外面吸炭	損欠	重焼
54	蓋	13.0×―――	浅黄	良好	砂粒少	天井右回転篦削り	小片	
55	蓋		灰	良好	砂粒少	天井右回転篦削り	小片	
56	蓋		灰白	良好	砂粒少		小片	
57	蓋		浅黄	良好	砂粒多		小片	
58	蓋		灰白	良好	砂粒多		小片	
59	蓋		鈍黄橙	やや軟	砂粒少	右回転	小片	内外吸炭
60	蓋		灰	良好	砂粒少		小片	
61	鴟	12.4×9.8×4.3	灰白	やや軟	砂粒少	付高台	右回転　¼	
62	鴟	13.6×9.8×4.8	黄黄橙・灰	やや軟	砂粒多	右回転糸切り付高台　内面篦あて痕	½	
63	鴟	13.0×8.4×5.1	明褐灰	良好	微白粒多	回転糸切り付高台　外面吸炭	¾	重焼
64	鴟	13.4×8.2×5.1	鈍橙	軟	微白粒多	回転糸切り付高台　右回転	½	

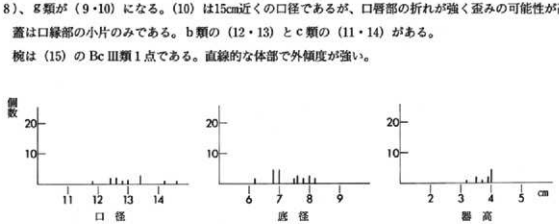
２号窯跡出土遺物（第40・41図　ＰＬ.21・46）

２号窯跡からの出土量は少なく散在した状態で検出されている。器種には坏・蓋・椀Ｂがある。

坏は口径12.4～13cmを主に、底径は６cm後半から７cmで頂点をなし、８cm大に偏る。器高は４cm大を頂点に３cm大に分布する。ａ類は（１～３）で、（３）は口唇部が肥厚気味に丸まる。ｂ類は（５～７）、ｃ類は８）、ｇ類が（９・10）になる。(10）は15cm近くの口径であるが、口唇部の折れが強く歪みの可能性が高い。

蓋は口縁部の小片のみである。ｂ類の（12・13）とｃ類の（11・14）がある。

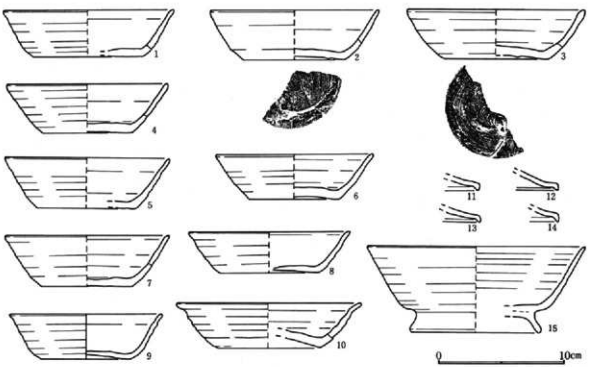
椀は（15）のBc Ⅲ類１点である。直線的な体部で外傾度が強い。



第40図　２号窯跡坏計測値分布図

舞台遺跡　2号窯(1)

№	器種	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
1	坏	13.4×8.6×3.7	灰黄	良好	粗砂粒多	右回転糸切り	¼	
2	坏	13.4×8.0×3.9	鈍黄橙	良好	粗砂粒	右回転糸切り	½	重焼
3	坏	13.7×7.8×3.9	鈍黄橙	やや軟	粗砂粒	右回転糸切り　外面吸炭	½	
4	坏	12.4×7.0×3.9	鈍橙	やや軟	微白粒多	回転糸切り　右回転　外面吸炭	½	重焼
5	坏	13.0×7.6×4.0	淡黄	良好	粗砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	¼	重焼
6	坏	12.4×7.0×3.5	灰白	良好	粗砂粒	右回転糸切り	½	
7	坏	12.8×7.0×4.0	灰黄	良好	粗砂粒	回転糸切り　右回転	¼	
8	坏	12.6×7.6×3.2	灰黄	良好	粗砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
9	坏	11.8×6.8×3.6	灰	堅緻	粗砂粒	右回転糸切り	½	
10	坏	14.6×8.0×4.0	灰白	堅緻	粗砂粒	回転糸切り　右回転　巻き上げ痕	½	
11	蓋		灰白	良好	砂粒少		小片	
12	蓋		灰白	良好	砂粒少		小片	
13	蓋		灰	良好	砂粒少		小片	
14	蓋		灰	良好	粗砂粒		小片	
15	塊	16.8×10.0×6.8	鈍橙	軟	砂粒少	付高台　右回転	¼	

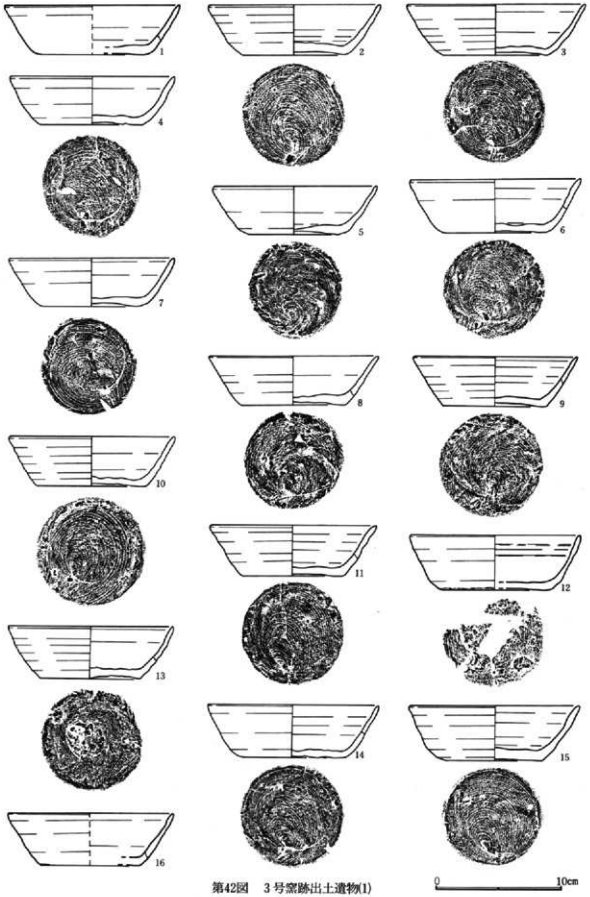


第41図　2号窯跡出土遺物

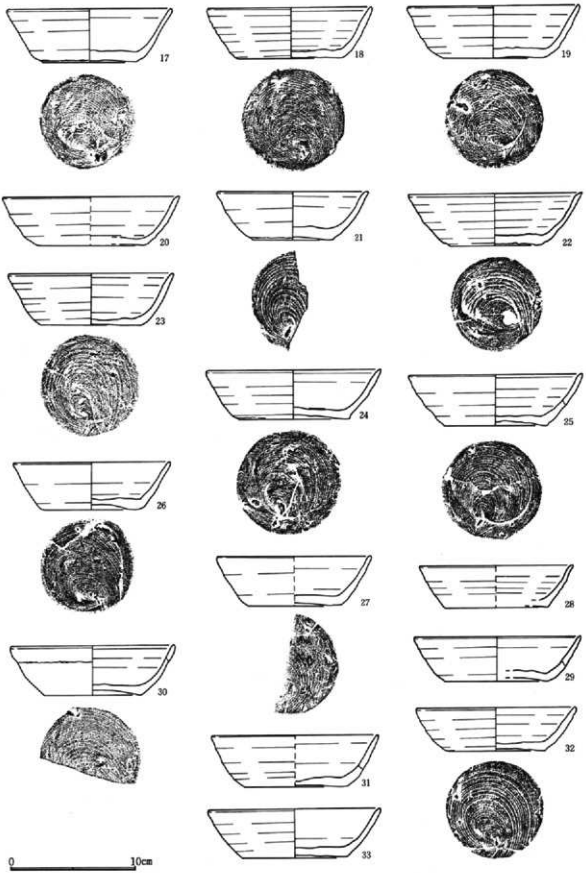
3号窯跡出土遺物（第42～45図　ＰＬ.22・23・46・47）

3号窯跡からの出土遺物位置は大略、窯跡天井部崩落土の上下で分けられる。1つは煙道部付近の天井部崩落土中あるいは上位で集中的に出土した1群で、破損品ではあるが完形度が高く、廃窯後に一括投棄されたようである。器種は坏が大半である。他は、本跡最終操業に伴う選別終了後に残されたと考えられるもので、燃焼部寄りの焼成部床面に集中する。器種には坏類を主とし蓋・椀Ｂなどがある。

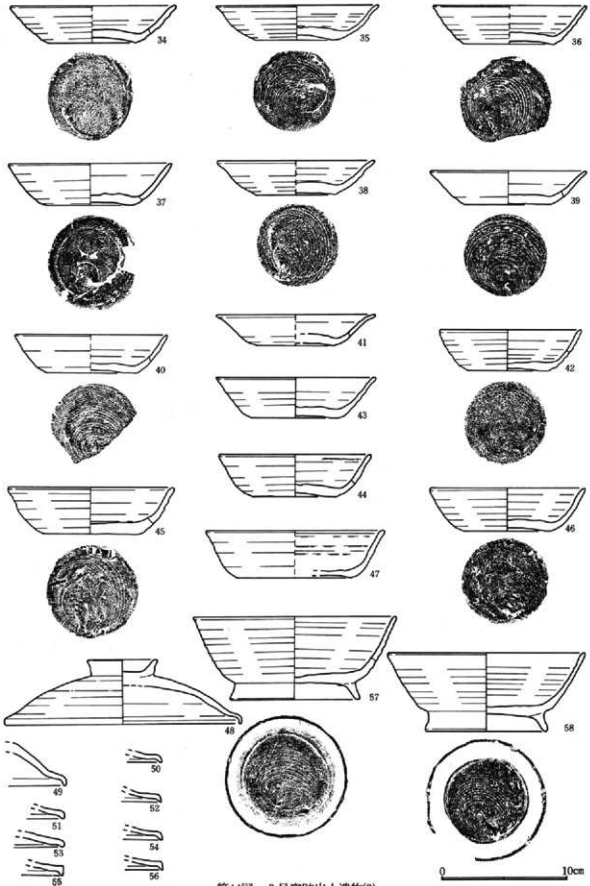
坏（1～25）は廃窯後（天井崩落）の埋土からの出土である。口径は13cm大に、底径8cm・器高は4cm大に集中する。d類が多いが、f類（20・22）とh類（21・24・25）がある。また、（1・7）はa類に、（8～10）はb類に近い。（26～47）は焼成部床面からの出土である。口径は12～13cmの間に、底径は6～7cm、



第42図　3号窯跡出土遺物(1)



第43図　3号窯跡出土遺物(2)



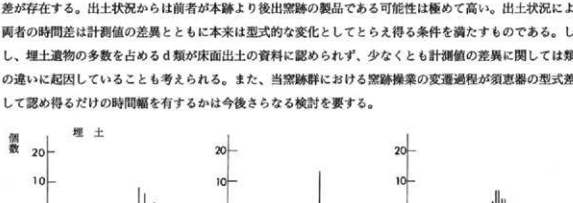
第44図　3号窯跡出土遺物(3)

器高は2～3cmにそれぞれ集中する。a類（28・29・32・33）・b類（26・27）・c類（34～41・43）・e類（30・31）・f類（40・42・44～46）・g類（47）がある。c類には体部が直線的または緩く外反するものと腰部に丸みをもち口縁部が外反する形状がある。

蓋はb類（48～50・52・54）は48のみ形状が知れ、丸みのある天井部に環状の紐が付く。bⅣ類である。c類は（51・55・56）、d類が（51・53）である。

椀は有高台のB類で口径15cm以上である。体部が浅目で直線的なBc Ⅲ類（58）は床面から、腰部が丸く張るBd Ⅲ類（57）は埋土の出土である。

坏類は埋土（崩落天井）出土の遺物が床面出土と比べ、口径・底径・器高ともに計測値が上まわり明瞭な差が存在する。出土状況からは前者が本跡より後出窯跡の製品である可能性は極めて高い。出土状況による両者の時間差は計測値の差異とともに本来は型式的な変化としてとらえ得る条件を満たすものである。しかし、埋土遺物の多数を占めるd類が床面出土の資料に認められず、少なくとも計測値の差異に関しては類型の違いに起因していることも考えられる。また、当窯跡群における窯跡操業の変遷過程が須恵器の型式差として認め得るだけの時間幅を有するかは今後さらなる検討を要する。



第45図　3号窯跡坏計測値分布図

舞台遺跡　3号窯(1)

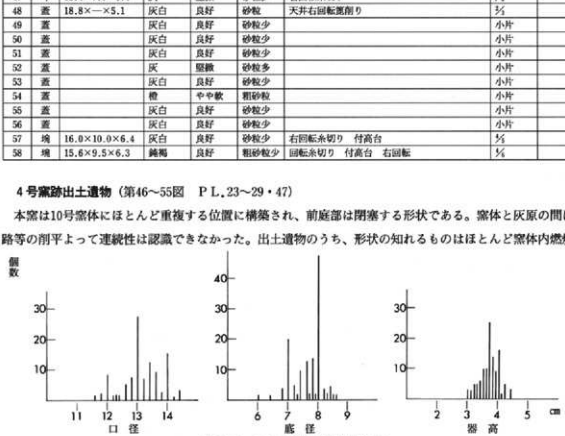
No	器種	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
1	坏	14.0×8.0×3.9	赤褐	軟	砂粒多	回転糸切り　右回転	1/4	
2	坏	13.6×8.0×4.0	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り　体部外面吸炭	1/4	重焼
3	坏	14.0×8.0×4.0	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り　内外面吸炭	1/4	重焼
4	坏	12.8×8.0×3.8	灰白	良好	小礫粗砂	右回転糸切り	1/4	
5	坏	13.0×7.2×3.6	浅黄	良好	小礫多	右回転糸切り　口縁内外吸炭	1/4	重焼
6	坏	13.4×8.0×4.0	暗灰黄	良好	砂粒少	右回転糸切り　外面吸炭	1/4	重焼
7	坏	13.2×7.5×3.7	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	1/4	
8	坏	13.2×8.0×3.9	赤褐	軟	赤褐粒多	右回転糸切り　外面吸炭	1/4	
9	坏	13.0×8.0×3.8	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	3/4	
10	坏	13.2×8.5×3.9	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り　内面吸炭	1/4	重焼
11	坏	13.2×8.0×4.0	黄褐	良好	砂粒少	右回転糸切り　体部外面吸炭	1/4	重焼
12	坏	13.1×8.0×4.3	褐	やや軟	砂粒少	右回転糸切り　内外面吸炭	1/4	重焼
13	坏	13.0×8.0×4.0	浅黄	良好	砂粒少	右回転糸切り　内外面吸炭	1/4	
14	坏	13.5×7.6×4.0	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り　外面吸炭	1/4	重焼
15	坏	13.2×7.5×4.0	淡黄	良好	砂粒少	右回転糸切り　外面吸炭	1/4	重焼
16	坏	13.0×7.6×4.0	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	1/4	
17	坏	13.0×7.5×4.0	灰白	良好	粗砂粒多	右回転糸切り	1/4	

舞台遺跡　3号窯(2)

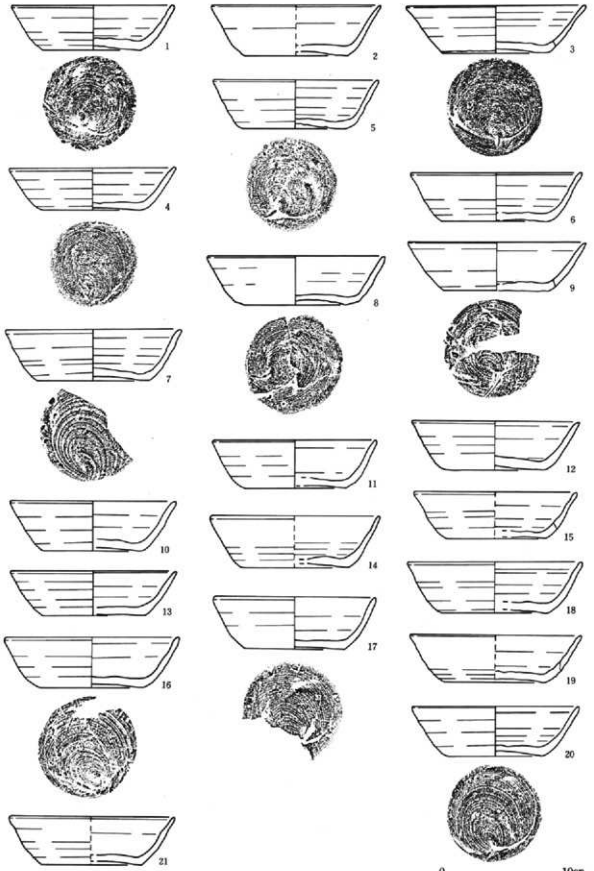
No	器種	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
18	坏	13.2×8.0×4.0	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り　外面吸炭	1/1	重焼
19	坏	13.5×7.8×4.0	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り　外面吸炭	1/1	
20	坏	14.0×8.0×3.8	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	1/4	
21	坏	12.0×6.4×3.8	灰	良好	砂粒少	右回転糸切り　内外面吸炭	1/2	重焼
22	坏	13.7×7.0×4.0	鈍黄褐	良好	砂粒少	右回転糸切り　内外面吸炭	1/1	
23	坏	13.0×7.8×4.0	灰白	良好	粗砂粒多	右回転糸切り　口縁内外面吸炭	1/1	重焼
24	坏	13.8×8.7×3.9	鈍黄褐	良好	砂粒少	回転糸切り　外面吸炭	1/1	重焼
25	坏	13.4×8.0×4.0	浅黄	良好	砂粒少	右回転糸切り　口縁内外面吸炭	1/1	重焼
26	坏	13.0×7.3×3.6	灰白	良好	砂粒雲	右回転糸切り　外面下半吸炭	1/1	重焼
27	坏	12.2×7.2×3.8	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	1/4	
28	坏	12.0×8.4×3.1	灰	良好	微白粒多	回転糸切り　右回転	1/4	
29	坏	13.0×8.0×3.5	赤褐	軟	粗砂粒多	右回転糸切り	3/4	
30	坏	13.0×7.6×3.9	灰	堅緻	砂粒少	回転糸切り　右回転	1/2	焼台？
31	坏	13.2×8.0×4.0	浅黄	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転　外面吸炭	1/2	重焼
32	坏	12.4×7.8×3.4	灰・灰白	堅緻	砂粒少	右回転糸切り	3/4	
33	坏	13.6×8.0×3.8	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	1/4	
34	坏	13.0×6.8×2.9	暗灰	堅緻	細砂粒多	右回転糸切り	1/2	焼台？
35	坏	12.4×6.5×2.7	暗灰	堅緻	粗砂粒	右回転糸切り	1/2	焼台？
36	坏	12.2×7.2×3.0	暗灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り	1/2	焼台？
37	坏	13.0×6.8×3.5	灰	堅緻	砂粒少	右回転糸切り	1/2	焼台？
38	坏	12.6×6.4×2.7	灰	堅緻	小礫	右回転糸切り	体3/4次	
39	坏	12.4×7.0×2.7	暗灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り	1/2	焼台
40	坏	12.0×7.0×3.0	灰	良好	砂粒少	右回転糸切り	1/4	
41	坏	10.8×6.0×2.4	暗灰	堅緻	細砂粒多	右回転糸切り	1/4	焼台
42	坏	11.2×6.5×3.0	暗灰	堅緻	細砂粒多	右回転糸切り	3/4	焼台
43	坏	12.8×7.0×3.2	暗灰	堅緻	砂粒多	回転糸切り　右回転	1/4	焼台？
44	坏	12.4×6.6×3.3	暗褐	良好	微白粒多	回転糸切り　右回転	1/2	
45	坏	13.0×7.2×3.6	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り　外面巻き上げ底	1/1	
46	坏	14.0×9.2×3.7	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	1/4	
47	坏	12.4×7.0×3.4	灰	堅緻	砂粒少	右回転糸切り	3/4	
48	蓋	18.8×—×5.1	灰白	良好	砂粒	天井右回転篦削り	3/4	
49	蓋		灰白	良好	砂粒少		小片	
50	蓋		灰白	良好	砂粒少		小片	
51	蓋		灰白	良好	砂粒少		小片	
52	蓋		灰	堅緻	砂粒多		小片	
53	蓋		灰白	良好	砂粒少		小片	
54	蓋		橙	やや軟	粗砂粒		小片	
55	蓋		灰白	良好	砂粒少		小片	
56	蓋		灰白	良好	砂粒少		小片	
57	埴	16.0×10.0×6.4	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り　付高台	3/4	
58	埴	15.6×9.5×6.3	褐褐	良好	粗砂粒少	回転糸切り　付高台　右回転	1/4	

4号窯跡出土遺物（第46～55図　PL.23～29・47）

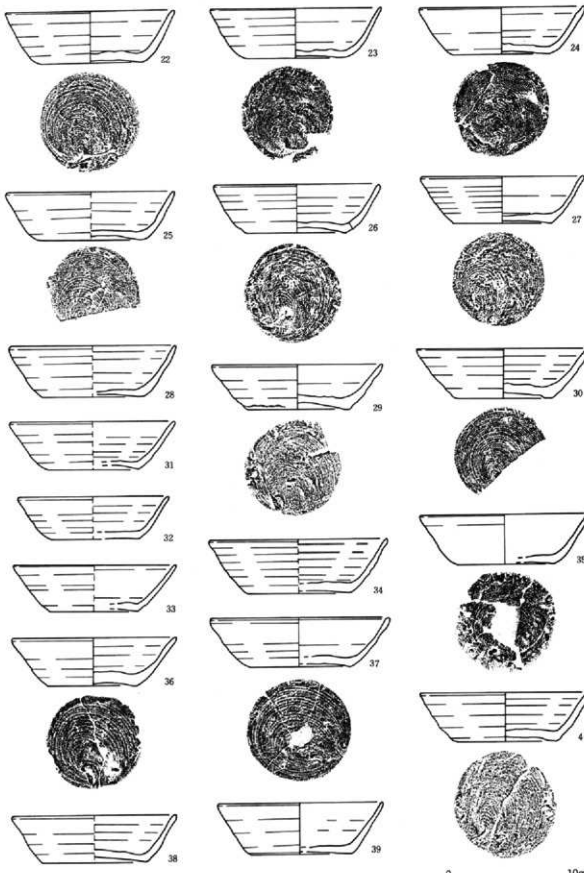
本窯は10号窯体にほとんど重複する位置に構築され、前庭部は閉塞する形状である。窯体と灰原の間は水路等の削平よって連続性は認識できなかった。出土遺物のうち、形状の知れるものはほとんど窯体内燃焼部



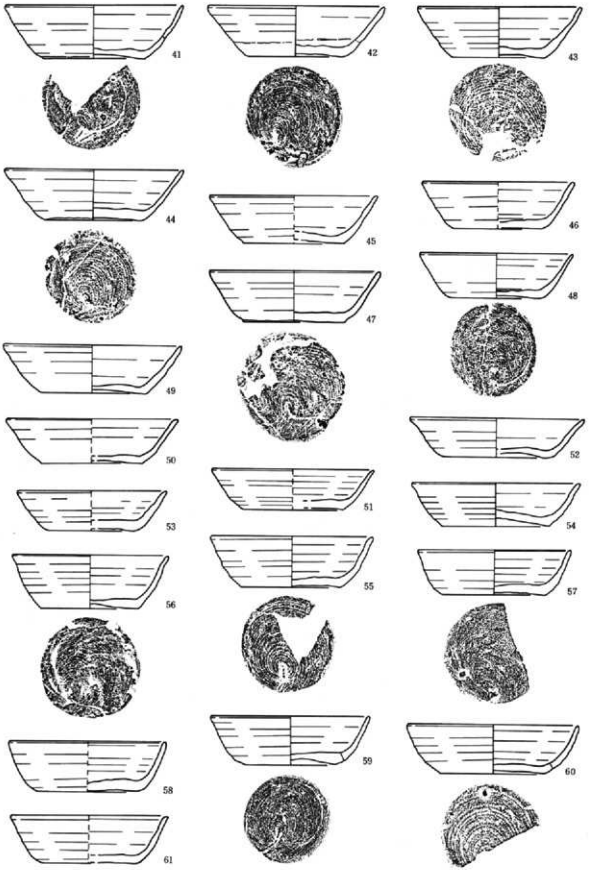
第46図　4号窯跡坏計測値分布図



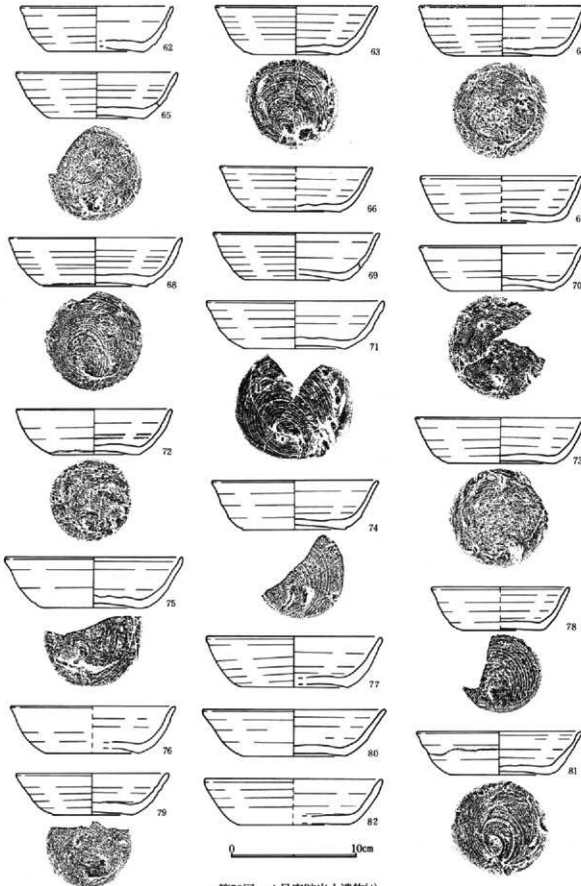
第47図　4号窯跡出土遺物(1)



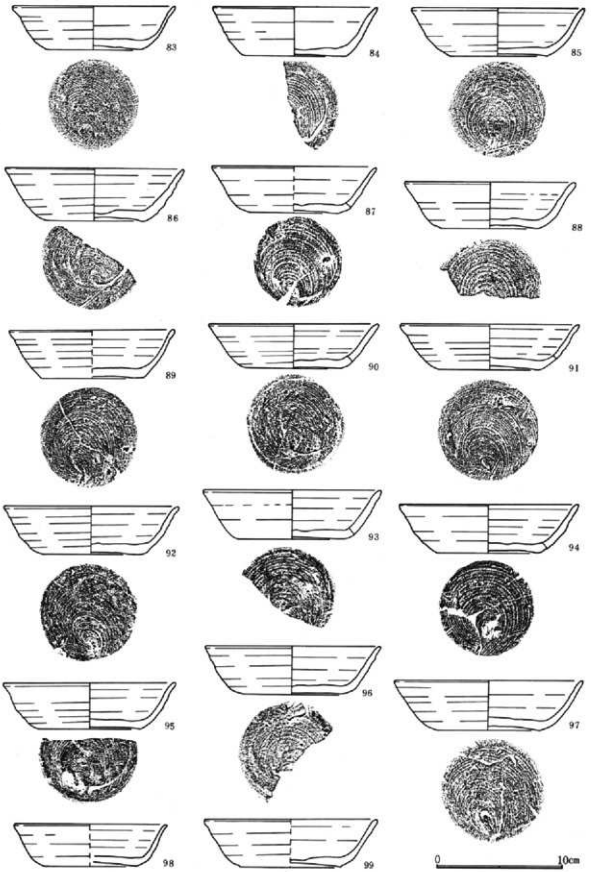
第48図　４号窯跡出土遺物(2)



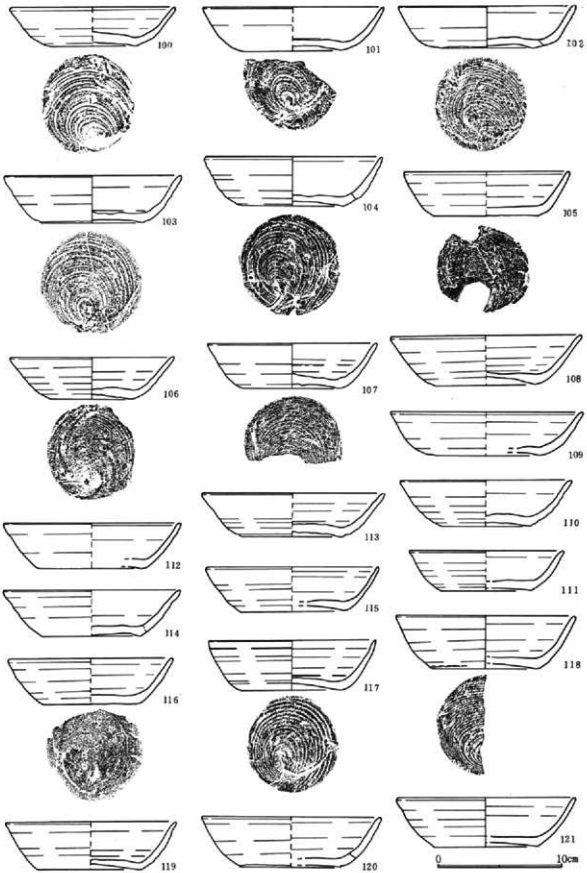
第49図　4号窯跡出土遺物(3)



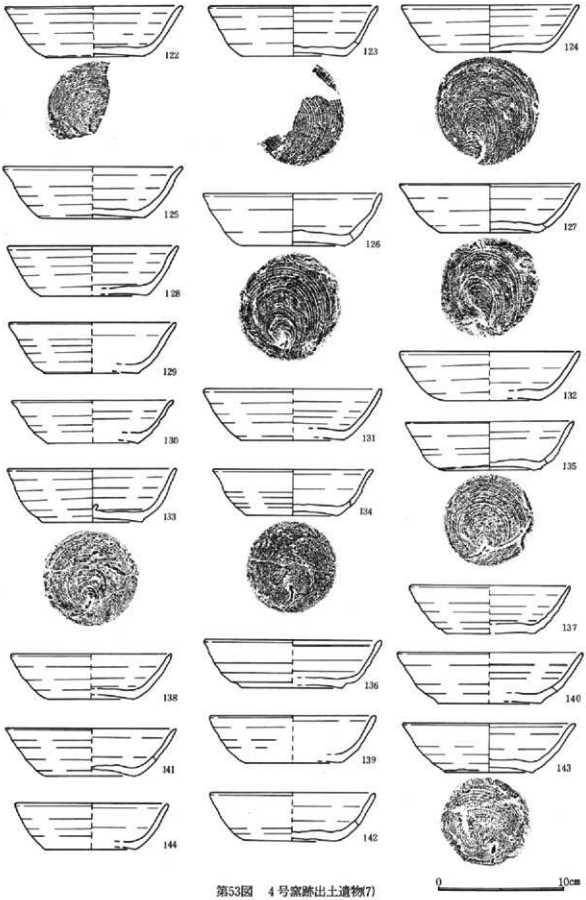
第50図　４号窯跡出土遺物(4)



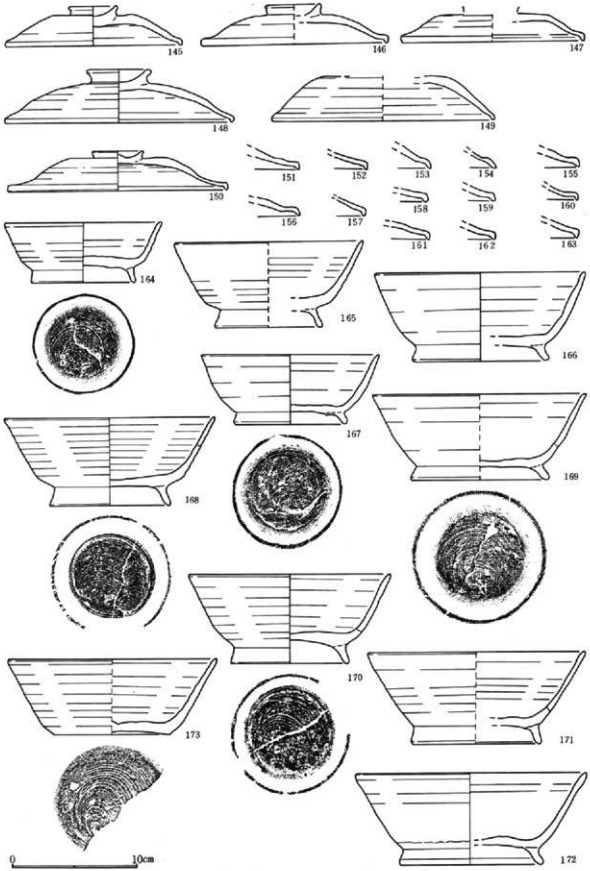
第51図　4号窯跡出土遺物(5)



第52図　4号窯跡出土遺物(6)



第53図　4号窯跡出土遺物(7)



第54図　４号窯跡出土遺物(8)

第55図　4号窯跡出土遺物(9)

あるいは床面近くに集中して残されたものである。器種には坏・蓋・椀A・椀B・甕Bのものと考えられる口縁部片がある。他に埋土中より土師器小型甕が出土するが、本窯に直接関係するかは不明である。

坏は口径13cmを頂点に12～14cmに集中する。底径は8cmが最も多く7cm以下8cm以上は少数である。器高は3～4cmの間にまとまり、3.5cm前後に頂点がある。a～h類の8類型が見られる。a類（1～28）にはかなりの多様性が認められ、(14・11・17・22・33)などはとないしはe類に分類すべきかもしれない。b類(29～49)はやや口・底径比が縮小する傾向がある。c類（50～54）は体部の立ち上がりが多様で、直線・外反・口縁部外反するものなどがある。d類（55・56）は口唇が小さく外反する。e類（57～75・77・78・117）には（78）のように口径11cm大の小型も見られるが量は少なく変則的存在と考えられる。f類(79～132)は量的に多く、g類は（76・83・92・95・98・125・130・137・141)。h類は（133～144)。

蓋はb・c・d類があり、(145）はbⅠ類、(146・147）はbⅡ類、(148）はcⅣ類、(149）はdⅢ類、(150）はcⅢ類である。

椀Aで器形の判明する資料は本跡と灰原からの各1点づつの出土である。(173）は口径17cmの大型品で形状は坏b類に類似し体部は直線的に立ち上がる。

椀Bはa～e類がある。(166）はaⅢ類、(164）はbⅠ類、(165）はbⅡ類、(168）はcⅢ類、(170）はdⅢ類、(167）はeⅡ類、(169・171）はeⅢ類、(172）はeⅣ類になろう。

(174）は丸底の甕B類口縁部と考えられる。外面には縦方向に平行叩きを施す。

(175)は土師器甕で台付きの可能性がある。口縁部厚く、くの字状に外反する。埋土上位から出土である。

舞台遺跡　4号窯(1)

№	器種	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
1	坏	13.0×8.0×3.7	灰	良好	粗砂粒多	右回転糸切り	¾	
2	坏	13.4×8.0×4.4	橫黄	やや軟	砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
3	坏	14.0×8.0×3.7	灰白	良好	細砂粒	右回転糸切り	⅔	
4	坏	13.0×7.0×3.3	灰	良好	砂粒多	右回転糸切り	⅔	
5	坏	13.0×8.0×3.8	灰	堅緻	小礫多	右回転糸切り	完	
6	坏	13.4×8.4×3.8	灰白	良好	粗砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
7	坏	13.8×8.8×4.0	明黄褐	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
8	坏	14.0×8.0×3.8	灰	堅緻	小礫多	右回転糸切り　否み大	⅔	
9	坏	13.8×8.0×3.8	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	¾	
10	坏	13.0×7.6×3.9	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転　外面吸炭	½	重焼
11	坏	13.0×8.0×3.8	鈍黄橙	軟	砂粒多	右回転糸切り	½	
12	坏	13.2×7.0×3.8	灰的	良好	砂粒少	右回転糸切り　外面吸炭	½	重焼
13	坏	13.0×8.0×3.5	浅黄橙	好	砂粒少	右回転糸切り	½	
14	坏	13.4×8.0×4.0	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
15	坏	12.7×8.0×3.6	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
16	坏	13.6×8.0×3.8	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り　外面吸炭	¼	
17	坏	13.4×8.0×4.1	灰黄	良好	小礫多	右回転糸切り	完	
18	坏	13.6×8.0×4.0	灰黄	良好	砂粒少	回転糸切り　外面吸炭	½	重焼

舞台遺跡　４号窯(2)

№	器種	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
19	坏	13.4×8.0×3.7	灰白	やや軟	砂粒少	回転糸切り　右回転　内面吸炭	¼	
20	坏	13.0×7.6×3.9	褐灰	やや軟	小礫少	右回転糸切り	¼	
21	坏	13.0×8.0×3.8	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
22	坏	13.4×8.0×4.0	灰褐	良好	粗砂粒多	右回転糸切り	¾	
23	坏	13.6×7.5×3.9	明赤褐	軟	粗砂粒多	右回転糸切り　外面吸炭	完	重焼
24	坏	13.0×7.4×3.5	灰	堅緻	細砂粒多	右回転糸切り	¾	
25	坏	13.2×8.0×3.7	灰	堅緻	粗砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
26	坏	13.0×7.8×3.8	灰	堅緻	小礫多	右回転糸切り　舌みあり	ほぼ完	
27	坏	12.8×7.4×3.7	灰	良好	粗砂粒多	右回転糸切り	ほぼ完	
28	坏	13.0×8.0×4.2	淡黄	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
29	坏	13.4×8.0×3.5	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り　外面吸炭	½	重焼
30	坏	13.4×7.4×3.9	灰	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転　½		
31	坏	13.0×7.4×3.7	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り	½	
32	坏	12.0×6.8×3.2	明黄褐	やや軟	砂粒少	右回転糸切り	½	
33	坏	13.6×7.0×3.6	鈍褐	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転　½		
34	坏	14.0×8.0×4.2	灰	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
35	坏	13.4×7.4×3.9	赤褐	軟	粗砂粒多	回転糸切り　右回転　½		
36	坏	13.4×7.0×3.7	浅黄	良好	粗砂粒少	右回転糸切り	½	
37	坏	14.0×8.2×3.8	灰白	良	砂粒少	右回転糸切り　外面吸炭	完	重焼
38	坏	13.0×8.0×3.7	灰白	良好	粗砂粒少	回転糸切り　右回転　外面吸炭	½	
39	坏	13.6×8.0×4.0	灰白	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転　½		
40	坏	13.2×8.0×3.8	灰	堅緻	粗砂粒多	右回転糸切り	¾	
41	坏	14.0×8.0×4.2	灰白	やや軟	砂粒少	右回転糸切り	¾	
42	坏	14.0×7.6×3.8	鈍黄橙	軟	砂粒少	右回転糸切り	完	
43	坏	12.8×7.4×3.9	灰黄	やや軟	砂粒多	右回転糸切り	¾	
44	坏	14.0×7.5×4.0	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	完	
45	坏	13.2×8.0×3.7	灰白	良好	粗砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
46	坏	12.0×7.0×3.7	灰	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
47	坏	13.8×8.0×4.0	灰黄	良好	砂粒少	右回転糸切り	¾	
48	坏	12.0×7.0×3.5	灰	堅緻	小礫多	右回転糸切り	½	
49	坏	14.0×8.0×3.8	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転　外面吸炭	¾	重焼
50	坏	13.6×8.0×3.5	淡黄				¾	
51	坏	12.8×8.0×3.1	灰	堅緻	砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
52	坏	13.6×8.0×3.0	灰	堅緻	粗砂粒少	右回転糸切り	½	
53	坏	12.0×7.0×3.1	灰白	堅緻	粗砂粒多	右回転糸切り　外面吸炭	¼	重焼
54	坏	13.2×8.4×3.4	灰	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	½	
55	坏	13.2×7.5×4.0	灰	堅緻	粗砂粒多	右回転糸切り	ほぼ完	
56	坏	12.2×7.8×4.2	灰褐	良好	小礫多	右回転糸切り	ほぼ完	
57	坏	12.0×8.0×3.5	灰	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
58	坏	12.4×8.0×3.9	灰	堅緻	砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
59	坏	12.6×7.0×3.8	灰	良好少	砂粒少	右回転糸切り　舌み大	½	
60	坏	13.6×8.0×3.9	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
61	坏	12.3×7.6×3.7	灰	堅緻	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
62	坏	12.0×7.6×3.5	灰	堅緻	粗砂粒多	右回転糸切り	½	
63	坏	12.0×7.6×3.5	灰	堅緻	粗砂粒多	右回転糸切り	½	
63	坏	13.0×6.8×3.8	灰	良好	砂粒多	右回転糸切り　見込擦当て板	¾	
64	坏	13.0×7.8×3.9	灰	堅緻	小礫多	右回転糸切り　舌み大	ほぼ完	
65	坏	12.8×7.6×3.6	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り	½	
66	坏	12.0×7.0×3.5	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
67	坏	12.8×8.0×3.7	灰黄	軟	粗砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
68	坏	13.6×8.0×3.8	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
69	坏	13.0×8.0×3.7	灰	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
70	坏	13.0×8.0×3.5	灰	堅緻			¾	
71	坏	14.0×8.0×3.8	黄黄	良好	砂粒少	右回転糸切り　外面吸炭	完	重焼
72	坏	12.4×6.8×3.5	灰	堅緻	粗砂粒多	右回転糸切り　舌み大	¾	
73	坏	13.4×8.0×3.6	灰	良好	砂粒多	右回転糸切り	¾	
74	坏	13.0×8.0×3.7	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り	½	
75	坏	14.0×8.0×4.0	淡黄	軟	砂粒少	右回転糸切り	½	
76	坏	13.2×7.5×3.6	灰	良好	砂粒少	右回転		
77	坏	14.0×8.0×4.0	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	

舞台遺跡　4号窯(3)

№	器種	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
78	坏	10.8×6.0×3.5	灰	堅緻	粗砂粒多	右回転糸切り	3/4	
79	坏	12.0×6.4×3.2	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り	1/2	重焼
80	坏	14.4×8.0×3.7	鈍黄橙	やや軟	砂粒少	回転糸切り　右回転　外面吸炭	1/2	重焼
81	坏	13.0×7.6×3.4	鈍黄橙	やや軟	粗砂粒少	右回転糸切り	1/2	
82	坏	14.0×8.4×3.6	鈍黄	良好	砂粒少	右回転糸切り　外面吸炭	1/4	重焼
83	坏	12.4×7.4×3.4	灰	良好	粗砂粒少	右回転糸切り	1/2	
84	坏	13.4×8.0×3.8	灰白	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	1/2	
85	坏	13.6×7.5×3.7	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り	1/2	
86	坏	14.0×8.0×4.1	鈍黄橙	やや軟	砂粒少	右回転糸切り	1/2	
87	坏	13.0×7.0×3.6	灰	良好	粗砂粒多	右回転糸切り	3/4	
88	坏	13.4×8.0×3.6	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	1/2	
89	坏	12.8×8.0×3.7	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	1/2	
90	坏	13.4×7.6×3.4	鈍黄橙	良好	砂粒多	右回転糸切り	1/2	
91	坏	14.0×8.0×3.5	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り　外面吸炭	3/4	重焼
92	坏	13.6×7.8×3.7	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り	3/4	
93	坏	14.0×8.0×3.8	淡黄	良好	砂粒多少	回転糸切り　右回転	3/4	
94	坏	14.0×8.0×3.8	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り　内面吸炭	3/4	重焼
95	坏	13.4×8.0×3.6	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	1/2	
96	坏	13.8×8.0×3.7	鈍橙	やや軟	小礫少	回転糸切り　右回転	1/2	
97	坏	14.1×8.0×3.9	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り　外面吸炭	1/2	
98	坏	12.0×7.0×3.2	灰	堅緻	粗砂粒多	右回転糸切り　外面吸炭	1/2	重焼
99	坏	13.6×8.0×3.7	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	1/4	
100	坏	13.0×7.0×3.2	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	1/2	
101	坏	14.2×7.6×3.4	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り　外面吸炭	1/2	重焼
102	坏	13.6×7.4×3.3	灰黄	良好	砂粒少	右回転糸切り　見込火襷　外面吸炭	1/2	重焼
103	坏	14.0×8.0×3.7	淡黄	やや軟	砂粒少	右回転糸切り　外面吸炭	3/4	重焼
104	坏	14.0×8.0×3.8	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り　外面吸炭	一部欠	重焼
105	坏	13.0×8.0×3.5	褐	やや軟	粗砂粒多	回転糸切り　右回転	1/2	
106	坏	13.0×6.8×3.5	鈍黄橙	良好	粗砂粒多	右回転糸切り	3/4	
107	坏	13.6×8.0×3.5	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	1/2	
108	坏	15.0×8.0×3.8	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	1/2	
109	坏	15.0×8.0×3.4	淡黄	軟	砂粒少	右回転糸切り　外面吸炭	1/2	
110	坏	13.4×7.0×3.6	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	1/4	
111	坏	12.0×7.0×3.1	灰	堅緻	粗砂粒多	回転糸切り　右回転	1/2	
112	坏	14.0×8.0×3.5	浅黄	やや軟	砂粒少	右回転	1/4	
113	坏	14.4×8.0×3.4	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	1/4	
114	坏	14.0×7.8×3.6	浅黄	やや軟	砂粒少	右回転糸切り	1/4	
115	坏	13.6×8.0×3.5	灰白	良好	粗砂粒多	右回転糸切り	1/2	
116	坏	13.0×7.4×3.6	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	1/2	
117	坏	13.2×8.0×4.0	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	1/2	
118	坏	14.0×8.0×4.2	灰	良好	粗砂粒少	右回転糸切り　右回転	1/2	
119	坏	13.6×8.0×3.5	灰白	砂粒少	砂粒少	右回転糸切り　内外面吸炭	1/2	重焼
120	坏	14.0×8.0×3.9	浅黄	やや軟	粗砂粒多	右回転糸切り	1/2	
121	坏	14.1×8.4×3.6	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り　外面吸炭	1/2	重焼
122	坏	14.0×7.8×4.0	灰黄	やや軟	砂粒少	回転糸切り　右回転	1/2	
123	坏	13.4×8.0×3.9	灰	良好	砂粒多	右回転糸切り	1/2	
124	坏	13.7×8.2×3.6	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り　内外面吸炭	3/4	重焼
125	坏	14.5×8.0×4.0	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転　外面吸炭	1/2	重焼
126	坏	14.0×8.0×4.0	鈍橙	良好	砂粒少	右回転糸切り　外面吸炭	1/2	重焼
127	坏	14.0×7.6×3.8	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	1/2	
128	坏(蓋)	13.0×8.6×4.4	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転　高台貼り未完	1/2	
129	坏	13.0×7.4×4.0	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転　外面吸炭	1/2	
130	坏	12.6×7.0×3.3	灰	堅緻	粗砂粒多	回転糸切り　右回転	1/4	
131	坏	14.0×8.0×4.0	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り　外面吸炭	1/2	重焼
132	坏	14.0×7.7×3.7	浅黄橙	軟	砂粒少	回転糸切り　右回転	1/2	
133	坏	13.2×7.5×4.2	灰	堅緻	粗砂粒多	右回転糸切り	完	
134	坏	12.8×7.2×3.6	灰	良好	粗砂粒少	右回転糸切り	1/2	
135	坏	13.0×7.0×3.8	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	1/2	
136	坏	14.0×8.0×3.7	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り　外面吸炭	1/2	
137	坏	12.6×7.0×3.7	灰	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	1/4	

舞台遺跡　４号窯(4)

No.	器種	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
138	坏	13.0×7.0×3.5	鈍黄橙	やや軟	砂粒少	右回転糸切り	¼	
139	坏	13.0×7.2×3.7	鈍黄橙	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転　外面吸炭	½	重焼
140	坏	14.4×8.0×4.0	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
141	坏	13.4×7.0×3.7	灰白	良好	粗砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
142	坏	13.0×7.6×3.7	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転　外面吸炭	¼	重焼
143	坏	13.8×7.0×3.8	黄	良好	粗砂粒少	右回転糸切り	½	
144	坏	12.0×7.0×3.6	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	¼	
145	蓋	14.0×3.8×3.1	灰	堅緻	粗砂粒多	天井右回転篦削り　環状摘み	⅓	
146	蓋	14.8×4.0×3.0	灰	堅緻	粗砂粒多	天井右回転篦削り　環状摘み	½	
147	蓋	14.0×一×一	灰	良好	砂粒少	天井右回転篦削り		
148	蓋	17.6×4.8×4.2	灰白	良好	砂粒多	天井右回転篦削り　環状摘み	ほぼ完	重焼
149	蓋	17.4×一×3.5	灰白	良好	砂粒少	天井右回転篦削り		
150	蓋	17.6×4.2×3.1	灰白	堅緻	砂粒多	天井右回転篦削り　環状摘み	⅓	
151	蓋		灰白	良好	砂粒少		小片	
152	蓋		鈍黄橙	やや軟	砂粒少		小片	
153	蓋		灰黄	やや軟	砂粒多		小片	
154	蓋		灰白	良好	砂粒少		小片	
155	蓋		明赤褐	やや軟	砂粒少		小片	
156	蓋		灰白	良好	砂粒少		小片	
157	蓋		灰白	良好	砂粒多		小片	
158	蓋		灰白	良好	砂粒少		小片	
159	蓋		灰	良好	砂粒少		小片	
160	蓋		灰白	良好	砂粒少		小片	
161	蓋		灰白	良好	砂粒少		小片	
162	蓋		灰白	良好	砂粒少		小片	
163	蓋		灰白	良好	砂粒多		小片	
164	瓶	12.4×8.0×4.7	灰	堅緻	砂粒少	回転糸切り　付高台　右回転	⅓	
165	瓶	14.8×8.4×6.7	灰	堅緻	砂粒少	付高台右回転	¼	
166	瓶	16.4×10.6×6.9	灰	堅緻	微白粒多	回転糸切り　付高台　右回転	½	
167	瓶	14.0×9.0×5.5	灰	堅緻	粗砂粒多	回転糸切り　付高台　右回転	⅓	
168	瓶	16.8×9.6×7.0	灰	堅緻	砂粒少	回転糸切り　付高台　右回転	⅓	
169	瓶	17.0×10.8×6.7	灰	浅黄	砂粒少	回転糸切り　付高台　右回転	½	
170	瓶	16.1×9.6×7.0	オリーブ灰	良好	砂粒少	回転糸切り　付高台　右回転	½	
171	瓶	17.0×10.0×7.1	明褐灰	軟	砂粒少	回転糸切り　付高台　右回転	½	
172	瓶	18.0×11.0×7.2	鈍橙	軟	砂粒少	回転糸切り　付高台　右回転	½	
173	深瓶	16.4×9.0×5.9	鈍黄橙	軟	粗砂粒	回転糸切り　右回転　見込紐作り痕	½	
174	甕		灰白	堅緻	砂粒少	頸部外面平行沖き目	口縁	
175	大型甕	10.0×一×(7.8)				最大径側11.3cm　横位篦削り　球胴	上半½	

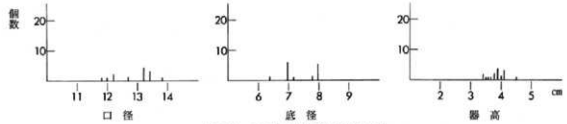
10号窯出土遺物（第56・57図　ＰＬ.44・45・50）

本窯は後出の４号窯とほぼ重なり、その構築に際し窯体の大半が削りとられている。また前庭部は谷地の左岸中段に開削された水路によって消滅したと考えられる。窯体は僅か燃焼部を中心とした部分が残存する。出土遺物はここからのもので量的には少ないがいづれも床面からの出土である。

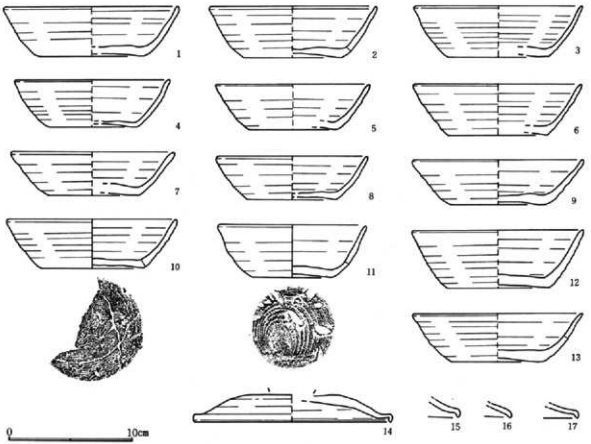
出土遺物は少なく坏を中心に少数の蓋がある。

坏は口径12cm大と13cm大である。底径は７cmと８cmで、器高は４cm前後に集中する。類型は少なくｂ類（５・７・９）と（13）のｈ類のほかはｄ類になろう。

蓋はａⅢ類（14）とｄ類がある。



第56図　10号窯跡坏計測値分布図



第57図　10号窯跡出土遺物

舞台遺跡　10号窯

№	器種	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
1	坏	14.0×9.0×4.0	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転　内面吸炭	½	重焼
2	坏	13.4×7.8×4.0	灰白			右回転糸切り	⅓	
3	坏	13.0×7.0×4.0	明灰褐	やや軟	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
4	坏	12.0×7.0×3.7	灰	堅緻	密	右回転糸切り	¼	
5	坏	12.2×7.0×3.6	鈍褐	やや軟	砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
6	坏	13.4×8.0×4.0	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
7	坏	12.7×7.0×3.4	灰	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
8	坏	12.0×7.0×3.5	灰	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
9	坏	13.4×7.0×3.7	灰白	良好	良好	回転糸切り　右回転	¼	
10	坏	13.4×8.0×3.7	灰	堅緻	砂粒多	回転糸切り　右回転	⅔	
11	坏	12.0×6.4×4.0	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り	略完形	
12	鉢(大型)	13.2×8.0×4.5	灰白	良好	粗砂粒多	右回転糸切り	½	
13	坏	13.2×7.0×3.5	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り	½	
14	蓋	15.6×－×－	灰	良好	砂粒多	天井右回転篦削り	⅔	
15	蓋		灰白				破片	
16	蓋		灰				破片	

５号窯出土遺物（第58～63図　ＰＬ.29～32・47・48）

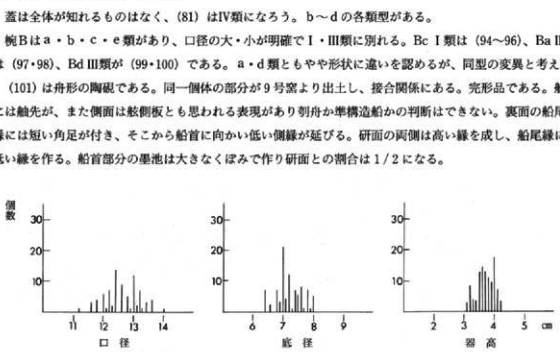
遺物は窯体内全体に散在して出土する。少なくも２度の操業が確認されるが、ほとんどの遺物は最終面のものである。遺物には坏が主体を占め他に蓋・椀からなる。特殊な器種に舟形の硯があり９号窯出土の部分と接合関係にある。

坏は口径11cm大の後半から13cm大の後半に集中し、頂点は12.5cmと13cmにある。底径は７cmを頂点に６～８cmに分布し、器高は４cmを頂点に３cm大へ分布が傾く。ａ～ｄ類が目立ち、ｅ～ｈ類は少量である。ａ類は（１～12）でやや腰部に丸みのあるものが多い。ｂ類は（13～31）で12～13cmの小口径化がみられる。ｃ類は（32～41）で（32・33）のようにｂ類との判別が難しいものもある。ｄ類は（42～63）で口縁部が緩く外反する例、腰部に丸みをもつ例など多様さがある。ｅ類は（64～67）、ｆ類は（68～73）、ｇ類（74～79）、ｈ類（80）はｇ類との区別が難しい。

蓋は全体が知れるものはなく、（81）はⅣ類になろう。ｂ～ｄの各類型がある。

椀Ｂはａ・ｂ・ｃ・ｅ類があり、口径の大・小が明確でⅠ・Ⅲ類に別れる。Bc Ⅰ類は（94～96）、Ba Ⅲ類は（97・98）、Bd Ⅲ類が（99・100）である。ａ・ｄ類ともやや形状に違いを認めるが、同型の変異と考える。

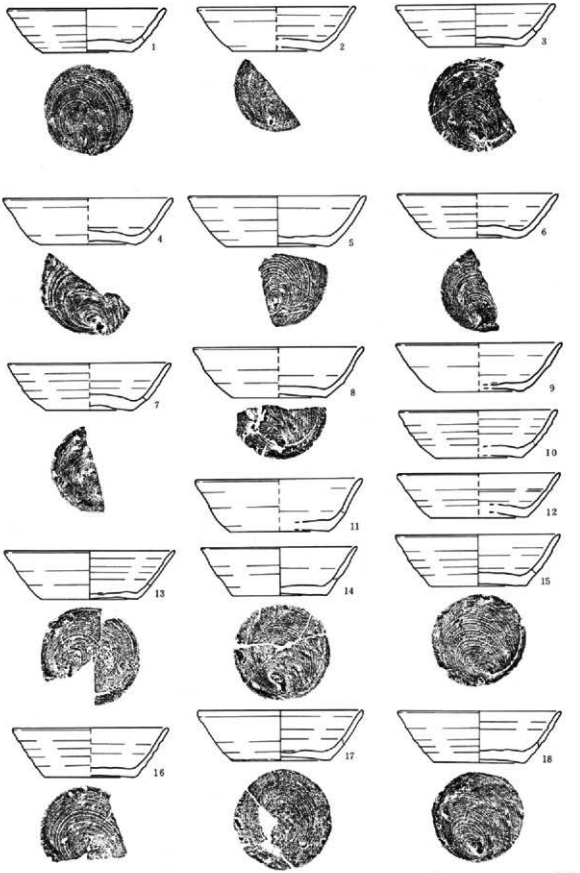
（101）は舟形の陶硯である。同一個体の部分が９号窯より出土し、接合関係にある。完形品である。船首には触先が、また側面は舷側板とも思われる表現があり刳舟か準構造船かの判断はできない。裏面の船尾両縁には短い角足が付き、そこから船首に向かい低い側縁が延びる。研面の両側は高い縁を成し、船尾縁にも低い縁を作る。船首部分の墨池は大きなくぼみで作り研面との割合は１/２になる。



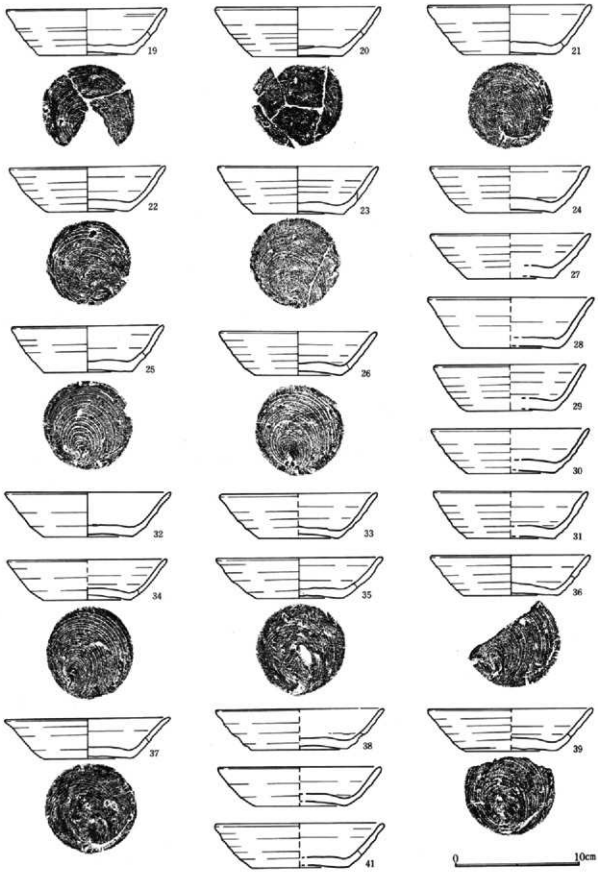
第58図　５号窯跡坏計測値分布図

舞台遺跡　５号窯(1)

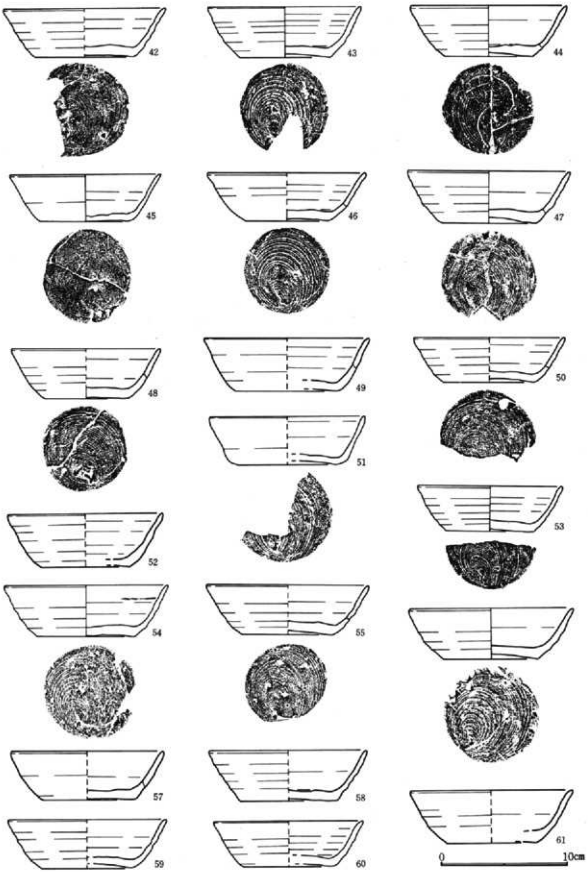
№	器種	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
1	坏	12.6×7.0×3.3	灰	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
2	坏	12.6×7.0×3.3	灰	堅緻	砂粒少	右回転糸切り	½	
3	坏	12.4×7.4×3.2	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
4	坏	13.5×7.7×4.0	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り　外面吸炭	½	重焼
5	坏	14.0×8.0×4.0	鈍黄橙	良好	砂粒少	右回転糸切り　外面吸炭	½	重焼
6	坏	12.6×6.6×3.5	灰	堅緻	砂粒少	右回転糸切り	½	
7	坏	13.0×7.0×3.7	灰	堅緻	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
8	坏	13.6×7.8×4.0	灰白	良好	粗砂粒少	右回転糸切り	½	
9	坏	13.0×7.2×4.0	鈍黄橙	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転　外面吸炭	½	
10	坏	12.4×6.8×3.7	灰黄	やや軟	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
11	坏	13.2×7.8×4.0	鈍赤褐	軟	粗砂粒多	回転糸切り　右回転	¼	
12	坏	13.0×7.6×3.5	灰白	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
13	坏	13.6×7.6×3.8	灰	堅緻	粗砂粒多	回転糸切り　右回転	¾	
14	坏	12.6×7.4×4.0	鈍橙	軟	砂粒少	右回転糸切り　外面吸炭	略完	重焼
15	坏	13.0×7.4×4.0	灰白	やや軟	砂粒少	右回転糸切り　外面吸炭	略完	重焼
16	坏	12.4×7.4×3.7	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	



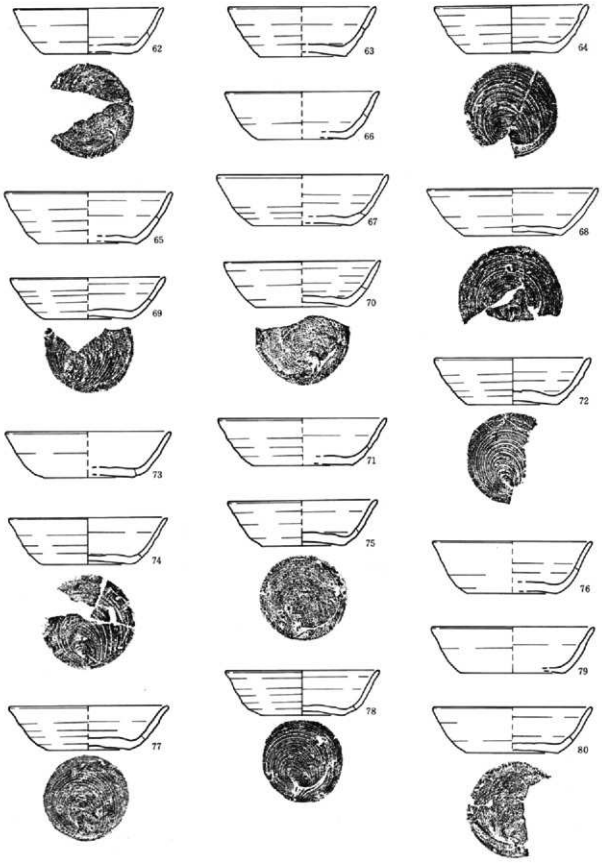
第59図　5号窯跡出土遺物(1)



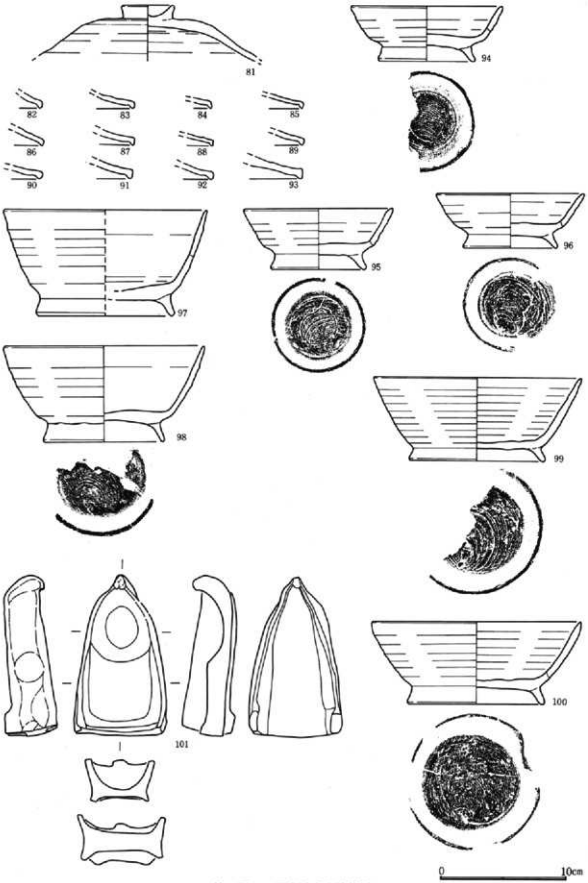
第60図　5号窯跡出土遺物(2)



第61図　5号窯跡出土遺物(3)



第62図　５号窯跡出土遺物(4)



第63図　5号窯跡出土遺物(5)

舞台遺跡　５号窯(2)

No	器種	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
17	坏	13.0×8.0×4.0	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
18	坏	13.0×7.0×4.0	鈍橙	軟	砂粒少	右回転糸切り　外面吸炭	略完	重焼
19	坏	12.6×7.4×3.5	明褐灰	やや軟	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
20	坏	13.0×7.0×3.9	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り　内外面吸炭	½	重焼
21	坏	13.0×7.0×3.8	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	¾	
22	坏	12.3×6.6×3.5	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り	½	
23	坏	12.8×7.2×4.0	鈍黄橙	やや軟	砂粒少	右回転糸切り　内外面吸炭	¾	重焼
24	坏	12.6×7.0×3.5	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
25	坏	12.0×7.0×3.7	灰	堅緻	砂粒少	右回転糸切り	½	
26	坏	12.8×7.0×3.5	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
27	坏	12.6×7.0×3.5	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
28	坏	13.2×7.6×4.0	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
29	坏	11.6×7.0×3.5	灰	堅緻	砂粒少	右回転糸切り	½	
30	坏	12.6×7.0×3.5	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
31	坏	12.3×7.0×3.5	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
32	坏	13.0×7.2×3.9	灰	堅緻	砂粒少	右回転糸切り	⅓	
33	坏	12.6×6.4×3.5	灰	良好	砂粒少	右回転糸切り	¼	
34	坏	12.7×7.0×3.2	灰	堅緻	砂粒少	右回転糸切り	½	
35	坏	13.2×7.0×3.2	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
36	坏	12.4×7.4×3.3	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
37	坏	13.1×7.0×3.4	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り	½	
38	坏	13.2×7.6×3.3	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
39	坏	13.0×7.0×3.4	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
40	坏	13.0×7.0×3.0	灰	良好	砂粒少	右回転糸切り	¼	
41	坏	13.2×7.4×3.3	鈍黄橙	やや軟	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
42	坏	13.0×7.8×4.6	灰	堅緻	粗砂粒	右回転糸切り	½	
43	坏	12.4×7.0×4.0	灰	堅緻	粗砂粒多	右回転糸切り	⅔	
44	坏	12.6×7.0×4.0	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り　外面吸炭	⅔	重焼
45	坏	12.0×7.0×3.8	灰褐	やや軟	粗砂粒多	右回転糸切り	⅔	
46	坏	12.7×6.6×3.7	灰	堅緻	砂粒少	右回転糸切り	½	
47	坏	13.0×7.6×4.0	鈍黄橙	軟	砂粒少	右回転糸切り	½	
48	坏	11.8×6.6×3.7	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
49	坏	13.2×8.0×4.0	鈍黄橙	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転　外面吸炭	½	重焼
50	坏	13.0×7.0×3.5	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
51	坏	13.3×8.0×3.0	灰	堅緻	砂粒少	右回転糸切り	½	
52	坏	12.2×7.0×4.0	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
53	坏	11.4×7.0×3.5	灰	堅緻	砂粒少	右回転糸切り	½	
54	坏	13.1×7.8×4.0	鈍黄橙	軟	粗砂粒少	右回転糸切り　外面吸炭	⅔	重焼
55	坏	13.0×7.4×3.7	灰	堅緻	砂粒少	右回転糸切り　外面吸炭	½	
56	坏	13.0×7.4×4.0	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り　外面吸炭	⅔	重焼
57	坏	12.2×7.2×3.9	鈍赤褐	軟	粗砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
58	坏	12.6×7.8×4.0	灰白	良好	粗砂粒多	回転糸切り　右回転	¼	
59	坏	12.6×7.0×3.8	灰	堅緻	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
60	坏	12.0×7.0×3.5	灰	堅緻	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
61	坏	12.9×7.0×4.0	灰	良好	粗砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
62	坏	12.0×7.0×3.5	灰	堅緻	粗砂粒多	右回転糸切り	⅔	
63	坏	12.0×7.0×3.8	灰	堅緻	粗砂粒少	右回転糸切り	¼	
64	坏	12.4×7.4×3.7	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り　内面吸炭	½	重焼
65	坏	13.6×8.0×4.0	鈍黄橙	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
66	坏	12.3×7.0×3.7	鈍赤褐	軟	粗砂粒多	回転糸切り　右回転	¼	
67	坏	13.6×8.0×4.0	鈍黄橙	やや軟	砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
68	坏	13.6×7.7×3.7	鈍黄橙	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転　外面吸炭	½	重焼
69	坏	12.4×7.0×3.2	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	¼	
70	坏	12.4×7.8×3.6	灰	堅緻	粗砂粒多	右回転糸切り	½	
71	坏	13.0×8.0×3.7	明褐灰	やや軟	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
72	坏	12.6×7.0×3.7	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
73	坏	13.2×7.2×3.6	灰	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
74	坏	12.8×7.4×3.5	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り　内面吸炭	½	重焼
75	坏	12.0×6.6×3.4	灰	堅緻	粗砂粒少	右回転糸切り	½	
76	坏	12.7×7.0×4.0	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転　外面吸炭	½	重焼

舞台遺跡　5号窯(3)

№	器種	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
77	坏	12.8×6.4×3.3	灰	堅緻	粗砂粒多	右回転糸切り	½	
78	坏	12.3×6.6×3.5	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り	½	
79	坏	13.0×7.8×3.6	灰白	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	¼	
80	坏	12.6×7.4×3.8	鉢褐	良好	粗砂粒多	右回転糸切り	½	
81	蓋	つまみ径4.2	灰白	良好	粗砂粒少	天井右回転篦削り　環状摘	端部欠	
94	埴	11.8×7.4×4.3	灰	堅緻	砂粒少	回転糸切り　付高台　右回転	½	底部爪痕
95	埴	11.8×7.7×4.8	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　付高台　右回転	⅔	底部爪痕
96	埴	11.6×7.4×4.3	灰	堅緻	粗砂粒多	回転糸切り　付高台　右回転	⅔	底部爪痕
97	埴	16.2×11.0×8.4	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　付高台　右回転	½	重焼
98	埴	16.0×9.8×7.6	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　付高台　右回転	¾	重焼
99	埴	16.4×10.8×6.1	灰白	良好	粗砂粒多	回転糸切り　付高台　右回転	½	
100	埴	16.2×11.0×6.5	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　付高台　右回転	¾	底部爪痕

6号窯出土遺物（第64～70図　PL.32～36・48・49）

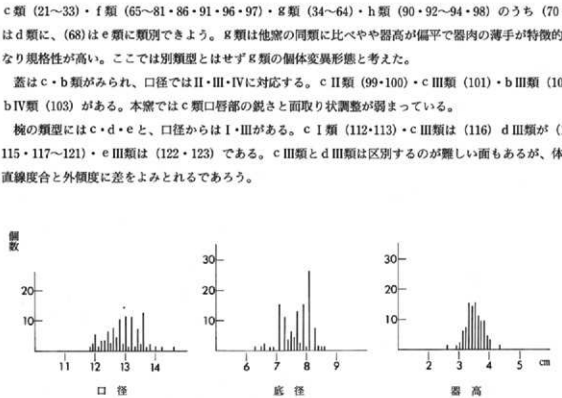
7号・11号窯と重複する。6号窯跡は11号窯体の窯尻から焼成部の範囲を削平して構築され、窯体長軸の方向を一にする。7号窯体は6号窯の前庭部の南縁を南へおよそ60°振れて掘り込まれる。構築は11号窯・6号窯・7号窯の順である。3窯跡の遺物取り上げは一部混入が生じたが総じて帰属認定が容易であった。

遺物出土状況は燃焼部に集中し、焼成部には散在的な状態で焼台と考えられる資料が目立つ。前庭部には細片化した遺物が多く、窯体内より掻き出されたと思われる廃土中に混在している。出土遺物には坏・蓋・椀があり坏類が圧倒的多数を占める。

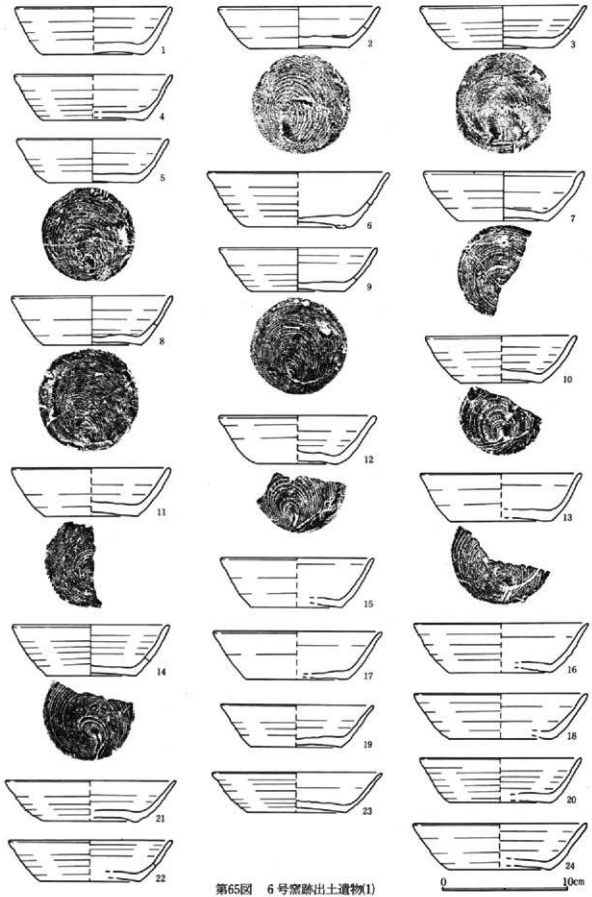
坏は口径12cm大の後半から量を増し13cm大の後半に頂点がある。底径は7～8cmの間で8cmが頂点に、器高は3～4cmの間が頂点となる。a～c・f～h類がある。a類（1～6・87・95）・b類（7～20・70）・c類（21～33）・f類（65～81・86・91・96・97）・g類（34～64）・h類（90・92～94・98）のうち（70・88）はd類に、(68)はe類に類別できよう。g類は他窯の同類に比べやや器高が偏平で器肉の薄手が特徴的でかなり規格性が高い。ここでは別類型とはせずg類の個体変異形態と考えた。

蓋はc・b類がみられ、口径ではII・III・IVに対応する。cII類（99・100）・cIII類（101）・bIII類（102）・bIV類（103）がある。本窯ではc類口唇部の鋭さと面取り状調整が弱まっている。

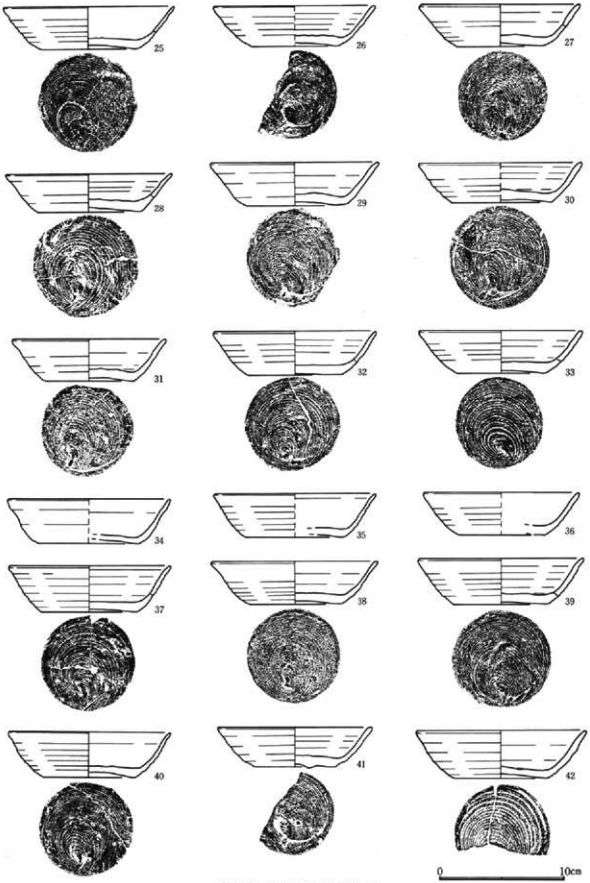
椀の類型にはc・d・eと、口径からはI・IIIがある。cI類（112・113）・cIII類は（116）dIII類が（114・115・117～121）・eIII類は（122・123）である。cIII類とdIII類は区別するのが難しい面もあるが、体部の直線度合と外傾度に差をよみとれるであろう。



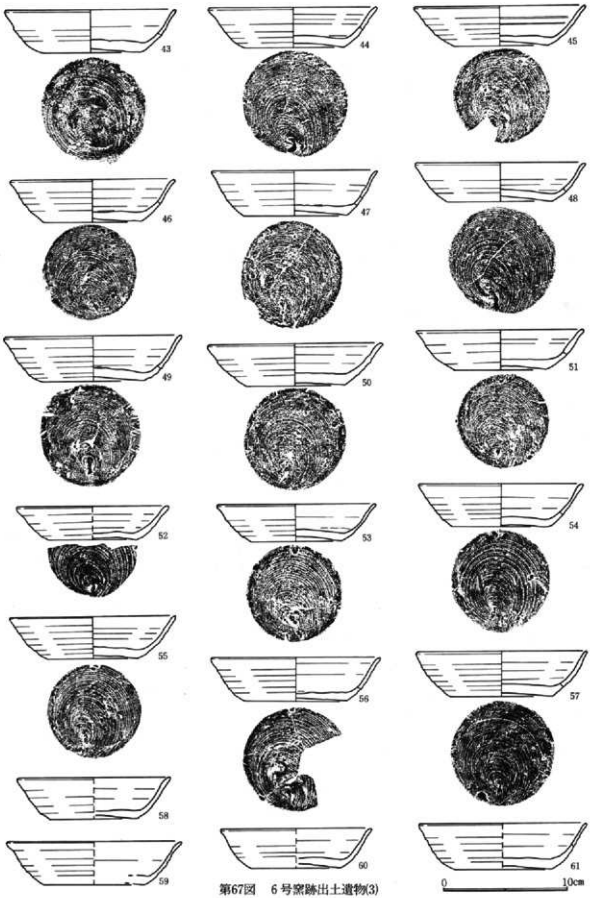
第64図　6号窯跡坏計測値分布図



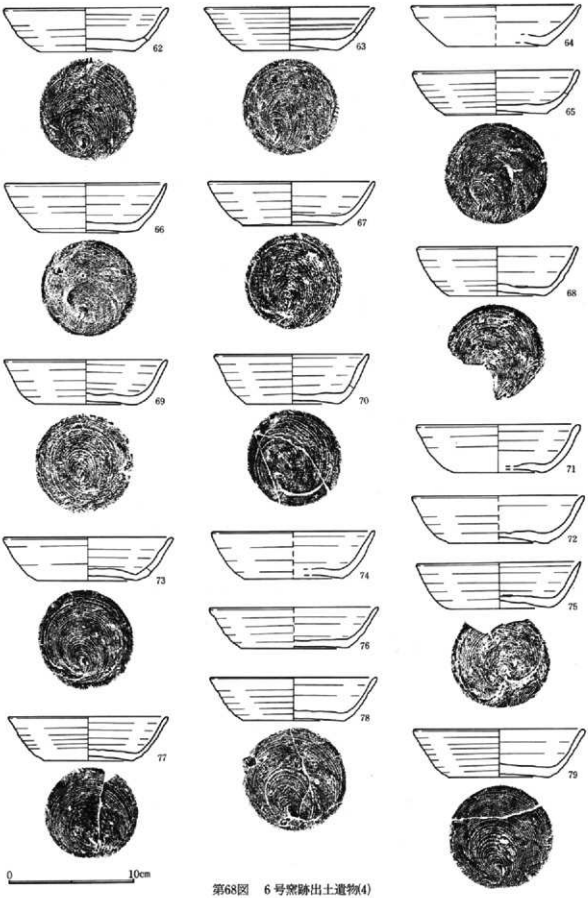
第65図　６号窯跡出土遺物(1)



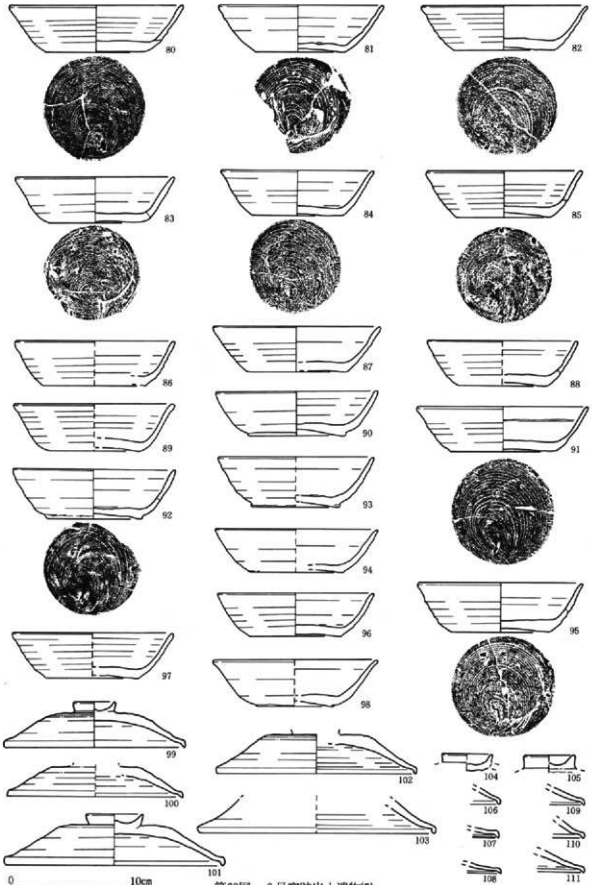
第66図　6号窯跡出土遺物(2)



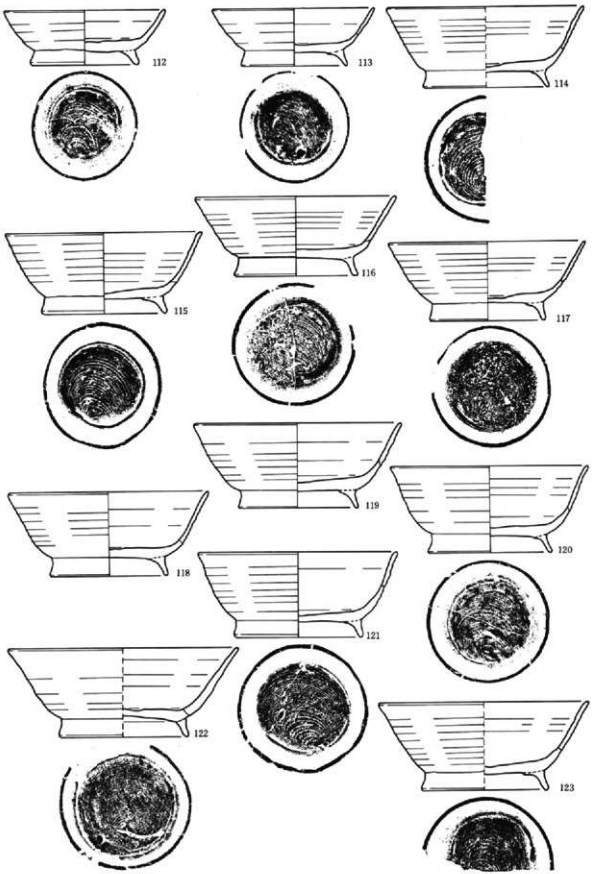
第67図　6号窯跡出土遺物(3)



第68図　6号窯跡出土遺物(4)



第69図　６号窯跡出土遺物(5)



第70図　6号窯跡出土遺物(6)

舞台遺跡　６号窯(1)

№	器種	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
1	坏	12.5×8.6×3.6	灰	堅緻	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
2	坏	13.0×8.0×3.2	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	略完形	
3	坏	13.0×8.0×3.3	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	⅓	
4	坏	12.6×8.0×3.3	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
5	坏	12.4×7.4×3.6	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り	⅓	
6	坏	14.6×8.0×4.3	灰白	やや軟	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
7	坏	12.6×7.4×3.9	灰	堅緻	砂粒少		½	
8	坏	13.0×8.0×3.9	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
9	坏	12.6×7.6×3.5	明赤褐	やや軟	砂粒少	右回転糸切り　内外面吸炭	略完形	
10	坏	12.0×6.5×3.5	黄灰	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
11	坏	12.4×7.6×3.8	灰	堅緻	粗砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
12	坏	12.5×6.6×3.6	灰	堅緻	砂粒少	右回転糸切り	½	
13	坏	13.0×8.0×3.8	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
14	坏	12.5×7.2×4.0	鈍褐	やや軟	砂粒少	右回転糸切り	⅓	
15	坏	12.2×7.2×3.9	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
16	坏	14.0×8.0×4.0	灰白	やや軟	砂粒少	右回転糸切り	¼	
17	坏	13.4×8.2×3.8	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
18	坏	13.7×8.0×3.5	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
19	坏	12.2×7.2×3.3	灰	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
20	坏	13.0×7.6×3.5	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
21	坏	13.6×7.8×3.0	灰	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
22	坏	12.9×8.0×3.2	灰	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
23	坏	13.4×8.0×3.2	灰白	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
24	坏	13.6×8.0×3.6	灰白	やや軟	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
25	坏	13.6×7.6×3.5	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
26	坏	13.0×7.0×3.0	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
27	坏	13.0×7.0×3.5	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り	略完形	
28	坏	13.0×8.0×3.0	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	⅓	
29	坏	13.0×7.8×3.4	灰白	良好	粗砂粒多	右回転糸切り	⅓	
30	坏	13.0×8.0×3.2	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	略完形	
31	坏	12.4×7.0×3.3	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り	½	
32	坏	12.8×7.4×3.4	灰	堅緻	粗砂粒多	右回転糸切り	⅓	
33	坏	13.0×7.0×3.2	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
34	坏	12.4×8.0×3.5	灰白	良好	雲混る	右回転糸切り	¼	
35	坏	13.0×8.0×3.4	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
36	坏	12.0×6.8×3.3	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
37	坏	13.0×7.6×3.6	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り	½	
38	坏	13.2×7.4×3.4	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
39	坏	13.0×7.6×3.7	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り	略完形	
40	坏	13.0×7.5×3.5	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
41	坏	12.4×6.4×3.1	灰	良好	砂粒多	右回転糸切り	½	
42	坏	13.4×7.4×3.8	橙	軟	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
43	坏	13.6×8.0×3.2	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
44	坏	13.4×8.4×3.3	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
45	坏	13.6×7.4×3.5	灰	良好	粗砂粒多	右回転糸切り　内外面吸炭	⅓	
46	坏	13.0×7.6×3.4	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り	略完形	
47	坏	13.2×8.4×3.5	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り	⅓	
48	坏	13.6×8.6×3.5	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
49	坏	14.0×8.0×3.6	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り	⅓	
50	坏	14.0×8.0×3.4	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	⅓	
51	坏	13.2×7.2×3.1	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り	½	
52	坏	12.0×7.0×2.6	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り	¼	
53	坏	12.6×7.4×3.0	灰白	良好	粗砂粒少	右回転糸切り	½	
54	坏	13.0×8.0×3.5	灰白	良好	粗砂粒少	右回転糸切り	⅓	
55	坏	13.0×7.4×3.4	灰白	良好	粗砂粒多	右回転糸切り	⅓	
56	坏	13.6×8.0×3.5	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り	½	
57	坏	13.6×8.0×3.5	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	⅓	
58	坏	12.0×7.0×3.0	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
59	坏	14.0×8.0×3.3	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
60	坏	11.6×7.0×3.0	灰	堅緻	砂粒多	回転糸切り　右回転	½	

舞台遺跡　6号窯(2)

№	器種	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
61	坏	13.6×7.6×3.5	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	1/4	
62	坏	13.4×8.0×3.4	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	3/4	
63	坏	13.6×7.6×3.4	灰白	良好	粗砂粒多	右回転糸切り	3/4	
64	坏	13.4×7.8×3.2	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	1/4	
65	坏	13.4×8.0×3.3	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	1/4	
66	坏	13.0×7.6×3.8	灰白	良好	粗砂粒少	砂粒少	3/4	
67	坏	13.4×7.9×3.5	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	3/4	
68	坏	12.8×7.4×3.8	鈍黄橙	良好	粗砂粒多	右回転糸切り	1/4	
69	坏	13.0×8.0×3.5	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	3/4	
70	坏	12.5×7.6×3.6	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	1/2	
71	坏	13.0×7.0×3.8	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	1/2	
72	坏	13.6×8.0×3.8	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	1/4	
73	坏	13.4×7.6×3.7	灰白	やや軟	砂粒少	右回転糸切り	3/4	
74	坏	13.0×7.8×3.7	鈍橙	やや軟	砂粒少	回転糸切り　右回転	1/4	
75	坏	13.0×7.8×3.6	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り	3/4	
76	坏	13.0×8.4×3.0	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	1/2	
77	坏	12.7×7.2×3.4	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り	1/4	
78	坏	13.4×8.0×3.4	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	1/4	
79	坏	13.4×8.0×3.5	灰	良好	砂粒少	右回転糸切り	完形	
80	坏	14.0×8.0×3.9	浅黄	良好	砂粒少	右回転糸切り	略完形	
81	坏	13.0×7.6×3.7	鈍橙	軟	粗砂粒少	右回転糸切り	1/4	
82	坏	13.2×8.0×3.5	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	3/4	
83	坏	13.0×7.4×3.7	灰白	良好	粗砂粒多	右回転糸切り	3/4	
84	坏	12.4×7.2×3.6	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り	1/2	
85	坏	12.2×7.6×3.6	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り	完形	
86	坏	12.6×8.2×3.5	灰	堅緻	砂粒多	回転糸切り　右回転	1/4	
87	坏	13.0×8.0×3.5	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	1/4	
88	坏	12.0×7.0×3.5	灰	堅緻	砂粒多	回転糸切り　右回転	1/4	
89	坏	12.6×7.2×3.6	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り	1/4	
90	坏	13.0×8.0×3.6	灰褐	やや軟	砂粒多	回転糸切り　右回転	1/4	
91	坏	13.5×8.4×3.5	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	1/4	
92	坏	13.0×7.6×3.9	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り	3/4	
93	坏	12.6×7.0×4.0	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	1/4	
94	坏	13.0×7.6×3.5	灰	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	1/4	
95	坏	13.0×8.0×3.5	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	1/4	
96	坏	12.4×7.2×3.3	灰	堅緻	砂粒少	右回転糸切り	1/2	
97	坏	12.8×7.4×3.4	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	1/2	
98	坏	13.2×6.2×3.8	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	1/2	
99	蓋	14.2×—×3.6	灰白	良好	砂粒少	天井右回転篦削り	1/4	
100	蓋	13.8×—×—	灰白	良好	砂粒少	天井右回転篦削り	1/4	
101	蓋	17.2×—×4.0	灰白	良好	砂粒少	天井右回転篦削り	3/4	
102	蓋	16.0×—×—	灰白	良好	砂粒少	天井右回転篦削り	1/4	
103	蓋	19.0×—×—	鈍黄橙	やや軟	砂粒少		破片	
104	蓋	つまみ径3.8	灰白			鈕	小片	
105	蓋	つまみ径3.8	灰オリーブ			鈕	小片	
106	蓋		灰白				小片	
107	蓋		灰白				小片	
108	蓋		黒褐				小片	
109	蓋		灰白	良好	砂粒少		小片	
110	蓋		灰白	良好	砂粒少		小片	
111	蓋		灰白	良好	砂粒少		小片	
112	壺	12.7×8.3×4.3	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　付高台　右回転	3/4	
113	壺	13.0×8.4×4.6	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　付高台　右回転	3/4	
114	壺	15.6×10.0×6.4	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　付高台　右回転	3/4	
115	壺	15.5×9.7×6.4	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　付高台　右回転	3/4	
116	壺	16.0×9.6×6.2	灰白	良好	砂粒多	回転糸切り　付高台　右回転	略完形	
117	壺	15.6×9.2×6.2	灰白	良好	砂粒多	回転糸切り　付高台　右回転	3/4	
118	壺	16.0×9.4×6.6	灰白	良好	砂粒多	回転糸切り　付高台　右回転	1/4	
119	壺	16.2×9.4×6.7	灰白	良好	粗砂粒	回転糸切り　付高台　右回転	3/4	
120	壺	15.6×9.8×6.8	灰白	良好	砂粒多	回転糸切り　付高台　右回転	3/4	

舞台遺跡　６号窯(3)

No	器種	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
121	塊	15.8×10.0×6.7	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　付高台　右回転	⅓	
122	塊	18.0×10.0×7.0	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　付高台　右回転	⅓	
123	塊	16.4×9.8×6.9	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　付高台　右回転	⅓	

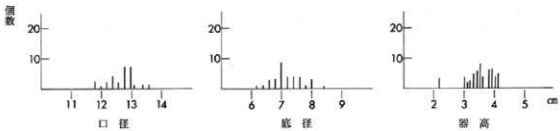
11号窯出土遺物（第71～73図　ＰＬ.45・50）

本窯は後出の６号・７号窯と重複し、６号窯の構築により窯尻部及び焼成部の一部が消失している。遺物の大半は焼成部の床面に残されたものである。

出土遺物には坏・蓋がある。

坏は口径13cmに頂点がある。底径は７cmを頂点にその前後、器高は３cmから４cmの間に集中する。ａ類は少なく（４・６・10）、ｂ類は（３・８・９・13・14・20）、ｃ類は（17・18）、ｄ類が（１・２・５・７・15・16）、ｆ類が（19・21～23）で、口径がやや縮小し偏平である。ｇ類が（25～27）で、ｈ類の（24）と区別が困難である。

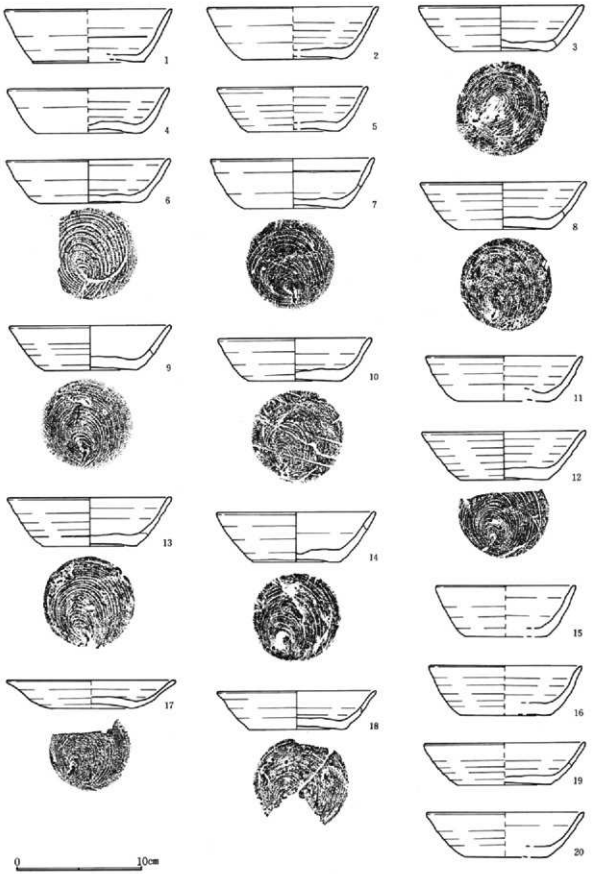
蓋はｂⅣ類の（28）がある。



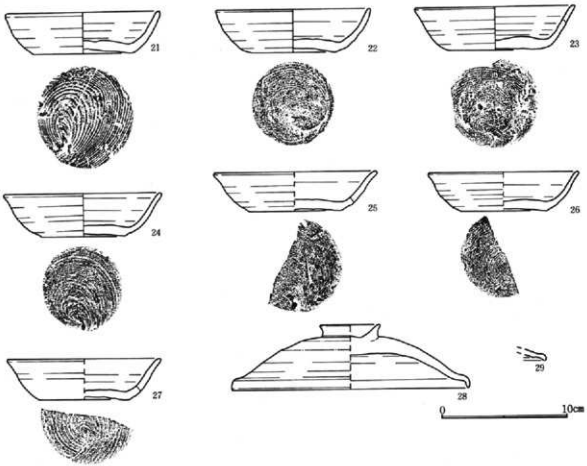
第71図　11号窯跡坏計測値分布図

舞台遺跡　11号窯(1)

No	器種	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
1	坏	13.3×8.8×4.2	灰白	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	¼	
2	坏	13.6×8.0×4.0	灰	良好	粗砂粒多	回転糸切り	⅓	
3	坏	12.7×7.6×3.5	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り	完形	
4	坏	13.0×8.0×3.5	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	⅓	
5	坏	12.0×7.0×3.5	灰	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	⅓	
6	坏	12.8×7.4×3.5	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	⅓	
7	坏	12.7×7.6×4.0	浅黄橙	良好	砂粒多	右回転糸切り	⅓	
8	坏	13.0×7.4×3.5	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	⅓	
9	坏	12.8×7.4×3.5	淡橙	やや軟	砂粒少	右回転糸切り	⅓	
10	坏	12.2×7.4×3.3	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	⅓	
11	坏	12.4×7.4×3.5	灰白	やや軟	砂粒少	回転糸切り　右回転	⅓	
12	坏	13.0×7.0×3.7	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	⅓	
13	坏	13.0×7.4×3.7	浅黄橙	良好	砂粒少	右回転糸切り　内面火襷あり	⅓	
14	坏	12.7×7.0×4.0	浅黄橙	良好	砂粒多	右回転糸切り	⅓	
15	坏	11.0×6.4×4.0	浅黄	やや軟	砂粒多	回転糸切り　右回転	¼	
16	坏	12.0×7.0×3.9	灰黄	やや軟	砂粒少	回転糸切り	¼	
17	坏	13.4×6.4×2.2	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り　歪み著しい	⅓	
18	坏	12.6×7.6×3.0	浅黄橙	やや軟	砂粒多	回転糸切り　右回転	⅓	
19	坏	12.8×7.0×3.5	灰	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	¼	
20	坏	12.6×6.6×3.5	灰白	やや軟	砂粒少	回転糸切り　右回転	⅓	
21	坏	12.4×8.0×3.4	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	⅓	



第72図　11号窯跡出土遺物(1)



第73図　11号窯跡出土遺物(2)

舞台遺跡　11号窯(2)

No	器種	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
22	坏	12.4×6.6×3.4	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り	⅓	
23	坏	13.0×7.0×3.4	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り	⅓	
24	坏	12.7×6.6×3.5	黄灰	良好	砂粒多	右回転糸切り	⅓	
25	坏	13.0×7.2×3.2	灰白	やや軟	砂粒少	右回転糸切り	⅓	
26	坏	12.0×6.6×3.0	灰	堅緻	砂粒多	回転糸切り　右回転	⅓	
27	坏	12.2×7.6×3.2	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り	¼	
28	蓋	19.0×4.8×5.0	灰白	良好	砂粒少	天井右回転置削り	¼	
29	蓋		灰白				破片	

7号窯出土遺物（第74～79図　ＰＬ.37～40・49）

本窯は6号・11号窯跡と重複し、両者の廃窯後に構築されている。窯跡群中最も小規模で、形態や・窯体の方位が他窯と異なり、構築が地形とは無関係になされているようである。遺物の出土は小規模な焼成部に集中しており、かなりの数量が生焼け状態で残されていた。操業途中と考えられるが残存遺物の量から見て使用に耐える製品は回収したようである。

出土遺物は坏を主に・蓋・椀の他、埋土中より土師器坏小片がある。

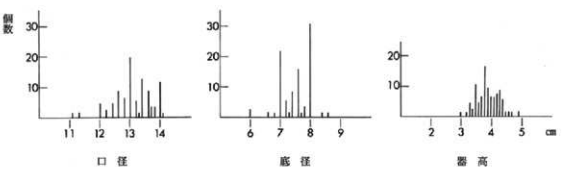
坏は口径12～14cmに集中し、13cmを頂点に14cmに向って多い。底径は7cmと8cmに集中し8cmに頂点がある。器高は3cmの後半大から4cm前半大に集中する。a・b・d・f～hの各類がある。a類は（1～18）

で形態が多様で類型の同定に明確さを欠く。b類（19～34）もまたd類との区別が困難であるが、体部外傾の度合で分けた。d類は（35～51）で器高の低い（40～42）がある。f類は（52～59）、g類は（60～78）、h類は（80～84）になろう。（85～88）はg類になろうが偏平な器高・器肉の薄さなど6号窯のものに極めて類似し、調査時の混入の可能性が高い資料である。

蓋はb・c類でともに口径の大きいⅢ・Ⅳ類である。bⅢ類が（93）・cⅢ類が（90）・bⅣ類は（89・92・94）になる。

椀はBeⅢ類のみの単類型である。本窯の椀Bには高台が肥厚し端部が丸まる特徴がある。（99・100）は体部にやや丸みをもち、（100）は口縁部が屈して開く。

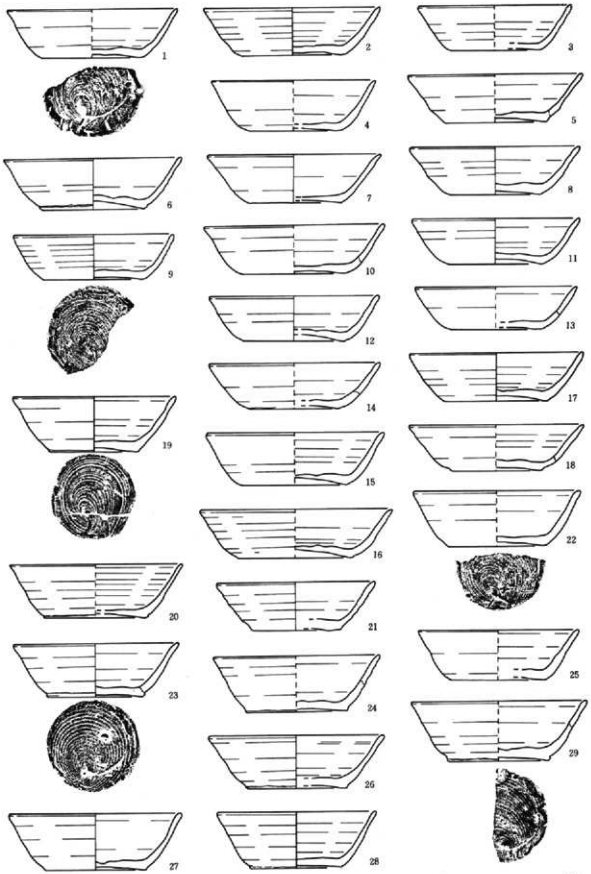
（105）は埋土出土の土師器坏小片である。器高は偏平で平底気味。体部は指頭痕が著しく弱い篦撫でがなされる。



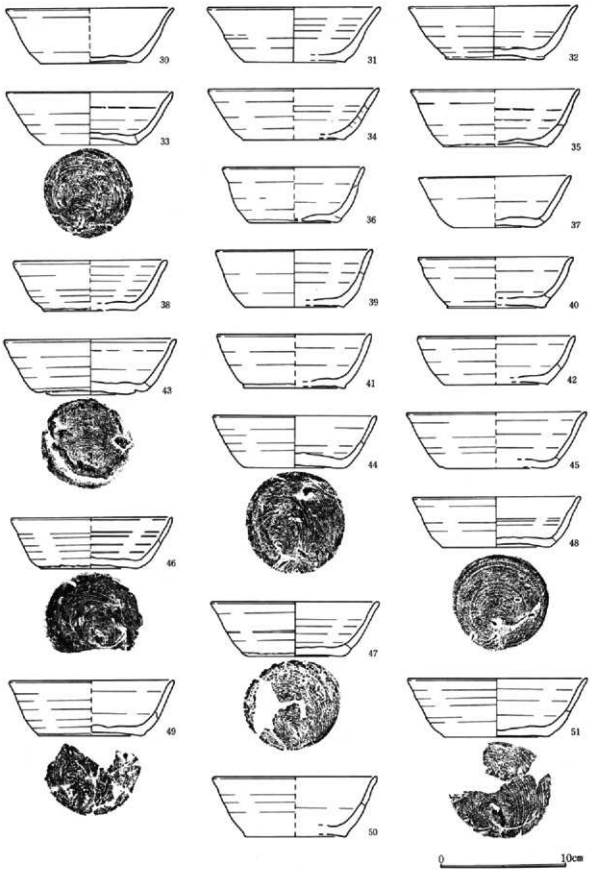
第74図　7号窯跡坏計測値分布図

舞台遺跡　7号窯(1)

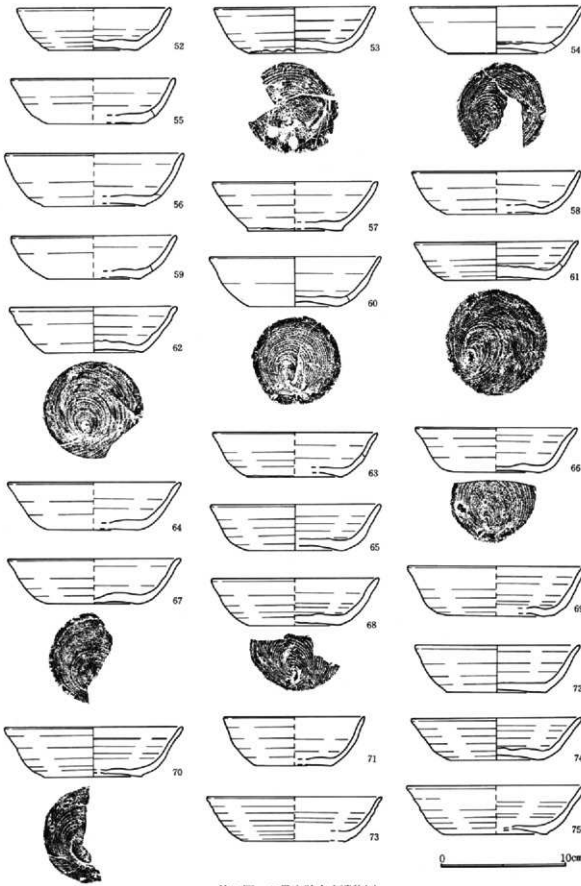
№	器種	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
1	坏	13.2×7.4×4.0	灰	良好	砂粒多	右回転糸切り	½	
2	坏	14.0×8.0×3.8	鈍赤褐	軟	砂粒少	右回転糸切り	略完形	
3	坏	12.0×7.0×3.5	灰	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
4	坏	13.0×7.0×4.2	灰白	やや軟	砂粒少	右回転糸切り	¼	
5	坏	13.8×8.0×3.8	灰黄	やや軟	砂粒少	右回転糸切り	½	
6	坏	14.1×8.0×4.0	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
7	坏	13.8×7.6×3.7	鈍黄橙	軟	砂粒少	右回転糸切り	½	
8	坏	13.6×7.0×3.7	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り	略完形	
9	坏	12.6×8.0×3.5	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り	½	
10	坏	14.0×8.0×3.8	灰白	やや軟	砂粒多	回転糸切り　右回転　見込部吸炭	¼	
11	坏	13.4×7.2×3.5	浅黄	軟	砂粒多	右回転糸切り	½	
12	坏	13.4×8.0×3.7	灰	堅緻	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
13	坏	12.6×7.0×3.5	灰白	やや軟	砂粒少	回転糸切り	¼	
14	坏	13.4×7.0×3.6	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	¼	
15	坏	14.0×8.0×4.2	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り	¼	
16	坏	15.0×8.6×3.7	灰白	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
17	坏	13.8×8.0×3.8	鈍赤褐	軟	砂粒多	右回転糸切り	略完形	
18	坏	13.6×7.0×3.8	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
19	坏	13.0×7.0×4.2	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
20	坏	13.4×8.0×4.2	浅黄橙	軟	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
21	坏	12.6×7.6×4.0	灰	堅緻	粗砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
22	坏	13.0×7.6×4.3	淡黄	やや軟	砂粒少	右回転糸切り	½	
23	坏	13.0×7.6×4.3	浅黄橙	やや軟	砂粒少	右回転糸切り	略完形	
24	坏	13.1×8.0×4.5	鈍黄橙	軟	砂粒少	回転糸切り	¼	
25	坏	12.6×7.4×4.0	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
26	坏	13.6×7.6×4.3	鈍橙	軟	砂粒少	右回転糸切り	½	
27	坏	13.7×8.0×4.5	鈍黄橙	軟	砂粒少	右回転糸切り	⅔	
28	坏	12.6×7.2×4.3	鈍橙	軟	砂粒少	右回転糸切り	⅔	



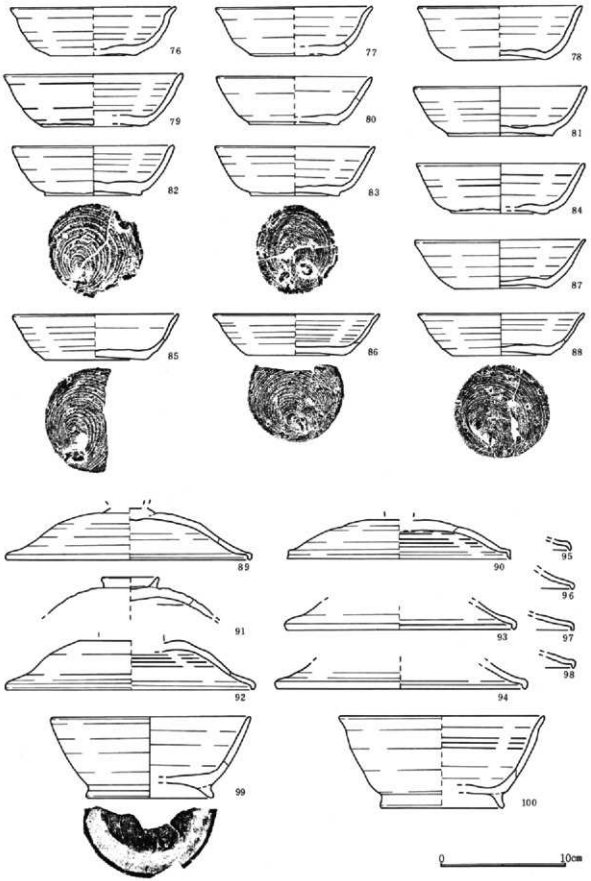
第75図　７号窯跡出土遺物(1)



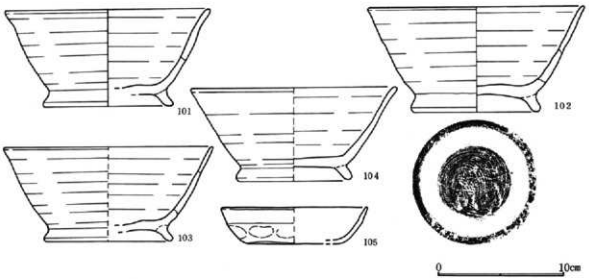
第76図　7号窯跡出土遺物(2)



第77図　7号窯跡出土遺物(3)



第78図　7号窯跡出土遺物(4)



第79図　７号窯跡出土遺物(5)

舞台遺跡　７号窯(2)

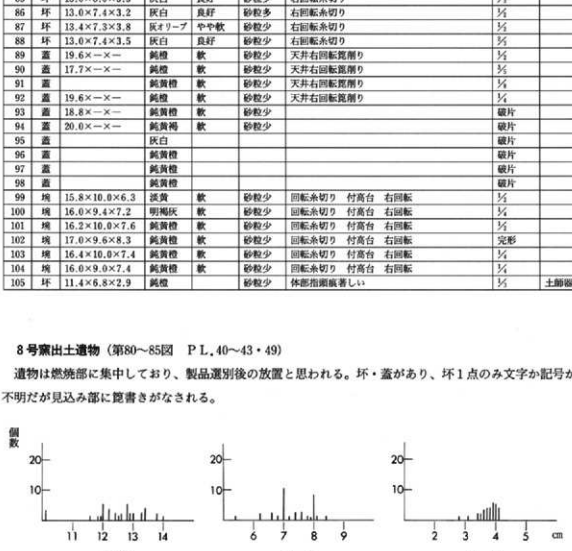
No	器種	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
29	坏	13.6×7.4×4.5	浅黄橙	軟	砂粒少	右回転糸切り	½	
30	坏	13.4×7.8×4.3	純黄橙	軟	砂粒少	右回転糸切り	½	
31	坏	13.8×8.0×4.8	純褐	軟	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
32	坏	13.3×7.8×4.2	純黄橙	軟	砂粒少	右回転糸切り	½	
33	坏	13.0×7.0×4.0	浅黄	良好	砂粒多	右回転糸切り	½	
34	坏	13.4×8.0×3.7	浅黄橙	軟	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
35	坏	13.0×8.0×4.5	浅黄橙	軟	砂粒少	右回転糸切り	½	
36	坏	11.4×7.0×4.3	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
37	坏	12.0×6.4×4.0	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り　底ノ内面吸炭	½	重焼
38	坏	12.0×7.0×3.8	灰	堅緻	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
39	坏	12.6×8.0×4.5	純黄橙	軟	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
40	坏	12.0×7.6×4.0	灰白	やや軟	砂粒少	右回転糸切り　内外面吸炭	¼	重焼
41	坏	12.4×8.0×4.3	純黄橙	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転　内面吸炭	½	重焼
42	坏	12.2×8.0×3.5	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
43	坏	13.5×7.0×4.0	淡黄	やや軟	砂粒少	右回転糸切り	½	
44	坏	13.0×8.0×4.3	灰白	やや軟	粗砂粒少	右回転糸切り	½	
45	坏	14.0×8.0×4.4	純黄褐	軟	砂粒少	回転糸切り	½	
46	坏	13.0×8.0×4.0	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り　切り直し	½	
47	坏	13.0×7.6×4.4	淡黄橙	軟	砂粒少	右回転糸切り	略完形	
48	坏	13.0×8.4×3.8	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	略完形	
49	坏	13.0×8.0×4.5	明褐灰	軟	砂粒少	右回転糸切り	¼	
50	坏	13.2×8.0×4.7	純黄橙	軟	砂粒少	右回転糸切り	½	
51	坏	14.0×8.0×4.6	純橙	軟	砂粒少	右回転糸切り	½	
52	坏	12.2×7.0×3.2	灰白	やや軟	砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
53	坏	12.6×7.0×3.5	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
54	坏	13.6×7.6×3.7	灰白	やや軟	砂粒少	右回転糸切り	½	
55	坏	13.0×7.2×3.5	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
56	坏	14.0×8.0×4.0	浅黄橙	軟	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
57	坏	13.0×7.4×3.7	灰白	やや軟	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
58	坏	13.0×7.6×4.0	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
59	坏	13.0×7.4×3.2	淡黄	軟	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
60	坏	13.0×7.0×4.0	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	略完形	
61	坏	12.8×8.0×3.0	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
62	坏	13.4×8.0×3.6	淡黄	やや軟	砂粒少	右回転糸切り	½	
63	坏	13.0×7.4×3.7	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	¼	
64	坏	13.6×7.0×3.7	浅黄橙	やや軟	砂粒少	右回転糸切り　外面吸炭	¼	
65	坏	13.4×7.4×3.5	灰白	やや軟	砂粒少	右回転糸切り	½	
66	坏	12.6×6.4×3.5	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り	½	

舞台遺跡　7号窯(3)

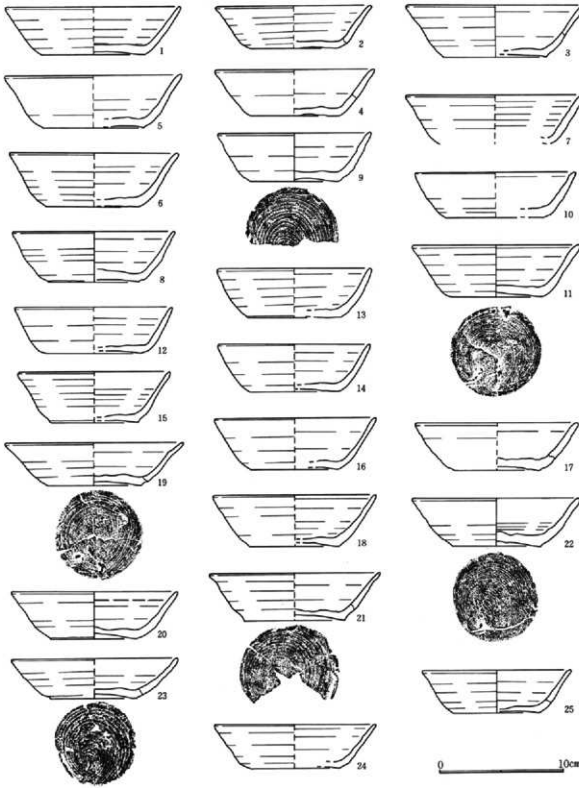
№	器種	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
67	坏	13.6×7.0×3.5	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
68	坏	13.2×7.0×3.7	灰白	やや軟	砂粒少	右回転糸切り	½	
69	坏	14.0×7.6×4.0	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
70	坏	14.0×7.4×3.7	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
71	坏	11.1×6.0×4.0	灰白	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
72	坏	13.0×8.0×3.7	鈍橙	軟	砂粒多	右回転糸切り	½	
73	坏	14.0×8.0×3.5	灰黄	やや軟	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
74	坏	13.6×7.4×3.3	灰白	やや軟	砂粒少	右回転糸切り	½	
75	坏	14.0×8.0×3.8	鈍橙	軟	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
76	坏	13.0×6.8×3.8	灰白	やや軟	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
77	坏	12.4×7.0×4.0	灰白	やや軟	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
78	坏	14.0×7.0×4.2	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
79	坏	13.6×8.0×4.0	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
80	坏	12.6×7.0×4.0	浅黄橙	やや軟	砂粒多	回転糸切り　右回転	¼	
81	坏	13.6×8.0×4.0	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転　外面吸炭	½	重焼
82	坏	12.6×7.6×3.7	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り	¾	
83	坏	13.0×7.0×4.0	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
84	坏	13.1×7.0×3.9	灰白	やや軟	砂粒少	右回転糸切り	½	
85	坏	13.0×8.0×3.5	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
86	坏	13.0×7.4×3.2	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り	½	
87	坏	13.4×7.3×3.8	灰オリーブ	やや軟	砂粒少	右回転糸切り	½	
88	坏	13.0×7.4×3.5	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
89	蓋	19.6×－×－	鈍橙	軟	砂粒少	天井右回転篦削り	½	
90	蓋	17.7×－×－	鈍橙	軟	砂粒少	天井右回転篦削り	½	
91	蓋		鈍黄橙	軟	砂粒少	天井右回転篦削り	¼	
92	蓋	19.6×－×－	鈍橙	軟	砂粒少	天井右回転篦削り	¼	
93	蓋	18.8×－×－	鈍黄橙	軟	砂粒少		破片	
94	蓋	20.0×－×－	鈍黄褐	軟	砂粒少		破片	
95	蓋		灰白				破片	
96	蓋		鈍黄橙				破片	
97	蓋		鈍黄橙				破片	
98	蓋		鈍黄橙				破片	
99	瓶	15.8×10.0×6.3	淡黄	軟	砂粒少	回転糸切り　付高台　右回転	½	
100	瓶	16.0×9.4×7.2	明褐灰	軟	砂粒少	回転糸切り　付高台　右回転	¼	
101	瓶	16.2×10.0×7.6	鈍黄橙	軟	砂粒少	回転糸切り　付高台　右回転	½	
102	瓶	17.0×9.6×8.3	鈍黄橙	軟	砂粒少	回転糸切り　付高台　右回転	完形	
103	瓶	16.4×10.0×7.4	鈍黄橙	軟	砂粒少	回転糸切り　付高台　右回転	¼	
104	瓶	16.0×9.0×7.4	鈍黄橙	軟	砂粒少	回転糸切り　付高台　右回転	¼	
105	坏	11.4×6.8×2.9	鈍橙		砂粒少	体部指頭痕著しい	½	土師器

8号窯出土遺物（第80～85図　PL.40～43・49）

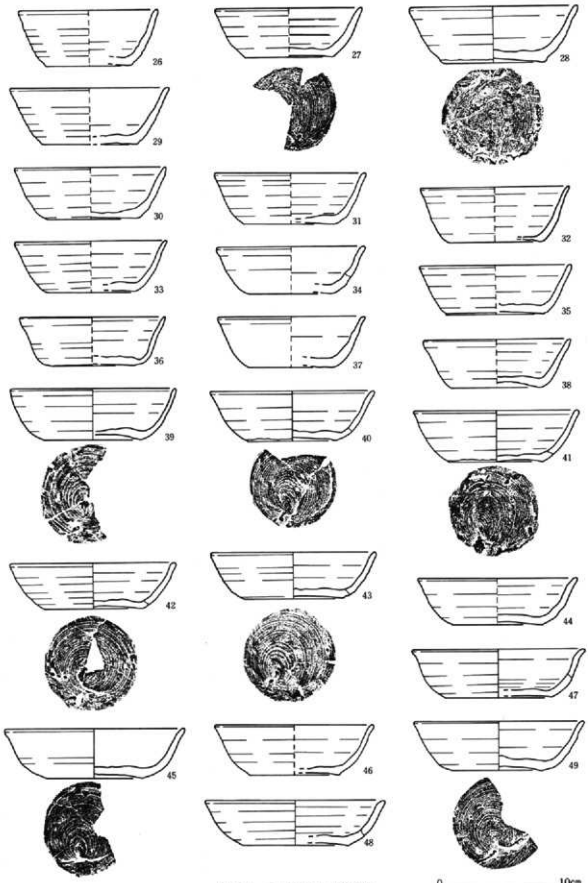
遺物は燃焼部に集中しており、製品選別後の放置と思われる。坏・蓋があり、坏1点のみ文字か記号かは不明だが見込み部に筮書きがなされる。



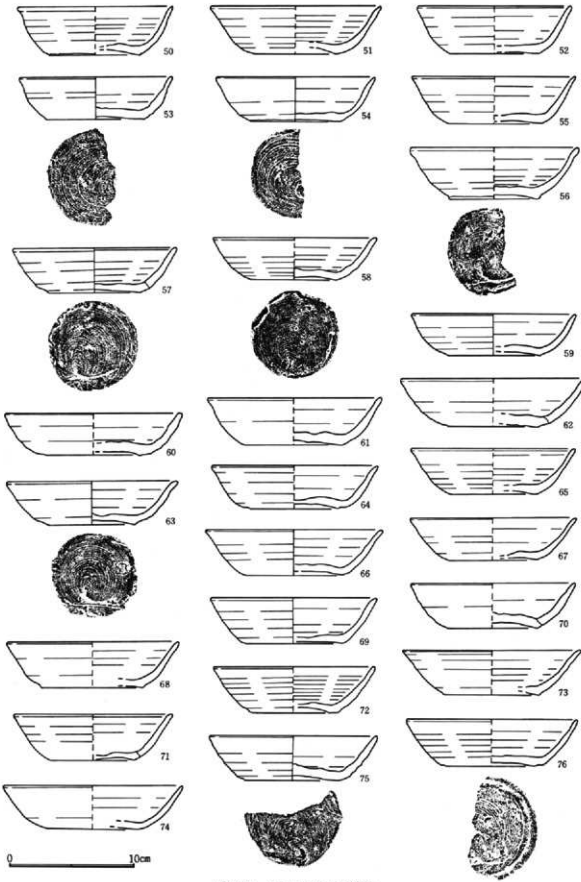
第80図　8号窯跡坏計測値分布図



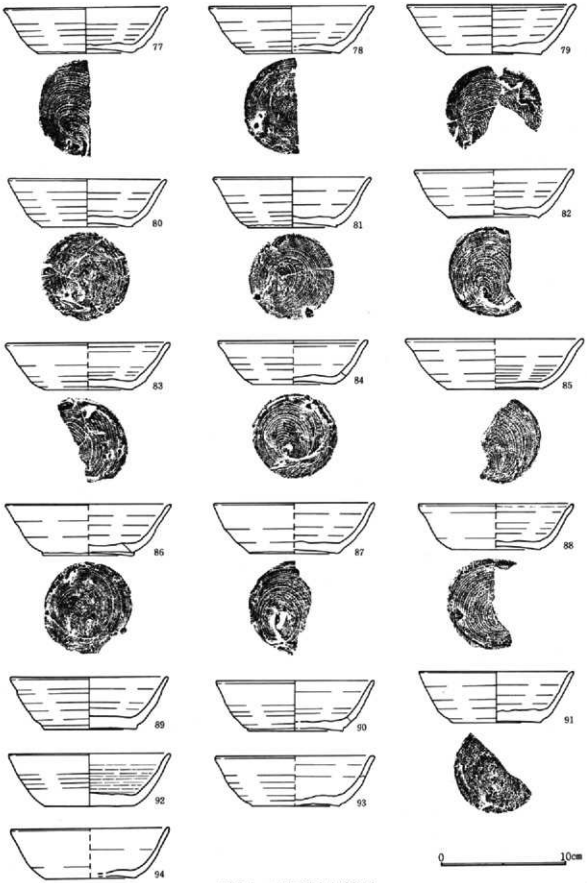
第81図　８号窯跡出土遺物(1)



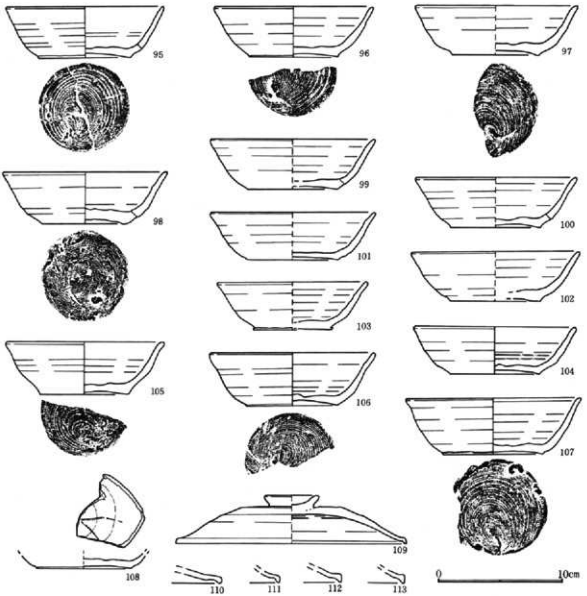
第82図　8号窯跡出土遺物(2)



第83図　８号窯跡出土遺物(3)



第84図　8号窯跡出土遺物(4)



第85図　８号窯跡出土遺物(5)

坏は口径が主として12～14cmの間にあり13cmが量的頂点である。底径は６cm大後半から８cmで７cmが圧倒的多数である。器高は３cm大の前半から４cmに集中する。ａ～ｄ・ｆ・ｈの各類型が存在するがａ・ｃ類が小量な傾向がある。ａ類は（１～６・10・20・24・25）で体部の外反するものが多い。ｂ類は（11・15・18・21・22）、ｃ類は少なく（19・23）がある。ｄ類は（９・14・26～38）でｅ類と区別が困難なものがある。ｆ類は（39・41～43・48・57～79）のうちやや偏平で口径の大型化が目立つ。(63・73）はｇ類に属しようか。ｇ類は（40・44・49～56）、ｈ類は（80～107）である。(108）は見込み部に筮書き痕が見える。

蓋はｂ～ｄ類がみられ、(109）はｂⅣ類になろう。

舞台遺跡　８号窯(1)

No	器種	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
1	坏	14.0×8.0×3.7	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り	¼	
2	坏	12.4×7.0×3.4	灰	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	

舞台遺跡　8号窯(2)

№	器種	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
3	坏	14.0×7.6×4.0	灰白	やや軟	砂粒多	右回転糸切り	½	
4	坏	12.6×7.0×3.6	鈍黄橙	やや軟	砂粒多	回転糸切り　右回転	¼	
5	坏	14.0×8.0×4.0	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り	¼	
6	坏	13.0×7.0×4.0	淡黄	やや軟	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
7	坏	14.0×－×－	灰白	良好	砂粒少	右回転	¼	
8	坏	12.7×7.0×3.8	灰白	堅緻	砂粒少	右回転糸切り	½	
9	坏	12.0×7.0×4.0	灰	堅緻	砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
10	坏	12.4×7.4×3.5	灰白	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	¼	
11	坏	13.0×7.0×4.0	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り	略完形	
12	坏	12.6×8.0×3.5	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
13	坏	12.2×7.0×3.5	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
14	坏	12.0×7.4×3.7	灰白	やや軟	砂粒少	回転糸切り　右回転　外面吸炭	¼	重焼
15	坏	12.4×7.0×4.0	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
16	坏	12.6×7.0×4.0	灰	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
17	坏	13.0×6.4×3.8	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
18	坏	13.0×7.0×4.0	灰白	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
19	坏	14.0×7.0×3.5	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り　歪著しい	½	
20	坏	13.0×7.0×4.0	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
21	坏	13.6×8.0×3.8	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り	½	
22	坏	13.0×7.0×4.0	灰	良好	砂粒多	右回転糸切り	½	
23	坏	13.0×6.6×3.2	灰	良好	砂粒多	右回転糸切り	½	
24	坏	12.6×6.6×3.4	青灰	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
25	坏	12.0×7.0×3.5	浅黄橙	軟	砂粒少	右回転糸切り	½	
26	坏	11.4×7.0×4.5	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
27	坏	11.8×7.0×4.0	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り	½	
28	坏	13.0×8.0×4.5	淡橙	やや軟	砂粒少	右回転糸切り　外面吸炭	⅔	
29	坏	12.8×7.8×4.4	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
30	坏	12.4×7.0×3.8	灰白	やや軟	砂粒少	右回転糸切り	¼	
31	坏	12.2×7.0×4.0	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り	½	
32	坏	12.0×7.0×4.0	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
33	坏	12.4×7.0×4.1	灰白	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
34	坏	11.8×7.0×4.7	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
35	坏	12.0×7.6×4.0	灰白	やや軟	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
36	坏	11.6×6.6×3.5	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り	½	
37	坏	12.0×7.0×4.0	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	¼	
38	坏	11.6×7.0×3.6	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
39	坏	13.0×8.0×3.8	灰白	やや軟	砂粒少	右回転糸切り	½	
40	坏	13.0×7.0×3.7	浅黄橙	やや軟	砂粒少	右回転糸切り　外面吸炭	½	重焼
41	坏	13.0×7.0×4.0	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
42	坏	13.0×7.6×3.5	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
43	坏	13.0×7.4×3.7	灰白	やや軟	砂粒少	右回転糸切り　内面火襷痕	½	
44	坏	12.4×7.0×3.7	灰	堅緻	砂粒多	回転糸切り　右回転	¼	
45	坏	14.0×7.0×4.0	淡黄	やや軟	砂粒少	右回転糸切り	½	
46	坏	12.6×7.0×4.0	灰白	やや軟	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
47	坏	13.4×8.0×3.7	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り　外面吸炭	½	
48	坏	14.2×8.2×3.5	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
49	坏	13.0×7.0×3.7	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り　内面火襷あり	½	
50	坏	12.2×7.0×3.5	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り	½	
51	坏	13.6×7.0×3.8	灰白	やや軟	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
52	坏	12.0×6.8×3.5	灰	堅緻	砂粒多	回転糸切り　右回転	¼	
53	坏	12.0×8.0×3.5	灰白	堅緻	砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
54	坏	12.4×7.0×3.2	灰白	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転　見かけ底部	½	
55	坏	13.0×7.0×3.7	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
56	坏	13.6×7.0×4.0	灰白	やや軟	砂粒少	右回転糸切り	½	
57	坏	13.0×7.0×3.5	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	略完形	
58	坏	13.0×7.0×3.5	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り	½	
59	坏	13.0×7.0×3.3	灰	良好	砂粒多	右回転糸切り	½	
60	坏	14.0×7.6×3.6	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
61	坏	13.6×7.0×3.7	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
62	坏	14.6×7.0×3.8	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り	½	

舞台遺跡　8号窯(3)

№	器種	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
63	坏	13.0×7.0×3.5	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	3/4	
64	坏	13.0×7.0×3.3	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	1/4	
65	坏	13.0×7.0×3.8	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	1/4	
66	坏	14.0×8.0×3.5	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	1/4	
67	坏	13.0×7.0×3.5	灰	堅緻	砂粒多	回転糸切り　右回転	1/4	
68	坏	13.6×8.0×3.6	灰白	やや軟	砂粒少	回転糸切り　右回転	1/4	
69	坏	13.0×7.6×3.5	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	1/4	
70	坏	13.0×7.6×3.8	灰白	やや軟	砂粒少	右回転糸切り	1/4	
71	坏	13.6×6.6×3.7	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り	1/4	
72	坏	13.0×7.0×3.8	灰白	やや軟	砂粒少	右回転糸切り	1/4	
73	坏	14.0×7.6×3.5	灰	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	1/4	
74	坏	14.0×7.0×3.2	灰	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	1/4	
75	坏	13.0×7.6×3.6	灰白	やや軟	砂粒多	右回転糸切り	1/4	
76	坏	13.6×8.0×3.5	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り　見かけ歪部	1/4	
77	坏	13.0×7.4×3.7	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り　外面吸炭	1/4	重焼
78	坏	13.0×7.4×4.0	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	1/4	
79	坏	13.4×7.6×3.8	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り　外面火襷あり	1/4	
80	坏	12.6×7.0×4.0	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り	3/4	
81	坏	12.6×7.0×4.0	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	3/4	
82	坏	12.4×7.0×3.6	浅黄橙	良好	砂粒少	右回転糸切り	1/4	
83	坏	13.0×7.0×3.7	灰白	やや軟	砂粒少	回転糸切り　右回転	1/4	
84	坏	12.0×6.6×3.5	浅黄橙	やや軟	砂粒少	右回転糸切り	1/4	
85	坏	14.2×7.5×4.0	灰白	やや軟	砂粒少	右回転糸切り	1/4	
86	坏	13.0×7.0×4.0	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り	1/4	
87	坏	13.8×7.0×4.0	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	1/4	
88	坏	12.2×7.0×3.6	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	1/4	
89	坏	12.0×7.4×4.4	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り	1/4	
90	坏	12.4×7.4×4.0	灰	堅緻	砂粒少	回転糸切り　右回転	1/4	
91	坏	12.4×7.0×3.9	灰	堅緻	砂粒少	右回転糸切り	1/4	
92	坏	13.0×7.0×4.2	灰白	やや軟	砂粒少	右回転糸切り　内面篦当て	1/4	
93	坏	12.6×7.0×3.9	灰白	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	1/4	
94	坏	12.6×7.0×3.8	灰白	やや軟	砂粒少	回転糸切り　右回転	1/4	
95	坏	12.6×7.0×4.2	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り	略完形	
96	坏	12.4×7.0×4.0	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	1/4	
97	坏	12.6×7.0×4.0	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	1/4	
98	坏	13.0×7.0×4.0	灰	良好	砂粒多	右回転糸切り	1/4	
99	坏	13.0×7.0×3.8	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り　内外面吸炭	1/4	重焼
100	坏	12.6×7.0×4.0	灰白	やや軟	砂粒少	回転糸切り　右回転	1/4	
101	坏	13.0×7.0×3.7	灰白	やや軟	砂粒少	回転糸切り　右回転	1/4	
102	坏	13.2×7.0×3.8	灰白	やや軟	砂粒少	回転糸切り　右回転	1/4	
103	坏	12.0×6.0×3.7	灰	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	1/4	
104	坏	13.0×7.0×3.7	灰白	やや軟	砂粒少	右回転糸切り	1/4	
105	坏	12.4×7.0×4.0	灰	良好	砂粒少	右回転糸切り	1/4	
106	坏	13.0×7.0×4.0	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	1/4	
107	坏	13.4×7.6×4.5	灰白	やや軟	砂粒少	右回転糸切り	1/4	
108	坏	—×—×7.4	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り　内面に篦描き	破片	
109	蓋	18.4×4.3×3.8	灰	良好	砂粒少	天井右回転篦削り	3/4	
110	蓋		灰白				破片	

9号窯出土遺物（第86～88図　ＰＬ.43・44・49・50）

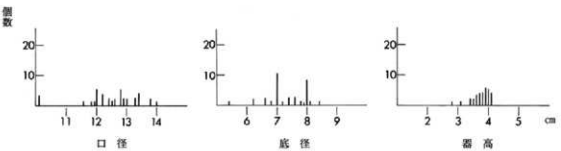
9号窯は少なくとも3度の焼成を行っているが、遺物検出は最終操業面からである。焼成部床面には焼台に使用された坏底部が少数ながら当初の位置を保っているものもある。多くは底部の片縁に体部の一部を残しており、傾斜面の下方にその部分を設置し底部を水平にしている。他の焼成部に分布する一群は床面から浮遊状態ながら着かず離れずの状態にあり選別後のものであろう。前庭部には多く小破片して出土している。

出土遺物は少なく、器種は坏・蓋・椀で坏が主体である。

坏は口径12cm大から13cm大に集中する。底径は7cmと8cmが頂点となり、器高は4cm前後に中心がある。b・d類がやや多く、a類（1～3）c類（30）・e類（4・6・27）・f類（29）・h類（28）ともに僅かである。b類は（5・7～15）、d類は（16・26）である。(31) は前庭部灰層からの出土で、形態的にはかなり後出のものと考えられ、混入の可能性が高い。

蓋はa～c類があり、aⅡ類（33）、bⅠ類（34・36）・bⅢ類（32）、cⅢ類（35・37）である。(37) は天井部が丸く張り類例は少ない。蓋はいずれも紐を欠くが環状になろう。

椀（45）は高台部を欠くがBcⅢ類になろう。



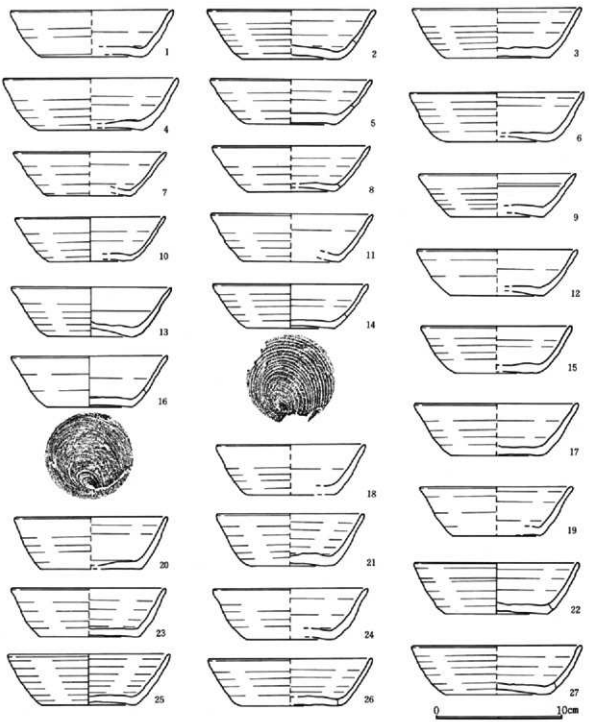
第86図　9号窯跡坏計測値分布図

舞台遺跡　9号窯(1)

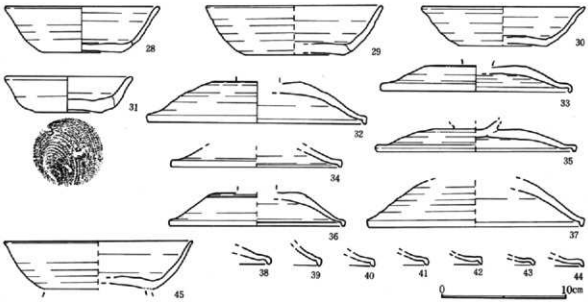
No.	器種	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
1	坏	12.8×8.0×3.7	明褐灰	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
2	坏	13.4×8.0×4.0	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り	½	
3	坏	13.3×8.4×3.9	灰	良好	砂粒少		¼	
4	坏	13.8×8.0×4.1	鈍橙	やや軟	砂粒少		½	
5	坏	13.2×7.0×3.5	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り	½	
6	坏	13.8×8.0×3.9	鈍黄橙	やや軟			¼	
7	坏	12.2×6.6×3.4	鈍黄橙	やや軟			¼	
8	坏	12.6×7.0×3.6	灰白	やや軟	砂粒少	回転糸切り　右回転　外面吸炭	½	重焼
9	坏	12.2×7.4×3.2	灰	良好	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
10	坏	12.0×7.0×3.5	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
11	坏	13.0×8.0×3.8	灰	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	¼	
12	坏	12.8×7.4×3.7	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り	¼	
13	坏	12.8×7.0×4.0	灰白	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	¼	
14	坏	12.6×7.0×3.5	灰白	良好	砂粒少	右回転糸切り	½	
15	坏	11.9×6.6×3.7	灰	良好	砂粒多		½	
16	坏	12.4×7.0×4.0	灰白	やや軟	砂粒少	右回転糸切り　外面吸炭	¼	
17	坏	13.0×7.2×4.0	灰褐	良好	砂粒多	右回転糸切り	¼	
18	坏	11.6×7.0×4.0	灰白	良好	砂粒少		¼	
19	坏	12.0×7.0×3.8	灰	堅緻	砂粒多	回転糸切り	¼	
20	坏	12.2×8.0×4.0	灰白	良好	粗砂粒多	回転糸切り　右回転	¼	
21	坏	11.8×6.2×4.0	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り	¼	
22	坏	13.0×8.0×4.0	灰白	やや軟	砂粒少	回転糸切り　右回転	½	
23	坏	12.6×8.0×3.8	灰	良好	砂粒多	右回転糸切り	¼	
24	坏	12.0×7.0×4.0	灰白	良好	砂粒少		½	
25	坏	13.0×7.6×4.0	灰白	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	¼	
26	坏	13.0×8.0×3.7	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り	½	
27	坏	13.4×8.0×4.0	灰	良好	粗砂粒多	右回転糸切り	½	
28	坏	12.0×6.6×3.5	灰白	やや軟	砂粒少	右回転糸切り　外面吸炭	重焼	
29	坏	14.0×8.0×4.0	灰白	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転		
30	坏	12.0×7.0×3.2	灰	堅緻	砂粒少	回転糸切り　右回転	¼	
31	坏	10.0×5.4×3.0	灰白	やや軟	砂粒少	右回転糸切り　試作品か？	完形	
32	蓋	17.6×－×－	灰	良好	砂粒少	天井右回転篦削り	½	
33	蓋	15.2×－×－	灰	良好	砂粒少	天井右回転篦削り	½	
34	蓋	13.4×－×－	灰白	良好	砂粒少		破片	
35	蓋	15.9×－×－	灰白	良好	砂粒少	天井偏平　右回転篦削り	½	

舞台遺跡　９号窯(2)

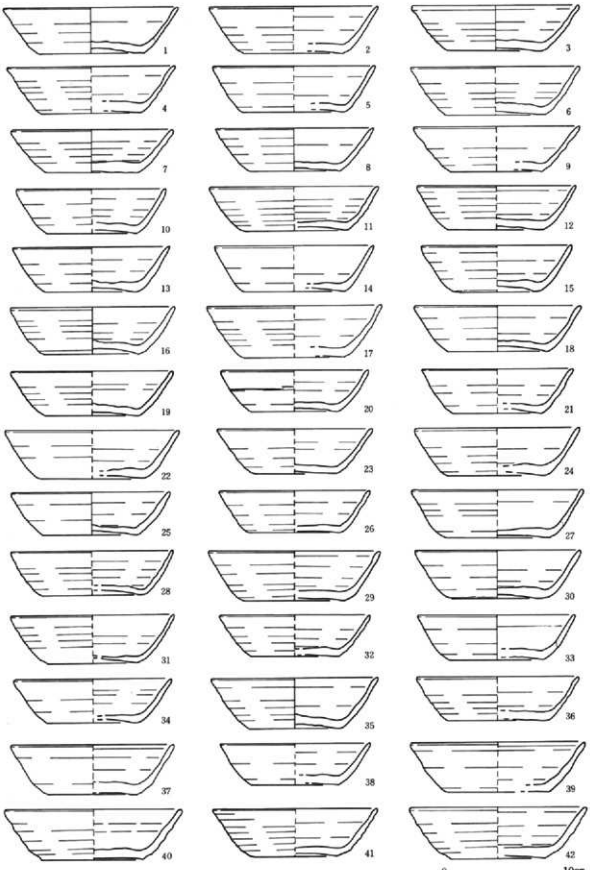
No	器種	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
36	蓋	14.2×－×－	灰白	良好	砂粒少	天井右回転篦削り	⅓	
37	蓋	16.8×－×－	灰白	良好	砂粒少	右回転	¼	
45	坏	15.0×－×－	灰	良好	砂粒少	回転糸切り　付高台　右回転	⅓	



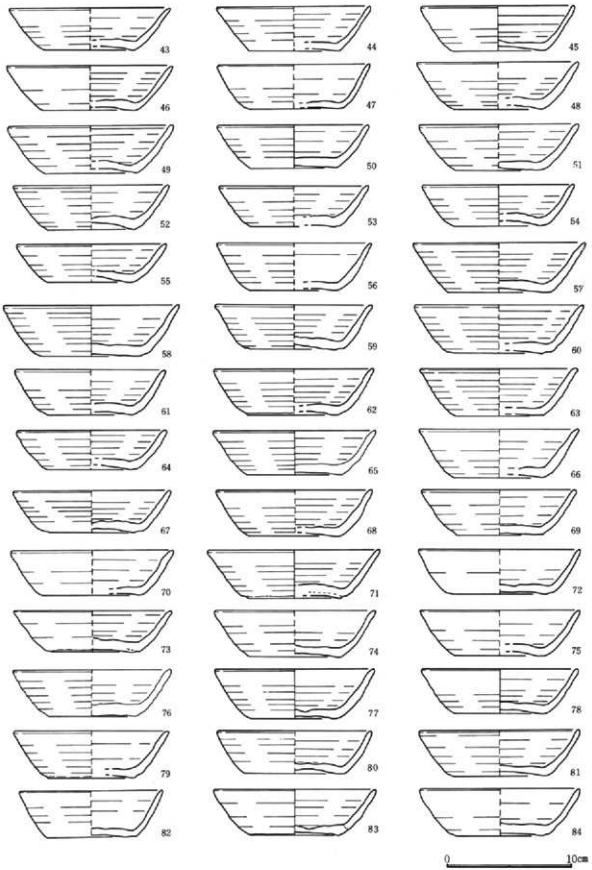
第87図　９号窯跡出土遺物(1)



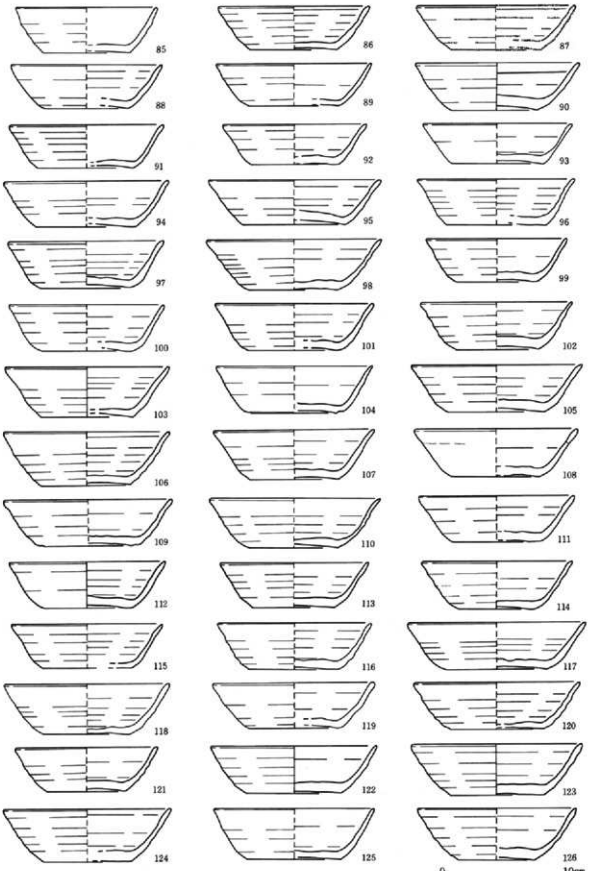
第88図　9号窯跡出土遺物2)



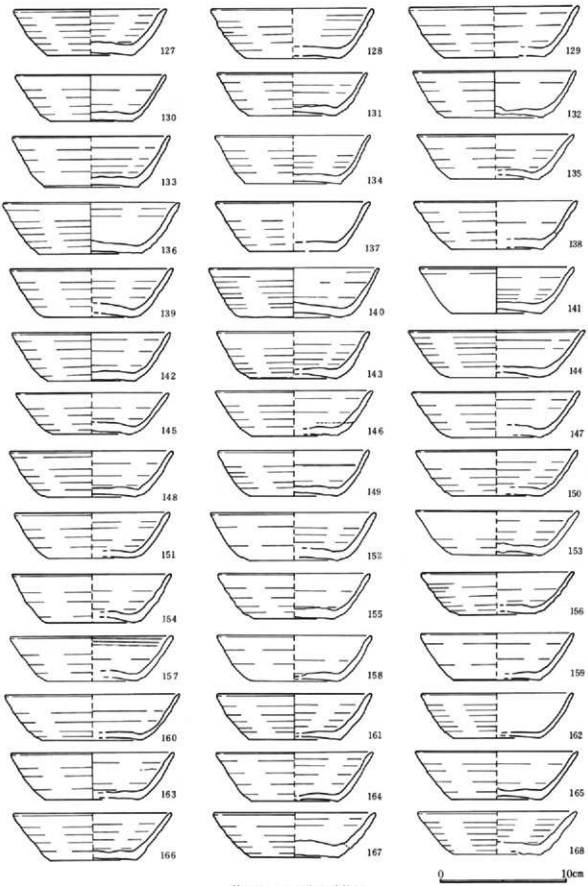
第89図　灰原出土遺物(1)



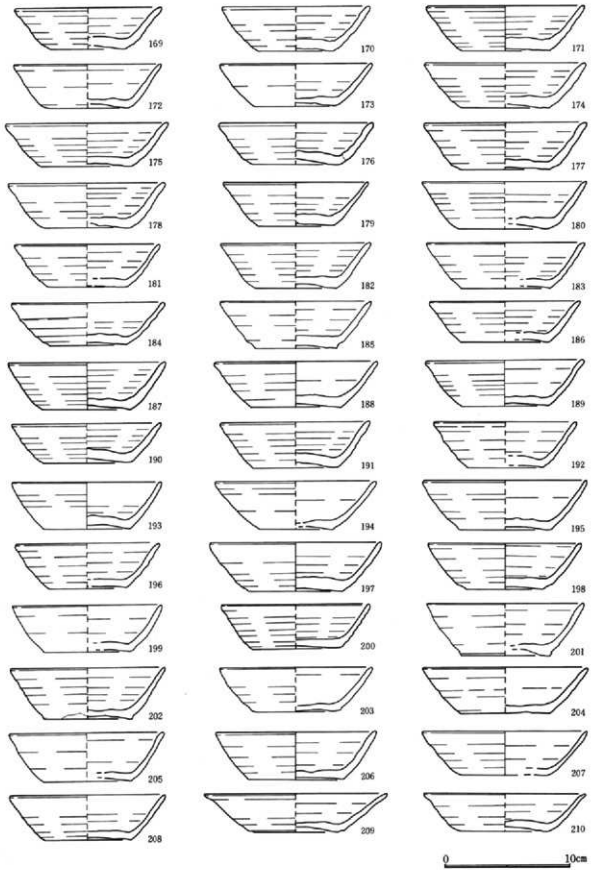
第90図　灰原出土遺物(2)



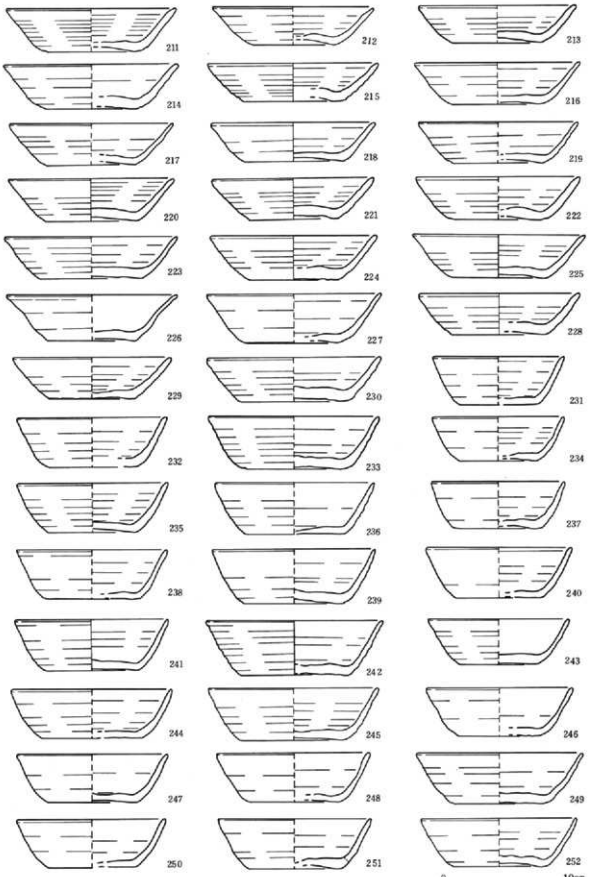
第91図　灰原出土遺物(3)



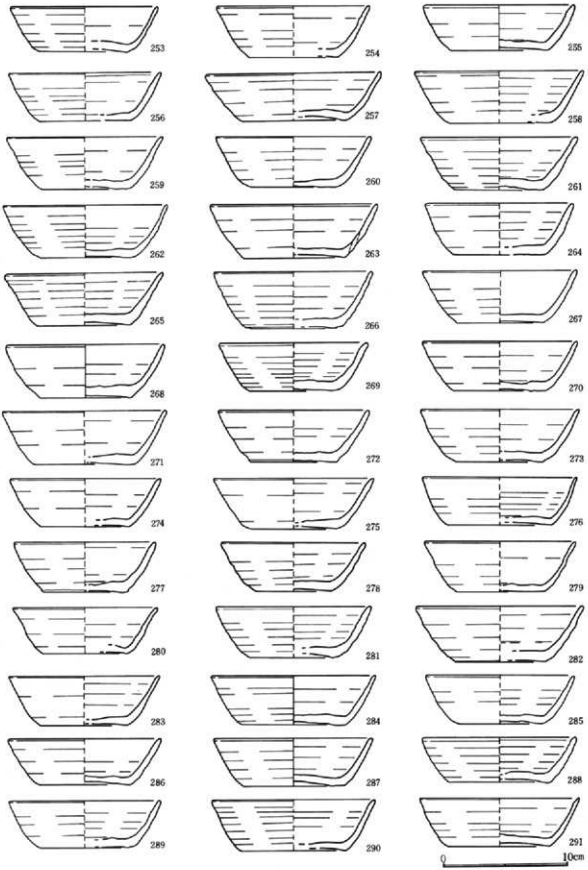
第92図　灰原出土遺物(4)



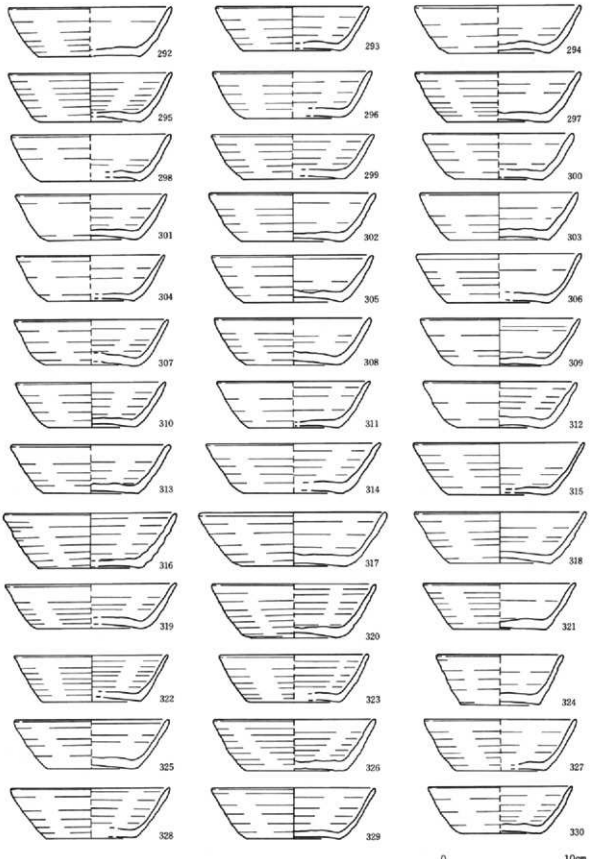
第93図　灰原出土遺物(5)



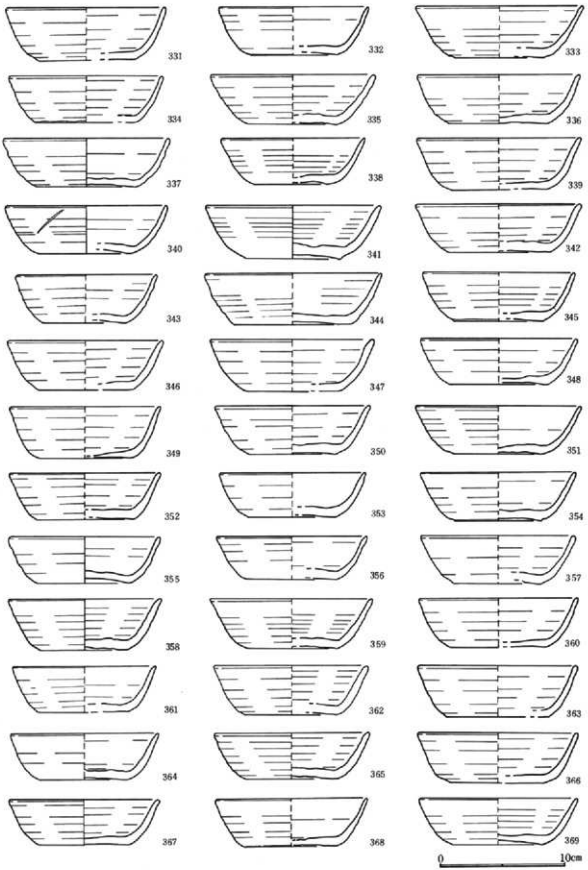
第94図　灰原出土遺物(6)



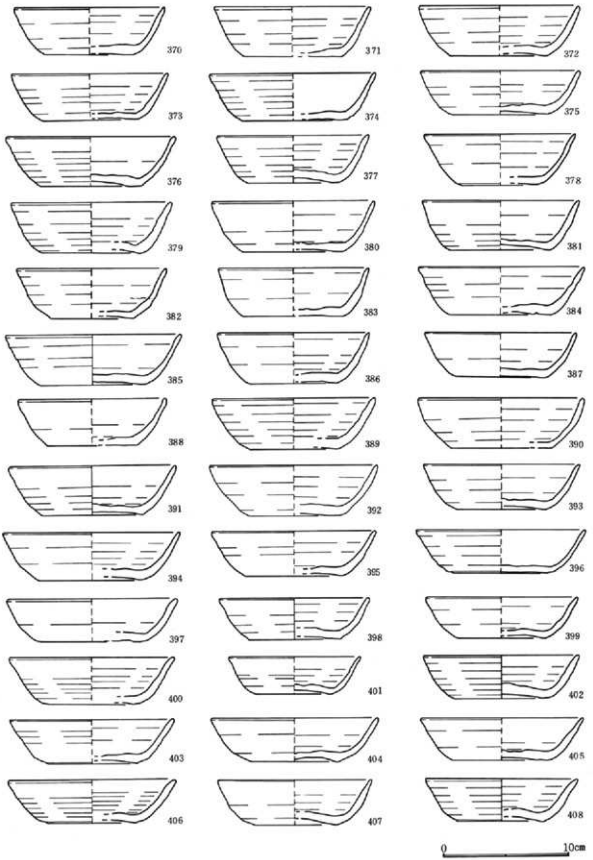
第95図　灰原出土遺物(7)



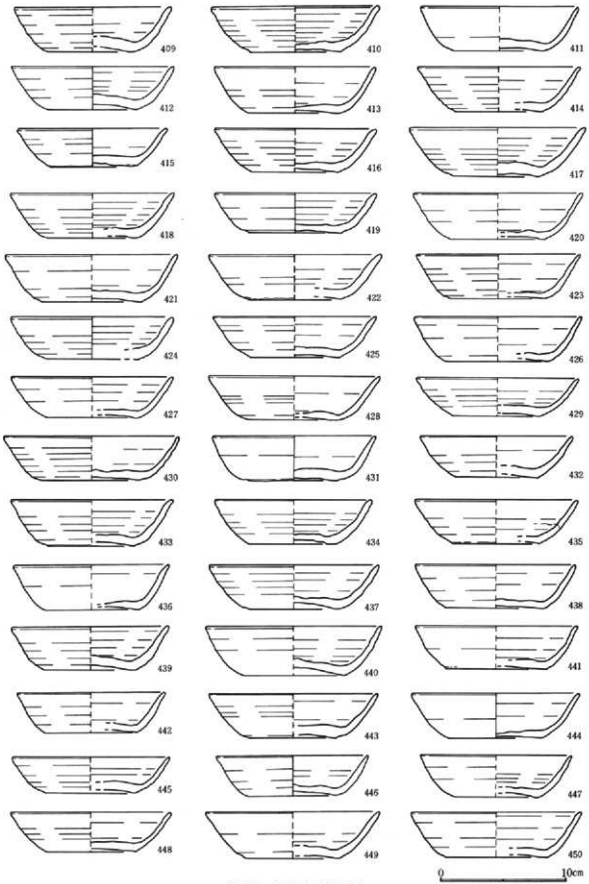
第96図　灰原出土遺物(8)



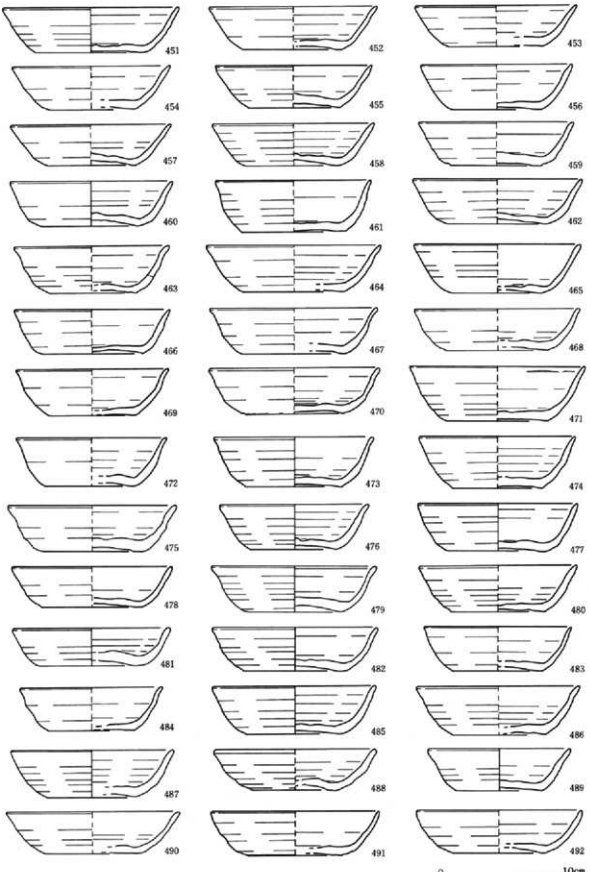
第97図　灰原出土遺物(9)



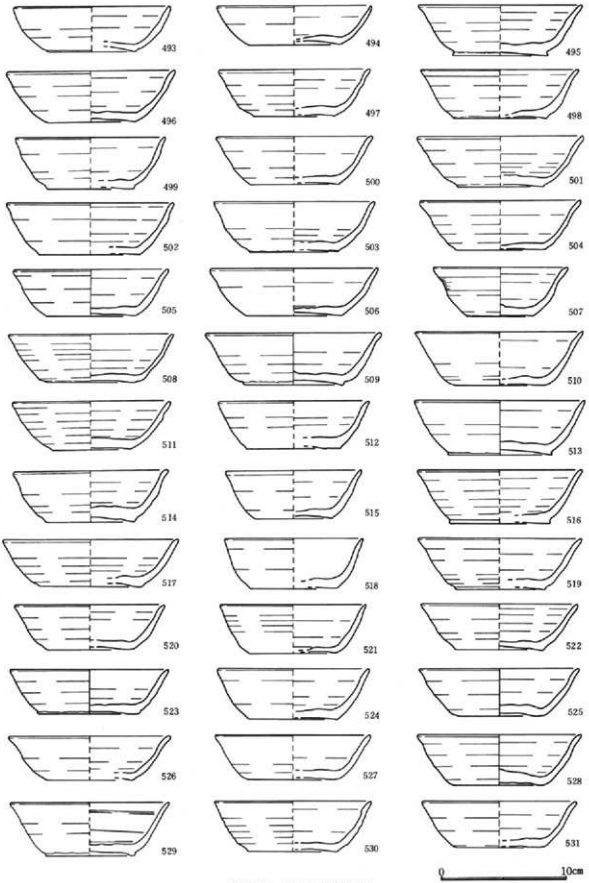
第98図　灰原出土遺物(10)



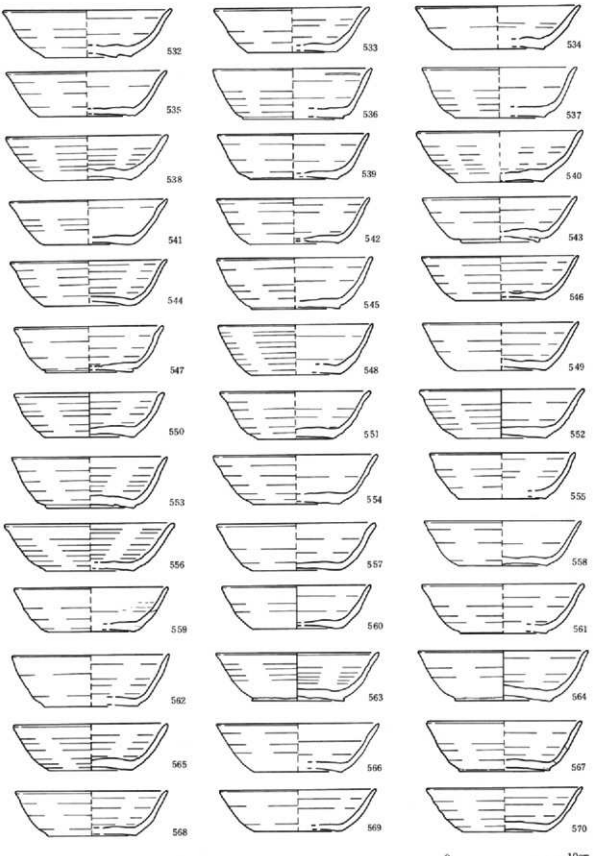
第99図　灰原出土遺物(1)



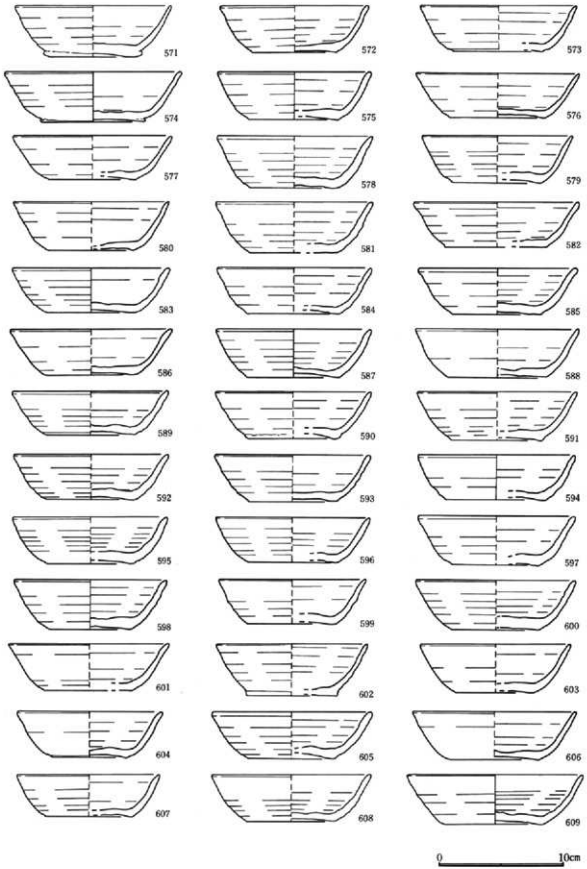
第100図　灰原出土遺物(2)



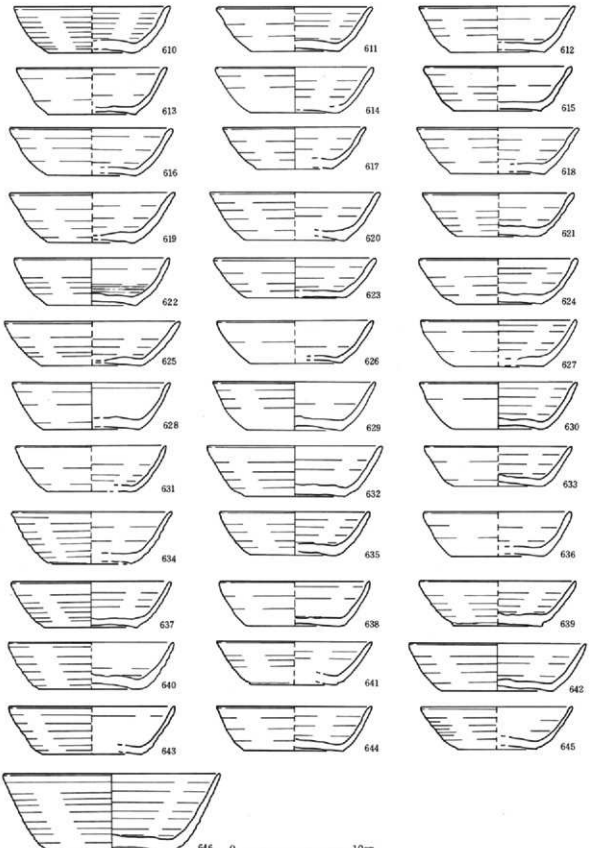
第101図　灰原出土遺物(Ⅲ)



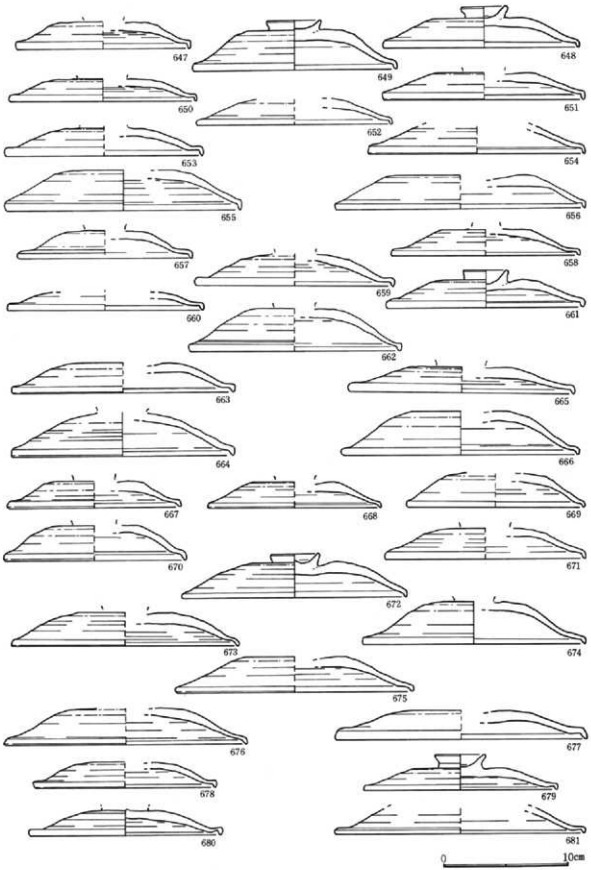
第102図　灰原出土遺物(4)



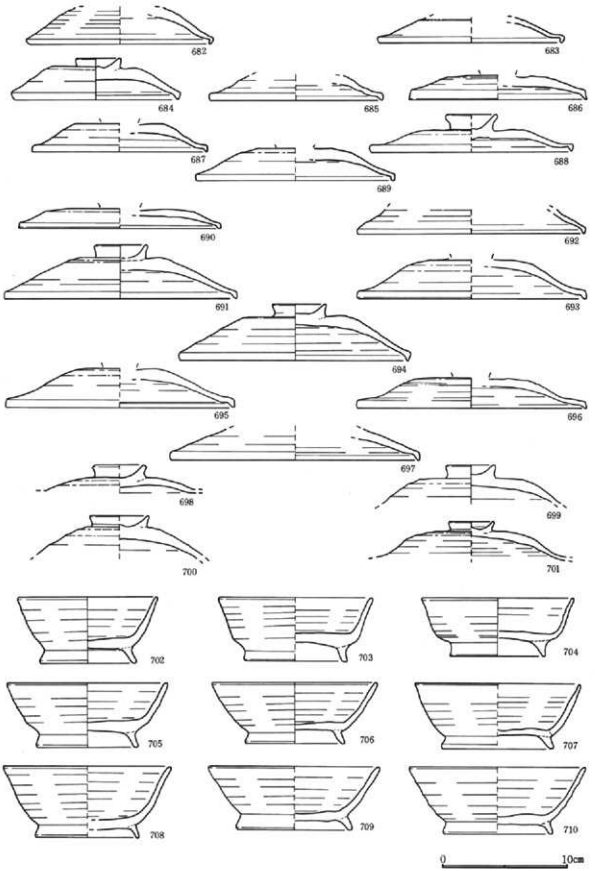
第103図　灰原出土遺物(5)



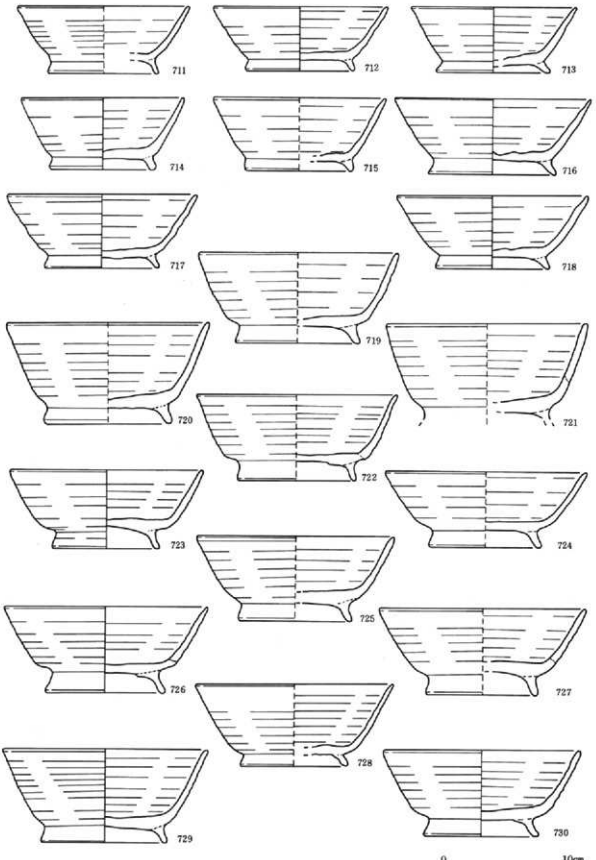
第104図　灰原出土遺物(6)



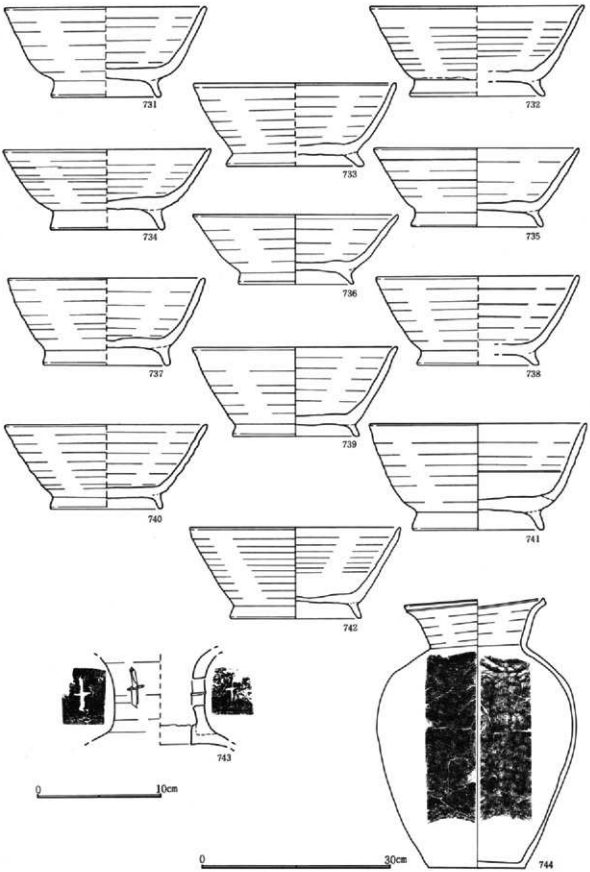
第105図　灰原出土遺物(17)



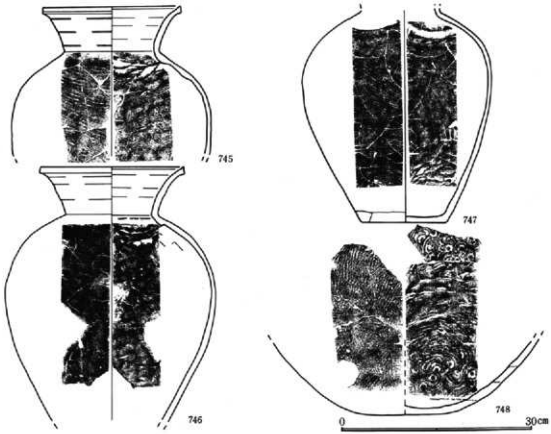
第106図　灰原出土遺物(8)



第107図　灰原出土遺物(9)



第108図　灰原出土遺物(2)



第109図　灰原出土遺物(2)

灰原出土遺物観察表(1)

№	器種	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
1	坏	14.0×8.2×3.6	褐灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り	⅓	
2	坏	13.5×8.0×3.7	灰	堅緻	砂粒多	回転糸切り　右回転	¼	
3	坏	13.2×7.4×3.6	鈍黄橙	良好	細砂粒	右回転糸切り　外面吸炭	½	重ね焼
4	坏	13.4×8.0×3.7	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転　轆轤目細強	¼	
5	坏	13.0×8.0×3.6	灰白	やや軟	密	回転糸切り　右回転　内外面吸炭	¼	
6	坏	13.4×8.0×3.8	灰	良好	砂粒多	右回転糸切り	½	
7	坏	13.0×7.3×3.4	灰白	良好	細砂粒	右回転糸切り　轆轤目細強	⅓	
8	坏	12.6×7.2×3.4	灰	堅緻	粗砂粒多	右回転糸切り　轆轤目強	⅓	
9	坏	13.2×7.4×3.6	灰	良好	粗白粒多	回転糸切り　右回転　轆轤目強	¼	
10	坏	12.0×7.0×3.5	灰白	良好	粗砂粒	右回転糸切り	½	
11	坏	13.4×8.0×3.5	鈍橙	やや軟	砂粒少	右回転糸切り　轆轤目細強	¼	
12	坏	12.6×7.6×3.5	灰	良好	砂粒多	右回転糸切り　轆轤目細強	½	
13	坏	13.0×7.0×3.5	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り	½	
14	坏	12.7×8.0×3.6	浅黄橙	やや軟	密	右回転糸切り　外面吸炭	¼	
15	坏	12.0×6.8×3.7	灰	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
16	坏	13.0×7.6×3.7	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り	½	
17	坏	14.0×8.0×4.1	暗褐	良好	粗砂粒	回転糸切り　右回転　轆轤目強　外吸炭	¼	重ね焼
18	坏	13.2×7.4×3.6	灰	良好	細砂粒	右回転糸切り	½	
19	坏	13.0×7.6×3.5	暗青灰	堅緻	細砂粒	回転糸切り　右回転	½	
20	坏	11.8×7.0×3.2	灰白	良好	粗砂粒多	右回転糸切り	¼	
21	坏	12.6×7.0×3.5	鈍青褐	良好	白粒多	回転糸切り　外面部凸凹	体部⅓	
22	坏	14.0×8.0×3.8	明褐灰	やや軟	細砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	¼	重ね焼
23	坏	12.4×7.0×3.6	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り　糸目粗　轆轤目強	½	
24	坏	13.0×7.6×3.8	灰白	やや軟	細砂粒	右回転糸切り　外面吸炭	¼	重ね焼
25	坏	12.8×7.8×3.4	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り	½	

灰原出土遺物観察表(2)

№	器種	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
26	坏	12.0×7.0×3.3	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り　糸目粗	½	
27	坏	13.6×8.0×3.8	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り	⅔	
28	坏	13.0×8.0×3.5	暗灰	堅緻	粗砂粒	回転糸切り　右回転	½	
29	坏	13.8×8.0×4.0	鈍褐	やや軟	粗白粒多	回転糸切り　右回転　外面吸炭　轆轤強	½	重ね焼
30	坏	13.2×7.2×3.8	灰白	良好	粗砂粒	右回転糸切り	⅔	
31	坏	13.1×7.1×3.8	鈍黄橙	やや軟	細砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	½	重ね焼
32	坏	12.0×7.0×3.3	暗灰	堅緻	微白粒多	回転糸切り　右回転　轆轤目細強	½	
33	坏	12.4×7.4×3.5	灰黄緑	良好	砂粒多	右回転糸切り	½	
34	坏	12.6×7.4×3.4	褐灰	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
35	坏	13.2×7.2×4.0	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り	⅔	
36	坏	12.8×8.0×3.4	灰白	良好	細砂粒	右回転糸切り　轆轤目細強	½	
37	坏	13.0×7.0×3.9	鈍黄橙	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	½	重ね焼
38	坏	12.0×7.0×3.7	灰白	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
39	坏	13.8×8.0×3.9	灰白	良好	細砂粒	右回転糸切り	½	
40	坏	14.1×8.0×4.0	灰	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転　轆轤目強	½	
41	坏	13.2×6.4×3.7	灰	良好	砂粒多	右回転糸切り　轆轤目細強	½	
42	坏	14.0×7.2×4.0	灰白	良好	粗砂粒多	右回転糸切り　轆轤目強	½	
43	坏	12.6×7.0×3.3	灰	良好	細砂粒	右回転糸切り	体部½	
44	坏	12.3×7.2×3.5	灰褐	堅緻	白粒多	右回転糸切り	½	
45	坏	12.2×7.2×3.6	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り	½	
46	坏	13.2×7.2×3.5	鈍黄橙	やや軟	砂粒多	右回転糸切り　外面吸炭	½	重ね焼
47	坏	12.2×7.0×3.5	灰白	良好	細砂粒	右回転糸切り　外面吸炭	½	重ね焼
48	坏	12.8×7.0×3.7	灰	堅緻	細砂粒	回転糸切り　右回転	½	
49	坏	14.0×8.0×3.7	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	½	
50	坏	12.2×7.0×3.4	灰白	良好	細砂礫少	右回転糸切り　見込・外面吸炭	⅓	重ね焼
51	坏	12.6×7.0×3.6	鈍黄橙	やや軟	細砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	½	重ね焼
52	坏	12.4×7.0×3.5	灰白	良好	粗砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
53	坏	12.0×7.0×3.2	灰	良好	細砂粒	右回転糸切り	½	
54	坏	12.0×7.0×3.7	灰	良好	砂粒多	右回転糸切り	½	
55	坏	12.0×7.0×3.0	灰	堅緻	細砂粒	回転糸切り　右回転	½	
56	坏	12.4×7.0×3.7	灰	良好	白粒多	回転糸切り　右回転　火膨痕	½	
57	坏	13.6×8.0×3.9	灰	良好	粗白粒多	右回転糸切り	½	
58	坏	14.0×8.0×4.0	灰黄橙	やや軟	粗白粒多	回転糸切り　右回転　外面吸炭	½	重ね焼
59	坏	12.6×7.0×3.5	灰	良好	砂粒多	右回転糸切り　底部2度切り？	½	
60	坏	13.4×7.0×3.8	灰	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転　底部糸出入高低？	½	
61	坏	12.0×7.0×3.5	鈍黄橙	やや軟	細砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	½	重ね焼
62	坏	12.8×7.4×3.6	灰黄褐	やや軟	砂粒少	右回転糸切り　外面吸炭	½	重ね焼
63	坏	12.6×7.0×3.7	灰白	良好	密	回転糸切り　右回転　外面吸炭	½	重ね焼
64	坏	12.0×7.0×3.1	青灰	堅緻	粗砂粒	回転糸切り　右回転	½	
65	坏	13.0×7.6×3.5	黄灰	堅緻	粗砂粒多	右回転糸切り	½	
66	坏	12.6×7.0×3.8	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	½	重ね焼
67	坏	12.6×6.6×3.3	青灰	堅緻	粗砂粒多	右回転糸切り　底部3度切りか出入高低	½	
68	坏	12.6×7.4×3.6	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	½	
69	坏	12.2×6.8×3.6	鈍黄橙	良好	砂粒多	右回転糸切り　轆轤目強	½	
70	坏	13.0×8.0×3.9	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	½	
71	坏	13.8×7.4×3.8	灰白	良好	粗白粒多	回転糸切り　糸目粗　右回転	½	
72	坏	12.6×7.2×3.5	灰	堅緻	砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
73	坏	12.6×7.6×3.2	灰	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
74	坏	12.9×7.3×3.6	灰白	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転　外面吸炭	½	重ね焼
75	坏	12.6×7.0×3.6	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転　轆轤目強	½	
76	坏	12.6×7.0×3.7	灰	良好	細砂粒	右回転糸切り	体部½	
77	坏	12.8×7.0×3.9	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り　糸の出入りに高低	⅓	
78	坏	12.4×7.0×3.5	灰黄	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
79	坏	12.4×7.0×3.7	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	½	
80	坏	12.4×7.8×3.4	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	½	
81	坏	12.6×7.2×3.6	灰	良好	砂粒多	回転糸切り　糸目粗　右回転	½	重ね焼
82	坏	11.4×7.0×3.6	灰白	良好	粗砂粒	回転糸切り　糸目粗　右回転	½	
83	坏	13.0×7.0×3.6	灰	堅緻	細砂粒	右回転糸切り　底部微凸	½	
84	坏	12.6×6.9×3.7	灰白	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
85	坏	11.2×7.0×3.6	鈍橙	やや軟	粗砂粒多	右回転糸切り　轆轤目強	½	

灰原出土遺物観察表(3)

№	器種	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
86	坏	12.0×7.0×3.4	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り　轆轤目強	¼	
87	坏	12.6×7.2×3.5	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	¼	
88	坏	12.0×6.6×3.5	鈍褐	やや軟	細粗砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	¼	重ね焼
89	坏	12.4×7.0×3.3	灰	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	¼	
90	坏	13.0×7.0×3.7	灰	良好	砂粒多	右回転糸切り	¼	
91	坏	12.4×7.4×3.4	青灰	堅緻	細砂粒	回転糸切り　右回転	¼	
92	坏	11.5×7.0×3.2	浅黄橙	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	¼	
93	坏	11.8×7.3×3.2	灰黄橙	堅緻	粗砂粒多	右回転糸切り	¼	
94	坏	13.2×8.0×3.6	灰白	良好	細砂粒	右回転糸切り　轆轤目細強	¼	
95	坏	13.8×8.0×3.5	青灰	堅緻	砂粒多	回転糸切り　右回転	¼	
96	坏	12.4×8.0×3.6	灰白	良好	細土	回転糸切り　右回転　轆轤目細強	¼	重ね焼
97	坏	12.4×7.0×3.7	灰	良好	細土	回転糸切り　右回転	¼	
98	坏	14.0×7.0×3.9	灰	良好	密	回転糸切り　右回転　轆轤目強	¼	
99	坏	11.2×6.4×3.4	暗青灰	堅緻	砂粒多	回転糸切り　右回転	¼	
100	坏	12.4×7.0×3.6	灰白	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	¼	
101	坏	12.6×7.0×3.7	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転　轆轤目やや強	¼	
102	坏	12.0×6.5×3.7	黄灰	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転　轆轤目やや強	¼	
103	坏	13.0×7.2×3.9	灰	良好	砂粒多	右回転糸切り	¼	
104	坏	12.4×6.8×3.7	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	¼	
105	坏	13.6×7.6×3.7	鈍黄褐	やや軟	砂粒多	右回転糸切り　轆轤目強　外面吸炭	¼	重ね焼
106	坏	13.2×7.0×4.2	灰	良好	密	回転糸切り　右回転　轆轤目強	¼	
107	坏	12.8×7.0×3.9	灰白	良好	細砂粒	右回転糸切り	¼	
108	坏	13.0×7.0×3.8	灰白	堅緻	細砂粒	回転糸切り　右回転	¼	
109	坏	13.4×7.0×3.6	灰	堅緻	砂粒多	回転糸切り　右回転	¼	
110	坏	13.6×7.0×3.8	灰	良好	細砂粒	右回転糸切り　轆轤目強	¼	
111	坏	12.4×7.0×3.6	灰白	良好	細砂粒	右回転糸切り	¼	
112	坏	12.4×7.0×3.6	灰白	良好	細砂粒	右回転糸切り　外面吸炭	¼	重ね焼
113	坏	11.8×6.5×3.5	暗青灰	堅緻	細砂粒	回転糸切り	¼	
114	坏	12.0×6.2×3.7	灰白	良好	粗砂粒	右回転糸切り　轆轤目強	¼	
115	坏	12.0×7.0×3.5	灰	堅緻	粗砂粒	回転糸切り　右回転	¼	
116	坏	12.2×7.0×3.7	鈍黄褐	やや軟	細砂粒	右回転糸切り　轆轤目強　外面吸炭	¼	重ね焼
117	坏	14.1×8.0×3.7	鈍褐	やや軟	砂粒多	回転糸切り　右回転　外面吸炭	¼	重ね焼
118	坏	13.2×7.0×4.0	鈍黄橙	やや軟	密	回転糸切り　右回転	¼	
119	坏	13.0×7.0×3.6	褐灰	やや軟	細砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	¼	
120	坏	13.2×7.4×3.7	灰黄	良好	密	回転糸切り　右回転　轆轤目強	¼	
121	坏	11.2×6.0×3.5	灰	堅緻	砂粒多	回転糸切り　右回転　轆轤目強	¼	
122	坏	13.4×7.4×3.7	鈍黄橙	やや軟	細砂粒	回転糸切り　右回転　轆轤目強　外吸炭	¼	重ね焼
123	坏	13.6×7.4×4.0	灰	良好	粗砂粒	右回転糸切り　轆轤目強	⅓	
124	坏	13.4×6.8×4.2	灰	良好	砂粒顕多	右回転糸切り　轆轤目強	½	
125	坏	12.8×7.4×4.0	灰白	良好	細砂粒	右回転糸切り	¼	
126	坏	12.6×6.0×4.1	灰黄	良好	粗白粒多	回転糸切り　右回転　外面吸炭	¼	重ね焼
127	坏	12.2×7.0×3.6	灰白	良好	細砂微少	回転糸切り　右回転　外面吸炭	¼	重ね焼
128	坏	13.0×7.0×3.9	灰	良好	粗砂粒	回転糸切り　右回転　轆轤目強	¼	
129	坏	13.4×8.0×4.0	灰	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転　轆轤目強	体部½	
130	坏	12.0×6.5×3.7	灰	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転　轆轤目強	½	
131	坏	12.0×7.0×3.4	灰	良好	細砂粒	右回転糸切り　轆轤目強	¼	
132	坏	12.9×7.8×3.7	灰	良好	粗砂粒多	右回転糸切り	½	
133	坏	12.6×7.5×4.0	灰白	良好	細砂粒	右回転糸切り　外面吸炭	¼	重ね焼
134	坏	12.4×7.8×3.8	灰白	やや軟	砂粒多	右回転糸切り　轆轤目やや強	¼	
135	坏	12.4×7.0×3.5	灰	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	¼	
136	坏	14.0×8.0×4.0	灰白	良好	粗砂粒多	右回転糸切り　轆轤目細やや強	¼	
137	坏	12.4×7.0×3.9	鈍褐	やや軟	微白粒多	回転糸切り　右回転　外面吸炭	¼	重ね焼
138	坏	13.0×7.0×3.8	灰黄	やや軟	粗白粒多	回転糸切り　右回転　外面吸炭	¼	重ね焼
139	坏	13.0×7.0×3.8	灰	良好	砂粗砂粒	回転糸切り　右回転　轆轤目やや強	½	
140	坏	13.6×8.0×3.9	灰	良好	細砂粒	右回転糸切り　轆轤目細強	½	
141	坏	12.2×7.4×3.6	鈍淡黄	やや軟	細砂粒	右回転糸切り　糸目粗	½	
142	坏	12.6×7.0×3.8	鈍褐	やや軟	細砂粒	回転糸切り　外面吸炭	½	重ね焼
143	坏	12.2×6.9×3.7	灰	良好	細砂微少	右回転糸切り　轆轤目細やや強	½	
144	坏	14.0×7.0×3.7	灰	良好	細砂粒	回転糸切り　轆轤目細強	½	
145	坏	12.2×6.1×3.2	灰	堅緻	粗砂粒多	右回転糸切り　轆轤目強	½	

灰原出土遺物観察表(4)

№	器種	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
146	坏	12.6×7.0×3.6	淡黄	やや軟	細砂粒	右回転糸切り	¼	
147	坏	13.2×7.0×3.6	暗青灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り　轆轤目強	½	
148	坏	13.0×7.0×3.6	褐灰	良好	細砂粒	右回転糸切り	½	
149	坏	12.1×7.0×3.6	灰	堅緻	粗砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
150	坏	12.8×7.0×3.6	灰白				¼	
151	坏	12.2×6.4×3.6	灰	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転　轆轤目強	¼	
152	坏	13.3×7.2×3.8	灰白	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
153	坏	12.8×7.2×3.5	鈍黄橙	やや軟	砂粒多	回転糸切り　右回転　外面吸炭	½	重ね焼
154	坏	12.6×7.0×4.8	灰白	良好	密	回転糸切り　右回転　轆轤目やや強	½	
155	坏	12.2×6.4×3.6	灰	堅緻	粗砂粒多	右回転糸切り　轆轤目やや強	½	
156	坏	12.0×6.0×3.3	灰	堅緻	砂粒多	回転糸切り　右回転　轆轤目やや強	¼	
157	坏	13.0×7.0×3.5	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	½	
158	坏	13.4×6.8×3.6	鈍褐	やや軟	細砂粒	右回転糸切り　外面吸炭	¼	重ね焼
159	坏	12.1×7.0×3.7	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転　内外面吸炭	½	重ね焼
160	坏	14.0×8.0×3.6	灰	堅緻	細砂粒	回転糸切り　右回転　轆轤目強　外吸炭	¼	重ね焼
161	坏	12.4×7.4×3.6	灰黄	やや軟	細砂粒	右回転糸切り　外面吸炭	½	重ね焼
162	坏	12.0×7.0×3.5	灰白	堅緻	密	回転糸切り　右回転	¼	
163	坏	13.0×7.6×3.7	灰白	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転　外面吸炭	½	重ね焼
164	坏	12.6×7.0×3.8	灰	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	¼	
165	坏	12.8×7.0×3.8	灰	良好	粗砂粒多	右回転糸切り	⅔	
166	坏	13.6×7.0×3.7	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	¼	重ね焼
167	坏	13.0×7.0×3.5	暗灰	堅緻	細砂粒	右回転糸切り	½	
168	坏	12.6×7.0×3.3	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	¼	
169	坏	11.8×6.0×3.2	青灰	堅緻	細白粒多	右回転糸切り　轆轤目強	¼	
170	坏	11.8×6.2×3.5	青灰	堅緻	細白粒多	右回転糸切り　轆轤目強	¼	
171	坏	12.6×7.0×3.5	鈍橙	軟	粗白粒多	右回転糸切り　轆轤目強	¼	
172	坏	11.8×6.2×3.4	灰白	良好	粗砂粒	右回転糸切り	¼	
173	坏	12.2×6.6×3.4	鈍黄橙	やや軟	細砂粒	回転糸切り　右回転	½	
174	坏	12.8×7.0×3.5	灰白	良好	粗砂粒多	回転糸切り　右回転	¼	
175	坏	13.0×7.4×3.4	灰	良好	粗砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
176	坏	12.4×7.0×3.3	灰白	良好	粗砂粒	回転糸切り　右回転	¼	
177	坏	13.0×7.0×3.7	鈍黄橙	やや軟	細砂粒	右回転糸切り	¼	
178	坏	12.6×7.0×3.5	灰	良好	粗砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
179	坏	11.6×6.0×3.4	暗青灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り　轆轤目やや強	½	
180	坏	13.0×7.0×4.2	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	¼	重ね焼
181	坏	11.7×6.0×3.4	灰					
182	坏	12.0×6.6×3.6	灰	良好	粗砂粒	右回転糸切り	½	
183	坏	12.5×7.0×3.6	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転　轆轤目強　外吸炭	¼	重ね焼
184	坏	12.2×6.0×3.3	灰	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転　轆轤目強	½	
185	坏	12.0×6.6×3.7	灰黄緑	堅緻	細砂粒	右回転糸切り　底部2度切り	¼	
186	坏	12.0×7.0×3.2	暗青灰	堅緻	粗白粒多	回転糸切り　右回転	¼	
187	坏	12.6×7.0×3.7	灰白	良好	細砂粒	右回転糸切り　糸目粗	½	
188	坏	13.0×7.2×3.5	灰白	やや軟	細砂粒	右回転糸切り　轆轤目やや強	½	
189	坏	12.6×7.0×3.6	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り	½	
190	坏	12.0×7.0×3.7	淡橙	やや軟	微白粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	¼	重ね焼
191	坏	12.0×6.8×3.6	青灰	堅緻	粗砂粒少	右回転糸切り　轆轤目強い	½	
192	坏	11.4×5.8×3.6	灰褐	堅緻	砂粒多	右回転糸切り　轆轤目強	¼	
193	坏	12.0×7.0×3.7	灰	良好	砂粒多	右回転糸切り	½	
194	坏	12.8×6.0×3.8	灰	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	½	重ね焼
195	坏	13.0×7.2×3.9	鈍黄橙	やや軟	細砂粒	右回転糸切り　外面吸炭	½	重ね焼
196	坏	11.5×6.2×3.5	灰	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転　轆轤目強	¼	
197	坏	13.7×7.5×3.9	灰白	良好	粗砂粒少	右回転糸切り　糸目粗　轆轤目やや強	½	
198	坏	12.2×6.0×3.6	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り　底部微凸	½	
199	坏	12.0×6.8×3.7	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	¼	重ね焼
200	坏	11.8×7.0×3.5	灰	良好	細砂粒	右回転糸切り　轆轤目細強	½	
201	坏	12.4×7.0×3.6	灰黄	やや軟	微白粒	回転糸切り　右回転　底部切直し？	¼	
202	坏	12.3×7.0×4.1	灰白	軟	砂粒多	回転糸切り　右回転　轆轤目強	¼	
203	坏	12.0×7.0×3.5	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	½	
204	坏	13.0×7.0×3.6	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	¼	
205	坏	12.2×7.0×3.8	灰白	やや軟	細砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	¼	

灰原出土遺物観察表(5)

No	器種	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
206	坏	12.8×7.6×3.7	灰	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転　内外面吸炭	5/6	重ね焼
207	坏	13.2×6.8×3.4	青灰	堅緻	微白粒多	回転糸切り　右回転	1/4	
208	坏	12.4×6.8×3.6	灰	堅緻	粗砂粒多	右回転糸切り　轆轤目強	1/6	
209	坏	14.6×6.6×3.0	灰	堅緻	細砂粒	右回転糸切り　２次被熱	1/4	
210	坏	12.8×6.9×3.0	灰	良好	砂粒多	右回転糸切り	1/6	
211	坏	13.6×7.0×3.4	灰白	やや軟	細砂粒	右回転糸切り　外面吸炭	1/6	重ね焼
212	坏	12.8×7.0×3.0	鈍橙	軟	砂粒多	右回転糸切り	1/4	
213	坏	12.6×7.0×2.9	暗青灰	堅緻	粗白粒多	右回転糸切り	1/4	
214	坏	14.0×7.4×3.5	暗灰	堅緻	微白粒多	回転糸切り　右回転	1/4	
215	坏	13.6×8.0×3.0	灰	堅緻	粗砂粒	右回転糸切り　轆轤目細強	1/6	
216	坏	13.0×7.0×3.3	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	1/4	
217	坏	14.0×7.0×3.3	灰	堅緻	細砂粒	回転糸切り　右回転	1/4	
218	坏	13.0×8.0×3.0	灰黄	やや軟	細砂粒	回転糸切り　右回転	5/6	
219	坏	12.6×7.0×3.2	暗灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り　轆轤目やや強	1/6	
220	坏	13.2×7.2×3.3	灰	良好	粗砂粒多	右回転糸切り	1/4	
221	坏	13.0×7.2×3.2	灰	堅緻	粗砂粒少	右回転糸切り	1/4	重ね焼
222	坏	13.0×7.0×3.3	灰	堅緻	粗砂粒	回転糸切り　右回転	1/4	
223	坏	13.8×8.0×3.4	灰白	良好	細砂礫少	右回転糸切り　轆轤目強	1/6	
224	坏	13.4×7.0×3.5	灰白	良好	細砂粒	右回転糸切り　外面吸炭	1/4	重ね焼
225	坏	13.6×7.6×3.5	灰	良好	粗砂粒多	右回転糸切り　轆轤目強	1/6	
226	坏	13.6×7.0×3.6	灰	良好	細砂粒	右回転糸切り	1/6	
227	坏	14.0×7.0×3.9	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	1/4	
228	坏	12.8×7.4×3.2	灰	良好	細砂粒	右回転糸切り	1/4	
229	坏	12.7×7.0×3.3	灰白	良好	細砂粒	右回転糸切り	1/4	
230	坏	14.0×8.2×3.5	灰白	良好	粗白粒多	右回転糸切り	1/4	
231	坏	10.4×6.0×3.8	灰褐	やや軟	密	回転糸切り　右回転　外面吸炭	1/4	重ね焼
232	坏	12.0×7.0×3.9	鈍黄灰	やや軟	細砂粒	回転糸切り　右回転	1/4	
233	坏	13.7×7.5×4.2	灰白	良好	粗砂粒	右回転糸切り　轆轤目細強	1/4	
234	坏	10.4×6.0×3.5	灰黄	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	1/4	
235	坏	12.0×7.0×3.9	灰白	やや軟	砂粒多	回転糸切り　右回転　外面吸炭	1/4	重ね焼
236	坏	12.8×8.0×4.1	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転　内面吸炭	1/4	
237	坏	10.6×7.0×3.7	灰白	良好	密	右回転糸切り　外面吸炭	1/4	重ね焼
238	坏	12.0×7.6×3.9	鈍黄橙	やや軟	細砂粒	回転糸切り　右回転	1/6	
239	坏	13.0×8.0×4.3	灰	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	1/4	
240	坏	11.6×7.0×4.0	灰	堅緻	細砂粒	回転糸切り　右回転　火襷あり	1/4	
241	坏	12.3×7.2×4.0	灰褐	堅緻	砂粒多	回転糸切り　右回転　轆轤目強	5/6	
242	坏	14.2×8.5×4.2	灰黄褐	やや軟	細白粒多	回転糸切り　糸目粗　右回転　外面吸炭	1/4	重ね焼
243	坏	11.2×6.2×3.6	暗青灰	堅緻	粗砂粒多	右回転糸切り	1/4	
244	坏	12.8×8.0×3.8	灰	堅緻	粗砂粒多	回転糸切り　右回転	1/4	
245	坏	13.6×8.4×4.1	鈍褐	やや軟	粗砂粒多	右回転糸切り　轆轤目細強　外面吸炭	1/4	重ね焼
246	坏	11.6×6.6×3.9	灰白	良好	粗及粒	回転糸切り　右回転	1/4	
247	坏	12.0×7.0×3.7	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	1/4	重ね焼
248	坏	12.0×7.0×3.8	鈍黄橙	やや軟	細砂礫少	右回転糸切り	1/4	
249	坏	13.2×6.8×4.0	灰	堅緻	細砂粒	右回転糸切り　轆轤目細強	1/4	
250	坏	11.8×6.8×3.8	鈍黄橙	やや軟	細砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	1/4	重ね焼
251	坏	12.3×7.4×3.9	灰白	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	1/4	
252	坏	12.3×7.2×3.8	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り	1/6	
253	坏	11.8×7.0×3.5	青灰	堅緻	砂粒多	回転糸切り　右回転　轆轤目強	1/4	
254	坏	12.2×7.0×4.1	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	1/4	
255	坏	12.0×7.8×3.6	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り	1/6	
256	坏	12.2×7.0×3.8	灰黄	やや軟	細砂粒	右回転糸切り　外面吸炭	1/4	重ね焼
257	坏	12.3×7.3×3.8	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	1/4	重ね焼
258	坏	13.4×8.0×4.1	灰白	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転　轆轤目細やや強	1/4	
259	坏	12.4×7.0×4.1	鈍黄橙	やや軟	粗砂粒多	回転糸切り　右回転　外面吸炭	1/4	重ね焼
260	坏	12.4×7.0×4.0	暗灰黄	やや軟	粗白粒多	右回転糸切り　轆轤目やや強　外面吸炭	1/4	重ね焼
261	坏	12.4×7.0×4.1	灰白	良好	粗白粒多	右回転糸切り　轆轤目強	1/4	
262	坏	13.1×7.3×4.1	鈍黄橙	やや軟	細砂粒	右回転糸切り　轆轤目細強　内外面吸炭	1/4	重ね焼
263	坏	13.4×7.0×4.2	鈍黄橙	軟	赤褐粒多	右回転糸切り	1/4	
264	坏	11.8×7.2×4.0	鈍黄橙	堅緻	砂粒多	回転糸切り　右回転	1/4	
265	坏	12.6×7.6×4.0	灰	堅緻	砂粒多	回転糸切り　右回転	1/4	

灰原出土遺物観察表(6)

№	器種	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
266	坏	12.6×6.8×4.5	灰白	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転　轆轤目細強	¼	
267	坏	12.2×7.0×4.1	灰白	良好	粗白粒多	右回転糸切り	½	
268	坏	12.7×7.2×4.2	灰	良好	砂粒多	右回転糸切り　火襷痕あり	¾	
269	坏	12.0×7.0×3.7	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	½	
270	坏	12.4×7.4×3.9	鈍黄橙	やや軟	細砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	½	重ね焼
271	坏	13.0×8.0×4.2	鈍黄橙	やや軟	砂粒多	右回転糸切り　外面吸炭	½	
272	坏	12.0×7.0×4.1	灰白	良好	粗砂粒少	右回転糸切り	¼	
273	坏	12.4×7.0×4.1	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	¼	
274	坏	12.0×7.0×3.8	灰白	やや軟	細砂粒	回転糸切り　右回転	¼	
275	坏	12.8×7.0×4.0	灰白	やや軟	砂粒多	回転糸切り　右回転	¼	
276	坏	13.2×8.0×3.8	暗青灰	堅緻	微白粒多	回転糸切り　右回転　内面轆轤目強	¼	
277	坏	11.2×7.0×3.9	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	¼	
278	坏	11.4×6.2×3.9	灰	良好	細砂粒	右回転糸切り　轆轤目強	½	
279	坏	12.0×7.0×4.0	浅黄	良好	密	回転糸切り　右回転　轆轤目強	¼	
280	坏	11.6×6.8×3.6	青灰	堅緻	砂粒多	回転糸切り　右回転	¼	
281	坏	12.4×7.0×4.0	灰白	やや軟	細砂粒	右回転糸切り	¼	
282	坏	13.2×7.0×4.3	灰	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	¼	
283	坏	12.0×7.0×3.9	明赤褐	やや軟	緻密	右回転糸切り	¼	
284	坏	13.2×8.2×3.9	灰	良好	粗白粒多	回転糸切り　右回転	⅔	
285	坏	11.8×6.6×3.9	鈍橙	やや軟	砂粒多	右回転糸切り	¼	
286	坏	12.2×7.2×3.6	灰白	良好	粗白粒多	右回転糸切り	½	
287	坏	12.6×8.0×3.7	灰	良好	粗砂粒多	右回転糸切り	½	
288	坏	12.2×8.0×3.5	灰白	良好	粗砂粒	右回転糸切り	¼	
289	坏	12.0×7.0×3.7	灰白	良好	粗白粒多	右回転糸切り	½	
290	坏	13.0×8.2×4.0	鈍橙	軟	粗白粒多	回転糸切り　糸目粗　右回転	½	
291	坏	12.6×8.0×3.8	灰	良好	粗砂粒	回転糸切り　右回転	½	
292	坏	13.0×8.0×3.9	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り　火襷痕あり	¼	
293	坏	12.4×8.0×3.5	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転　外面弱吸炭	½	重ね焼
294	坏	13.2×8.0×3.8	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　糸目粗　右回転	½	
295	坏	13.0×8.0×3.8	灰	良好	砂粒多	右回転糸切り　轆轤目細やや強	½	
296	坏	12.8×8.0×3.7	黄緑灰	堅緻	粗砂粒多	回転糸切り　右回転	¼	
297	坏	13.2×8.0×3.9	青灰	堅緻	粗砂粒多	右回転糸切り	¼	
298	坏	12.6×8.0×4.7	暗灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り	¼	
299	坏	13.0×8.0×3.6	黄灰	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭　底微凸	½	重ね焼
300	坏	12.0×7.0×3.6	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転　内外吸炭	⅔	重ね焼
301	坏	12.0×7.0×3.6	灰	良好	砂粒多	右回転糸切り	½	
302	坏	13.3×8.2×3.8	鈍黄橙	良好	粗白粗多	右回転糸切り　外面吸炭	½	重ね焼
303	坏	12.6×8.0×3.7	灰白	良好	粗砂粒多	右回転糸切り　底外面吸炭	½	
304	坏	11.8×7.0×3.6	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	¼	重ね焼
305	坏	13.0×8.0×3.7	灰白	良好	細砂礫少	右回転糸切り	½	
306	坏	13.0×8.0×3.8	灰	良好	粗砂粒多	右回転糸切り	¼	
307	坏	12.4×7.0×3.6	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	¼	
308	坏	12.6×7.4×3.7	暗灰	堅緻	粗砂粒多	右回転糸切り	½	
309	坏	12.6×7.4×3.7	灰	堅緻	粗砂粒少	右回転糸切り　糸目粗	½	
310	坏	12.0×7.0×3.5	灰黄緑	堅緻	粗砂粒	回転糸切り　右回転	½	
311	坏	12.3×7.0×3.7	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	¼	重ね焼
312	坏	12.2×7.0×3.6	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　外面吸炭	½	重ね焼
313	坏	12.8×7.6×3.8	灰黄	やや軟	細砂粒	右回転糸切り　糸目粗　外面吸炭	½	重ね焼
314	坏	14.0×7.0×3.9	灰黄	良好	微白粒	回転糸切り　右回転	¼	
315	坏	13.6×8.0×4.1	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	½	重ね焼
316	坏	13.6×8.0×4.3	灰黄	やや軟	粗砂粒多	回転糸切り　右回転　轆轤目細強	½	重ね焼
317	坏	15.2×8.0×4.2	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り　轆轤目やや強	½	
318	坏	13.6×8.0×4.0	鈍橙	やや軟	白粒多	右回転糸切り　外面吸炭	½	重ね焼
319	坏	13.6×8.0×3.5	灰	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転　轆轤目細強	¼	
320	坏	13.0×7.4×4.2	灰	良好	粗砂粒多	回転糸切り　右回転　轆轤目細強	½	
321	坏	12.2×7.4×3.6	灰	良好	細砂粒	右回転糸切り　轆轤目強い	¼	
322	坏	12.4×7.6×3.6	青灰	堅緻	細砂粒	回転糸切り　右回転	½	
323	坏	12.0×7.4×3.7	灰白	良好	粗砂粒	右回転糸切り	¼	
324	坏	10.0×6.0×4.0	黄緑灰	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	¼	
325	坏	12.4×6.8×3.8	灰	堅緻	小礫少	右回転糸切り	½	

灰原出土遺物観察表(7)

№	器種	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
326	坏	13.0×8.0×4.0	灰	良好	粗白粒多	右回転糸切り	½	
327	坏	12.0×7.0×4.1	鈍黄橙	やや軟	砂粒多	回転糸切り　右回転	¼	
328	坏	12.8×7.0×4.0	灰白	良好	密	回転糸切り　右回転　轆轤目強	¼	
329	坏	13.2×7.4×4.0	灰白	良好	細砂粒	右回転糸切り　外面吸炭	½	重ね焼
330	坏	11.4×6.0×3.7	灰白	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	¼	
331	坏	12.8×7.8×4.2	暗灰	堅緻	細砂粒	回転糸切り　右回転　底部微凸	¼	
332	坏	12.0×7.0×3.8	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	¼	
333	坏	13.4×7.0×4.0	暗褐	やや軟	細砂粒	回転糸切り　右回転　轆轤目強　外吸炭	¼	重ね焼
334	坏	12.2×7.8×3.7	灰黄	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	¼	
335	坏	12.0×7.4×3.9	灰黄	良好	細砂粒	右回転糸切り	¼	
336	坏	13.0×8.0×3.8	灰黄	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転　外面吸炭	¼	重ね焼
337	坏	13.3×7.9×3.9	灰黄	良好	粗砂粒多	右回転糸切り　轆轤目細強	½	
338	坏	11.6×6.0×3.6	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	¼	
339	坏	13.2×7.6×4.0	鈍黄褐	やや軟	白粒多	回転糸切り　右回転　外面吸炭	¼	重ね焼
340	坏	13.0×7.0×3.8	暗青灰	堅緻	砂粒多	回転糸切り　右回転	¼	
341	坏	14.0×7.6×4.2	灰白	良好	小礫多	右回転糸切り　底部２度切り	½	
342	坏	13.2×8.0×3.8	灰	堅緻	粗砂粒少	回転糸切り　糸目粗　右回転	¼	
343	坏	11.4×6.6×3.7	灰	堅緻	砂粒多	回転糸切り　右回転　轆轤目強	¼	
344	坏	14.0×9.0×4.0	黒灰	やや軟	密	回転糸切り　右回転　轆轤目やや強	½	重ね焼
345	坏	12.1×7.0×3.9	灰白	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転　糸目粗　底部微凸	½	
346	坏	12.4×7.8×3.9	灰	良好	砂粒多	右回転糸切り	¼	
347	坏	13.2×7.8×4.1	灰白	やや軟	密	回転糸切り　右回転　内面吸炭	¼	再被熱
348	坏	12.4×7.8×3.6	灰	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	½	
349	坏	12.0×7.4×4.0	鈍黄橙	良好	細砂粒	右回転糸切り　外面吸炭	¼	重ね焼
350	坏	12.4×7.0×3.8	灰	良好	粗砂粒多	右回転糸切り	¼	
351	坏	13.0×7.0×3.8	黄灰	良好	粗砂粒多	回転糸切り　右回転　外面吸炭	¼	重ね焼
352	坏	12.0×7.8×3.6	灰	堅緻	粗砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
353	坏	11.6×7.0×3.5	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　糸目粗　右回転	¼	
354	坏	12.4×6.8×3.8	灰白	やや軟	砂粒多	回転糸切り　右回転	⅓	
355	坏	12.1×7.3×3.7	灰	堅緻	粗砂粒多	右回転糸切り	¼	
356	坏	12.0×7.4×3.3	灰白	やや軟	細砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	¼	重ね焼
357	坏	12.3×7.0×3.7	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	¼	
358	坏	12.2×7.0×4.0	灰白	良好	粗砂粒少	右回転糸切り	½	
359	坏	13.0×7.0×3.9	灰	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	¼	
360	坏	12.6×7.8×3.8	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り	¼	
361	坏	11.6×7.0×3.6	黒灰	やや軟	細砂粒	回転糸切り　右回転　内外面吸炭	¼	
362	坏	12.4×7.6×3.9	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	¼	
363	坏	12.6×8.0×4.0	灰	良好	細砂粒	右回転	¼	
364	坏	11.8×7.0×3.6	淡黄	良好	細砂粒	右回転糸切り　内外面吸炭	¼	重ね焼
365	坏	12.4×7.4×3.6	灰	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
366	坏	12.6×7.6×3.9	灰	良好	密	回転糸切り　右回転　轆轤目強	¼	
367	坏	12.0×7.0×3.6	鈍褐	やや軟	砂粒多	回転糸切り　右回転　外面吸炭	½	重ね焼
368	坏	12.2×7.0×3.8	鈍黄橙	やや軟	粗白粒多	回転糸切り　右回転	¼	
369	坏	12.6×7.1×3.7	灰黄緑	良好	砂粒多	右回転糸切り	½	
370	坏	12.0×7.0×3.5	青灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り　底部２度切り？	½	
371	坏	12.6×8.0×3.9	灰	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	¼	
372	坏	12.6×7.8×3.9	灰白	やや軟	砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
373	坏	12.6×7.6×3.7	灰	やや軟	粗白粒多	回転糸切り　右回転	¼	
374	坏	13.4×8.0×3.7	灰	良好	粗砂粒多	回転糸切り　右回転	¼	
375	坏	12.6×8.0×3.5	浅黄橙	やや軟	細砂粒	右回転糸切り	¼	
376	坏	13.5×8.0×3.9	灰	良好	粗砂粒多	回転糸切り　右回転　轆轤目細強	½	重ね焼
377	坏	12.2×7.2×3.7	灰	堅緻	小礫少	右回転糸切り	½	
378	坏	12.0×6.0×4.0	灰	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	¼	
379	坏	12.8×7.0×4.0	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	¼	
380	坏	13.2×8.0×4.0	灰白	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	¼	
381	坏	12.4×8.0×3.9	灰	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
382	坏	12.0×6.6×4.0	橙	軟	細砂粒	回転糸切り　右回転	¼	
383	坏	12.6×8.0×3.8	灰	良好	粗砂粒多	回転糸切り　右回転	¾	
384	坏	13.2×8.0×3.7	灰白	良好	細砂粒	右回転糸切り　轆轤目強	¼	
385	坏	14.0×8.0×3.9	灰	良好	細砂粒	右回転糸切り　外面吸炭	¼	重ね焼

灰原出土遺物観察表(8)

№	器種	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
386	坏	12.2×6.8×4.0	灰白	良好	粗白粒	右回転糸切り	¼	
387	坏	12.0×7.0×3.5	灰白	良好	細砂粒	右回転糸切り	½	
388	坏	11.8×7.0×3.7	灰白	良好	白粒多	回転糸切り　右回転	¼	
389	坏	13.0×7.0×4.0	灰褐	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転　内面吸炭	¼	重ね焼
390	坏	13.2×8.0×4.0	灰	良好	粗白粒多	回転糸切り　右回転	¼	
391	坏	13.3×8.0×3.9	鈍黄橙	やや軟	粗白粒多	右回転糸切り　外面吸炭	½	重ね焼
392	坏	13.4×7.0×4.0	灰黄	良好	細砂粒	右回転糸切り　外面吸炭	½	重ね焼
393	坏	12.4×7.0×3.6	灰白	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転　外面吸炭	¼	重ね焼
394	坏	14.2×8.0×3.8	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り	¼	
395	坏	13.2×7.6×3.5	淡灰橙	やや軟	細砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	¼	重ね焼
396	坏	13.4×7.4×3.4	灰	堅緻	粗砂粒多	右回転糸切り	½	
397	坏	13.6×8.0×3.4	灰白	良好	粗砂粒多	回転糸切り　右回転	¼	
398	坏	12.0×7.4×3.3	灰白	良好	細砂粒	右回転糸切り　糸目粗	½	
399	坏	12.0×6.8×3.2	灰黄緑	堅緻	砂粒多	回転糸切り　右回転	体部¼	
400	坏	13.2×6.8×3.7	灰白	良好	密	回転糸切り　右回転　外面吸炭	¾	重ね焼
401	坏	10.6×5.8×3.0	暗青灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り	½	
402	坏	12.4×7.4×3.4	灰白	良好	粗砂粒	右回転糸切り	¼	
403	坏	13.0×7.0×3.5	鈍黄橙	やや軟	細砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	¼	重ね焼
404	坏	13.4×7.0×3.4	灰	堅緻	砂粒多	回転糸切り　右回転	¼	
405	坏	12.8×7.8×3.3	鈍黄橙	やや軟	粗白粒	右回転糸切り　外面吸炭	½	重ね焼
406	坏	13.4×7.4×3.4	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	½	
407	坏	12.4×6.6×3.6	灰	堅緻	細砂粒	回転糸切り　右回転	体部¼	
408	坏	12.0×7.0×3.3	灰	堅緻	砂粒多	回転糸切り　糸目粗　右回転	½	
409	坏	12.6×7.0×3.5	灰	良好	細砂粒	回転糸切り　糸目粗　右回転	½	
410	坏	13.4×7.2×3.6	灰白	やや軟	細砂粒	右回転糸切り　外面吸炭	½	重ね焼
411	坏	12.6×7.0×3.5	鈍橙	やや軟	細砂粒	右回転糸切り　外面吸炭	½	重ね焼
412	坏	13.0×7.0×3.4	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り　底面微凸	¾	
413	坏	12.8×6.2×3.6	灰	やや軟	粗砂粒	回転糸切り　右回転	½	
414	坏	13.0×7.0×3.6	灰	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転　轆轤目やや強	¼	
415	坏	12.0×7.0×3.0	青灰	堅緻	粗砂粒多	右回転糸切り	½	
416	坏	13.0×7.0×3.4	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　糸目粗　右回転	½	
417	坏	14.0×6.8×3.8	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り	½弱	
418	坏	13.2×7.2×3.5	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	½	
419	坏	13.0×7.4×3.1	灰	良好	粗砂粒	右回転糸切り	¼	
420	坏	13.4×7.6×3.7	灰白	良好	密	右回転糸切り　外面吸炭	¼	重ね焼
421	坏	13.8×8.0×3.7	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	½	
422	坏	13.8×7.0×3.6	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	¼	
423	坏	13.0×7.6×3.5	灰	良好	粗白粒多	右回転糸切り	¼	
424	坏	13.0×7.4×3.3	灰	やや軟	微白粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	½	重ね焼
425	坏	13.0×7.0×3.2	鈍黄橙	やや軟	細砂粒	回転糸切り　右回転	½	
426	坏	13.4×8.0×3.5	灰白	良好	白粗多	回転糸切り　右回転	¼	
427	坏	13.0×7.1×3.3	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り	½	
428	坏	13.8×7.0×3.5	灰黄	やや軟	細砂粒	右回転糸切り	¾	
429	坏	13.0×6.6×3.0	灰	堅緻	細砂粒	回転糸切り　右回転　轆轤目やや強	¼	
430	坏	14.0×8.0×3.4	灰	良好	粗砂粒多	右回転糸切り	½	
431	坏	13.0×7.0×3.5	灰白	良好	細砂粒	右回転糸切り	½	
432	坏	12.0×7.0×3.3	灰	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	¼	
433	坏	13.0×7.0×3.6	灰黄	やや軟	細砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	¼	重ね焼
434	坏	12.6×7.0×3.5	灰黄	やや軟	細砂粒	右回転糸切り　外面吸炭	¾	重ね焼
435	坏	13.0×7.0×3.5	灰白	良好	細砂粒	右回転糸切り	¼	
436	坏	12.4×7.0×3.6	鈍赤褐	軟	砂粒多	回転糸切り　右回転　器面虫喰状穴多	¼	
437	坏	13.6×7.0×3.5	灰	良好	砂粒多	右回転糸切り	½	
438	坏	12.8×7.6×3.5	灰白	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
439	坏	12.6×7.4×3.4	灰白	良好	粗白砂粒	回転糸切り　右回転	½	
440	坏	14.0×8.0×3.9	鈍褐	やや軟	細砂粒	右回転糸切り　外面吸炭	½	重ね焼
441	坏	13.0×8.0×3.4	灰白	良好	細砂粒	右回転糸切り	½	
442	坏	11.8×7.4×3.2	灰黄	良好	細砂礫少	回転糸切り　右回転	¼	
443	坏	13.4×6.8×3.5	灰白	やや軟	細砂粒	回転糸切り　右回転	¾	
444	坏	13.4×7.4×3.5	灰白・鈍橙	やや軟	細砂粒	回転糸切り　右回転	½	
445	坏	12.6×7.0×2.9	青灰	堅緻	微白粒	回転糸切り　右回転	¼	

灰原出土遺物観察表(9)

№	器種	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
446	坏	12.2×7.0×3.2	灰	良好	砂粒多	右回転糸切り	1/2	
447	坏	12.0×6.6×3.3	灰	堅緻	細砂粒	右回転糸切り	1/4	
448	坏	12.8×7.0×3.1	灰	堅緻	砂粒多	回転糸切り　右回転　轆轤目やや強	体部1/4	
449	坏	13.9×7.5×3.7	鈍黄橙	やや軟	細砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	1/4	重ね焼
450	坏	13.5×8.0×3.6	鈍赤褐	軟	密	回転糸切り　右回転	1/4	
451	坏	14.0×8.8×3.6	暗灰	やや軟	細砂粒	回転糸切り　右回転　内外面吸炭	1/2	
452	坏	13.5×8.0×3.3	灰	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	1/4	
453	坏	12.8×7.2×3.2	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	1/2	重ね焼
454	坏	12.6×7.0×3.4	灰白	良好	粗砂粒多	回転糸切り　右回転	体部1/4	
455	坏	12.6×7.2×3.3	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　糸目粗　右回転　外面吸炭	3/4	重ね焼
456	坏	12.0×7.0×3.5	灰黄緑	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	1/2	
457	坏	12.0×7.0×3.7	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り	1/4	
458	坏	13.0×7.4×3.3	灰白	良好	細砂粒	右回転糸切り　外面吸炭	1/4	重ね焼
459	坏	12.3×7.2×3.4	灰	良好	粗砂粒	回転糸切り　右回転	1/2	
460	坏	13.0×7.6×3.5	灰白	良好	粗砂粒	右回転糸切り　外面弱吸炭	1/2	重ね焼
461	坏	12.6×8.4×4.1	灰白	良好	粗砂粒多	右回転糸切り　轆轤目強　外面吸炭	1/4	重ね焼
462	坏	13.4×8.0×3.6	灰	良好	砂粒多	右回転糸切り　糸切目無	3/4	
463	坏	13.4×7.0×3.7	灰	堅緻	白粒多	右回転糸切り	1/4	
464	坏	14.0×8.0×3.6	灰	堅緻	細砂小礫	回転糸切り　右回転	1/4	
465	坏	13.4×7.0×3.8	灰	堅緻	細砂粒多	回転糸切り　右回転	1/4	
466	坏	12.4×8.0×3.5	灰	良好	角小礫	回転糸切り　右回転　体部成形時補修	1/4	
467	坏	13.4×8.0×3.6	明黄褐	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	1/4	重ね焼
468	坏	13.1×8.0×3.3	灰黄	やや軟	密	回転糸切り　糸目粗　右回転　外面吸炭	1/4	重ね焼
469	坏	12.2×6.8×3.6	灰白	やや軟	密	回転糸切り　右回転　外面吸炭	1/4	重ね焼
470	坏	13.6×7.6×3.6	灰	良好	砂粒多	右回転糸切り	1/2	
471	坏	14.0×8.0×4.3	鈍黄橙	やや軟	細砂粒	右回転糸切り　外面吸炭	体部1/4	重ね焼
472	坏	12.0×7.0×3.8	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	1/4	重ね焼
473	坏	12.8×7.6×3.9	灰黄	やや軟	細砂粒	回転糸切り　糸目粗　外面吸炭	3/4	重ね焼
474	坏	12.4×7.0×4.1	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　糸目粗　右回転　外面吸炭	1/4	重ね焼
475	坏	13.4×7.9×3.6	淡黄	やや軟	細砂粒	右回転糸切り　糸目粗　轆轤目粗強	3/4	
476	坏	12.0×7.0×3.5	灰	堅緻	砂粒多	回転糸切り　右回転	1/2	
477	坏	12.6×7.4×3.7	灰白	良好	小礫少	右回転糸切り　外面吸炭	1/2	重ね焼
478	坏	12.8×8.0×3.2	灰白	良好	細砂粒	右回転糸切り　外面吸炭	1/2	重ね焼
479	坏	13.2×7.2×3.6	青灰	堅緻	粗白粒多	右回転糸切り　糸目粗	1/4	
480	坏	12.6×7.4×3.6	灰	良好	白粒多	右回転糸切り	1/4	
481	坏	12.6×8.0×3.0	灰白	良好	細砂粒	右回転糸切り	1/2	
482	坏	13.2×8.2×3.5	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り　轆轤目細強	3/4	
483	坏	11.6×7.0×3.5	灰	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	1/4	
484	坏	11.4×6.8×3.4	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	1/4	重ね焼
485	坏	13.2×7.8×3.7	灰白	やや軟	細砂粒	右回転糸切り	1/4	
486	坏	13.0×7.4×3.8	灰	良好	細砂粒	右回転糸切り	1/4	
487	坏	13.0×7.0×3.7	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　外面吸炭	1/4	重ね焼
488	坏	13.0×7.0×3.2	灰黄	良好	粗砂粒少	右回転糸切り　右回転　外面弱吸炭	1/4	重ね焼
489	坏	11.3×7.0×3.3	灰黄	良好	細砂小礫	右回転糸切り	3/4	
490	坏	13.8×7.6×3.3	褐灰	やや軟	細砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	1/4	重ね焼
491	坏	13.6×7.4×3.5	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	1/4	
492	坏	13.2×7.4×3.4	灰	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	1/4	
493	坏	12.6×6.8×3.6	灰白	良好	砂粒多	回転糸切り	1/4	
494	坏	12.4×7.2×3.1	暗灰	堅緻	細砂粒	回転糸切り　右回転　底部微凸　外吸炭	1/4	重ね焼
495	坏	13.0×7.4×4.0	鈍黄褐	やや軟	細砂粒	回転糸切り　右回転	1/4	
496	坏	13.4×7.6×3.9	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　糸目粗　右回転	1/4	
497	坏	12.0×6.4×3.7	灰	良好	微白粒	回転糸切り　糸目粗　右回転　轆轤目強	1/4	
498	坏	13.5×7.4×3.9	灰白	やや軟	細砂粒	回転糸切り　右回転　底部微凸	1/4	
499	坏	12.0×7.0×4.0	褐灰	やや軟	細砂粒	回転糸切り　右回転　底部２度切り	1/4	重ね焼
500	坏	12.4×7.0×3.8	灰	堅緻	砂粒多	回転糸切り　右回転	1/4	
501	坏	13.2×6.8×4.0	灰	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	1/4	
502	坏	13.4×8.0×4.1	灰白	良好	粗砂粒少	回転糸切り　糸目粗　右回転　外面吸炭	1/4	重ね焼
503	坏	12.8×7.0×4.0	灰白	良好	粗砂粒多	右回転糸切り	1/4	
504	坏	12.8×7.0×3.9	灰白	良好	密	右回転糸切り　轆轤目強	1/4	
505	坏	12.4×7.0×3.7	褐灰	良好	粗白粒多	右回転糸切り	3/4	

灰原出土遺物観察表(10)

No.	器種	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
506	坏	13.4×7.6×3.7	灰黄	やや軟	砂粒多	回転糸切り　右回転	½	
507	坏	10.8×5.4×3.9	灰	軟	細砂粒	右回転糸切り　内外面吸炭	½	
508	坏	13.2×7.0×3.8	灰	良好	細砂粒	右回転糸切り　底部微凸	½	
509	坏	14.0×7.8×4.1	鈍黄褐	やや軟	細砂粒	右回転糸切り　底部微凸　外面吸炭	¼	重ね焼
510	坏	13.2×7.0×4.2	灰黄	やや軟	細砂粒	回転糸切り　糸目粗　右回転	¼	
511	坏	12.5×6.2×3.8	灰	堅緻	細砂粒	回転糸切り　右回転	½	
512	坏	12.0×7.6×3.8	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り	¼	
513	坏	13.5×8.2×4.3	鈍黄橙	良好	粗砂粒	右回転糸切り	½	
514	坏	13.4×7.0×4.0	灰白	良好	粗砂粒多	右回転糸切り　底部凸	½	
515	坏	10.8×6.0×3.8	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	¼	
516	坏	13.0×8.0×4.1	黄灰	良好	白粒多	回転糸切り　右回転　底部微凸	¼	
517	坏	14.0×8.0×3.7	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	¼	
518	坏	11.0×7.0×3.9	鈍褐灰	軟	粗砂粒多	右回転糸切り	½	
519	坏	13.0×7.0×4.0	灰	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	¼	
520	坏	12.0×7.0×3.5	鈍黄橙	軟	細砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	¼	重ね焼
521	坏	11.6×6.8×3.8	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り　体部	¼	
522	坏	12.4×7.0×3.6	灰白	良好	細土	右回転糸切り　外面吸炭	¼	重ね焼
523	坏	12.6×8.0×3.5	灰黄緑	良好	砂粒多	右回転糸切り	½	
524	坏	12.0×7.0×3.9	灰	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	¼	
525	坏	12.6×7.0×3.7	灰	堅緻	細砂粒	右回転糸切り	½	
526	坏	12.6×6.8×3.4	灰白	良好	粗砂礫少	回転糸切り　右回転	½	
527	坏	12.4×7.0×3.5	灰	堅緻	細砂粒	右回転糸切り	¼	
528	坏	13.0×7.0×4.0	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り　糸目粗	½	
529	坏	12.7×7.0×4.2	灰白	やや軟	細砂粒	回転糸切り　右回転　底部微凸　外吸炭	½	重ね焼
530	坏	12.5×7.0×4.0	鈍黄橙	やや軟	細砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	½	重ね焼
531	坏	12.3×6.6×3.6	鈍黄橙	やや軟	細砂粒	右回転糸切り　外面吸炭	½	重ね焼
532	坏	13.4×7.0×3.7	鈍黄橙	やや軟	細砂粒	右回転糸切り　外面吸炭	½	重ね焼
533	坏	12.4×7.0×3.5	橙橙	やや軟	細砂粒	回転糸切り　右回転	½	
534	坏	13.0×7.0×3.9	灰	良好	砂粒多	回転糸切り　糸目粗　右回転	½	
535	坏	12.4×7.6×3.5	灰白	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転　外面吸炭	¼	重ね焼
536	坏	12.8×8.0×4.0	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	¼	重ね焼
537	坏	12.3×7.0×4.0	鈍黄褐	良好	粗白粒多	回転糸切り　右回転	¼	
538	坏	13.0×7.0×3.5	灰白	良好	粗砂粒	右回転糸切り	½	
539	坏	13.0×7.6×3.6	鈍橙	軟	細砂粒	右回転糸切り　底部微凸	½	
540	坏	13.2×7.0×4.0	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	¼	
541	坏	12.6×7.0×3.5	灰褐	やや軟	細砂粒	右回転糸切り　外面吸炭	½	重ね焼
542	坏	12.4×7.0×3.6	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り	½	
543	坏	12.2×6.2×3.5	灰黄緑	堅緻	粗砂粒多	回転糸切り　右回転　底部微凸	½	
544	坏	12.4×7.0×3.5	鈍黄褐	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	¼	重ね焼
545	坏	12.4×8.0×4.0	灰白	良好	細砂粒	右回転糸切り	½	
546	坏	12.4×7.0×3.5	暗灰	堅緻	白粒多	回転糸切り　右回転	½	
547	坏	11.8×7.0×3.7	灰	堅緻	細砂粒	回転糸切り　右回転　底部微凸	½	
548	坏	12.4×7.0×4.0	灰	堅緻	粗白粒多	回転糸切り　右回転	½	
549	坏	12.4×7.0×3.8	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り　外面吸炭	¼	重ね焼
550	坏	12.0×7.0×3.5	灰白	良好	細砂粒多	右回転糸切り	½	
551	坏	12.2×6.0×3.7	黄褐	やや軟	細砂粒	右回転糸切り　轆轤目強　外面吸炭	½	重ね焼
552	坏	13.0×7.0×3.8	灰	良好	砂粒多	右回転糸切り　轆轤目細強	½	
553	坏	12.4×7.0×4.0	灰	良好	細砂粒	右回転糸切り　底部微凸	½	
554	坏	13.2×7.0×3.9	黄灰	良好	粗白粒多	回転糸切り　右回転　轆轤目強　外吸炭	¼	重ね焼
555	坏	11.6×6.8×3.6	灰	やや軟	細砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	½	重ね焼
556	坏	13.6×7.0×3.7	灰黄	やや軟	細砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	½	重ね焼
557	坏	12.8×7.2×3.7	灰黄	やや軟	細砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	½	重ね焼
558	坏	12.4×7.0×3.5	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	¼	重ね焼
559	坏	12.3×7.0×3.5	灰	堅緻	砂粒多	回転糸切り　右回転	¼	
560	坏	12.0×7.0×3.4	灰	良好	砂粗多	回転糸切り　右回転	½	
561	坏	12.8×6.8×3.9	淡黄	やや軟	細砂粒	回転糸切り　右回転　底部微凸　外吸炭	¼	重ね焼
562	坏	12.6×7.4×4.0	鈍黄橙	やや軟	細砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	½	重ね焼
563	坏	13.0×7.4×3.7	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り	¼	
564	坏	13.4×7.4×3.9	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り　底部微凸	½	
565	坏	12.4×6.6×3.6	灰	堅緻	砂粒多	右回転糸切り	½	

灰原出土遺物観察表(II)

No.	器種	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
566	坏	13.0×7.0×3.8	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	3/4	
567	坏	12.2×7.2×4.0	灰白	良好	密	回転糸切り　右回転	3/4	
568	坏	12.2×7.0×3.5	灰白	良好	粗砂粒多	回転糸切り　右回転	3/4	
569	坏	12.6×7.0×3.4	灰白	軟	密	回転糸切り　右回転　外面吸炭	3/4	重ね焼
570	坏	12.3×6.4×3.5	暗青灰	堅緻	粗砂粒多	右回転糸切り　轆轤目強	1/2	
571	坏	12.4×6.6×4.0	灰	堅緻	小礫少	右回転糸切り　底部微凸	1/2	
572	坏	12.0×6.8×3.7	灰	堅緻	砂粒多	回転糸切り　右回転	3/4	
573	坏	12.4×7.0×3.7	灰白	良好	微白粗粒	回転糸切り　右回転　底部微凸	1/4	
574	坏	14.2×8.2×4.0	灰黄	良好	細砂粒	右回転糸切り	1/2	
575	坏	12.2×7.0×3.7	灰	良好	粗砂粒	右回転糸切り　底部微凸	1/2	
576	坏	13.0×7.6×3.5	灰	堅緻	砂粒多	回転糸切り　右回転	1/4	
577	坏	12.6×6.8×3.5	灰白色	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	3/4	
578	坏	12.4×7.0×4.1	純黄褐	やや軟	粗白粒多	右回転糸切り	1/4	
579	坏	12.0×7.0×3.7	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　糸目粗　右回転	1/4	
580	坏	12.4×7.0×3.8	灰	堅緻	細砂粒	回転糸切り　右回転	1/4	
581	坏	12.6×7.0×4.0	黄緑褐	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転　内外面吸炭	1/4	重ね焼
582	坏	13.2×8.0×3.6	灰	堅緻	砂粒多	回転糸切り　右回転	1/4	
583	坏	12.6×7.0×3.5	灰	堅緻	粗白粒多	回転糸切り　右回転	1/4	
584	坏	12.4×7.4×3.6	灰	堅緻	粗白粒多	回転糸切り　右回転	1/4	
585	坏	12.6×7.0×3.6	灰白	良好	細砂粒	右回転糸切り	1/4	
586	坏	12.8×7.0×3.6	灰	堅緻	粗砂粒少	右回転糸切り	3/4	
587	坏	13.0×7.4×3.8	灰	堅緻	粗砂粒多	右回転糸切り	1/2	
588	坏	13.0×8.0×3.9	灰白	良好	粗砂粒多	右回転糸切り	1/4	
589	坏	12.4×7.2×3.4	灰白	良好	細砂粒	右回転糸切り	1/4	
590	坏	12.4×7.0×3.7	灰	良好	密	回転糸切り　右回転	1/4	
591	坏	12.6×7.2×3.8	灰	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	1/4	
592	坏	12.4×7.0×3.5	灰	良好	粗白粒多	右回転糸切り	1/2	
593	坏	12.4×7.0×3.7	灰	堅緻	砂粒多	回転糸切り　右回転	1/2	
594	坏	12.6×8.0×3.5	灰	堅緻	粗砂粒多	回転糸切り　右回転	1/2	
595	坏	12.4×7.0×3.7	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転外面吸炭	1/4	重ね焼
596	坏	12.2×7.0×3.6	灰黄緑	堅緻	細砂粒	回転糸切り　右回転	1/4	
597	坏	12.6×7.0×3.9	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	1/4	重ね焼
598	坏	12.2×6.6×3.9	灰白	良好	細砂粒	右回転糸切り　外面吸炭	1/2	重ね焼
599	坏	11.8×7.0×3.5	淡灰黄	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転　轆轤目強	1/4	重ね焼
600	坏	12.8×7.0×3.9	純黄橙	やや軟	細砂粒	右回転糸切り　糸目粗	1/4	
601	坏	12.8×7.0×3.7	灰白	やや軟	細砂粒	右回転糸切り　右回転	1/4	
602	坏	12.0×7.2×4.1	暗青灰	堅緻	細砂粒	回転糸切り　右回転　底部凸	1/4	
603	坏	12.0×6.0×3.8	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転　外面吸炭	1/4	重ね焼
604	坏	11.6×6.2×3.6	灰白	良好	密	回転糸切り　右回転	1/4	
605	坏	12.8×7.0×3.6	灰白	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	1/4	
606	坏	13.0×7.0×3.7	灰黄	良好	細砂粒	右回転糸切り	1/4	
607	坏	11.4×7.0×3.3	灰	良好	粗白粒多	回転糸切り　右回転	1/4	
608	坏	12.7×7.0×3.7	暗褐	やや軟	密	回転糸切り　右回転　外面吸炭	3/4	重ね焼
609	坏	14.0×7.9×3.9	純黄橙	やや軟	細砂粒	右回転糸切り　外面吸炭	1/4	重ね焼
610	坏	12.4×7.0×3.6	灰白	良好	小礫少	回転糸切り　右回転　外面吸炭	1/4	重ね焼
611	坏	12.5×7.0×3.5	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	1/4	
612	坏	12.4×7.6×3.6	灰白	良好	細少	右回転糸切り	3/4	
613	坏	12.0×7.0×3.6	灰	堅緻	細白粒多	右回転糸切り	1/4	
614	坏	12.4×7.0×3.6	純黄橙	やや軟	砂粒多	回転糸切り　右回転　外面吸炭	1/2	重ね焼
615	坏	11.8×6.6×3.5	灰	堅緻	粗砂粒多	右回転糸切り　轆轤目強	1/2	
616	坏	13.0×7.0×3.7	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　糸目粗　右回転	1/4	
617	坏	11.4×6.0×3.3	灰	堅緻	細砂粒	回転糸切り　右回転　轆轤目粗強	1/4	
618	坏	12.8×7.4×3.7	灰	堅緻	粗砂粒多	回転糸切り　右回転　轆轤目強	1/4	
619	坏	13.0×7.0×3.9	灰白	やや軟	細砂粒	回転糸切り　右回転	1/4	
620	坏	13.6×7.6×3.8	灰	良好	密	回転糸切り　右回転	1/4	
621	坏	12.1×6.5×3.4	灰	良好	砂粒多	右回転糸切り　轆轤目強	1/2	
622	坏	12.4×7.1×3.7	灰	良好	粗白粒多	右回転糸切り	1/4	
623	坏	13.0×8.0×3.1	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　糸目粗　右回転	1/2	
624	坏	12.6×7.0×3.6	灰白	良好	細砂粒	右回転糸切り　外面吸炭	1/4	重ね焼
625	坏	14.0×8.0×3.5	灰黄	やや軟	細砂粒	右回転糸切り　外面吸炭	1/2	重ね焼

灰原出土遺物観察表(12)

№	器種	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
626	坏	12.6×7.4×3.4	灰	堅緻	砂粒多	回転糸切り　右回転	¼	
627	坏	12.4×7.0×3.7	灰白	良好	微白粒多	右回転糸切り　外面吸弱吸炭	½	重ね焼
628	坏	12.6×7.6×3.6	鈍黄橙	やや軟	細砂粒	回転糸切り　糸目粗　右回転　外面吸炭	½	重ね焼
629	坏	13.0×7.5×4.8	灰白	良好	粗砂粒	右回転糸切り	¼	
630	坏	12.4×6.8×3.7	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り　外面吸炭	½	重ね焼
631	坏	12.0×7.0×3.6	青灰	良好	細粒微少	回転糸切り　右回転	½	
632	坏	14.0×8.0×4.0	灰	良好	粗砂粒少	右回転糸切り　糸目粗	½	
633	坏	11.7×7.0×3.2	灰	良好	砂粒多	右回転糸切り	¼	
634	坏	12.8×6.2×4.0	灰黄褐	やや軟	細砂粒	回転糸切り　右回転　轆轤目細強	¼	重ね焼
635	坏	12.0×7.0×3.4	灰白	良好	小礫少	回転糸切り　右回転	¼	
636	坏	11.8×7.3×3.5	灰褐黄	やや軟	密	回転糸切り　糸目粗　右回転	½	
637	坏	12.8×7.4×3.6	灰	良好	粗砂粒多	右回転糸切り	¼	
638	坏	12.0×7.4×3.5	灰	良好	粗砂粒多	回転糸切り　糸目粗　右回転	¾	
639	坏	12.4×7.0×3.6	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転　糸目粗　底部微凸	½	
640	坏	13.2×8.1×3.7	灰	良好	粗白粒多	回転糸切り　右回転　轆轤目細強	½	
641	坏	12.4×7.0×3.4	灰	良好	白粒多	回転糸切り　右回転	¼	
642	坏	14.0×8.6×3.7	灰白	やや軟	粗砂粒	回転糸切り　右回転	½	
643	坏	13.2×8.0×3.7	灰	良好	密	回転糸切り　右回転　轆轤目強	¼	
644	坏	12.4×8.0×3.5	灰	良好	砂粒多	回転糸切り　右回転	¼	
645	坏	12.0×6.0×3.3	黄褐灰	堅緻	細砂粒	回転糸切り　糸目粗　右回転	¾	
646	椀	17.3×10.0×6.1	灰	良好	白粒多	無高台　右回転糸切り周辺回転篦削り	¼	重ね焼
647	蓋	14.7×—× —	灰	堅緻	細砂粒	鈕欠損　天井右回転篦削り	¾	
648	蓋	15.6×—×3.2	灰白	良好	細砂粒	環状鈕　天井回転糸切り右回転篦削り	¾	
649	蓋	16.4×—×4.0	暗灰	堅緻	粗砂粒多	環状鈕　天井右回転篦削り	¾	
650	蓋	14.8×—× —	暗灰	堅緻	粗砂粒多	鈕欠損　天井右回転篦削り	½	
651	蓋	16.0×—× —	灰白	良好	細砂粒	鈕欠損　天井回転糸切り右回転篦削り	¼	
652	蓋	15.6×—× —	灰白	良好	細砂粒	鈕欠損　天井右回転篦削り	¼	
653	蓋	15.8×—× —	暗灰	堅緻	細砂粒	口縁部　天井右回転篦削り	¼	
654	蓋	17.2×—× —	灰	良好	砂粒	鈕　天井欠損	¼	
655	蓋	19.0×—× —	灰白	良好	細砂粒	鈕欠損　天井右回転篦削り	½	
656	蓋	20.0×—× —	暗灰	堅緻	粗砂粒多	鈕欠損　天井回転糸切り右回転篦削り	½	
657	蓋	14.0×—× —	灰	良好	細砂粒	鈕欠損　天井右回転篦削り	½	
658	蓋	15.0×—× —	暗灰	堅緻	細砂粒	鈕欠損　天井回転糸切り右回転篦削り	¼	
659	蓋	16.0×—× —	灰白	良好	細砂粒	鈕欠損　天井回転糸切り右回転篦削り	¼	
660	蓋	15.6×—× —	暗灰	堅緻	細砂粒	鈕欠損	¼	
661	蓋	15.8×—×3.0	灰白	良好	細砂粒	環状鈕　天井回転糸切り右回転篦削り	½	
662	蓋	17.0×—× —	灰白	良好	緻砂粒	鈕欠損　天井右回転篦削り	¼	
663	蓋	17.8×—× —	灰	良好	粗砂粒	鈕欠損　天井右回転篦削り	¼	
664	蓋	18.9×—× —	黄褐	やや軟	細砂粒	鈕欠損　天井右回転篦削り	½	
665	蓋	18.0×—× —	暗灰	堅緻	細砂粒	鈕欠損　天井右回転篦削り	口縁¼	
666	蓋	19.0×—× —	灰白	良好	砂粒多	鈕欠損　天井右回転篦削り	½	
667	蓋	13.8×—× —	灰	良好	砂粒多	鈕欠損　天井回転糸切り右回転篦削り	¼	
668	蓋	13.8×—× —	灰	堅緻	細砂粒	鈕欠損　天井右回転篦削り	口縁少	
669	蓋	14.1×—× —	灰	良好	細砂粒	鈕欠損　天井右回転篦削り	口縁¼	
670	蓋	14.6×—× —	淡橙灰	軟	細砂粒	鈕欠損　天井右回転篦削り	¼	
671	蓋	16.0×—× —	橙	軟	赤褐粒	鈕欠損　天井右回転篦削り	½	
672	蓋	17.9×—×3.4	暗灰	堅緻	粗砂粒多	環状鈕　天井回転糸切り右回転篦削り	½	
673	蓋	18.2×—× —	灰	良好	細砂粒	鈕欠損　天井回転糸切り右回転篦削り	¼	
674	蓋	17.8×—× —	灰白	良好	粗砂粒	鈕欠損　天井回転篦削り	½	
675	蓋	19.0×—× —	灰	良好	粗砂粒多	鈕欠損　天井右回転糸切り	¼	
676	蓋	19.4×—× —	灰白	良好	細砂粒	天井右回転篦削り	¼	
677	蓋	20.0×—× —	灰白	やや軟	細砂粒	鈕欠損　天井右回転篦削り	口縁少	
678	蓋	14.6×—× —	灰	堅緻	砂粒多	鈕欠損　天井右回転篦削り	½	
679	蓋	15.4×—×2.8	灰	良好	砂粒多	環状鈕　天井右回転篦削り	½	
680	蓋	15.5×—× —	暗灰	堅緻	砂粒多	鈕欠損　天井右回転篦削り	½	
681	蓋	20.0×—× —	鈍黄橙	やや軟	細砂粒	鈕　天井欠損	口縁少	
682	蓋	15.0×—× —	灰白	良好	細砂粒	鈕欠損　天井右回転篦削り	口縁¾	
683	蓋	14.8×—× —	暗灰	堅緻	細白粒多	鈕欠損　天井右回転篦削り	口縁少	
684	蓋	13.0×—×3.3	灰白	良好	細砂粒	環状鈕　天井右回転篦削り	½	
685	蓋	14.0×—× —	灰	堅緻	細砂粒	鈕欠損　天井右回転篦削り	口縁少	

灰原出土遺物観察表(13)

No	器種	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
686	蓋	14.0×－×－	灰	堅緻	細砂粒	紐欠損　天井右回転篦削り	口縁1/4	
687	蓋	14.0×－×－	灰	堅緻	細砂粒	紐欠損　天井右回転篦削り	1/4	
688	蓋	16.2×－×3.0	灰褐	やや軟	細砂粒	環状紐　天井回転糸切り右回転篦削り	/4	
689	蓋	16.0×－×－	灰白	やや軟	細砂粒	天井右回転篦削り	口縁1/4	
690	蓋	16.2×－×－	暗青灰	堅緻	細砂粒	紐欠損　天井右回転篦削り	1/4	
691	蓋	18.5×－×4.2	鈍黄橙	やや軟	粗砂粒多	環状鞍　天井回転篦削り	1/4	
692	蓋	18.2×－×－	灰	堅緻	細砂粒	紐　天井欠損	1/4	
693	蓋	18.0×－×－	灰白	良好	細砂粒	天井右回転篦削り	口縁1/4	
694	蓋	18.5×－×4.4	灰白	良好	粗砂粒	環状紐　天井右回転篦削り	3/4	
695	蓋	18.2×－×－	灰白	良好	粗砂粒	紐欠損　天井右回転篦削り	1/4	
696	蓋	18.2×－×－	灰白	良好	粗砂粒	紐欠損　天井右回転篦削り	1/4	
697	蓋	20.0×－×－	灰白	良好	細砂粒	紐欠損　天井右回転篦削り	口縁1/4	
702	椀	11.2×7.4×5.2	灰	良好	砂粒多	回転糸切り付高台　右回転	1/4	
703	椀	12.2×8.0×5.0	灰	良好	細砂粒	回転糸切り付高台　右回転	1/4	
704	椀	12.0×7.4×4.6	灰	堅緻	砂粒多	回転糸切り　右回転　轆轤目強	1/4	
705	椀	12.8×8.0×5.1	灰白	やや軟	細砂粒	回転糸切り付高台　右回転　内面吸炭	3/4	重ね焼
706	椀	13.2×8.0×4.8	灰	堅緻	粗砂粒多	回転糸切り付高台	1/4	
707	椀	13.0×8.6×5.1	鈍橙	軟	密	右回転糸切り付高台　外面吸炭	1/4	重ね焼
708	椀	13.3×8.2×5.6	灰	良好	砂粒多	回転糸切り付高台　右回転　轆轤目強	1/4	重ね焼
709	椀	13.6×9.0×5.0	明褐	軟	赤褐粒多	右回転糸切り付高台	1/4	
710	椀	13.9×8.5×5.3	灰白	良好	砂粒多	右回転糸切り付高台　轆轤目強　外吸炭	1/4	重ね焼
711	椀	13.8×8.8×5.3	灰・鈍橙	良好	密	付高台　右回転	体部少	
712	椀	14.0×8.4×5.1	灰	やや軟	砂粒多	右回転糸切り付高台　轆轤目強　外吸炭	1/4	重ね焼
713	椀	13.0×9.0×5.1	灰	堅緻	砂粒多	回転糸切り付高台　右回転	1/4	
714	椀	13.0×8.4×5.7	灰	良好	砂粒多	回転糸切り付高台　右回転　轆轤目強	1/4	重ね焼
715	椀	13.8×8.4×5.8	鈍橙	やや軟	密	右回転細切り付高台	1/4	
716	椀	15.6×10.0×6.0	灰	良好	密	回転糸切り付高台右回転	1/4	
717	椀	15.1×8.9×5.8	灰	良好	砂粒多	右回転糸切り付高台　轆轤目強	1/4	
718	椀	15.2×9.0×5.8	灰白	良好	砂粒多	回転糸切り付高台	1/4	
719	椀	16.0×10.0×7.2	灰	良好	密礫少	回転糸切り付高台　右回転　轆轤目強	1/4	重ね焼
720	椀	16.2×10.0×8.0	灰白	やや軟	細砂粒	回転荒かい右回転　内外吸炭	1/4	
721	椀	16.0×－×(8.0)	灰黄	軟	密	右回転　轆轤目細強　吸炭　付高台欠	1/4	重ね焼
722	椀	16.0×9.2×6.8	灰	堅緻	粗砂粒	回転糸切り付高台　右回転　轆轤目細強	1/4	
723	椀	15.4×8.4×6.2	灰	堅緻	粗砂粒多	回転糸切り付高台　右回転	1/4	
724	椀	16.0×9.0×6.0	灰	良好	砂粒多	回転糸切り付高台　右回転	1/4	
725	椀	15.8×9.0×6.7	黄褐灰	良好	細砂粒	回転糸切り付高台　右回転　轆轤目強	体部小	
726	椀	16.4×9.6×6.8	黒灰	良好	細砂粒	回転糸切り付高台　轆轤目細やや強	1/4	
727	椀	16.4×8.7×6.8	黄褐灰	良好	細粘一	回転糸切り右回転　歪重	1/4	
728	椀	15.8×8.6×6.5	暗青灰	良好	砂粒多	回転糸切り付高台　右回転	1/4	
729	椀	16.4×10.0×7.4	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転　轆轤目細強	3/4	
730	椀	15.8×9.0×6.8	灰	良好	細砂粒	回転糸切り　右回転	3/4	
731	椀	16.0×8.8×7.1	灰	堅緻	砂粒多	回転糸切り付高台	1/4	
732	椀	17.0×10.3×7.1	灰	良好	細砂粒	回転糸切り付高台	1/4	
733	椀	16.2×11.0×6.5	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り付高台　右回転	1/4	
734	椀	16.6×9.2×6.3	灰	良好	細砂粒	回転糸切り付高台　右回転　轆轤目強	1/4	
735	椀	16.4×10.4×6.3	灰	良好	細砂礫少	右回転糸切り付高台	1/4	
736	椀	16.4×9.0×5.5	灰白	良好	細砂粒	回転糸切り付高台　右回転　外面吸炭	1/4	重ね焼
737	椀	15.6×10.0×6.8	灰白	良好	細砂粒	右回転糸切り付高台　右回転　外面吸炭	1/4	重ね焼
738	椀	16.0×9.4×7.0	灰白	良好	砂粒多	回転糸切り付高台　右回転	1/4	
739	椀	16.4×10.0×7.0	灰	良好	砂粒多	右回転糸切り付高台　轆轤目強　外吸炭	1/4	重ね焼
740	椀	16.0×8.8×6.6	灰	良好	細砂粒	右回転糸切り付高台　轆轤目強　外吸炭	1/4	重ね焼
741	椀	17.2×10.4×8.4	灰	軟	密	回転糸切り付高台　轆轤目強　内外吸炭	3/4	
742	椀	16.8×10.4×7.2	灰白	やや軟	砂粒多	回転糸切り付高台	3/4	
743	瓶	頸径7.0	灰白	やや軟	密	頸部3方に十字切り込み潜し	頸部1/4	
744	壺	22.5×15.0×43.0	灰	良好	細砂粒	内面無文当目　外面弱い平行叩き目	ほぼ/4	
745	壺	22.0×－×－	灰	良好	細砂粒	内面無文当目　外面弱い平行叩き	下半欠	
746	壺	23.0×－×－	灰	良好	細砂粒	内面上半一文字文当目　外面弱平行叩き	底部欠	
747	壺	－×13.5×－	灰	良好	細砂粒	内面無文当目　外面弱い平行叩き	口縁欠	
748	壺		灰	良好	細砂粒	内面同心円文当目　外面平行叩き目	底部	

第3節　竪穴住居跡

舞台遺跡における竪穴住居跡は総軒数271余を数える。帰属する時代別では縄文時代5軒・古墳時代215軒（前期149、後期66）・歴史時代51軒である。各時代によってその分布にある程度の特徴が見られる。

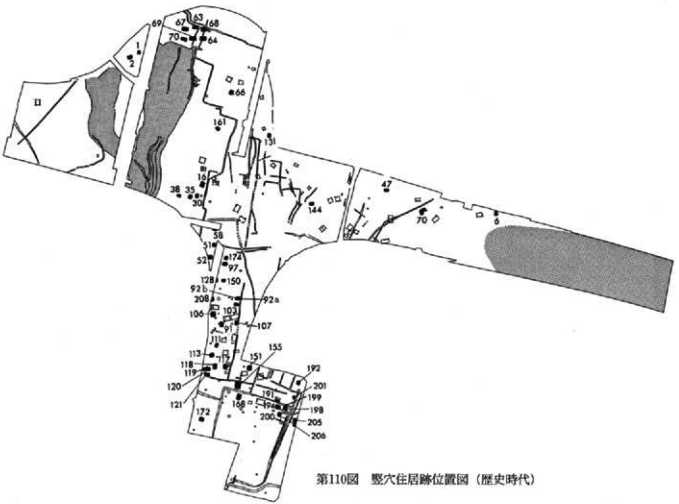
縄文時代では数字に示されるように散在的ではあるが遺跡地の南部に小集合が形成されている。

古墳時代前期では方形周溝墓群を囲むように中央部に密集し重複関係が著しく存続期間の長さと、墓域との重畳にかかわる集落変遷の検討が重要課題である。

古墳後期には前期住居群と一部西半部が主体的な居住空間となっている。前期程の重複は見られないものの短期的な存続とも思われない。当遺跡西、粕川左岸に形成された古墳群との関係が注目されよう。

本報告になる歴史時代の住居跡群は遺跡地の南半を中心にあり、古墳時代後期の住居群と分布域をほぼ同じくする。しかし当該期の重複（建て替えを含む）は極めて少なく計画的形成、短期存続の集落の感が強い。また北部地点にある6軒の竪穴は、窯跡群との位置関係および配置そのものからも須恵器製作に直接にかかわった工人集団の住居跡ないしは工房跡としての可能性は高い。しかし、注目すべきは舞台遺跡歴史時代住居跡のうち窯跡産出須恵器の供給を受けた住居がごく限られており、多くは窯跡よりやや時期が下るようである。より広範な地域を対象にした検討が必要である。

竪穴住居跡に限らないが、当遺跡の基本的な理解には三和工業団地遺跡（伊勢崎市調査、帥群埋文1999）など周辺遺跡との総合的見地からの分析が必要不可欠である（第110図）。



第110図　竪穴住居跡位置図（歴史時代）

A₁-16号住居跡（第111・112図　ＰＬ,69・76）

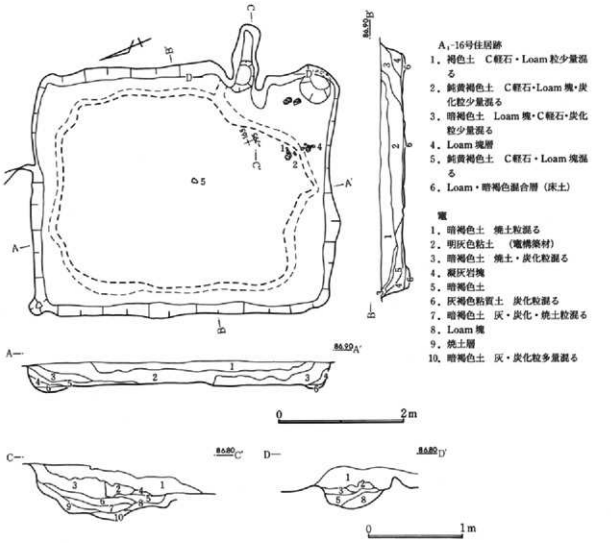
座標値39163～39169・－54793～54798の範囲にある。17号・19号住居跡と重複するが、両者より新しい時期の所産である。

平面形態は南北に長軸をもつ方形を呈する。規模は長軸4.8m・短軸4.0m・壁高40cmで急傾斜の立ち上がりである。主軸方位はＮ－112°－Ｅを示す。床面積9.1㎡。

竈は東壁の南寄りに付設され、住居内に張り出す袖部と、壁線を約40cm突出する細長い煙道部をもつ。袖は基盤 Loam 層を長さ50cmほど掘り残して芯材とする。火床部には、竈構築材に用いたと考えられる凝灰岩塊や明灰色粘質土が崩落する。火床面には乱れが観察され、住居廃棄時の破壊行為も想定される。

床面は平坦をなし比較的堅牢に踏み締まる。貯蔵穴は竈に接近した南東隅にあり、径50cmの円形で深さ40cmを測る。掘形は垂直にはならず、壁面を抉るように穿つ。柱穴・壁下溝は検出されない。
住居の掘形は、壁沿いを幅20～50cm。深さ10～15cmの窪みを巡らし中央を台状に残す。

遺物には須恵器・土師器坏、土師器甕がある。須恵器の１点には見込み部と外面底部にそれぞ墨書文字が記される。９世紀前半になろう。



第111図　A₁-16号住居跡

出土遺物

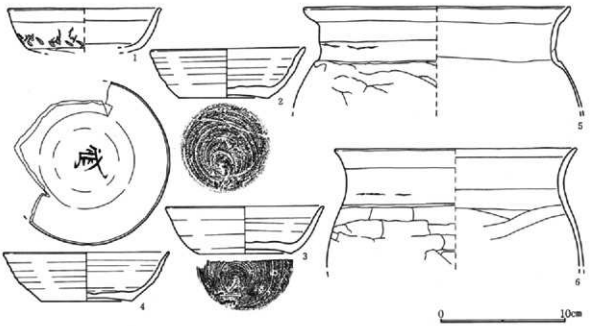
1は土師器坏。残存1/4の破片。底部は平底気味で、口唇部は外側に丸まる。口縁部は横位撫で、体部は弱い篦撫で、底部は不定方向の篦削り。胎土は細土均一で焼成は硬い。鈍い褐色を呈す。口径12cm。

2～4は須恵器坏で、いずれも右回転糸切り無調整。腰から体部にかけて弱い丸みをもち、緩く外反して開く。口唇部は細く引き出す。4は内面見込み部（？）と、外面底部（？）の2カ所に墨書文字を記す。胎土は粗粒均一で焼成良好。2は灰白、3・4は外面及び口唇部に吸炭する黄橙色を呈す。口径12.4～13.2cm。

5・6は土師器甕。器肉は薄い。口縁部内外面は横位撫で、外面肩部は横位篦削り、内面は横位篦撫で。5は明瞭なコの字口縁を呈し、端部は内側に小さく丸まる。口径21.2cm。6は緩く弧を描き大きく外反し端部は細まる。口径19cm。

A_1-16号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器坏	12.0	9.0	3.5	底部偏平	4	須恵器坏	13.2	7.2	3.9	墨書文字「？」「？」
2	須恵器坏	12.9	7.2	3.9	右回転糸切り	5	土師器甕	21.2			コの字口縁
3	須恵器坏	12.4	7.4	3.7	右回転糸切り	6	土師器甕	19.0			緩いコの字口縁



第112図　A_1-16号住居跡出土遺物

A_1-30号住居跡（第113・114図　PL.69・76）

座標値39154～39158・－54798～54802の範囲にある。北半は25号住居跡と重複し、これより新しい時期の所産である。本跡の掘形が浅く、25号住居跡埋土との識別ができずに重複部分は検出されなかった。平面形態は方形を呈すと考えられる。住居規模は東西軸が3mで、南北軸も同規模と考えられる。壁高は10cmに満たない浅い掘形である。主軸方位はN－101°－Eを示す。

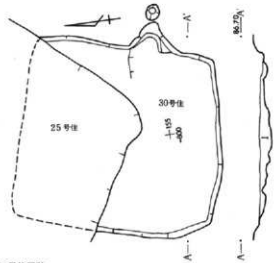
竈は東壁南寄りに付設される。袖部の作りはなく竈本体は壁線外の構築で、約40cm突出する。明瞭な火床の焼土面は見られず、竈内は焼土粒・炭化粒・灰などが混在する層で埋まる。掘形面では火床部から焚口部にかけて4穴が検出されており、石などの構築材を埋設した痕跡とも考えられる。

床面は平坦をなすが踏み締まりは弱い。柱穴・貯蔵穴・壁下溝などの施設は検出されない。住居の掘形は、竈から東西方向の延長線上を掘り残す。周辺は、深さ20cmほど窪める形態であるがさほどの規則性は認められない。

遺物には須恵器坏・椀・灰釉陶器皿などがある。総じて使用による摩滅が著しい。9世紀末から10世紀前半になろう。

出土遺物

1～3は須恵器坏で、右回転糸切り無調整。1・2は小底径で、体部丸く張り口唇部は丸まって開く。焼成は甘く、黄橙色を呈す。1の胎土は風化雲母片を多く含み、2は雲母片の他に長石粒が目立つ。3は深い箱型で体部は直線的。胎土は粗粒均一で灰色を呈す。坏の口径は11.7～13cm。



A₁-30号住居跡
1，黒色土　Loam 椀・炭化粒混る（床土）

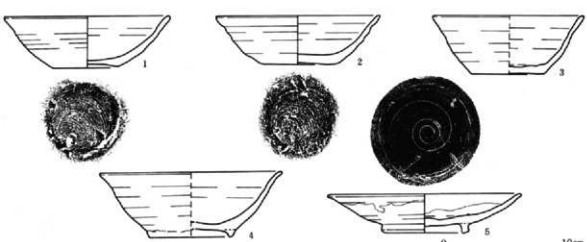
第113図　A₁-30号住居跡

4は須恵器椀で、回転糸きり付け高台。轆轤は右回転。高台は低く体部は丸みをもつ。口縁部は外反して開き、口唇部は細まる。焼成は甘く淡黄橙色を呈す。胎土には粗砂粒が多い。口径14.5cm。

5は灰釉陶器皿。口縁部は細まりやや強く外へ反る。腰部の箆削りは撫で消され、内面見込み部には鋸当ての渦巻き条痕が残る。高台は低く幅広。漬け掛け施釉。口径15.3cm。折戸53号窯式（大原2号窯式）に相当しよう。

A₁-30号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	須恵器坏	13.0	5.2	4.0	右回転糸切り	4	須恵器坏	14.5	6.6	5.0	使用摩滅著しい
2	須恵器坏	13.0	6.0	3.8	右回転糸切り	5	灰釉陶器皿	15.3	6.8	3.0	漬け掛施釉
3	須恵器坏	11.7	6.0	4.6	使用摩滅著しい						



第114図　A₁-30号住居跡出土遺物

A₁-35号住居跡（第115・116図　P L.69・76）

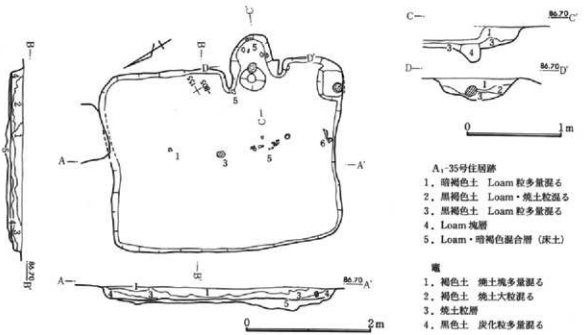
座標値39153～39158・－54804～54808の範囲にある。

平面形態は南北に長軸をもつ方形を呈する。規模は長軸3.6m・短軸2.85m・壁高20cmで浅いが急傾斜の立ち上がりである。主軸方位はN－120°－Eを示す。床面積9.4m²。

竈は短軸方向東壁の南寄り、壁外に約40cm突出して付設される。住居内には小さく袖部が作られが、構築材には純度のある粘土などの素材はなく焼土塊炭化粒などの混じる褐色土である。火床には明瞭な焼土面は残されず焼土粒・炭化粒の著しく混じった暗褐色土で埋まる。竈内からは40×20cmの長卵形の川原石が横転した状態で出土したが、火床掘形にはこの石を設置したと考えられる小穴が穿たれており支脚としたものであろう。

住居床面は平坦をなし、竈前面から中央部にかけての踏み締まりは良好である。貯蔵穴は南東隅の壁面に接してあり60×40cm、深さ20cmの整った方形を呈する。柱穴・壁下溝は検出されない。住居掘形は竈前面を不定形に10～20cmの深さに掘り窪めてある。

出土遺物には墨書のある土師器坏のほか甕がある。遺物から10世紀中頃になろう。



第115図　A₁-35号住居跡

出土遺物

1・2は土師器坏。1は底・体部が篦削り、口縁部・内面は撫で調整。平底気味で外面体部と内面見込みに墨書文字が記され読み不明。口径12.8cm。粗砂粒・長石粒が少量まじり焼成は良好で淡橙色を呈す。2は1と同様な形状と思われ小片である。胎土は均一で焼成は甘く暗橙色を呈す。

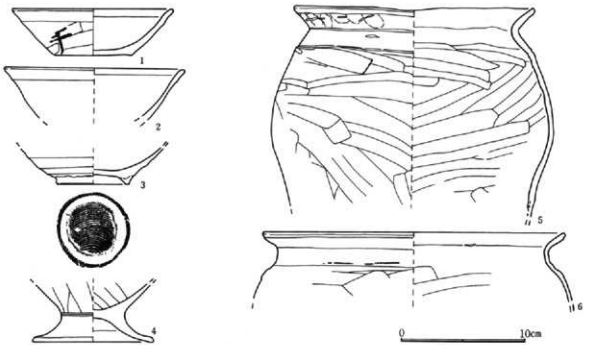
3は須恵器椀で上半が欠損。轆轤回転は右で糸切りに雑な付け高台。胎土は粗砂粒・風化雲母が混じる。灰白色を呈す。4は土師器甕で低い台付き。粗砂粒・角閃石を含み橙色を呈す。

5・6は土師器甕。5は丸く張る胴から変化の少ない肩部で、短い口縁が「くの字」状に強く外屈。口縁・肩部は横撫で、胴上半は横位・下半縦位篦削り。内面は横位の篦撫でを施す。粗砂粒多く、赤褐色を呈す。

口径19cm。６は肩部に明瞭な稜をなし短い口頸部から内湾気味に強く外屈。口縁・頸部横位撫で。肩部横筮削り、内面横位筮撫で。胎土砂粒含み、焼成は良好で淡橙色を呈す。口径は24cmになろうか。

A_1-35号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器坏	12.8	6.8	3.7	外・見込みに不明墨書	4	土師台付甕		9.5		
2	須恵器坏	14.4				5	土師器甕	19.0			短く強いくの字状口縁
3	須恵器椀		5.8		回転糸切り付け高台	6	土師器甕	24.0			短く強いくの字状口縁



第116図　A_1-35号住居跡出土遺物

A_1-38号住居跡（第117・118図　ＰＬ.69・76）

座標値39154～39158・－54814～54819の範囲にある。住居跡中央には径１ｍ前後の後世に属する円形土坑により床面を穿つ。

平面形態は東西に長軸をもつ方形を呈する。住居規模は長軸3.3ｍ・短軸2.5ｍ、壁高５cmで痕跡程度の遺存状況である。主軸方位はＮ－101°－Ｅを示す。床面積7.8㎡。

竈は長軸方位の東壁南寄りに付設され略三角形状で壁外に40cmほど突出し、外縁に焼土粒と粘土の混在土が弧状に巡る。住居内には袖部の痕跡は残されていないものの竈の残存形状から、住居廃棄時に除去されたものと考えられる。埋土は焼土粒多く、炭化粒を混じえる暗褐色土である。火床は明瞭な赤化面は形成されず焼土と炭化粒の薄層が見られた。

第117図　A_1-38号住居跡

住居床面は平坦をなすが壁沿いは踏み締まりが弱い。柱穴・貯蔵穴・壁下溝などの検出は無い。

出土遺物は少なく、形状の知れるものは土師器の坏・甕の2点である。10世紀前半になろう。

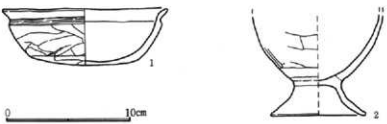
出土遺物

1は土師器坏。口縁部はくの字状に強く外傾し体部境に稜をなす。体部深く横位篦削り、平底気味の底部は不定方向の篦削り。胎土は均一で角閃石が混じる。焼成は硬く赤褐色を呈す。口径15cm。

2は台付き甕。台部は小さく小型の甕になろう。台部内外面横位の撫で。胎土は細砂粒混じり均一。橙色を呈す。

A_1-38号住居跡出土遺物計測表

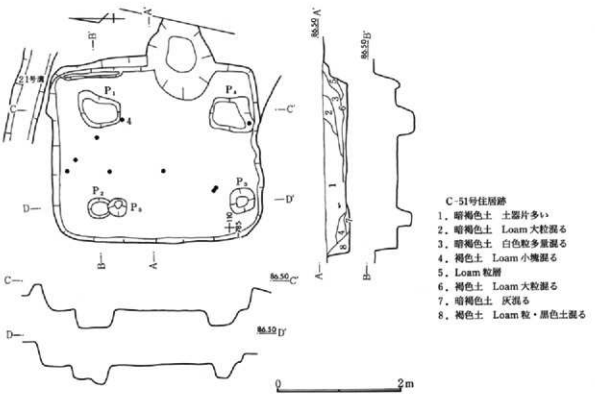
番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器坏	15.0	8.5	4.4	口唇に油煙付着	2	土師台付甕		7.5		



第118図　A_1-38号住居跡出土遺物

C-51号住居跡（第119・120図　P L.69・77）

座標値39109～39113・－54781～54784の範囲にある。C-50号住居跡と重複し、これより新しい時期である。



第119図　C-51号住居跡

平面形態は南北軸の若干長い方形を呈する。住居規模は長軸3.3m・短軸2.9m、壁高40cmで直立する。主軸方位はN－90°－Eを示す。床面積8.2m

竈は短軸方位の東壁南寄りに付設され煙道先端は調査区域外にかかる。竈の掘形は大きく、1×1.2mの楕円形を呈する。袖部の痕跡は残されず、原形を窺い知ることは出来ない。

住居の床面は平坦をなし全体に踏み締まりは良好である。柱穴は４穴検出され、住居の平面形上では南側に偏って配置される。なお、北西にあるＰ２に接するＰ５は柱抜き取り穴の可能性がある。柱穴掘形はＰ１・Ｐ４が大きく60×50cmの略方形に、Ｐ２・Ｐ３は30～40cmの円形になる。いずれも深さは20～25cmでほぼ均一である。柱間寸法は南北列東側は2.0m・西側2.3m、東西列北側・南側は1.5mである。壁下溝は東壁の竈北側の一部のみに見られる。貯蔵穴は検出されない。埋没状況は中央の埋土が厚くLoam塊の混入が多いことから人為的な埋め戻しの可能性が考えられる。住居掘形は竈前面と北壁から西壁にかけて不整Ｌ字状に10～15cm窪めてある。

遺物は土師坏、須恵器椀、灰釉陶器皿、瓦小片などがある。10世紀前半になろう。

出土遺物

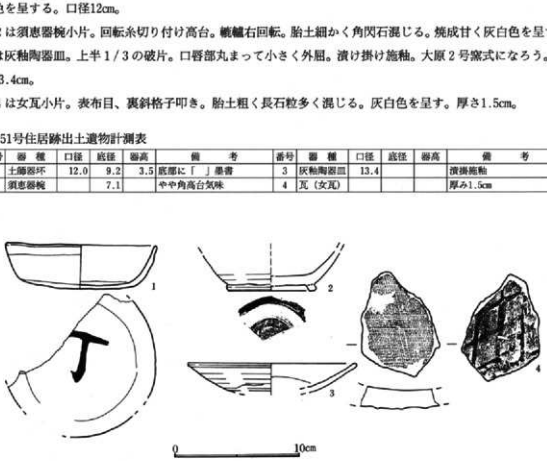
１は土師器坏。残存２/３。底部は僅かに丸みをもつが平底気味。口唇部は小さく内屈。内面・口縁部は横位撫で。体部は篦削り後撫で調整。底部不定方向の篦削りに「丁カ」の墨書文字。胎土細かく焼成良好、赤褐色を呈する。口径12cm。

２は須恵器椀小片。回転糸切り付け高台。轆轤右回転。胎土細かく角閃石混じる。焼成甘く灰白色を呈す。３は灰釉陶器皿。上半１/３の破片。口唇部丸まって小さく外屈。漬け掛け施釉。大原２号窯式になろう。口径13.4cm。

４は女瓦小片。表布目、裏斜格子叩き。胎土粗く長石粒多く混じる。灰白色を呈す。厚さ1.5cm。

C-51号住居跡出土遺物計測表

番号	器　種	口径	底径	器高	備　　考	番号	器　種	口径	底径	器高	備　　考
1	土師器坏	12.0	9.2	3.5	底部に「　」墨書	3	灰釉陶器皿	13.4			漬掛施釉
2	須恵器椀		7.1		やや角高台気味	4	瓦（女瓦）				厚み1.5cm



第120図　C-51号住居跡出土遺物

C-52号住居跡（第121・122図　ＰＬ.69・77）

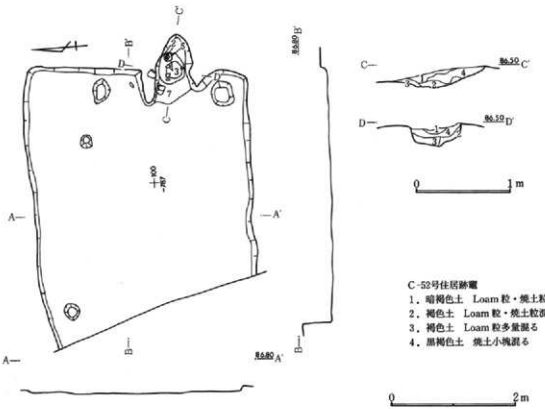
座標値39098～39102・－54784～54790の範囲にある。西側端は調査区域外にかかり全体は検出されない。

平面形態は東西軸の長い方形であろう。住居規模は長軸4.4m以上・短軸3.5m、壁高は僅か５cm前後である。主軸方位はＮ－93°－Ｅを示す。

竈は長軸方位の東壁に付設され、壁線より約50cm突出する。左右袖部は住居内に50cmほど張り出し、袖基部にあたる壁線上に角礫が埋設されて芯材と考えられる。竈の埋土は焼土粒の混じる暗褐色土で、下位はLoam粒を多く含む。

床面はほぼ平坦をなし、小穴が２～３個見られるが、柱穴を想定出来る配置にはなく、壁下溝の検出もない。貯蔵穴は南東隅、竈に接近して設けられる。径50cm・深さ約30cmの略円形である。住居掘形は床面より約10cm下位にあり平坦な面をなす。

遺物には須恵器坏・椀、土師器甕などがあり、竈と埋土中からの出土である。９世紀末から10世紀初頭になろう。



第121図　C-52号住居跡

出土遺物

１～４は須恵器坏。１・２は小型で体部が丸く小底径である。１の口径は11.8cm。３は腰部が丸く深い体部で、口径12.5cm。４は深く直線的な体部で、粘土紐の巻き上げ跡が観察される粗い作りである。口径12.7cm。坏底部は右回転糸切り無調整である。いずれも焼成は甘く淡橙色から灰白色を呈するが、２は赤褐色である。胎土は細砂粒を混じえるが均一である。

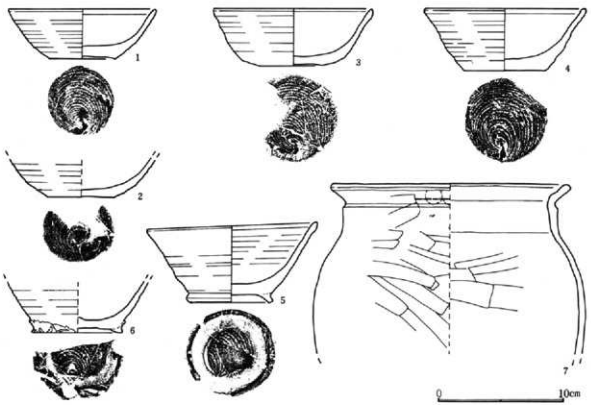
５・６は須恵器椀。体部は坏４に高台を付けたごとく直線的で、回転糸切り後粗略な付け高台である焼成

は甘く、胎土は比較的均一である。５は口径13.5cm。

７は土師器甕で、強く外傾する口縁部下位に撫でによる段をなして頸部に至るコの字口縁である。口頸部は横位撫で、肩部横位・胴上半斜位篦削り。内面横位篦撫で。胎土は砂粒・角閃石を含む。鈍橙色を呈する。口径19.0cm。２・３・７は竈、他は埋土の出土である。

C-52号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	須恵器坏	11.8	5.8	3.9	右回転糸切り	5	須恵器椀	13.5	6.1	6.0	回転糸切り付け高台
2	須恵器坏		5.2		右回転糸切り	6	須恵器椀		7.2		回転糸切り付け高台
3	須恵器坏	12.5	6.5	4.4	右回転糸切り	7	土師器甕	19.0			コの字口縁
4	須恵器坏	12.7	6.5	4.9	右回転糸切り						

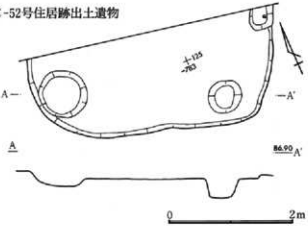


第122図　C-52号住居跡出土遺物

C-58号住居跡（第123・124図　ＰＬ.69・77）

座標値39123～39126・－54781～54786の範囲にある。住居の北側ほとんどは調査区域外（道路）に入る。全体の様相は不明であり、南壁と東・西壁線の一部のみが検出されている。住居東西長は約４ｍを測り、壁高は15cmである。

床面は壁線に沿った部分であり、平坦であるが踏み締まりは弱い。床面には北側の調査



第123図　C-58号住居跡

区域外の方向より焼土粒分布が南へ延びる。これが竈などの火所を源とするならば、舞台遺跡での同時代住居の一般的な竈位置である東壁付設とは異なっている。床面には土坑状、あるいは小穴が検出されているが、貯蔵穴・柱穴等の認定はできない。径70～50cm・深さ30～10cmで円形を呈する。

遺物は須恵器坏・椀類でいずれも小片である。10世紀中頃から後半になろう。

出土遺物

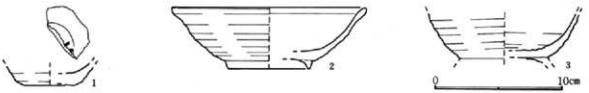
いずれも須恵器で坏・椀類である。

1は小坏で小破片である。内面に墨書文字痕がある。解読不能。

2は椀で丸い腰部から偏平な体部で口縁は大きく開く。3はやや深目となろう。口縁部は欠損する。2・3とも回転糸切りで粗略な付け高台である。轆轤右回転。胎土は細砂で長石粒を多く混じえる。灰白色を呈する。

C-58号住居跡出土遺物計測表

番号	器　種	口径	底径	器高	備　　考	番号	器　種	口径	底径	器高	備　　考
1	須恵器坏		4.0		見込みに墨書痕	3	須恵器椀				
2	須恵器椀	15.4	6.5	4.9							



第124図　C-58号住居跡出土遺物

A_2-63号住居跡（第125～127図　P L.69・77・78）

座標値39306～39310・－54801～54807の範囲にある。須恵器窯跡群に関わる工人の住居か工房に想定される遺構である。北壁線は14号溝によって消失している。

平面形態は東西軸方向が著しく長い方形を呈する。住居規模は長軸5.2m・短軸約3mで、壁高はかなり削平が及んでいるためかやく10cmと低い。主軸方位はN－100°－Eを示す。床面積12.7㎡。

竈は長軸方位の東壁ほぼ中央に付設され、長径1.4mほどの大きな楕円形掘形で半部は壁線外に70cm突出する。先細りしない形状である。住居内には袖は検出されず壁線上に長頭形の川原石を設置してある。竈の埋土は、焼土粒・塊、炭化粒・灰などの混合する層である。埋土の中位には構築材の崩れと考えられる粘性の強い黒褐色土が見られる。

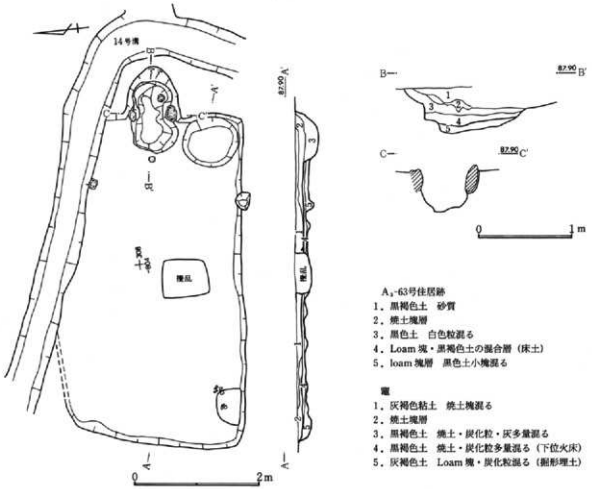
床面はほぼ平坦をなし、踏み締まりは比較的堅い。貯蔵穴は竈に隣接した南東隅に設けられ、90×80cm・深さ15cm程度の略円形である。柱穴・壁下溝は検出されない。住居掘形は中央東西方向帯状に若干の高まりを残し周辺をやや窪めてある。

遺物は土師器甕が目立ち、いずれも残存率は小さい。特筆すべきは床面より石製紡錘車が出土しており、「小成」と読める刻書文字がある。出土遺物は8世紀後半から9世紀初頭になろうか。

出土遺物

1は土師器。偏平な底部で体部は直立する。口縁・内面は横位撫で、体・底部は篦削り。胎土は細かく均一で雲母片混じる。鈍橙色を呈し、口径12.2cm。

2は須恵器坏。底部欠損し1/4の残存。体部の丸み強い。轆轤左回転。胎土砂粒多いが均一。焼成は堅緻



第125図　A_3-63号住居跡

で灰色を呈する。復元口径13cm。

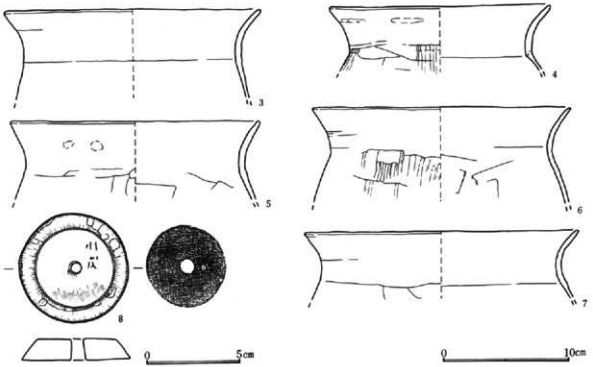
3～7は土師器甕。口縁部は外反して開き、口唇部は細まる。緩やかに張る胴部をなそうが、3はやや張りが弱い。4は口縁下半が直立気味で初源的なコの字口縁を思わせる。いずれも胎土は細砂粒が多いが均一である。橙色を呈し口径は17.6～21.6cmである。

8は緑灰白色の蛇紋岩製の紡錘輪である。断面台形をなし、上下面は平滑に磨かれるが側縁部は細かな調整擦痕が残る。上面に「小成」の刻書あり、人名であろうか。上径5cm・下径5.8cm・厚さ1.1cm。

A_3-63号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器坏	12.0		3.2	底部偏平	5	土師器甕	19.8			緩いくの字状口縁
2	須恵器坏	13.0			轆轤左回転	6	土師器甕	20.4			緩いくの字状口縁
3	土師器甕	24.0			緩いくの字状口縁	7	土師器甕	21.6			緩いくの字状口縁
4	土師器甕	17.6			緩いコの字状口縁	8	石製紡錘輪	5.0	5.8	1.1	69.6g 刻書文字「小成」

第126図　A_3-63号住居跡出土遺物(1)



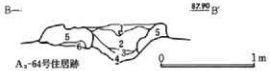
第127図　A_3-63号住居跡出土遺物(2)

A_3-64号住居跡（第128・129図　P L.70・78）

座標値39295～39300・－54794～54800の範囲にある。須恵器工人に関わる住居か工房と考えられる遺構である。南北走する15号溝が住居中央部を横断する。

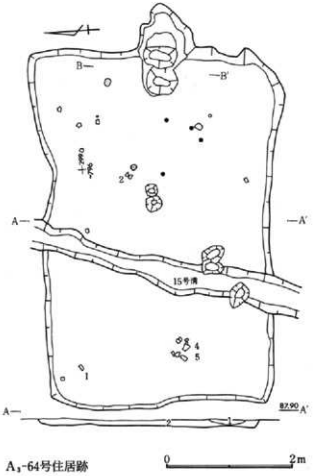
平面形態は東西方向に著しい長軸の方形を呈する。住居規模は、長軸5.4m・短軸3.5m、壁高は削平が深いためか僅か10cmである。主軸方位はN－96°－Eを示す。床面積19.0m²。

竈は長軸方位の東壁やや南寄りに付設され、掘形は先端部が凸形に壁線より約70cm突



A_3-64号住居跡
1．黒褐色土　細砂粒混る
2．黒褐色土　Loam粒少量混る

竈
1．暗灰色粘土　焼土・Loam粒混る（構築材崩）
2．暗い灰色粘土　焼土粒多量混る
3．焼土層　（火床）
4．炭化・焼土粒混合層
5．暗灰色粘土　（構築材）
6．黒褐色土　黒い（芯材）



第128図　A_3-64号住居跡

出する。袖部は壁線が小さく張り出す程度の痕跡が認められ、構築材には暗灰色粘土が用いられている。埋土は主として同質の流出粘土で埋まる。

床面には小さな凹凸が見られるものの、平坦で踏み締まりも良好である。柱穴・貯蔵穴等の諸施設は検出されない。

遺物には土師器甕片が多い。８世紀後半から９世紀前半になろうか。

出土遺物

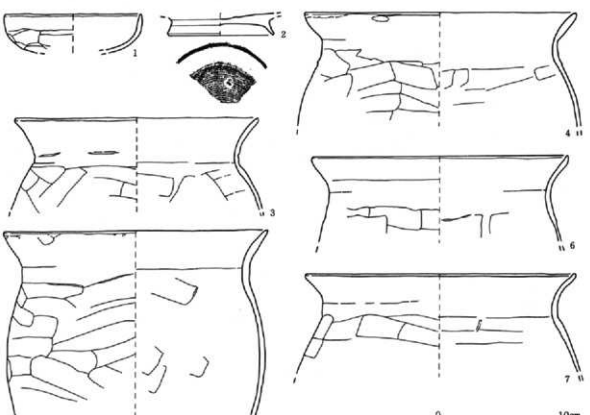
１は土師器坏の小片である。口縁部は直立し、端部は細まる。口縁・内面横位撫で。体・底部は篦削り。胎土は砂粒少なく雲母片が混じる。口径11.0cm。

２は須恵器椀で底部小片である。回転糸切り、付け高台。轆轤右回転。胎土は粗粒で均一。灰白色を呈す。復元底径8.6cm。

３～７は土師器甕。４・５は口縁部がやや肥厚し、６・７は端部が小さく内湾する。口縁部は横位撫で、胴部上半は横位篦削り、内面横位篦撫で。３・７は器表に細砂粒が著しく露呈し、やや甘い焼成で赤みの強い橙色。４・６は砂粒を含むが均一。鈍橙色を呈する。口径19.2～21.6cm。甕類は胴部・口縁部がほぼ同径で最大径をもつと考えられるが、３・７が僅か胴部径がまさる。

A_3-64号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器坏	11.0			底部緩い丸み	5	土師器甕	21.0			緩いくの字状口縁
2	須恵器椀		8.6		回転糸切り付け高台	6	土師器甕	20.2			緩いくの字状口縁
3	土師器甕	19.2			緩いくの字状口縁	7	土師器甕	21.4			緩いくの字状口縁
4	土師器甕	21.6			緩いくの字状口縁						



第129図　A_3-64号住居跡出土遺物

A_3-66号住居跡（第130・131図　ＰＬ.70・78）

座標値39247～39252・－54768～54772の範囲にある。

平面形態は、南北方向に長軸をもつ方形を呈する。規模は、長軸3.8m・短軸3.0m、壁高は25cmを測り直立する。主軸方位はＮ－111°－Ｅを示す。床面積9.9m²。

竈は短軸方位の東壁にあり、大きく南に偏って付設される。袖部は小さく住居内に張り出すが、火床部は壁線外に位置する。長い煙道が延びて、壁線より約１mに及ぶ。袖部を含めた全長は1.7mになる長径な竈である。袖および火床部を形成する側面には、構築材として褐灰色・黄白色粘土を用い厚く塗布してある。塗布される粘土の厚さは20cmにもおよび、火床部幅60cmに対し、掘形幅は１mにもなる。

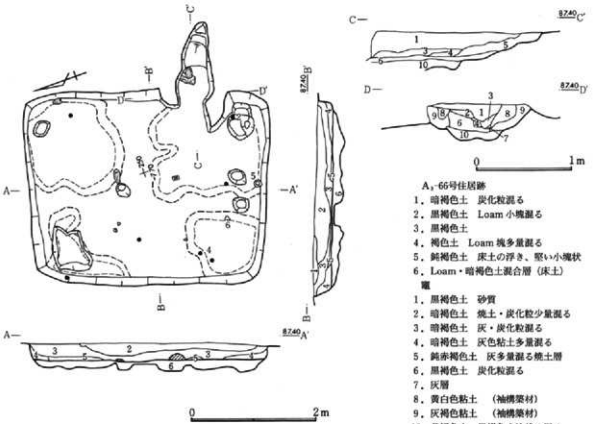
住居床面は平坦をなし踏み締まりも良好である径20cmの小穴４個が検出されているが、配置の不規則さと10cm足らずの深さから柱穴とはしがたい。貯蔵穴は竈脇南東隅にあり、径40cm深さ20cmの不整円形を呈する。住居掘形は四隅を楕円形に掘り窪め、中央を十字形の高まりとする。埋土は Loam 塊を主体にして、暗褐色土を混じえ堅く締めてある。

遺物には、土師器・須恵器坏・蓋などがある。

出土遺物

１～３は土師器坏。平底気味の底部で、浅目の体部である。内外面とも成形時の指頭痕が顕著である。口縁部・内面は横位撫で。体部は指頭痕成形後の後弱い箆削り。底部は不定方向の箆削り。胎土は砂粒が少なく細土である。１・２は明るい赤褐色３は浅い黄橙色を呈す。口径11.4～12cm。

４～６は須恵器坏と蓋。４は直線的な体部の浅い箱型で、強い轆轤目が残る。右回転糸切り無調整。底部



A_3-66号住居跡
1．暗褐色土　炭化粒混る
2．黒褐色土　Loam 小塊混る
3．黒褐色土
4．褐色土　Loam 塊多量混る
5．鈍褐色土　炭土の浮き、堅い小塊状
6．Loam・暗褐色土混合層（床土）

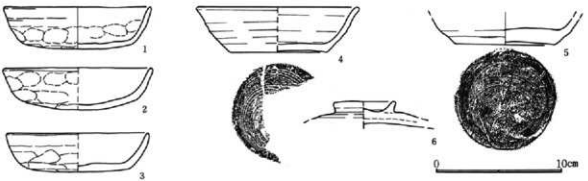
竈
1．黒褐色土　砂質
2．暗褐色土　焼土・炭化粒少量混る
3．暗褐色土　灰・炭化粒混る
4．暗褐色土　灰色粘土多量混る
5．鈍赤褐色土　灰多量混る焼土層
6．黒褐色土　炭化粒混る
7．灰層
8．黄白色粘土　（袖構築材）
9．灰褐色粘土　（袖構築材）
10．黄褐色土　黒褐色土塊状に混る

第130図　A_3-66号住居跡

に墨書痕がある。細砂粒多く角閃石混じる。鈍黄橙色を呈し、外面全体に焼成時の吸炭。口径12.5cm。５は上半を欠く坏。厚い底部で右回転糸切り後、周辺・腰部は回転篦削り。砂粒多く灰白色を呈す。６は環状摘みの蓋である。天井部右回転篦削り。胎土は粗粒均一で灰白色を呈す。天井部に板状の重ね合わせ痕が認められ、成形粘土紐の重ねか。

A_3-66号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器坏	11.8	8.6	3.5	底部偏平	4	須恵器坏	12.8	7.8	3.6	底部墨書文字痕
2	土師器坏	12.0		3.3	底部緩いくびれ	5	須恵器坏		8.0		底部周辺回転篦削り
3	土師器坏	11.4	8.4	3.0	底部偏平	6	須恵器蓋				環状摘



第131図　A_3-66号住居跡出土遺物

A_3-67号住居跡（第132・133図　ＰＬ.70・78・79）

座標値39304～39309・－54810～54817の範囲にある。須恵器工人に関わると考えられる遺構である。

平面形態は、東西に著しく長い長軸をもつ方形を呈する。長軸5.5m・短軸3.65m、壁高は約20cmで直立する。主軸方位はＮ－100°－Ｅを示す。床面積17.9㎡。

竈は長軸方位の東壁に付設される。先端部は壁線を約40cm突出させ火床部は住居内に長径70cmほどの楕円形に掘り窪める。袖部は検出されないが、竈両側の壁線上に角礫と円礫が配され、天井部などの補強に用いられたとも考えられる。

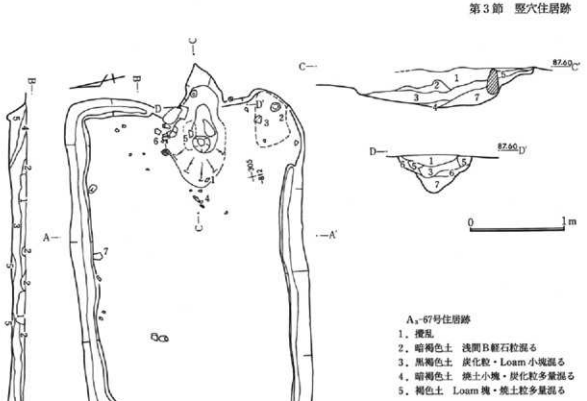
床面は平坦をなすが中央部が緩く弓なりに高まる様相があり、踏み締まりは堅牢である。柱穴・貯蔵穴は検出されないが、南東隅を除く四壁には幅15cm・深さ10cm前後の壁下溝が巡る。住居南東隅には薄い粘土の分布が見られたが検出量は僅かであり、須恵器工人を直接示唆するような状況は認められない。竈に隣接するところからも、竈構築材の可能性が高い。

遺物は、土師器坏・甕、須恵器坏・椀など数点である。共伴する遺物間にはやや時間的な隔たりが見られる。また、須恵器甕片は、本住居と同じく工人に関係すると考えているA_3-68号住居出土と同一個体の資料である。住居跡年代は、一部に８世紀後半の遺物をもち９世紀前半になろうか。

出土遺物

１は土師器坏。体部の浅い偏平な形状である。口縁・内面横位撫で。底部不定方向の篦削り。砂粒少なく均一。鈍橙色を呈する。口径12.8cm。

２～４は須恵器坏椀。２は腰部へ強い差し込みがありくびれる。体部は直線的で浅い箱型である。轆轤回転右。底部回転篦削り。使用摩滅が著しい。胎土は細かく均一。焼成やや甘く灰白色を呈す。口径12.7cm。３は２と同じく腰部に強い差し込みがあり体部は大きく開く。内面口唇下に強いあてがなされ、端部は丸ま



第132図　A₃-67号住居跡

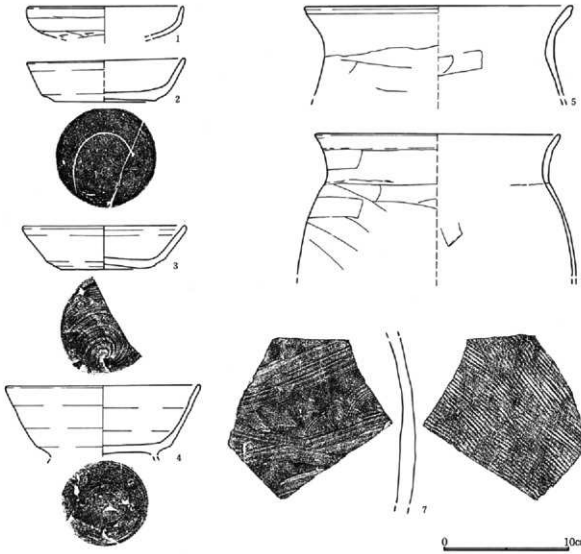
A₃-67号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器坏	12.6		2.5	体部偏平	5	土師器甕	21.2			緩いコの字口縁
2	須恵器坏	12.6	8.0	3.2	底部回転箆削り	6	土師器甕	19.4			緩いコの字口縁
3	須恵器坏	13.0	7.0	3.4	右回転糸切り	7	須恵器甕	胴部片			A₃-68住9と同一個体
4	須恵器椀	15.6	8.5+	5.5+	回転箆削り付け高台						

る。右回転糸切り無調整。大粒長石が混じるが細土。焼成堅緻で灰色を呈する。口径13cm。4は腰の張る椀型で体部は直線的。付け高台欠損。轆轤右回転。底部回転箆削り。胎土粗く長石・凝灰岩粒多く混じる。焼成はやや甘くオリーブ黒色を呈する。口径15.6cm。

5・6は土師器甕。口縁下半はやや立ち気味で、弱いコの字口縁をなす。5は口縁部に弱い凹線が巡る。口縁部横位撫で。胴部上半は横・斜位箆削り。内面横位箆撫で。胎土は細土で均一。橙色を呈す。口径19.4～21.2cm。

７は須恵器甕片。外面は細目の平行叩、内面は無紋の当具で篦削りを施す。細土で焼成堅緻、灰色を呈す。A_3-68号住居跡出土の甕片と同一個体の可能性が高い。



第133図　A_3-67号住居跡出土遺物

A_3-68号住居跡（第134・135図　ＰＬ.70・79）

座標値39304～39309・－54793～54799範囲にある。15号・16号溝が中央部を横・縦断する。須恵器工人に関わると考えられる遺構である。

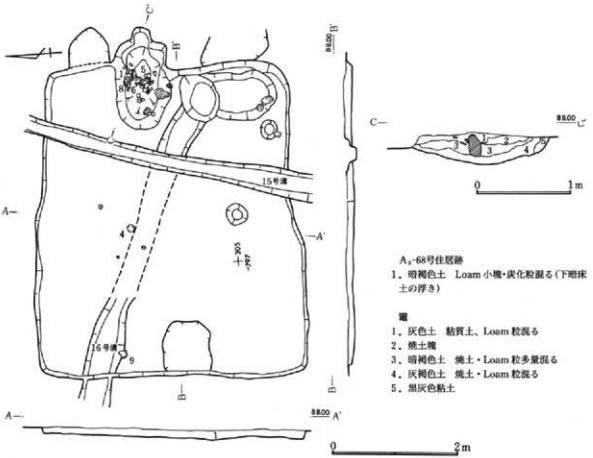
平面形態は、東西に長軸をもつ方形を呈する。長軸5.0m・短軸4.0m、壁高10cm程度でかなり削平が及んでいると考えられる。主軸方位はＮ－96°－Ｅを示す。床面積19.2㎡。

竈は長軸方位の東壁、僅かに北に寄って付設される。壁線外へは約70cm突出し、凸状の掘形をもつ。袖部は左袖が痕跡程度に残る。左右壁線上にあたる位置には、角・長径楕円礫が検出されており、焚口部と火床部を画する天井架構に支えの用をなしていたと考えられる。焚口・火床に相当する範囲は、1.2×0.7mほどの浅い楕円形の掘形である。竈内からは土師器甕片が多く検出されている。

床面は横・縦断する15号・16号溝によりかなり荒れているが踏み締まりは良好である。柱穴・貯蔵穴等の

施設は不明である。また工房を示唆するような状況は認められない。

遺物には土師器坏・甕、須恵器坏・皿などがある。1・3・5・6・8は竈中からの出土。須恵器皿内面には墨書文字が認められる。出土位置は重複する15号溝の範囲にあり、これに属する可能性もある。遺物には年代的に齟齬が感じられるが遺構の年代は9世紀前半に中心があると考えたい。



第134図　A_3-68号住居跡

出土遺物

1・2は土師器坏で小片である。偏平な体部で薄手の作りである。胎土は細土で均一。1は橙色、2は鈍黄橙色を呈する。

3・4は須恵器坏・皿。3は底部小片。右回転篦削りである。砂粒多くやや軟質で灰色を呈す。4は口縁部欠損の皿。低い付け高台。轆轤右回転。内面に墨書文字があり、解読不明。胎土は細土均一で、灰白色を呈す。

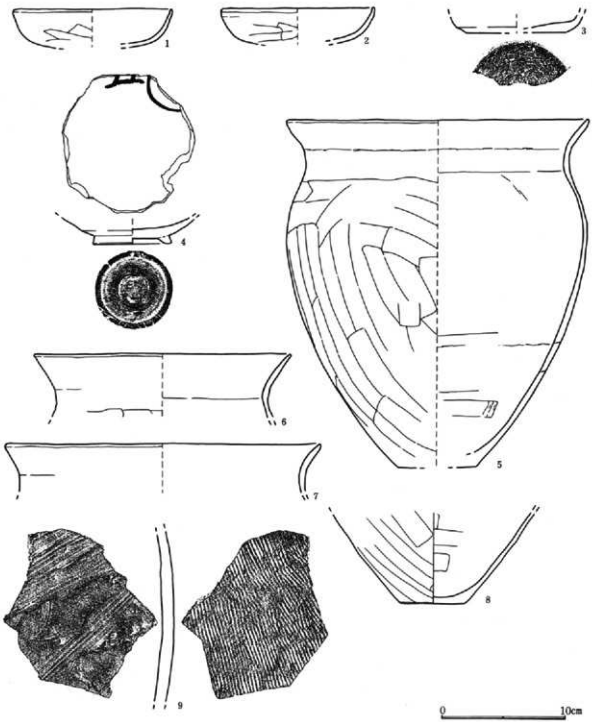
5～8は土師器甕。5は口縁・胴部の最大径は同じ。コの字口縁である。口縁部横位撫で、肩部は横・斜位、胴部は縦・斜め篦削り。内面横位篦撫で。口径20.4～25cm。

9は須恵器甕片。外面は細目の平行叩、内面は無文の当具痕後篦削り。A_3-67号住居出土資料と同一個体の可能性が高い。

当住居跡出土遺物には時間的な隔たりがあろう。3の須恵器坏は8世紀の後半に、4の皿は9世紀中頃以降になろう。

A_3-68号住居跡出土遺物計測表

番号	器　種	口径	底径	器高	備　　考	番号	器　種	口径	底径	器高	備　　考
1	土師器坏	12.6		3.0	底部やや丸み	6	土師器甕	20.4			緩いくの字口縁
2	土師器坏	12.2		3.0	底部やや丸み	7	土師器甕	25.0			緩いくの字口縁
3	須恵器坏		8.0		底部回転箆削り	8	土師器甕		5.2		
4	須恵器皿		6.3		内面墨書文字痕	9	須恵器甕	胴部片			A_3-67住7と同一個体
5	土師器甕	24.0	6.0	27.2	緩いこの字口縁						



第135図　A_3-68号住居跡出土遺物

A_3-69号住居跡（第136・137図　ＰＬ.70・79）

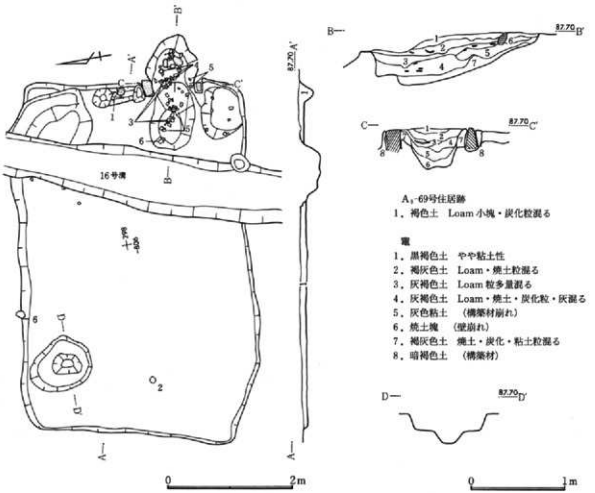
座標値39295～39300・－54802～54809の範囲にある。住居東半を15号溝が横断する。須恵器工人に関わる遺構と考えられる。

平面形態は東西方向に長軸をもつ方形を呈する。規模は長軸5.4m・短軸3.7m、壁高は10cmにも満たずかなり削平が及んでいるものと考えられる。主軸方位はＮ－102°－Ｅを示す。床面積21.0㎡。

竈は長軸方位の東壁南偏って付設される。焚口・火床に相当す部分は1.1×0.7mの範囲を浅く楕円形に掘り窪めてある。壁外には約80cm突出させ、左右の壁線には角・長径楕円礫を埋設する。袖の芯材とも考えられるがこれに続く明瞭な袖部の検出はなく、天井の架構に関わる材の可能性がある。礫の周囲は Loam を混じえる暗褐色土を巻くようにしてある。なお、竈先端部には埋設状態ではないが、長径小児頭大の礫が対位置で２点あり煙道構築の部材であろうか。埋土からは土師器甕片が多く検出されている。

床面はほぼ平坦をなし、踏み締まりは堅牢である。柱穴の検出はなく、貯蔵穴は竈脇の南東隅に設けられる。80×70cmの略方形を呈するが底面は約25cmの深さで皿状に窪む。須恵器工人の遺構と目されている本跡においてもその明確な根拠を見いだせない。強いては、遺構内北西部に検出された二段構造の小穴は、いわゆるロクロピットに類似する形状をもつ。とはいえ、調査時での認識がなかったためか詳細は不明である。

遺物には須恵器坏・土師器甕など少量がある。遺物年代からは８世紀の後半代になろう。



第136図　A_3-69号住居跡

出土遺物

1・2は須恵器坏。1は腰部を強く差し込み、丸みがある。轆轤右回転、底部回転篦削り。胎土粗砂粒多く甘い焼成。外面焼成吸炭。灰白色を呈す。口径12.8cm。2は底部のみ。回転糸切り後周辺右回転篦削り。胎土細かく内外面焼成吸炭。1・2とも使用摩滅著しい。

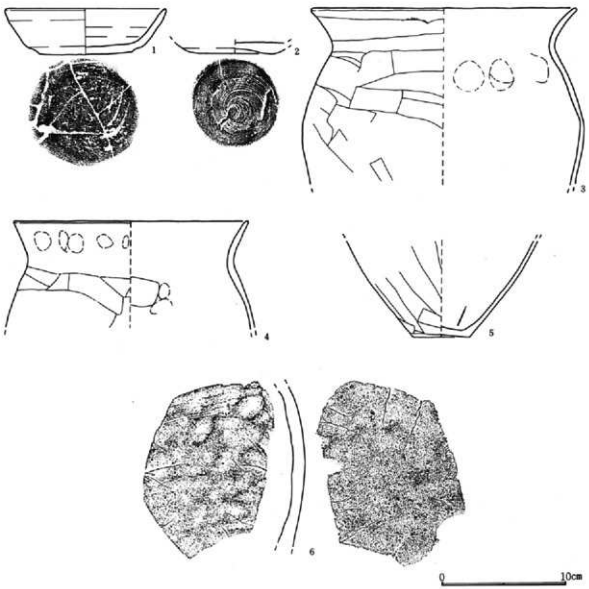
3～5は土師器甕。緩く外反するくの字口縁をなし、3は口縁部に紐作り痕。胴上半は横位、5の下半は縦～斜位篦削り。

胎土は細砂均一。3は赤橙色、45は鈍橙色を呈す。3の口径は21cm・4は18.6cm。

6は須恵器小型甕の下半小片。内面は無文当具痕、横位篦撫で。砂粒多く、焼成堅緻。濃灰色を呈す。

A_3-69号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	須恵器坏	12.8	7.2	3.6	底部回転篦削り	4	土師器甕	18.6			緩いくの字口縁
2	須恵器坏		6.8		底部周辺回転篦削り	5	土師器甕		4.5		
3	土師器甕	21.0			緩いくの字状口縁	6	須恵器甕	胴部片			小型甕か



第137図　A_3-69号住居跡出土遺物

A_3-70号住居跡（第138・139図　ＰＬ.70・80）

座標値39294～39299・－54811～54817の範囲にある。住居の南半には須恵器窯跡群が構築される谷地の谷頭が及び、削平ないしは流出によって失われている。本跡もまた、須恵器工人に関わる遺構と考えているが施設等についてはこれを示すものは検出されていない。

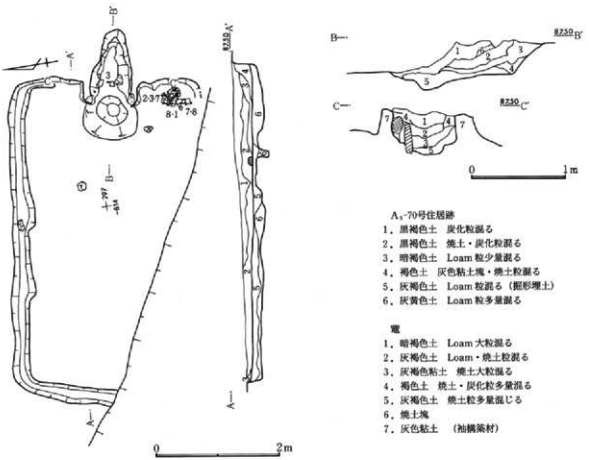
平面形態は東西に長軸をもつ方形と考えられ、規模は長軸５ｍ・短軸３ｍほどになろう。壁高は遺存の良い東側で約25cmを測り、西に向かって削平が深い。主軸方位はＮ－100°－Ｅを示す。竈は長軸方位の東壁にあり、ほぼ中央に位置すると考えられる。住居内には小さな袖部が張り出し。長径楕円礫が袖材として埋設される。焚口・火床部は径80cmのすり鉢状で深めに掘り込まれる。先端部は壁線より約80cm突出する。火床部と壁線外へ突出する返還部には両側に長径礫が埋設され、火床と煙道部を画している。竈袖石の周囲は灰色粘土を用いて成形してある。

床面は平坦をなし、踏み締まりは堅牢である。残存する西・北・東壁には幅20cm、深さ５～７cmの明瞭な壁下溝が巡る。貯蔵穴に相当する施設は不明瞭だが、竈脇の南東隅からは土師器甕が出土し僅かな窪みとなっている。床下の掘形は不整面をなし５～15cmでLoamを混じえる灰褐色土で埋める。

遺物には、須恵器坏、土師器坏・甕などがある。９世紀前半代になろう。

出土遺物

１～４は土師器坏。底部から体部下半は箆削り。１は２/３。深めの体部で内湾する口唇部は丸まる。２・



第138図　A_3-70号住居跡

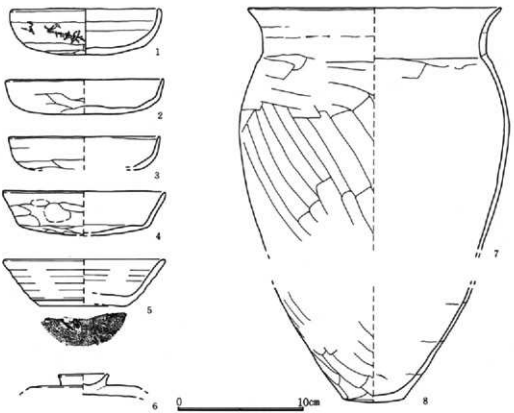
３は小片。偏平で体部は短く直立気味。４は１/３。底・体部の変換が明瞭で、体部は深目で直線的に開き、指頭痕が著しい。胎土は細土で均一。２は緻密で明橙色、他は鈍橙色を呈す。口径11.9～13.0cm。

５・６は須恵器坏・蓋摘部。５は１/３。体部は直線的で大きく開く。右回転糸切り無調整。細砂粒均一で焼成堅緻、灰色を呈す。口径12.9cm。６は環状。天井は右回転篦削り。砂大粒で焼成甘い。灰白色を呈す。

７・８は土師器甕。同一個体であろう。１/３。コの字口縁で紐作り痕が残る。胴上部がやや強めに張り口径より若干大きい。肩部は横位、胴部は斜位篦削り。内面横位篦撫で、下位に紐作り痕が残る。胎土細かく鈍橙色を呈す。口径20.0cm。

A_3-70号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器坏	11.9		3.6	底部丸み	5	須恵器坏	12.9	7.0	3.7	右回転糸切り
2	土師器坏	12.6		2.7	底部偏平	6	須恵器蓋				環状摘 径4.0
3	土師器坏	12.0		2.5	底部偏平	7	土師器甕	20.0			超いコの字口縁
4	土師器坏	13.0	10.3	3.5	底部偏平	8	土師器甕		4.8		7・8は同一個体か



第139図　A_3-70号住居跡出土遺物

E_3-91号住居跡（第140・141図　ＰＬ.70・80）

座標値39037～39042・－54773～54778の範囲にある。

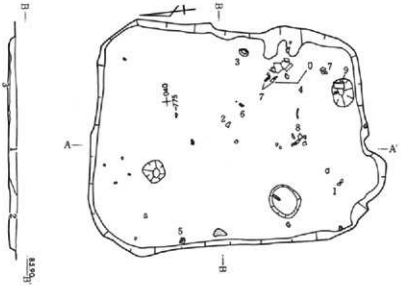
平面形態は南北に長軸をもつ隅丸方形を呈する。南・西壁の２ケ所で50cmほど突出するが、本跡に付随するかは不明である。規模は長軸4.3m・短軸3.7m、壁高は13cmと浅い。主軸方位はＮ－96－Ｅを示す。

竈は短軸方向の東壁にあり、南に偏って付設される。やや小振な造りで、小さな袖を作るが破損が著しく

痕跡程度である。煙道に相当する部分は壁外には延びず、舞台遺跡における当該期の住居跡竈としては稀な形態である。床面積13.5m²。

床面は平坦をなし、踏み締まりは比較的良好である。貯蔵穴等の施設に乏しく小穴が3ケ所に検出されているものの、北西に位置する深さ50cmの1穴を除き10cm程度の窪みである。床下掘形10～15cmの均一な面をなし暗褐色土とLoamの混土を埋土とする。

遺物には須恵器坏、土師器坏・甕、灰釉陶器の細片などがある。甕類は竈内より、他もその周辺から主に出土している。



第140図　E₃-91号住居跡

出土遺物

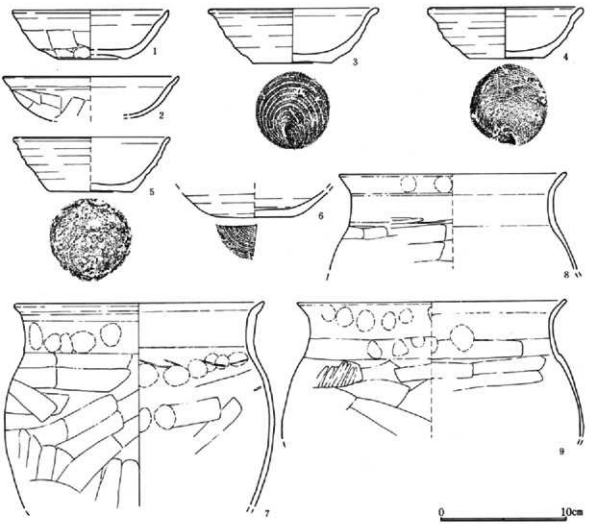
1・2は土師器坏。体部上半は緩くくびれて内湾気味に開き、口唇は細まる。1は2/3。底部小さく上げ底気味で絞り状に亀裂が著しい。口縁部内面横位撫で体部下半横位篦削り腰部指頭痕口唇に油煙状付着物。細土で赤橙色を呈す。口径12.4cm。2は1/3。内面に横位篦磨き。口縁部は強い撫で。底部欠損。細土で赤橙色を呈す。口径14.0cm。

3～6は須恵器坏。3・4は体部に丸みをもち口唇肥厚し強く外反する。右回転糸切り無調整。3は完形。砂粒少なく灰白色を呈す。口径13.5cm。4は体部2/3欠損。口縁部は強い屈曲をなす。内面に粘土皮膜が残る。容器として使用か。胎土は砂粒少なく焼成は甘い。黄橙色を呈す。口径12.4cm。5は直線的な体部で肉薄、2/3を欠損。右回転糸切り無調整。胎土粗砂粒混じる。二次被熱か、黄橙色を呈す。口径12.4cm。6は底部の小片回転糸切り腰部は回転篦削り胎土粗粒均一。焼成堅緻で灰色を呈す。

7～9は土師器甕。コの字口縁である。口縁部は指頭調整後、横位撫で。肩部横・胴部斜位篦削り。7は下半欠損。8・9は口縁から胴上半の1/4である。7は砂粒多く、他は細土でいずれも橙色を呈す。口径18.6～21.2cm。

E_3-91号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器坏	12.4	5.5	3.8	底部平底	6	須恵器坏		6.0		回転糸切り　腰部篦削り
2	土師器坏	14.0	7.7	3.2	底部偏平	7	土師器甕	19.6			この字口縁
3	須恵器坏	13.4	6.2	4.3	右回転糸切り	8	土師器甕	18.6			この字口縁
4	須恵器坏	12.4	5.8	4.1	内面粘土塊付着	9	土師器甕	21.2			この字口縁
5	須恵器坏	12.4	6.5	4.3	右回転糸切り						



第141図　E_3-91号住居跡出土遺物

E_3-92ａ・ｂ号住居跡（第142・143図　ＰＬ.71・80・81）

座標値39061～39065・－54759～54764の範囲にある。ａ・ｂの２軒が重複しており、前者が新しい所産である。調査所見からは床面の高低差はないとされる。両者は南・東壁線をほぼ共有し、竈の設置方位も一致しているが、住居の形状は正方形に近いａ号住居跡に対し、旧のｂ号住居跡は東西方向に長軸をもつ平面形態である。

ａ号住居跡の平面形態は正方形に近い。規模は、南北3.25m・東西3.0mで壁高25cmを測る。主軸方位はＮ－95°－Ｅを示す。

竈は東壁のほぼ中央にあり、壁線より約30cm突出する。竈前の床面には流出した焼土の薄層が広がる。袖

部等の痕跡はなく竈全体の形状は判然としない。埋土の下位には灰層が厚く堆積していたが、火床となるような硬化焼土面は残されていない。掘形は浅く、皿状に窪む程度である。

床面はほぼ平坦をなし、踏み締まりも良好である。貯蔵穴は竈脇の南東隅にあり径80cm・深さ20cmの隅丸方形を呈す。柱穴・壁下溝は検出されていない。住居の掘形は円形状の窪みを3ケ所に設け、Loam塊の混じる暗褐色土を埋めて床土を形成している。

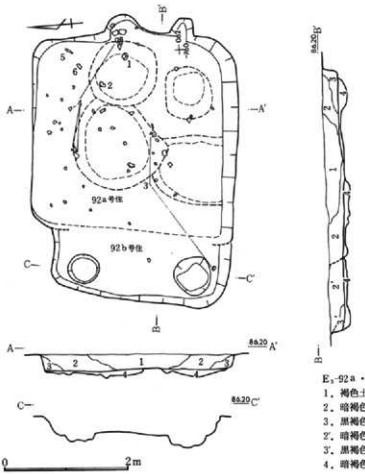
遺物には須恵器坏類、土師器甕があり、竈前に多く出土している。9世紀後半になろう。

b号住居跡の平面形態は、東西に長軸をもつ方形を呈すると考えられる。住居跡の西端はa号住居跡より約1.1m突出するが、北壁線は50cm程度内に入る。東壁は残存する竈の痕跡から見て若干縮小するようである。規模は、長軸4.0m・短軸2.8m程度で、壁高は25cmを測る。主軸方位はN－103°－Eを示す。

竈の存在は焼土の痕跡で確認されたものである。a住居跡の構築に伴って取り払われたと考えられ、東壁の南寄りの位置に壁線から30cmほどの突出部が残されていた。

床面はa号住居跡と同一高で、残存部が壁際のためか踏み締まりは弱い。北西及び南西の隅にそれぞれ径50cmの円形の落ち込みが検出されている。深さは10～20cmで性格を知るような遺物の出土や土層情報もない。

遺物は、細片が少量で図示できるものや年代を推するものはない。住居形態より、8世紀後半から9世紀前半になろう。



第142図　E₃-92a・92b号住居跡